

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

かなや  
金屋遺跡

1985

新潟県教育委員会

関越自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

かなや  
金屋遺跡

1985

新潟県教育委員会

## 序

六日町は古くから南魚沼の政治・経済・文化の中心として発展してきました。このことは縄文時代・古墳時代などの遺跡の多いことからもうかがわれます。

例えば、県指定史跡の蟻子山・飯綱山古墳群においては100余基の古墳が群集し、出土品も馬具や鏡など貴重なものがあり、県内でも有数な古墳群を形成し古墳時代の中核地をなしていたことがわかります。

また中世においては、上田長尾氏が坂戸城を本城とし、現在の六日町の基礎をなしたといわれ、坂戸城は現在国の指定史跡になっています。

このように、南魚沼郡において重要な地域である六日町に高速道のインター・チェンジが計画され、はからずも蟻子山古墳群の直下に位置する金屋遺跡が発掘調査されました。

これらの調査結果から、金屋遺跡は縄文時代の古い時期から古墳時代・平安時代を経て、中世までの複合遺跡であることが判明し、古墳時代と平安時代の集落の一端が解明されました。

多くの遺物から、本遺跡が関東地方や北陸地方・中部地方との交流をもっていたことも解明され、三国街道の交通の要衝であったことも十分うなづけるものと思われます。

これらの古代の資料が今後、魚沼地方の歴史を解明する一助となれば幸いです。また、調査に際し援助・協力をいただいた日本道路公団、六日町教育委員会、地元有志の方々には、深甚なる謝意を表するものです。

昭和60年3月

新潟県教育委員会

教育長 久間健二

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県南魚沼郡六日町大字余川金屋道上に所在する金屋遺跡の発掘調査の記録である。発掘調査は関越自動車道の建設に伴い、新潟県が昭和57・58年度に日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、2年度にわたって行った。期間は、昭和57年8月23日から11月5日までと、昭和58年4月7日から7月7日までである。
3. 本遺跡の名称は、遺跡台帳には「金谷遺跡」となっていたが、小字名が「金屋道上ほか」であり、遺跡の名称は小字名を用いることから「金屋遺跡」と改めた。
4. 遺物の整理・復元作業は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員があたった。
5. 発掘に伴う出土遺物の注記は遺跡名の「金屋」から「KN」とし、昭和57年度は「KN」、昭和58年度は「KN II」とし、遺物台帳の番号を付した。遺構出土の遺物は番号の次に遺構名を付した。
6. 発掘調査による出土遺物は一括して新潟県教育委員会が、保存・管理している。
7. 遺構・遺物の実測、挿図の作成は、山本　肇を中心として職員が分担した。  
遺構写真は、高橋勉・北村亮が主に担当し、遺物写真は山本肇が担当した。
8. 本報告書の執筆は、埋蔵文化財係長の指導のもと、北村亮・田辺早苗・丸山謙司・鈴木俊成・山本肇が分担執筆したものである。各分担は以下のとおりである。  
北村　亮　II-2, IV-1・2・3a・3b, V-4a・4c, VI-3e・3f・4  
田辺早苗　V-2b・4b・4d・4e, VI-1a・3d  
丸山謙司　VI-1a  
鈴木俊成　VI-1b  
山本　肇　I, II-1, III, IV-3c, V-1・2a・3, VI-2d・3a～3c, VII,  
VIII, 器種説明表, 土器観察表
9. なお、本書において、土器の説明は各器種名称を付図に図示し、表記した。また各遺物については土器観察表をもってこれにあてた。遺物の番号は挿図・写真図版とも同一番号を使用した。土器観察表の法量の数値で（　）内は復元推定値である。
10. 第2図の地形図および図版第1の空中写真是国土地理院発行のものを使用した。
11. 報告文中における諸氏各位の氏名については、敬称を略させて頂いた。
12. 調査体制は第II章にまとめて記した。
13. 本報告書作成にあたり、下記の諸氏から御教示を賜った。厚く御礼申し上げる。  
阿部恭平・池田　亨・伊藤正義・岡本東三・小野　昭・唐沢至朗・小島幸雄・小林進一  
小林達雄・斎藤孝正・斎藤基生・佐藤則之・品田高志・砂田佳弘・古川知明・三輪晴夫  
吉岡康暢・吉田恵二

（五十音順・敬称略）

# 金屋遺跡調査報告書

## 目 次

第I章 調査に至る経緯 .....	1
第II章 遺跡の位置と周辺の環境 .....	2
1 位置と地形.....	2
2 周辺の遺跡.....	4
第III章 調査の経過 .....	6
1 試掘調査.....	6
2 昭和57年度.....	6
3 昭和58年度および遺物整理.....	7
第IV章 調査の概要 .....	9
1 調査区の設定.....	9
2 層序.....	9
3 各地区の概要.....	9
a. A地区	b. B地区
c. C地区	
第V章 遺構 .....	14
1 繩文時代.....	14
2 古墳時代中期.....	15
a. 住居跡	b. その他
3 古墳時代後期.....	22
4 平安時代.....	23
a. 住居跡	b. 挖立柱建物
c. 蒔	d. 土壙
e. その他	
第VI章 遺物 .....	46
1 繩文時代.....	46
a. 土器	b. 石器
2 古墳時代.....	49
a. 中期	b. 後期

3 平安時代	57
a. 土器	b. 墨書き土器・刻書き土器
c. 転用硯	d. 鉄製品
e. 石製品	f. 土製品
4 中世	84
a. 珠洲糸土器	b. 陶質土器
第VII章 考察	86
第VII章 まとめ	88

## 図版目次

- 図版1 周辺の地形  
 図版2 遺跡遠景（坂戸山から） A地区全景（北西から）  
 図版3 A地区全景西半分（南西から）  
 図版4 引き渡し部分完掘状況（南東から） 平安時代遺構面完掘状況（北から）  
 図版5 C地区東側側道発掘風景（北から） C地区東側側道遺物出土状況（西から）  
 図版6 C地区側道SK29（縄文時代）完掘状況（北から） C地区側道SK29南西土層断面（北から）  
 図版7 SD1土層断面（南西から）（A地区北壁土層断面） SD4完掘状況（西から）  
 図版8 B地区古墳時代中期の遺構全景（南から） C地区SD13検出状況  
 図版9 SI12土層断面（南西から） SI12完掘状況（南西から）  
 図版10 SI13土層断面（北から） SI13完掘状況（東から）  
 図版11 SI13炉（南から） SI13内土壤土層断面（南西から） SX15遺物出土状況  
 図版12 SX14土層断面（北から） SX15土層断面 SX16土層断面・奥はSI12（南から）  
 図版13 SX15完掘状況（南から） SX17完掘状況（南から）  
 図版14 SX18完掘状況（南から） SX19完掘状況（南から）  
 図版15 SI1竈（北から） SI1土層断面（北東から） SI1完掘状況（北から）  
 図版16 SI2土層断面（B-B'）（南から） SI2竈検出状況（北から） SI2竈完掘状況（北から）  
 図版17 SI2完掘状況（北から） SI3完掘状況（北から）  
 図版18 ①SI3下部土壤（SK33）遺物出土状況（南から） ②SI3竈（西から） ③剣出土  
 状況 SI3遺物出土状況（西から）

- 図版19 S I 4 土層断面（北東から） S I 4 土層断面A—A'（南西から） S I 4 造構検出状況（北西から）
- 図版20 S I 4 瓦調査前（南西から） S I 4 瓦完掘状況（南西から） S I 4 瓦掘り形完掘状況（南西から）
- 図版21 S I 4 完掘状況（北西から） S I 5 完掘状況（南から）
- 図版22 S I 6 土層断面（A—A'）（北西から） S I 6 完掘状況（南西から）
- 図版23 S I 8 完掘状況（西から） S I 10 完掘状況（北から）
- 図版24 S I 7 土層断面（A—A'）（南西から） S I 7 完掘状況（瓦未掘）（北西から）
- 図版25 S I 7 瓦（北西から） S I 7 瓦土層断面b—b'（西から） S I 7 完掘状況（北西から）
- 図版26 S I 9 完掘状況 S I 9 瓦（北西から） S I 9 瓦土器出土状況（北西から）
- 図版27 S B 1 完掘状況（南から） S B 2 完掘状況（南から）
- 図版28 S B 3・S B 4（北上から） S I 3・S B 6 周辺全景（東から）
- 図版29 ①S B 1 柱穴9 ②S B 2 柱穴1 ③S B 2 柱穴2 ④S B 2 柱穴3 ⑤S B 2 柱穴3 土層断面（西から）
- 図版30 S X21 土層断面（西から） S X21 完掘状況（南から） S X22 土層断面（西から）
- 図版31 S X22 完掘状況（南から） S K31 土層断面（南から） S K31 完掘状況（南から）
- 図版32 S K32 土層断面（北西から） S K5 土層断面（北から） S K18 土層断面（西から）
- 図版33 S K32 完掘状況（東から） S K5（奥）S K6 完掘状況（南から） S K18 完掘状況（南から）
- 図版34 S K15 土層断面（北東から） S K14 土層断面（南西から） S K1 土層断面（東から）
- 図版35 S K15 完掘状況（南から） S K14 完掘状況（南から） S K24 完掘状況（南から）
- 図版36 縄文土器 縄文時代石器
- 図版37 S I 12 出土土器
- 図版38 S I 13・S X15・S X16 出土土器
- 図版39 S X18 出土土器
- 図版40 S X19・古墳時代中期造構外出土土器
- 図版41 古墳時代後期土器
- 図版42 S I 1～S I 4 出土土器
- 図版43 S I 5～S I 9 出土土器
- 図版44 S X20 出土土器（1）
- 図版45 S X20 出土土器（2）
- 図版46 S X20・掘立柱建物・溝・土壤出土土器
- 図版47 造構外出土土器1（須恵器）
- 図版48 造構外出土土器2（須恵器）
- 図版49 造構外出土土器3（土師器）

図版50 遺構外出土土器4（土師器）

図版51 灰釉陶器および中世陶器

図版52 転用鏡・羽釜（遺構外出土）

図版53 墨書き土器・刻書き土器

図版54 鉄製品・石製品・土製品

## 挿 図 目 次

1 金屋遺跡と周辺の地形	3	26 S I 3 実測図	26
2 金屋遺跡周辺の遺跡	5	27 S I 3 竜実測図	27
3 地区割図	6	28 S I 4 実測図	28
4 調査経過図	8	29 S I 4 竜実測図	29
5 グリッド模式図	9	30 S I 5 実測図	30
6 基本土層図	10	31 S I 6 実測図	31
7 B地区土層柱状図	11	32 S I 7 実測図	32
8 A地区遺構配置図	12	33 S I 7 竜実測図	32
9 B地区遺構配置図	折り込み	34 S I 8 実測図	33
10 C地区遺構平面図	13	35 S I 10 実測図	33
11 C地区西側側道出土土器	13	36 S I 9 実測図	34
12 繩文時代土壙（S K29）実測図及び 遺物出土状況	14	37 S I 9 竜実測図	34
13 繩文時代土壙（S K29）実測図	29	38 S K12 実測図	35
14 S I 12 実測図	16	39 S B 1・S K12 実測図	35
15 S I 13 実測図	17	40 S B 2 実測図	36
16 S X14 実測図	18	41 S B 3・S B 4 実測図	37
17 S X15 実測図	20	42 S B 5 実測図	37
18 S X16 実測図	20	43 S B 6・S K 7 実測図	38
19 S X17・S X19 実測図	21	44 S D 4 土層断面図	38
20 S X18 実測図	22	45 土壙実測図(1)	40
21 古墳時代後期土壙実測図	22	46 土壙実測図(2)	42
22 S I 1 実測図	23	47 土壙実測図(3)	44
23 S I 1 竜実測図	24	48 土壙実測図(4)	45
24 S I 2 実測図	24	49 繩文土器	47
25 S I 2 竜実測図	25	50 繩文時代石器	48
		51 S I 12 出土土器(1)	50

52	S I 12出土土器(2).....	51	73	土壤出土土器(1)(S K14出土土器) .....	65
53	S I 13出土土器.....	51	74	土壤出土土器(2).....	66
54	S X15出土土器.....	52	75	S D11出土土器.....	67
55	S X16出土土器.....	52	76	平安時代遺構外出土土器 須恵器(1).....	68
56	S X17出土土器.....	52	77	平安時代遺構外出土土器 須恵器(2).....	69
57	S X18出土土器.....	53	78	平安時代遺構外出土土器 灰釉陶器.....	70
58	S X19出土土器.....	54	79	平安時代遺構外出土土器 土師器(1).....	71
59	古墳時代中期遺構外出土土器.....	54	80	平安時代遺構外出土土器 土師器(2).....	72
60	古墳時代後期遺構外出土土器.....	56	81	平安時代遺構外出土土器 土師器(3).....	73
61	S I 1出土土器.....	57	82	平安時代遺構外出土土器 土師器(4).....	74
62	S I 2出土土器.....	58	83	平安時代遺構外出土土器 土師器(5).....	75
63	S I 3出土土器.....	58	84	平安時代遺構外出土土器 土師器(6).....	76
64	S I 4出土土器.....	59	85	須恵器拓影図(1).....	77
65	S I 5出土土器.....	60	86	須恵器拓影図(2).....	79
66	S I 6出土土器.....	60	87	墨書き器・刻書き器実測図.....	80
67	S I 7出土土器 .....	61	88	転用硯実測図.....	81
68	S I 8出土土器.....	62	89	鉄製品実測図.....	82
69	S I 9出土土器.....	62	90	石製品・土製品実測図.....	84
70	S X20出土土器(1).....	63	91	中世遺物実測図・文様拓影図.....	85
71	S X20出土土器(2).....	64	92	羽釜出土遺跡分布図.....	95
72	掘立柱建物・柱穴出土土器.....	64	93	遺跡周辺の地形模式図.....	98

## 付 図 目 次

1	古墳時代中期土器 .....	101	3	平安時代土器 (1) .....	104
2	古墳時代後期土器 .....	103	4	平安時代土器 (2) .....	106

## 表 目 次

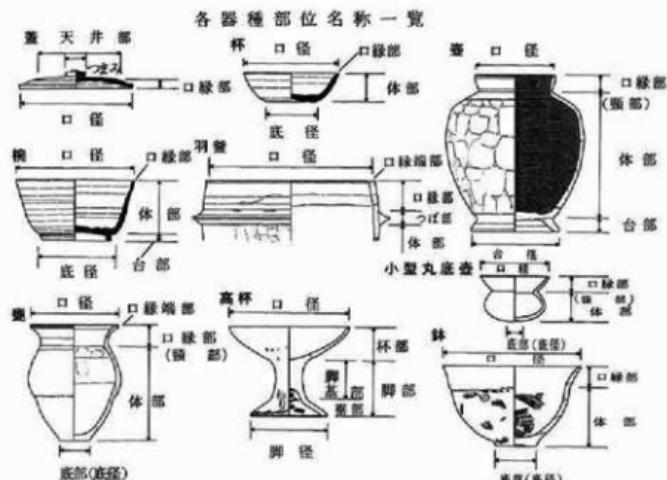
1	周辺の主な遺跡.....	4	4	古墳時代中期土器器種説明表 .....	102
2	石器計測表.....	49	5	古墳時代後期土器器種説明表 .....	103
3	鉄器計測表.....	83	6	平安時代土器器種説明表 .....	105

## 土器観察表目次

- |                                |          |                |          |
|--------------------------------|----------|----------------|----------|
| 1 古墳時代中期土器観察表                  | .....108 | 4 墓書土器・刻書土器観察表 | .....128 |
| 2 古墳時代後期土器観察表                  | .....111 | 5 転用観察表        | .....128 |
| 3 平安時代土器（一部古墳時代後期<br>土器を含む）観察表 | .....112 |                |          |

## 凡 例

本報告書で使用する各土器の部位名称および挿図中のスクリントーンは以下のとおりとした。



### スクリントーンの分類について

#### 造構平面図

燒土・炭化物範田	黑色土層	須恵器	黑色処理範田
土器密着範田	青褐色土層	土器	赤色塗彩範田
砂被部	灰藍色粘質土層	灰陶器	転用硯・研石、すり範田
地山	暗褐色(砂質)土層	油煙付着範田	石器、叩き範田

#### 造物実測図

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

金屋遺跡は、蟻子山古墳群などとの関連において知られていた遺跡であったが、扇状地のため遺物が表面採集されることとは少なく、性格などの不明な遺跡であった。

関越自動車道の建設は、昭和41年1月、長岡～湯沢間の基本計画が公表され、具体的段階に入った。当初、金屋遺跡周辺には蟻子山古墳群・飯綱山古墳群などが所在しているため、それらの遺跡の取扱いについて、日本道路公団（以下、公団とする）と新潟県教育委員会（以下、県教委とする）との間で協議がなされた。また計画された道路法線内にも新遺跡が存在するか否かを調査する必要が生じたため、分布調査が実施された。まず初めは、昭和50年9月に小出～湯沢間の事前調査が行われた。しかし金屋遺跡については、付近の遺跡の調査のみで直接的な調査はなされなかった。

昭和52年8月、公団から県教委へ、小出～湯沢間のインターチェンジ内の遺跡有無について照会があり、県教委では翌昭和53年3月、分布調査を実施して、六日町インター付近には金屋遺跡が存在することを公団へ通知した。この際、金屋遺跡の遺跡範囲は約25,000m<sup>2</sup>であった。昭和54年4月、再度、小千谷～湯沢間の道路法線内の詳細分布調査が実施され、遺物の散布は少なかったが地形などの判断から、総面積約28,000m<sup>2</sup>の遺跡の範囲が提示された。この後、この面積が遺跡の道路法線内の遺跡面積となった。またこの遺跡面積は昭和55年4月、県教委から発表された「開発対象遺跡一覧」に示された。

その後、長岡～六日町間の道路の開通がせまり、公団からは県教委に対し、金屋遺跡の調査依頼が提出されたが、現地の用地買収などに支障があったことなどから順延となつた。

昭和57年3月、小出～六日町間の開通時期も決定し、用地買収も完了したため、公団と県教委との再協議により、昭和57年・58年の2年にわたって調査を行うこととなった。7月に県教委は道路法線内の遺跡範囲全域にわたる試掘調査を実施した。

以上、2度の分布調査と1度の試掘調査を踏まえて、昭和57年8月23日から11月5日と昭和58年4月7日から6月30日までの予定で発掘調査が実施されることとなり、公団から新潟県が受託して、金屋遺跡の発掘調査が行われた。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

### 1. 位置と地形

六日町は新潟県の南東部に位置し、群馬県とは越後山脈を境にして接している。行政区画としては南魚沼郡の中央にあり、六日町市街は中世において、坂戸城に拠る上田長尾氏が城下に家臣団を主体とする町屋を営んだことが起りといわれ、近世には清水街道と分岐する三国街道の宿場町として、また長岡と六日町とを結ぶ魚野川舟運の最終河港場・市場町として繁栄し、今も、商業・文化の中心的役割を果している。

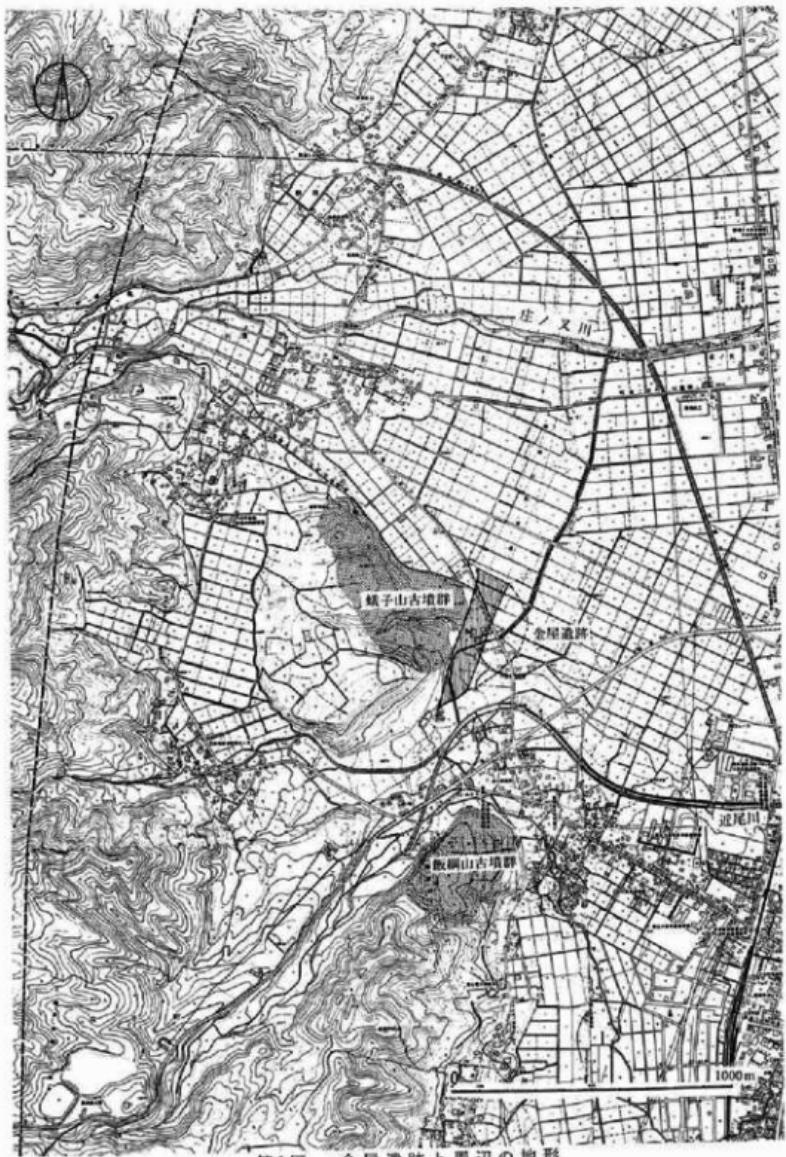
六日町周辺の地形は東西三つの地形区に大別される。東は、町の南東部を北北東に連なる越後山脈、中央は、町の中央を北流する魚野川とそれに流れ込む三国川や水無川などによってつくられた扇状地からなる六日町盆地、西は、町の北西部に、南北に連なる魚沼丘陵である。

以上三つに分けられる各地域は、中央の魚野川を境にして東と西とではっきりしたコントラストを見せている。東側は越後山脈から三国山脈に連なる八海山・中ノ岳・駒ヶ岳・巻機山・谷川連峰に代表される標高1,500m~2,000m級の著しく起伏の大きい山地であり、魚野川流域の六日町盆地へは急崖をなして落ち込んでいる。また魚野川右岸の同山地から流下し魚野川に注ぐ登川・三国川・水無川は広大な扇状地を形成している。

一方西側の魚沼丘陵は魚野川と信濃川に挟まれ、第三紀中新統上部以上の地層からなる油田褶曲帯地域であり、褶曲構造はほぼ北北東一南南西方向の軸をもっている。標高は樹形山で約750m、当間山で約1020mと平均800m前後である。魚沼丘陵の断面は非対称であり、主陵は魚野川寄りに位置する。東側は新発田~小出線の延長に相当する構造線で境となり、北西の信濃川に向かってゆるく傾斜している。

越後山脈と魚沼丘陵、中央にある六日町盆地は、中期洪積世から続く新発田~小出線の活動により、洪積段丘の発達がきわめて悪い。つまり段丘形成期に入って構造線の活動が活発化し、東部の継続的な沈降運動の結果、盆地が形成されたとみることができる。その後魚野川の冲積地となり、また東の越後山脈からの河川により右岸は広大で緩傾斜の扇状地を形成し、左岸は西の魚沼丘陵から流下する庄ノ又川などにより、狭く小規模で傾斜の急な扇状地を形成している。

金屋遺跡は、魚沼丘陵の急な東麓にわずかに残る魚野川の形成した河岸段丘の裾に位置し、庄ノ又川のたび重なる氾濫によって形成された扇状地の扇央に立地している。扇央であるため本来的には湧水は得にくい場所であるが、段丘(蟻子山)の山麓の湧水により沢地が形成され、古代からの集落が立地し得た地理的環境と推定される。また、遺跡周辺の欠ノ上・野田・川窪などの各集落も、同様に魚沼丘陵の山麓に湧水を求めて自然発的に形成された山麓集落と考えられ、古代の金屋遺跡も同様の山麓集落であったと考えられる。



第1図 金屋遺跡と周辺の地形

## 2. 周辺の遺跡

六日町盆地には、魚野川の支流である登川・庄之又川・三国川などによって形成された大小の扇状地が発達しており、これらの扇状地と後背の丘陵・山地には、縄文時代を中心にして数多くの遺跡が存在している。第2図は現在知られている縄文時代から平安時代までの遺跡を、六日町地区を中心に示したものである。ここでは縄文時代と古墳について、その立地を中心にして概観する。

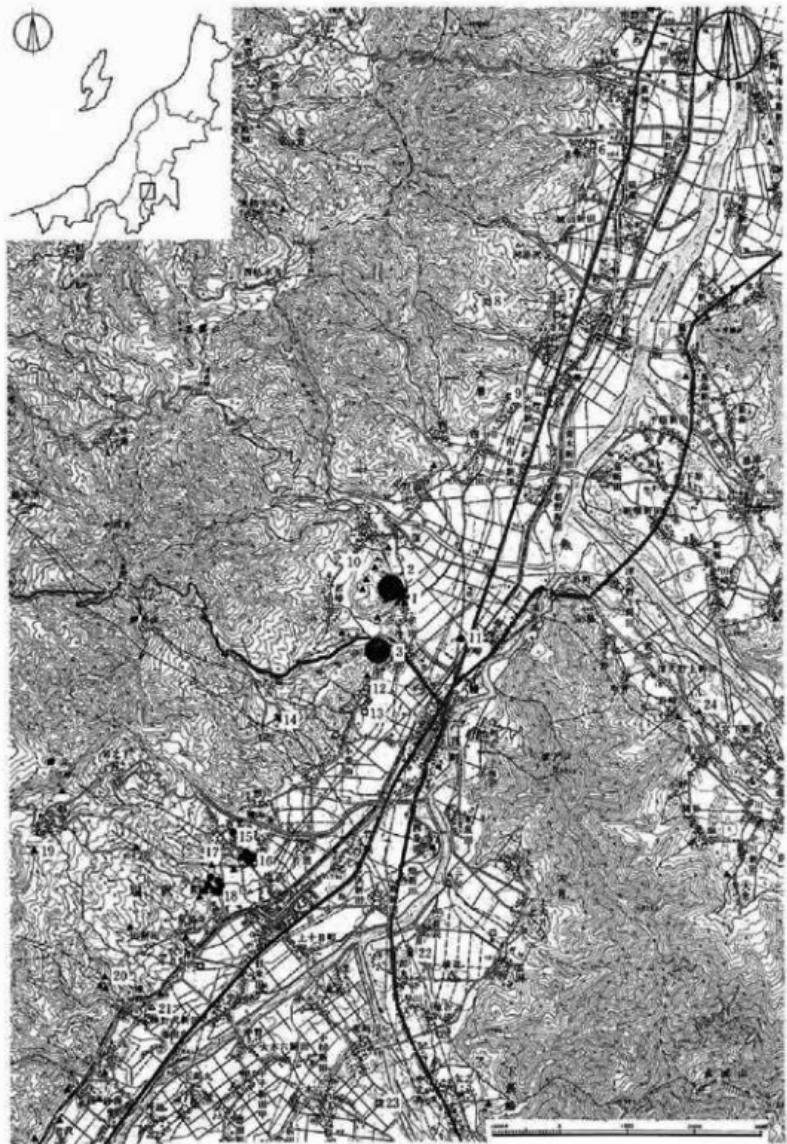
縄文時代の遺跡をみると、立地条件で次の二つに大別される。ひとつは、上ノ台遺跡(14)・梨木平遺跡(20)に代表されるように、標高200m以上の山地・丘陵に立地するもので、もうひとつは、宮下原遺跡(24)のように低位段丘及び丘陵縁辺部に立地するものである。いずれも時期的には中～後期の遺跡が大多数を占めるが、同じ中期でも後者に比較的大規模な遺跡が多く、早～前期の遺物を伴う遺跡は前者がほとんどで、その多くは小規模なものである。

また、魚野川流域は高田平野と並んで古墳の集中地域として知られており、消滅したものも含めて現在約180基の古墳が確認されている。これらは総称して魚沼古墳群とも呼ばれ、造営時期はおおむね古墳時代後期と考えられている。立地は堀之内町の根小屋古墳群を除いて、いずれも魚野川の左岸であり、この流域の開発を考える上で興味ある事実である。これらの古墳及び古墳群を立地・出土遺物から分類すると、A、比較的に比高差のある狭い丘陵末端の腰線上に立地する小規模古墳群〔根小屋古墳群・下山古墳群(5)〕。B、立地はAと類似するが丘陵上の広い平坦面に造営され、60基を超す大規模古墳群〔蟻子山古墳群(2)・飯綱山古墳群(3)〕。C、丘陵縁辺の扇状地に造営される単独もしくは小規模古墳群〔万貝古墳(15)・椎塚古墳群(16)・南山古墳群(17)〕に分けられ、鏡の出土の有無などからA→B→Cの順で造営時期が考えられている(中川 1973)。

奈良～平安時代になると、魚野川の右岸にも江戸塚遺跡(23)のように集落跡と思われる遺跡が出現はじめる。これは、この頃に左岸の開発と併行して右岸扇状地でも耕地の開発が始めたことを示すものと思われるが、遺跡の数からみてその主体は依然として左岸にあったことがわかる。

第1表 周辺の主な遺跡

No	遺跡名	時代	備考	No	遺跡名	時代	備考
1	金屋	縄文・古墳・平安	S57・58熱 教委発掘	13	長表	弥生・奈良 一中世	S49町教委、S58・59町教委 発掘
2	蟻子山古墳群	古	墳 S47熱史跡	14	上ノ台	縄文(中)	
3	飯綱山古墳群	古	墳 S47熱史跡	15	万貝古墳	古 墳	
4	一木口	弥生		16	翻摩古墳1	古 ~4	1・2号…S44 4号…S46 町教委発掘
5	下山古墳群	古	墳	17	堂前林	縄文(中)	
6	前原	奈良～平安		18	南山古墳1	古 ~7	2号…S36町教委発掘 6号…S38中村幸三郎発掘
7	北原	奈良～平安		19	椎塚蟻子山	縄文(中～後)	
8	天池	奈良～平安		20	鶴ノ木平	縄文(早～中)	S59町教委発掘
9	朴ノ木	奈良～平安		21	清長寺	弥生	
10	蟻子山A～E	縄文(中～後)		22	お江作り	縄文(中)・ 弥生	
11	大清水	古	墳	23	江戸塚	奈良～平安	
12	木の琴坂	奈良～平安		24	宮下原	縄文(中～後)	S54町教委発掘



第2図 金星遺跡周辺の遺跡

(国土地理院「十日町」1:50,000原図 昭和48年発行)

### 第III章 調査の経過

#### 1. 試掘調査(第3図)

昭和57年7月19日から28日まで行った。

調査対象全域にわたって行われたが、用地買収が未了のため、調査不能の地区もあった。遺跡は県道と用水路によって三分割し、県道の東側地域をA地区・県道と用水路に挟まれた地域をB地区・用水路の南側地域をC地区とした。C地区は盛土されていたため、盛土の東側・西側側道を調査対象とした。試掘調査方法は、任意の坪掘りとし、一部トレッセを設定した。結果は以下の通り。

1. 対象地域全域に遺物包含層が認められた。A・B地区は土師器・須恵器、C地区東側側道からは縄文土器が出土した。
2. 遺物包含層はA地区において2枚ある。
3. 県道の下は幅20m・深さ7mを超える砂礫を覆土とする旧河道が存在する。
4. 遺跡全体は扇状地性の土石流に覆われており、遺物包含層は0.5~1mの深度にある。

#### 2. 昭和57年度(第3図)

8月23日から11月5日まで調査を行った。

対象地域はA地区・C地区及びC地区東側側道である。総面積5,500m<sup>2</sup>であった。

A地区は調査員2名で全期間を、C地区は調査員2名で9月24日から10月7日、東側側道は10月1日から7日まで調査を行った。

調査方法は、試掘調査の結果を踏まえて、



第3図 地区割図

重機により、遺物包含層の上まで排除し、人力により、遺物包含層と遺構の調査を行った。

A地区においては遺構調査の結果、県道の下に存在する旧河道のように砂礫層を覆土とする溝3本(SD1～SD3)が検出された。溝の規模は幅1.2～2m、深さ70～80cmであるが、SD1～SD3の総延長は120m以上に及び、溝内は礫が隙間なくつまっているため、人力による掘り下げではいつ修了するか予想もできなかった。そのため重機により掘り進め、排積は不整地走行車を使用し、調査地域外に排出した。試掘調査の時に黒色土層と暗褐色土層の2枚の遺物包含層が存在したが、調査の結果、地形は北西から南東へゆるく傾斜しており、A地区における最も高い地区である19Sにおいては黒色土層は削平され存在しないことが判明した。またSD1～SD3の底面確認のために地山面を掘り下げた結果、約1.5m下に砂礫層のあることが判明した。この砂礫層は一部地山面上に表出している。10月中旬、200グリッドにおいて、暗褐色土層の下約20cmの黄褐色砂質土層中から土器が検出された。土器は、暗褐色土層の遺物とは大きな時期差は認められなかった。遺構の掘り形も明確ではなく、洪水などにより遺構が流失したものと考えられた。その他、SX21・SX22などを検出したが明確な掘り形を持つ遺構は少ない。SD1やSD4の土断面図から、A地区は数度の洪水をうけたことが判明した。

C地区は、蟻子山からの沢地の部分であり、遺構の存在は危惧された。中央の沢地部分は後にし、まず住宅があった部分から調査を開始した。8月30日から、住宅の基礎の撤去と、表土剥ぎを重機で行ったが、湿地のため排水が思うに任せず、排土に手間取った。人力による精査に入ったのは9月24日からであった。遺構は溝が1本検出された。沢地の中央部12Jグリッドについては、数ヶ所試掘溝を入れた調査を行ったが、深さ2mまで青灰色土と植物の混る灰黑色粘土の互層を呈し、遺構遺物は検出されなかった。東側側道はC地区と平行して調査を行った。厚さ2mの盛土を除去後、精査した。縄文時代の遺物、土壤を検出し、C地区および東側側道の調査は10月7日終了した。

A地区的調査と並行し、10月30日から11月1日まで、58年度調査予定地B地区の北半分の表土を約20cm削除し、58年4月からの調査に備えた。

### 3. 昭和58年度及び遺物整理（第3回）

4月7日から6月30日までの予定で調査に入ったが、遺構が多く、期間を1週間延長し7月7日で全調査を終了した。B地区11,000m<sup>2</sup>、C区西側側道約1,000m<sup>2</sup>が対象である。

3月中に山側に排水溝を設定し、融雪による蟻子山からの湧水に備えた。その結果、4月には周囲に雪はあったものの調査にはさしたる支障とはならなかった。B地区的調査は北から順に南へ進行した。黒色土層と暗褐色土層とを層序別に人力で掘り下げた。遺構は暗褐色土層を掘り下げた黄褐色砂質土上面で確認された。5月中旬までにB地区的北半分までの調査が終了した。

5月28日、平安時代の調査を終了した地域の一部と県道下の旧河道と合わせて約4,700m<sup>2</sup>が工事に必要となったため、公團に引き渡すこととなった。この部分に、下層の確認のため、2本のトレンチを入れた。結果は、深さ3mまで砂礫層であった。さらに1.5m掘り下げたところ、

南東に急傾斜する織子山の旧斜面が認められた。遺構はないため、この地区は5月29日公団に引き渡した。

その後、沢地における調査が主となった。沢地は湿地となっており、遺物の出土も11L・12L・13Kグリッド以西からは認められなかった。この地区は水田跡の存在が想定されたため、サブトレーナーを入れ、土層の断面観察から畦などの遺構検出を試みたが、畦畔状の高まりはなかった。また、黒色土の上層青色灰砂質土層から精査を行ったが、水田遺構は存在しなかった。

C地区西側道は6月1日から6月9日まで調査した。特に遺構は検出されなかった。6月28日、残りのB地区南半分において下層の確認調査を行った結果、平安時代遺構面の下約1mにおいて、古墳時代の遺物包含層が確認された。周辺に確認グリッドを入れ、遺物が認められなくなる範囲まで拡張した。総面積約3,000m<sup>2</sup>である（第11図朱色の範囲）。

この古墳時代の遺物包含層は、南と西にそれぞれ傾斜し、北東側は砂礫層によって切られていた。7月4日に、古墳時代中期の遺構の調査を終了し、さらに約1,000m<sup>2</sup>を2m掘り下げて下の遺物包含層の有無を確認した。その結果遺物・遺構もなく、7月7日全調査を終了した。

遺物整理は、注記までは調査中に現場にて実施した。一部、終了しなかったものを58年7月から11月で行った。58年11月から59年7月まで実測図の整理・遺物の分類・実測・図版の作成を行った。

なお、調査体制は以下のとおりである。

主体 新潟県教育委員会（教育長 久間 健二）

総括 南 義昌（昭和57年度） 高橋 安（昭和58年度）（文化行政課長）

管理 歌代 莊平（文化行政課長補佐）

庶務管理 般口 駿（庶務係主任）

庶務 若杉 幸三（昭和57年度） 高橋 幸治（昭和58年度）（庶務係主事）

調査指導 金子 拓男（昭和57年度） 中島 栄一（昭和58年度）（埋蔵文化財係長）

調査担当 中島 栄一（昭和57年度） 山本 雄（昭和58年度）（埋蔵文化財係職員）

調査員 山本 雄・大森 勉・高橋 勉（昭和57年度）（埋蔵文化財係職員）

北村 亮・田辺 早苗（昭和58年度）（埋蔵文化財係職員）



第4図 調査経過図

## 第IV章 調査の概要

### 1. 調査区の設定（第5図）

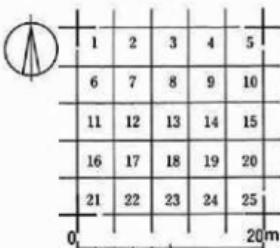
遺跡の範囲は昭和54年の分布調査及び昭和57年の試掘によって概略は捉えられていたものの、A地区北東側とC地区南西側ではすでに盛土が開始されており、この部分にも遺跡が広がる可能性が考えられた。このため、できるだけ広い範囲をカバーし、調査地域の拡大にも十分対応できるよう配慮して調査区を設定した。

グリッドは方向を国土地理院の座標系に一致させ、任意の点(20O)を基点として20m方眼を組みこれを大グリッドとした。グリッドの呼称は西から東へ1, 2, 3……、南から北へA, B, C……、とし、「12Mグリッド」のごとく両者の組み合わせによって行った。大グリッドはさらに4m方眼に区分し、北西隅から東に向って1~25の小グリッドとした。グリッドの設定にかかる杭の打設は、表土除去後に業者に委託して実施した。なお杭の呼称は、大グリッドの南西隅の杭とグリッド名を一致させた。また、調査が2年に渡ることから、22Oと20Nを見通し杭として残るようにし、翌年のグリッド設定の基準杭とした。レベル原点は調査区域外の県道筋に任意の杭を打ち、ベンチ・マークより標高を求めた(196.494m)。

### 2. 層序（第7図）

本遺跡は、扇状地の扇頂部に近い丘陵縁辺部に立地しているため、かなり複雑な土層堆積状況を呈しているものと思われた。観察結果では、B地区の南西部で青色灰砂質土がみられるほかは、各地区とも基本的には、表土—黒色土・暗褐色土（遺物包含層）—黄褐色砂質土（平安時代地山）であり、平均して1.5mの厚さで堆積しているが、小谷の出口であるA地区とB地区的山際では、2m前後と厚くなっている。また、これらの基本層序の間には、扇状地性の氾濫による黄褐色系の砂質土が1~5枚堆積しており、特にA地区的A-A'では1.5mにも及ぶ。

平安時代の遺物包含層（古墳時代遺物も少量含む）である黒色土・暗褐色土は、1~2枚の間層が入る部分もあるが、地山より50cmの厚さではほぼ一様に堆積しており、この時期には氾濫性の



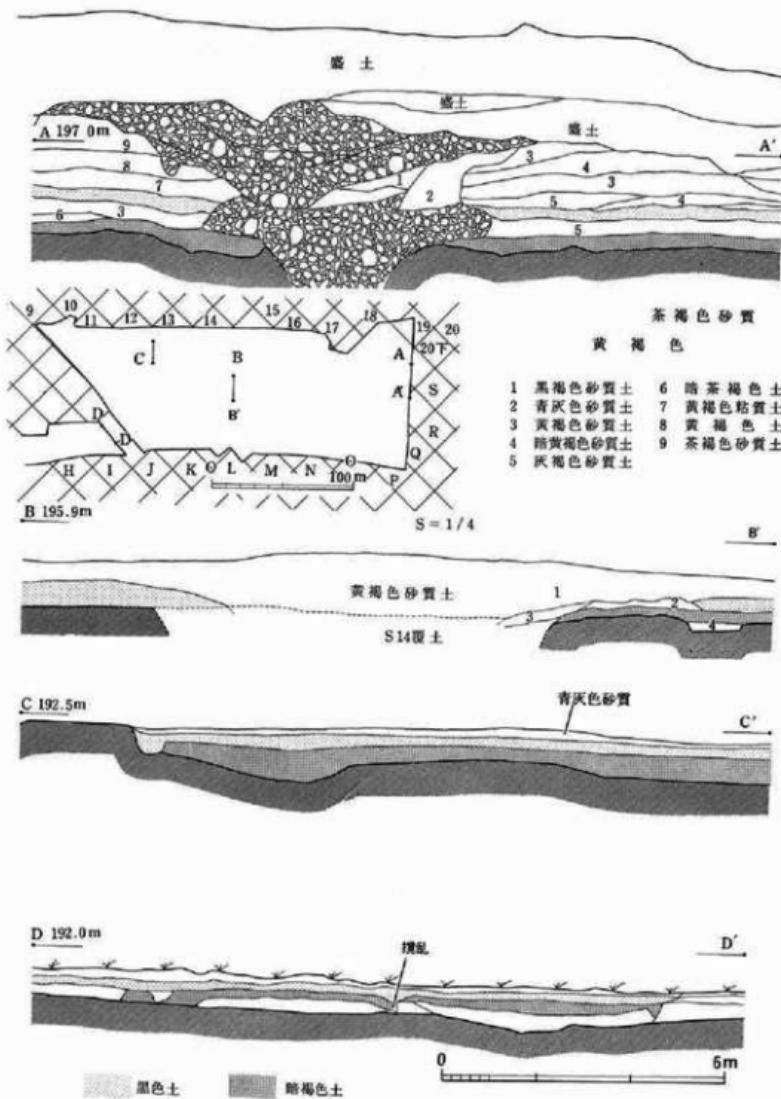
第5図 グリッド模式図

堆積が少なかったことがわかる。なお、B地区でみられる青灰色砂質土（第7図）は、小谷の出口にあたり、この下層では古墳時代の遺物包含層が14Mグリッド付近で急激に落ち込んでおり、これより西では確認できなかった。

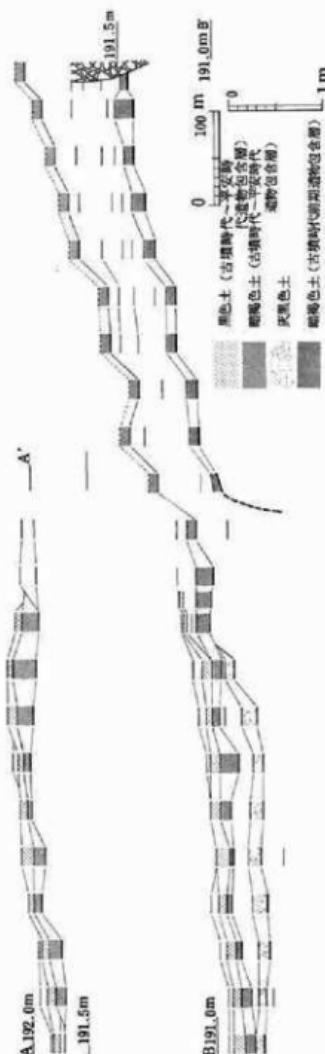
### 3. 各地区的概要

#### a. A地区（第8図）

A地区は県道の東側、グリッドでは18~22・N~Tの間である。調査の結果、県道にそって、南北に旧河道が流れ



第6図 基本土層図



第7図 B地区土層柱状図

ていたことが判明した。またSD1～SD3・SD4の土層断面(第44図)からも理解されるように、A地区は全域にわたって、扇状地性の氾濫を受けており、遺構の検出は困難であった。

遺構は、溝4、土壤4、性格不明遺構2、石組2、焼土集中16ヶ所(うち石組のあるもの2ヶ所)、ピット多数である。

SD1～SD4は南東へのびるもので、SD1～SD3は砂礫層を覆土とする。SD4の周辺には、遺物細片が散在していた。

性格不明遺構SX21は方形プランを呈し、住居跡とも考えられた。

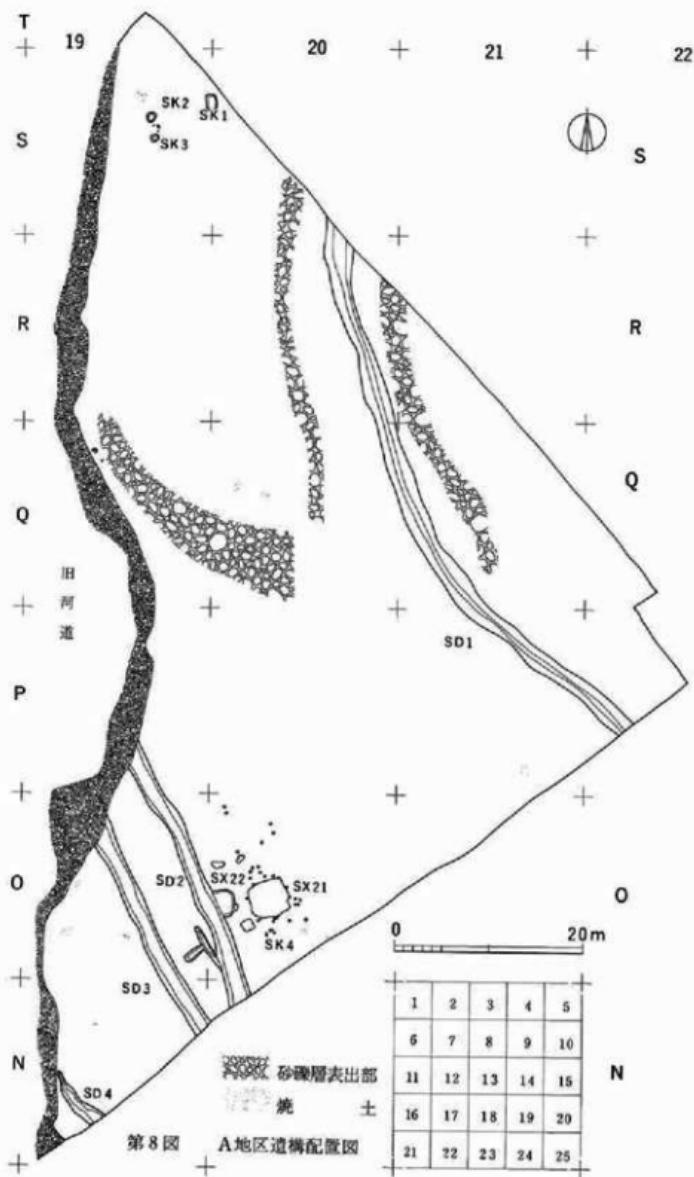
石組み遺構は20Qグリッドに2ヶ所検出された。石組みは幅20cm程、長さ30cmの川原石から成り、焼成を受けていた。下に焼土が集中していた。遺物は土器細片が石組みと複雑にからんでいた。竈と考えられ、周囲の精査を行ったが、柱穴・溝などはなかった。石の組み方も崩れた状態であり、土器も細片化していることから、洪水等により、住居跡が消失し、その残った竈の跡とも推定される。

焼土集中も前述のほか19O・19S・20O・21O・21Pグリッドに30cm×40cmの範囲、厚さ約5cm堆積しているものが検出された。掘り形が、土壤としてしっかりしたものは少ない。遺存状況のよいものとしてSK2がある。

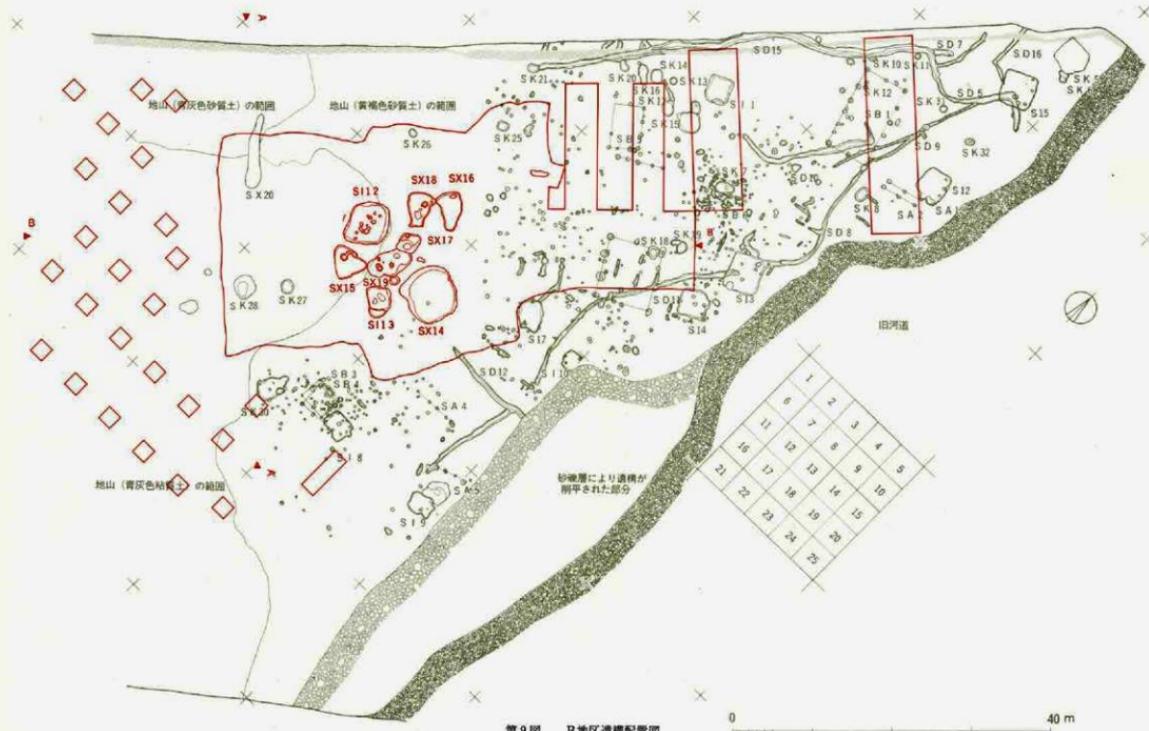
遺物は、19S・19Q・19N・20Q・20O・21Oグリッドに集中する。いずれも細片化しており、形となるものは少ない。

#### b. B地区(第8図)

昭和58年度に本調査を実施したB地区は、調査区の東側が、ほぼ南北に平安時代以降に流れたと思われる幅約20mの河道によって切られており、16ラインより東では地山(黄褐色砂質土)の堆積がみられず、疊層になっている。また、13Mから15Kを結ぶラインより南西側では、地山が漸移的



第8図 A地区遺構配置図



第9図 B地区遺構配置図

0 40 m

に青灰色砂質土に変化しており、遺構がほとんど存在しないことから、平安時代以前より湿地になっていた可能性が考えられる。

主な遺構は、平安時代（9世紀後半～11世紀）の竪穴住居跡10、土壙25、掘立柱建物4、溝8、ピット多数、性格不明遺構1のほか、平安時代の遺構検出面から60～70cm下層で、古墳時代中期（5世紀中～後半）の竪穴住居跡2、性格不明6が検出されている。住居跡の配置をみると、旧河道に沿って営まれているが、S I 10のようにこれに切られているものがあることや、A地区でも住居跡と思われるものが検出されていることから、旧河道によって壊された住居跡がかなりあったものと考えられる。このほかの遺構としては、15N（23）グリッドの黒色土上で焼土集中ヶ所が一箇所確認されているが、性格は不明である。

遺物は、16P・15O・16Oグリッドのように遺構の検出された地区周辺で多量に出土しており、完形に近いものもかなりみられる。

#### c. C地区（第10・11図、図版8）

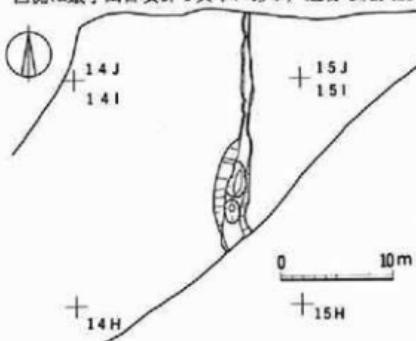
C地区は、用水路の南側、3-15-C～Jグリッドにある。ほとんどが盛土部となり、調査対象面積は、約3,000m<sup>2</sup>である。C地区と東側・西側側道に細分される。

C地区は、蟻子山から流れる沢地にあり、常に湿地となっている地区である。調査前に住宅のあった地域は、近接した畑地から過去に土師器や、竈と思われる焼土が検出されており、遺構の存在する可能性が高かった。調査によりこの地区では南北にのびる溝を1本確認した。遺物は土器であり、細片となって溝の周辺に散在していた。12Jグリッドなど沢地の中央は、試掘調査したが、遺構遺物は出土しなかった。

C地区側道は、蟻子山山麓から舌状にのびる低位段丘上にある。東側からは縄文土器細片100余片、石器80余片と土壙1基が検出された。土壙は縄文時代のものと考えられた。土器は細片化していた。遺物の分布はかなり集中し、低位段丘の縁辺部にまとまっている。

西側は蟻子山古墳群の真下にあり、遺物も縄文土器若干と土師器片、須恵器（1）が検出された。地形的に北東に傾斜し、遺構はなかった。

須恵器（1）は有蓋高杯の蓋である。6世紀初頭の所産と考えられ、蟻子山古墳群との関係を知り得る資料である。



第10図 C地区遺構平面図



第11図 C地区西側側道出土土器

## 第V章 遺構

金屋遺跡において検出された遺構は縄文時代・古墳時代・平安時代にわたっている。特に古墳時代中期の遺物包含層と古墳時代後期・平安時代の遺物包含層の間には、洪水平積層が存在して、上下2層に分かれて検出された。以下、各時代別に記述する。

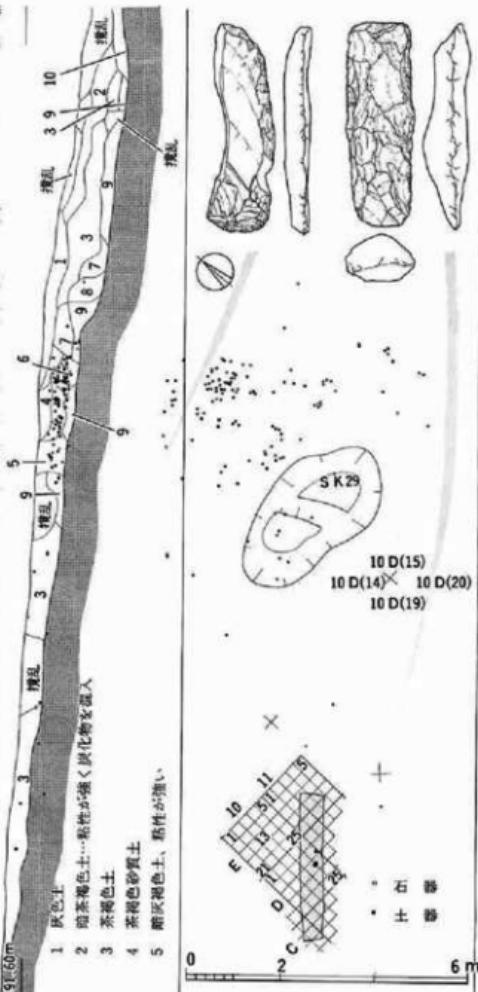
### 1. 縄文時代（第12・13図 図版5・6）

縄文時代の遺物はC地区側道部から出土している。遺構は東側側道で土壌1基が検出された。

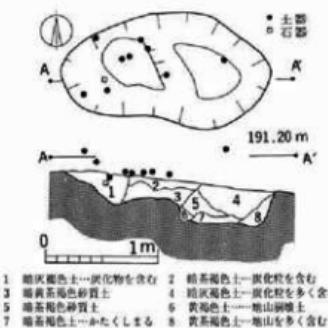
東側側道部の土壌(SK29)周辺における遺物の出土状態は、土器と石器が混然となり、SK29の北側に集中する。いずれも斜面にそった暗褐色土から出土している。

SK29は北東にゆるく傾斜するソフトローム面に検出された。9D(14)グリッドの北東隅に位置する。東西1.86m・南北1.02mを測る東西に長い梢円形を呈している。底面は二段となり、西側が浅くなる。深さは浅い方で25cm・深い方で40cmを測る。西壁は30度とゆるく立ち上がり、東壁は70度と急である。

覆土は東西のセクションベルトから8層に分層された。土層の観察から1~3層と4~8層の2つの土壤が重複していた可能性があ



第12図 縄文時代土壌実測図及び遺物出土状況



第13図 繩文時代土塚（SK29）実測図

構面とも流されていた。また、第7図からもわかるように地山面は西側と南側に傾斜しており、遺構が検出された地区が当該期には高い地区であったと思われる。

### a. 住居跡

#### S I 12 (第14図 図版9・12)

B地区の中央、14Mグリッドにあり、古墳時代中期の遺構群の最西部に位置する。プランは不整隅丸方形を呈し、南壁がやや広い台形である。隅部は地山が砂質であり、一部崩壊した可能性もある。主軸はN-22°-W、各辺は3.8~4.5mを測る。

覆土はセクションベルトから9層に分層された。覆土の堆積状態から、本住居は2~9層までが自然に埋没し凹地状を呈しているところに、洪水等により一気に洪水堆積土（1層の黄褐色粘土）が流れ込んだと考えられる。

壁は、地山が砂質土であるため明瞭ではないが、立ち上がり角度は約70°を測る。床面は中央部から壁際20cmのところ（第14図・破線内）は硬くしまっているが、壁際直下は軟質であった。柱穴は整然とは並ばず、主柱穴はP<sub>1</sub>-P<sub>3</sub>の3本が確認された。このうちP<sub>3</sub>は整った柱穴で、柱も検出されたが、P<sub>1</sub>-P<sub>2</sub>は浅いものであった。ほかに南壁中央の壁際にはP<sub>1</sub>-P<sub>6</sub>が並ぶ。特に、P<sub>5</sub>は長径81cm、幅26~40cm、深さ15cmの溝状を呈していた。周溝は検出されなかった。炉は床面に掘り込まれたものは検出されなかった。しかし、中央部に厚さ5cm前後で炭化粒・木炭片が密集し、土器の塵片なども検出されていることから、焚火の跡は存在したと考えられる。

遺物は4層~7層に多く出土し、小型丸底壺・壺・高杯・鉢・甕が出土している。特に、7層中（床面直上・土器集中範囲）からのものには甕片が多く認められ、ほかに4層中などには壁にそって小型丸底壺・鉢など完形のものが多く出土している。

#### S I 13 (第15図 図版10・11)

14Mグリッドの南東部、S I 12の南東約5mに位置し、古墳時代中期遺構群の最南部に検出された。黄褐色砂質土に掘り込まれたため、壁は崩壊が見られる。プランは不整隅丸方形を呈

る。各層はレンズ状堆積を呈しておらず人为的に埋められたと考えられる。また、水田耕作により、常に冠水状態におかれていたため、覆土は全て酸化鉄分を含む。

### 2. 古墳時代中期（第11図 図版8）

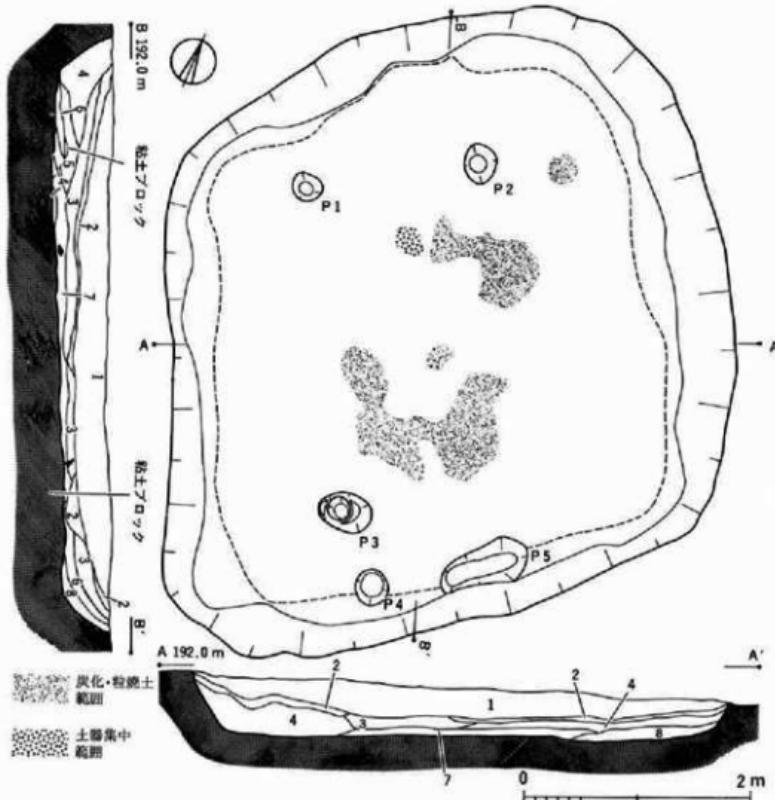
古墳時代中期の遺構は堅穴住居跡（S I）2軒、性格不明なもの（S X）6基が検出された。いずれも平安時代の遺構確認面下約1mのところ、厚く堆積した洪水堆積土を排除して確認された。遺物包含層は暗褐色土であり、14P・15Oグリッド以東では洪水などの土石流により遺物包含層・遺構面とも流されていた。

遺構が検出された地区が当該期には高い地区であったと思われる。

し、主軸はN-22°-W。各辺は3.8~4.5mを測り、北辺が長い。南東部には直径2mの半円形を呈する落ち込みがあり、本住居はこれを切って構築されている。

覆土は南北に設定したセクションベルトにおいて六層に分層された。本住居に伴う覆土は1~5層であり、2~4層はレンズ状に堆積し、凹地状に残った部分に氾濫等により1層が充満したものと考えられる。6層は地山漸移層と考えられる。

壁はゆるやかに立ち上がる。壁高は15~37cmを測り、南部分で地形の傾斜に従って浅くなる。柱穴・周溝はない。床面は中央部で砂質土を硬くたたきしめているが、全体に軟質である。炉は床面をわずかに掘り凹めたもので、プランはダルマ形を呈し、長径1.1m・短径0.5~0.7m。



- 1 黄褐色粘土  
2 褐褐色砂質土…炭化粒をわずかに含む  
3 褐褐色砂質土…炭化粒を多く含む  
4 黄褐色砂質土…炭化粒を含む  
5 褐褐色砂質土…大粒の炭化粒を含む  
6 前褐色砂質土…炭化粒を含む  
7 黑褐色砂質土…木炭片・炭化粒を多く含む  
8 前黄褐色砂質土…大粒の炭化粒を含む  
9 黄褐色砂質土…漸移層

第14図 S I 12 実測図

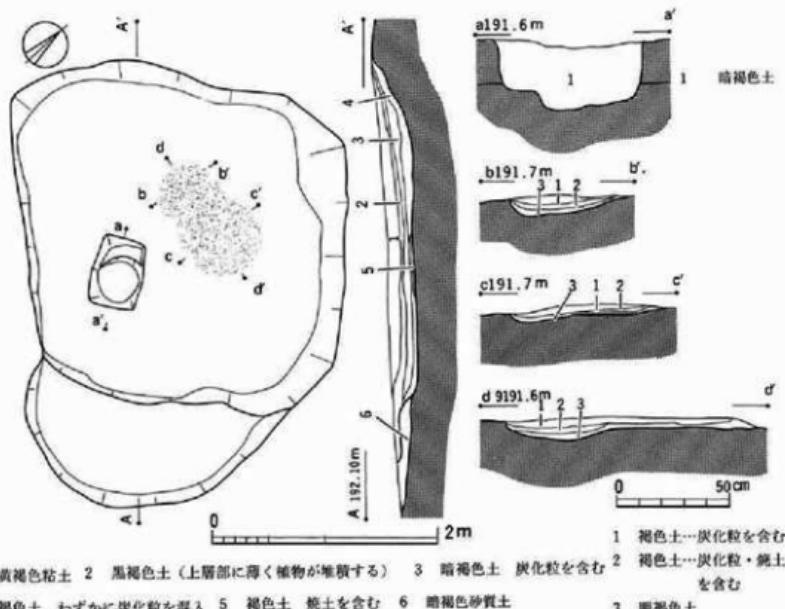
深さは7~9cmと浅い。底面には焼けた硬化面などは認められなかった。土壤は、中央よりやや南寄りに1基検出された。長辺65cm・短辺47cmの方形で、北側にテラスが1段ある。深さはテラスで21cm・最深部で30cmを測る。覆土は暗灰褐色土で炭化粒を多く混入する。遺物は小型丸底壺・甕・高杯などが、主として3・4層から出土している。特に小型丸底壺・甕はほぼ完全形に近いもので横倒しの状態で出土した。

#### b. その他の

##### S X14 (第16図 図版12)

14・15Mグリッドに位置する大形の土壤で、平面形はやや歪んだ隅丸方形を呈する。南北6.1m・東西6.7m・深さ30~35cmを測る。覆土は基本的に四層に分かれ、上から1層黄褐色粘土(この層はさらに上下二層に分かれ、上層は砂を含み、下層は灰色粘土ブロック層である)・2層黒色腐植土・3層褐色砂(褐色砂中に若干の炭化粒を含み、褐色を呈する)・4層黄褐色砂漸移層がレンズ状に堆積している。壁・底面は全体にしまりがなく、ゆるく摺鉢状に傾斜している。遺物は土器器範細片が数点出土したにすぎない。

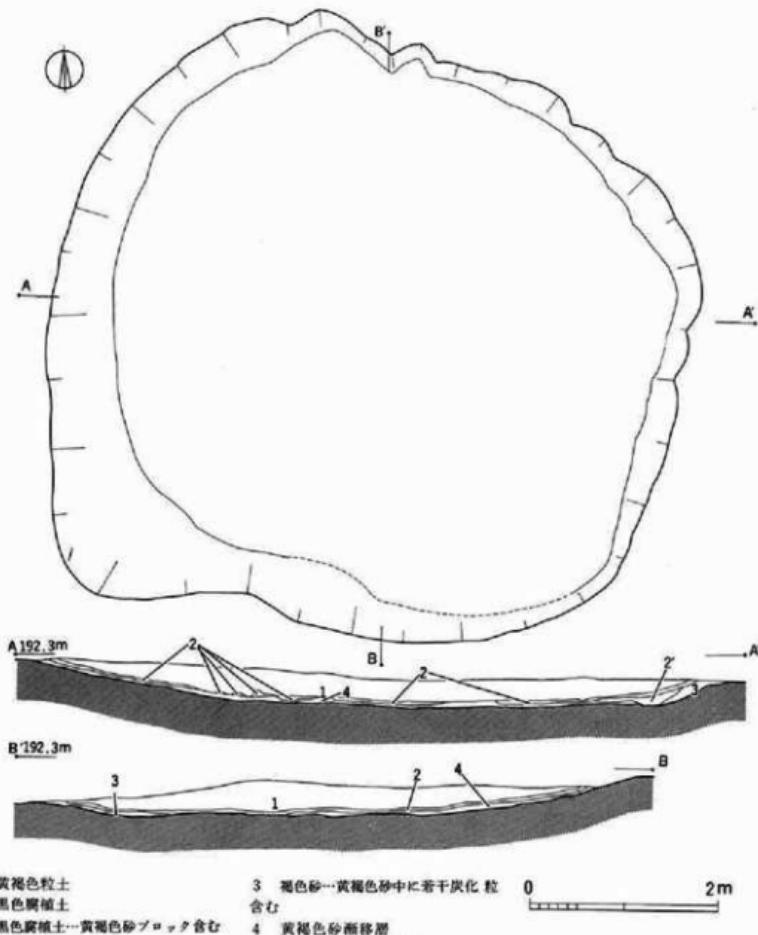
検出当初、隅丸方形の平面から堅穴住居跡かと考えたが、壁・底面の堅さ・傾斜・遺物の出土状況等から自然の凹みの可能性が強い。



第15図 S I 13 実測図

S X15 (第17図 図版11・12・13)

14Mグリッドに位置する大形の浅い土壌である。南西側の壁が不明であるが、平面形は三角形を呈するかと思われる。南北長3.7m・東西辺4.5m・深さ10~18cmを測る。覆土は基本的に2層に分かれ、上から1層黄褐色粘土・2層暗褐色土（砂を多く含み、炭化物を混入する）が堆積し、ピット内には3層青灰色及び黄白色砂質土が堆積している。底面は東側がやや堅敏で、南西へゆるく傾斜する。壁は西側がほぼ垂直に、東側がゆるく立ち上がる。北側には高さ約5cm



の低い段を有する。ピットは1基で、中央北西寄りに位置し、平面椭円形を呈し、長軸85cm・短軸75cm・深さ約6cmを測る。遺物はこのピット周辺に集中して出土している。

当初、底面が堅緻で、遺物がまとまって出土したことから竪穴住居跡と考えたが、平面が三角形で、炉・柱穴が検出されないことからここでは竪穴住居との断定は避けた。

#### S X16 (第18図 図版12)

14Nグリッドに位置する大形の浅い土壇である。西から南にかけて掘り過ぎたため、本来の平面形は不明であるが、長椭円形あるいは長方形であったと思われる。現存長は長軸4.55m・短軸2.65m、深さは北側確認面から約10cmを測る。覆土は三層に分かれ、上から1層黄褐色粘土・2層茶褐色土(炭化粒を含む)・3層暗褐色土(炭化粒を含む)が堆積する。底面は堅緻で、南北へゆるく傾斜している。壁は北から東にかけて残存し、なだらかに立ち上がる。遺物は北側に集中して出土した。

炉・柱穴が検出されないことからここでは竪穴住居跡との断定を避けた。

#### S X17 (第19図 図版13)

14Mグリッドに位置し、S X19と重複する土壇である。北から西にかけて削られているが、現存部分から本来の平面形は隅丸方形と思われる。現存長は一辺約2.4mで、底面は2段になり、深さは東側確認面から上段10cm・下段16cmを測る。覆土は三層に分かれ、上から1層黄褐色粘土・②層茶褐色土(炭化粒を含む)・③層褐色土(砂を多く含み、炭化粒も含む)が堆積する。壁・底面は摺鉢状に傾斜する。遺物は土器師細片が若干出土している。

当初、S X17とS X19、S X17の東側土器集中地点は一体の遺構かと思われた。しかし、断面観察からS X17はS X19より古く、東側土器集中地点とは直接関係しないことが判明した。

#### S X18 (第20図 図版14)

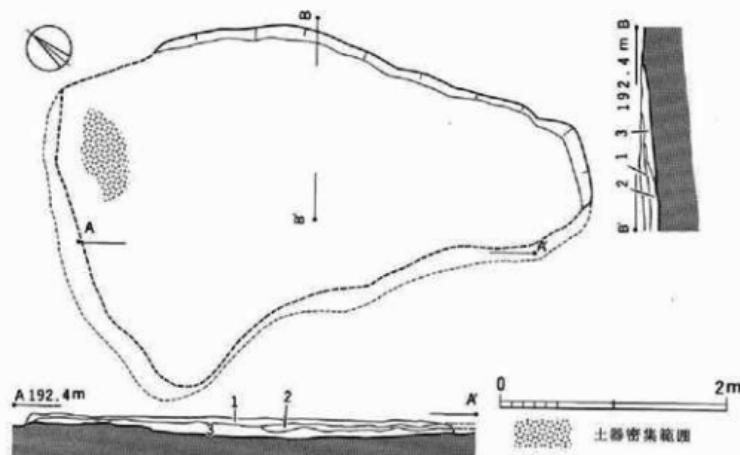
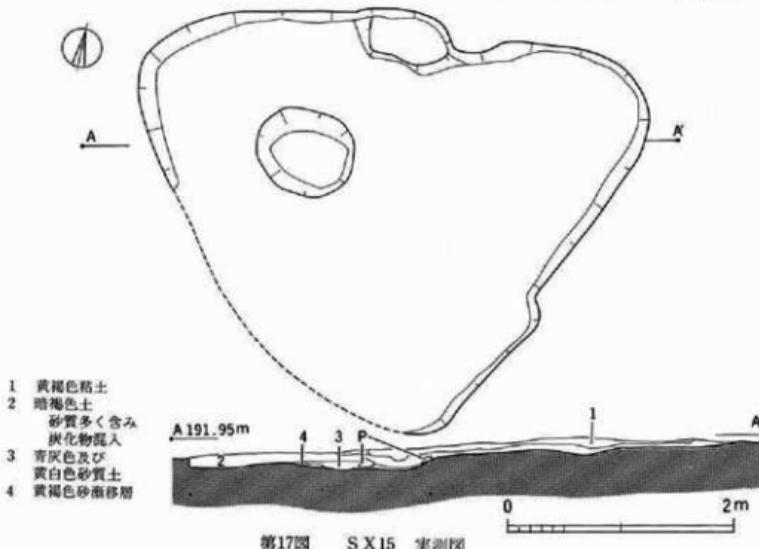
14M・Nグリッドに位置する大形の浅い土壇である。平面形は不整卵形を呈する。南北4.25m・東西(中央付近)2.65m、深さは北側確認面から約5cmを測る。覆土は3層に分かれ、上から1層黄褐色粘土・2層黒色土(わずかに赤味をおび、粘性有り)・3層茶褐色土(砂を多く含む)が堆積する。底面は堅緻で、西へゆるく傾斜する。壁は北西側が一部不明であるが、ほかはゆるく立ち上がる。ピットは2基あり、北西側に位置する。ともに平面は椭円形で、中央寄りのピットは長軸75cm・短軸60cm・深さ30cm、壁際のピットは長軸65cm・短軸50cm・深さ23cmを測る。2基とも上層に黄褐色粘土がレンズ状に、下層に茶褐色砂(粘土プロック・炭化粒を含む)が堆積する。遺物は南側に集中して多量に出土した。

平面形が歪み、炉が存在せず、ピットは2基検出されたものの、上屋構造の存在を証明するには至らないことから、竪穴住居跡との断定を避けた。

#### S X19 (第19図 図版14)

14Mグリッドに位置し、S X17と重複する大形の浅い土壇である。平面はやや歪んだ長椭円形を呈し、長軸5.0m・短軸3.15m、深さは東側確認面から15~20cmを測る。覆土は基本的に三層に分かれ、上から1層黄褐色粘土・2層黒褐色土(1層と3層の間に必ずあり、本來の厚さは1

cm位である)・3層褐色土(砂利・炭化粒・黄褐色砂ブロックを含む)が堆積する。底面は堅緻で遺構外と明確に識別可能であり、西南へゆるく傾斜する。壁は東から北にかけて確認され、ゆるやかに立ち上がる。ピットは4基あり、北からそれぞれ、梢円形を呈し長軸55cm・短軸45cm・

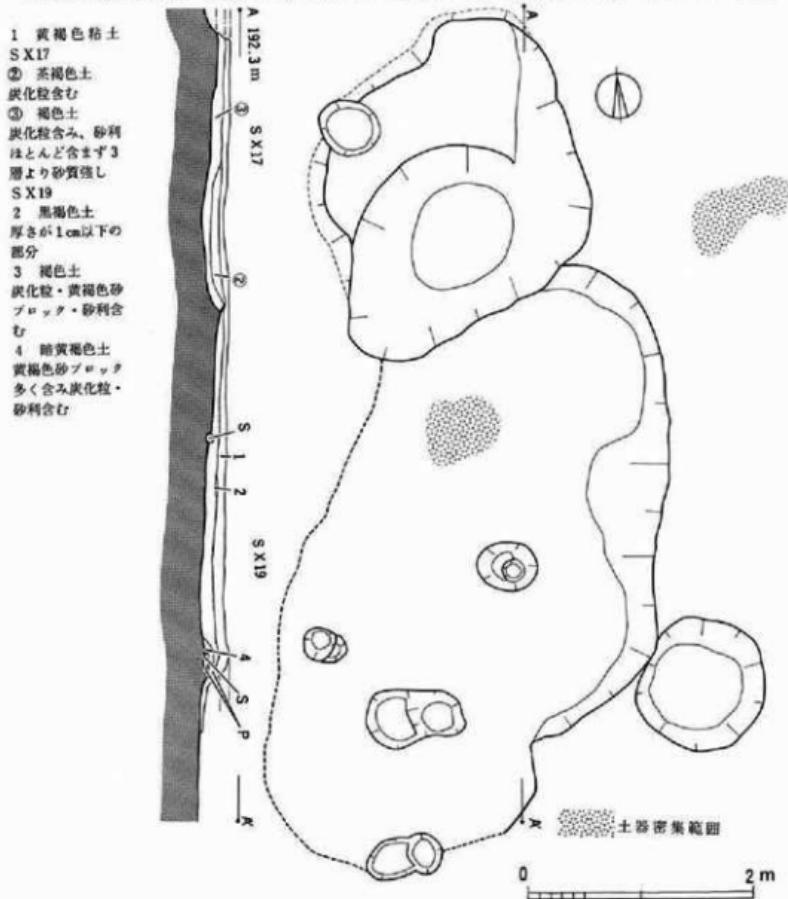


深さ30cm、梢円形を呈し長軸40cm・短軸30cm・深さ20cm、瓢形を呈し長軸90cm・短軸45cm・深さ30cm、瓢形を呈し長軸70cm・短軸35cm・深さ15cmを測る。遺物は北側で集中して出土した。

東側に接する土壌は、平面が円形を呈し、径110cm・深さ10cmを測る。遺物はまったく出土せず、S X19との関係は不明である。断面観察からS X19はS X17より新しいことが判明した。S X18同様、ここでは竪穴住居跡との断定を避けた。

### 3. 古墳時代後期（第21図・図版18①）

古墳時代後期の造構・遺物は平安時代のものと同様の確認面・遺物包含層で検出された。当



第19図 S X17・19 実測図

期の遺物を出土する遺構としてはS I 3下部土壇(S K33)・S I 1・S I 6・S K14・S K15などがあり、遺構外からの遺物の出土もこれらの遺物付近(14~16O, 15~16Nグリッド)に限られる。遺構の中で、S K33以外は平安時代の遺物と混然となって出土しているため、当期の遺構と限定できるのはS K33のみである。従って、ここにおいてはS K33だけを記述

し、ほかの遺構は平安時代の項において述べることとする。

ととする。なお遺物につ

いても各出土遺構において一括して行うこととする。

#### S K33(第21図)

15N(2)グリッドにおいて検出された。S I 3の南西隅部に位置する。この土壇より西にはS D11が続くようにのびるが、S D11は地山上からS I 3と同一面で確認されたが、S K33はS I 3の床面を精査した後確認された。長軸1.09m・幅27~58cm・深さ24~26cmの長方形を呈している。主軸はN=45°~Eを測る。覆土は炭化物を混入する暗褐色土の単層であった。

土器類はS I 3の床面からわずかに下がったところ、土壇の上層において密集していた。

#### 4. 平 安 時 代(第11図 図版2~4)

平安時代の遺構は、堅穴住居跡(S I)9軒・掘立柱建物(S B)6棟・棚(S A)5列・溝(S D)13本・土壇(S K)30基・性格不明遺構(S X)3基・ピット多数が検出された。

各遺構はおもにB地区北東部に多く認められた。C地区およびA地区では遺構の密度は薄い。このことは、遺跡が何度かの洪水により、搅乱などをこうむり、遺構の検出が困難であったように、一部遺構

第21図 古墳時代後期(S K33)土壇実測図



第20図 S X18 実測図

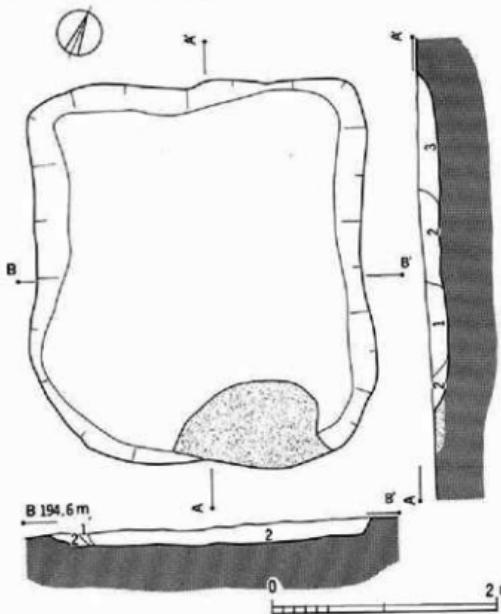


も流失した可能性があるが、遺物包含層が残り、遺物の遺存状態はけっして劣悪ではないことを考えると、遺跡の主体がB地区にあったと考えられる。またC地区とB地区の西半分については、蠍子山から流れる沢の延長にあたり、南西にゆるく傾斜し、常に湿地となっており、地山の土質も青灰色粘質土であることから、古代にも生活の場としてではなく、湿地を利用した水田などの生産の場であったと推定された。しかし、今回の調査では当該地区においては水田などの遺構は検出されなかった。また遺構の密集する地区は標高193m前後と高位にあり、當時でも高い場所であったことが確認された。

堅穴住居跡は9軒のうち8軒までが県道下の旧河道の右岸にそって並ぶことが看取される。

掘立柱建物はおもに蠍子山の麓に密集する。南北に長いものが多く、規模は画一的ではない。ピットが多くあり、ほかにも存在する可能性が高い。

溝は計画的に構築されたものは少なく、ほとんどは洪水の際に流れた小川状のもので、SX 20もこの一つと考えられる。



- 1 黒褐色土+砂粒…砂質土を多く含む、乾燥が早い
- 2 " …しまりよし
- 3 " …2層よりやや褐色が強い
- 4 褐色土+砂利…しまりよし
- 5 黄褐色土………地山ブロック

第22図 S II 実測図

土壤は形状・性格等による分類ができず、本書では遺物の出土したものから順に記述した。

柵は、柱穴の形・大きさ等に規格性はない、並び方も不規則であった。各堅穴住居跡付近に位置するものが多い。今回は特別な記述はさけた。

### a. 住居跡

S I I (第22-23図 図版15)

150の中央やや北寄りで検出されたもので、5mほど南にはS I 6が営まれている。プランは不整隅丸長方形を呈するが、特に南隅のコーナーはゆるいカーブを描いてお

り、竈のある辺を除いて各辺は外縁する。主軸はN-25°-W、長軸3.35m、短軸2.90mである。掘り込みは15cm程度であるが、地山が北東から南西へ向ってわずかに傾斜し

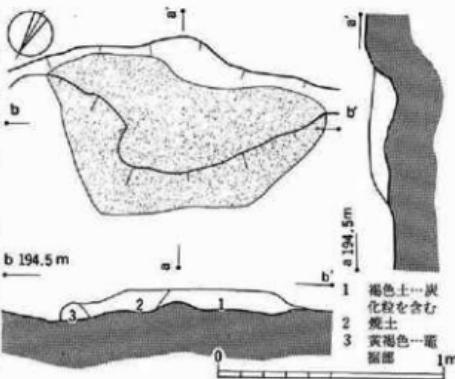
ているため、南西側ではしだいに壁は低くなっている。壁の中で最も遺存状態が良好なのは東壁で、ほかは立ち上がりも明確でなく、ゆるく消滅する。周溝・柱穴はみられず、床面も明瞭ではない。

窓は北壁の中央やや東寄りに構築されている。全体的に擾乱がひどく、ほ  $b$  194.5 m とんど原形を失っているが、わずかに東側の袖が断面観察で確認されている。また、壁側中央に突出部がみられるが、これが煙道部とも考えられる。

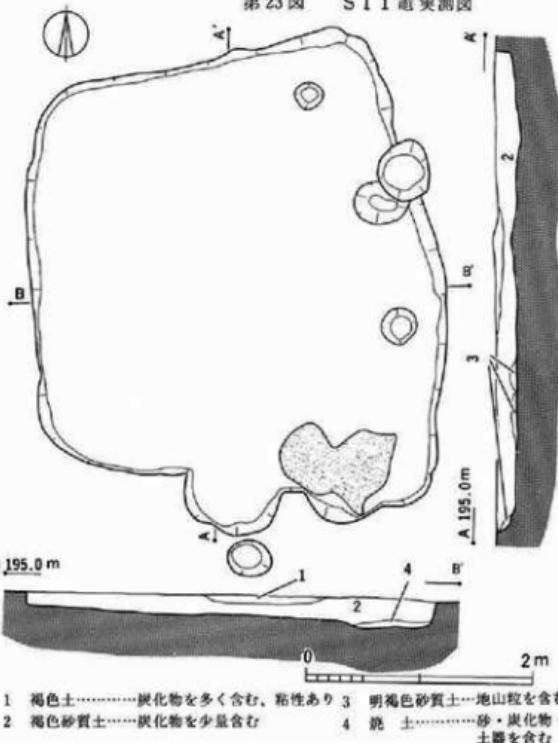
遺物は1層より多く出土しているが、特に窓付近に集中している。器種としては、土師器の杯・高杯・壺、須恵器の蓋・長頸壺などがみられる。

S I 2 (第24・25図  
図版16・17)

16Pグリッドの南西隅で旧河道に沿って検出されたものである。プランは基本的には台形であるが、南壁の中央部に半円形の突出部を有し、東壁は大きく外彎している。主軸はほぼ南北を示し、長軸3.92m・短軸3.68mである。掘り込み



第23図 S I 1 窓実測図



第24図 S I 2 実測図

は平均18cmで、壁は南壁の突出部を除いてほぼ垂直に立ち上る。床面は凹凸が激しく、礫層面が露出している。ピットは東壁寄りに4本確認されたが、このうち壁を壊している1本は、本住居跡覆土を掘り込んでおり、直接住居跡に係るものではない。ほかの3本は深さが15cm前後とほぼ一定している。

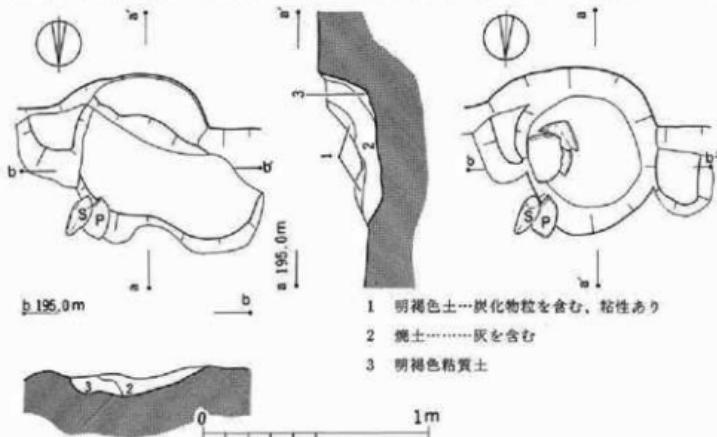
竈は南壁の突出部東側にあり、壁を約40cm掘り込んで構築されている。また、床面を14cm掘り込んで燃焼部を作っており、この中には袖石として使用されたと思われる偏平砾が残存していた。擾乱が著しく原形は保っていない。

遺物は、ほとんど2層から出土しているが、ほかの住居跡に比べて須恵器の出土が目立つ。土師器の無台杯、須恵器の無台杯・有台杯・蓋がみられる。また、竈の燃焼部からは土師器の甕が出土している。

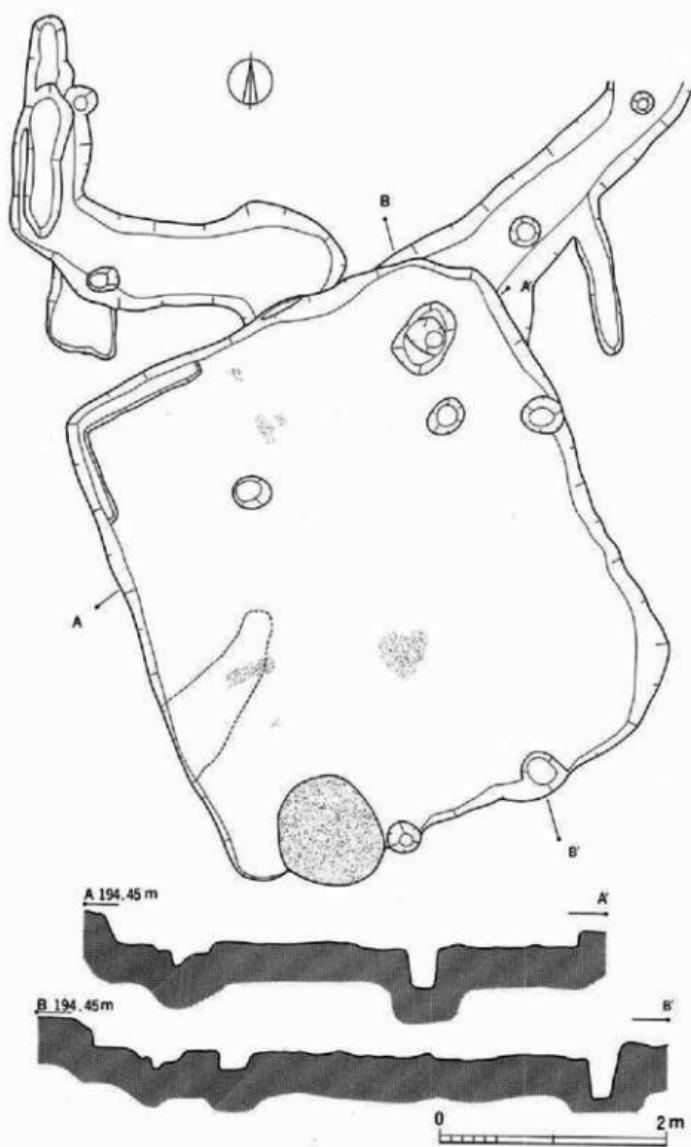
#### S I 3 (第26・27図 図版17・18・28)

16Dグリッドの南側中央に位置し、自然の流路と思われるSD 9を切って構築されている。プランは本遺跡の住居跡中では比較的整った長方形を呈するが、北及び南コーナーは不整形でゆるく彎曲する。主軸はN-25°-W、長軸4.79m・短軸4.20mと最大の規模を有する。掘り込みは約15cmで、壁は明瞭に立ち上がる。床面は礫層の露出部があるものの、比較的平坦で、深さ35cm前後のしっかりした柱穴が5本確認されている。周溝は西コーナーで長さ約2.2m・幅10~15cm・深さ2~3cmのものが検出されているが、ほかの部分では確認されていない。なお、S I 4と同様に覆土の最上層には黄褐色砂質土のレンズ状堆積がみられる。

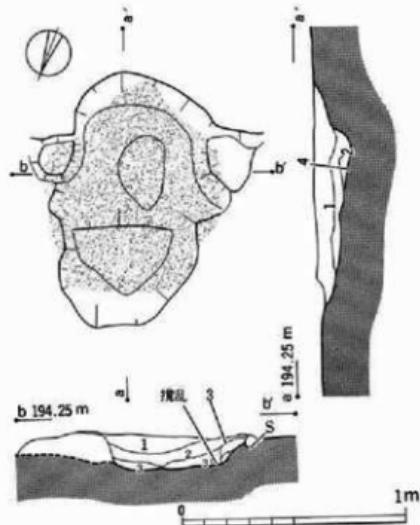
竈は南壁の西隅に、壁を約50cm掘り込んで構築され、燃焼部は地山を17cm掘り下げ、北半にはテラス状の平坦面を有する。また、両袖の壁部分にはテラス状の張り出しを設けている。燃



第25図 S I 2 竈実測図



第26図 S I 3 実測図



1 黒色土……炭化粒を多量に含む  
2 赤褐色土……炭化粒を多量に含む  
3 褐色土……地山・炭化物粒を多く含む（底面壤土）  
4 赤褐色土……粘土（地山更質土）

第27図 S I 3 窯穴測図

袖部分まではほぼ巡っており、幅は最大40cm、北西コーナーの最小部分で6cmと一定していない。深さは5cm前後である。4本のビットが検出されたが、深さ8~30cmと一定でなく、配置にも規則性はみられない。ただ、本住居跡を囲むように径20~30cm・深さ20~30cmのビットがみられ、壁からの距離も40~50cmとほぼ同じことから、上屋構造と何らかの関係があるものと考えられる。なお、覆土の最上層には黄褐色砂質土のレンズ状堆積がみられ、住居跡廃絶後の埋没最終段階で水性堆積をもたらすような河川氾濫等があったことがわかる。

窯は南西コーナーに、ほぼ西へ突出する煙道部を伴って構築されている。燃焼部は地山を10cmほど掘り込んで作られており、焚き口には大型の偏平磚2個を、床面を約10cm掘り込んで「八」字状に固定して袖石としている。磚の内側には灰白色砂質土が貼り付けられており、これによって燃焼部内壁を形成したものと思われる。また、煙道部は住居跡外の地山面を約15cm掘り込み、長さ25cm前後の礫を組んで作られている。礫の内側には、燃焼部と同様の灰白色砂質土の貼り付けがみられる。燃焼部内からは、土師器の甕・羽釜がそれぞれ1個体分出土している。

遺物は4層中より出土しているが、数は少ない。器種は土師器の杯・甕、須恵器の碗である。

#### S I 5 (第30図 図版21下)

B地区の北隅で、16Qグリッドの南西隅に位置する。プランはほぼ正方形を呈するが、西壁がやや彎曲して外に張り出す。主軸はN-24°-W、長軸4.32m・短軸4.23mを測る。掘り込み

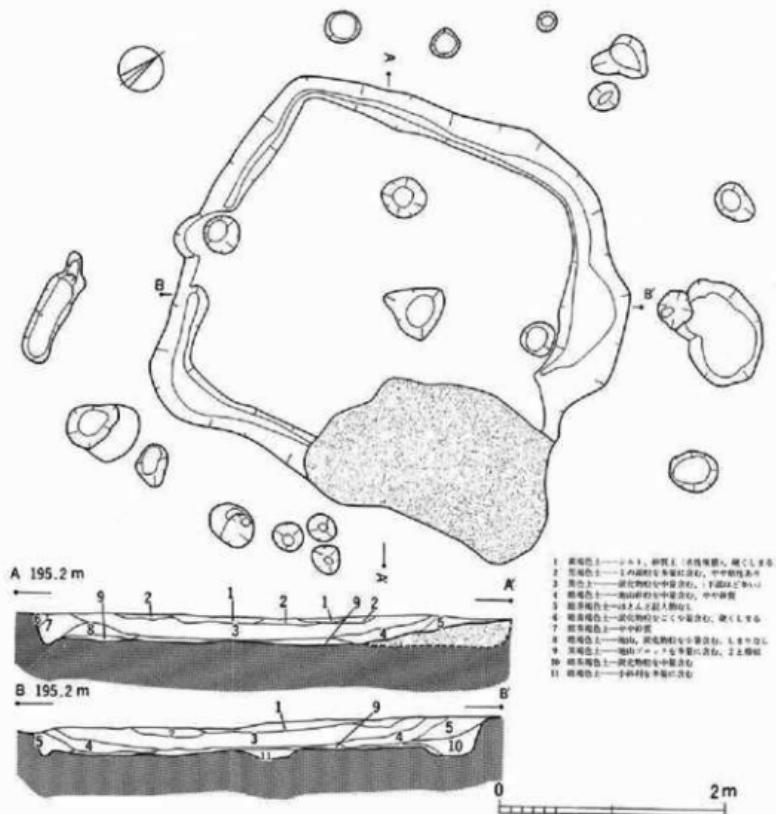
焼部底部で、わずかではあるが焼土塊が検出された。

出土遺物は土師器の無台杯・羽釜、須恵器の長頸壺などである。また、床面から10cm浮いた状態で炭化材及び剣が出土している。

なお、本住居跡には直接関係ないが、竈のすぐ北側で長椭円形の土壙（SK 33）が検出され、覆土中より古墳時代後期の土器片が多く出土している。

#### S I 4 (第28・29図 図版19・20・21)

16Nグリッドの中央やや北西寄りで、S I 3の5m南に位置する。プランは不整形形を呈し、主軸はN-28°-W、長軸3.68m・短軸3.40mを測る。掘り込みは26cmで、床面は礫層の露出も少なくほかに比べて平坦であるが、南に向ってわずかに傾斜している。周囲は西壁中央部で切れるものの、竈の

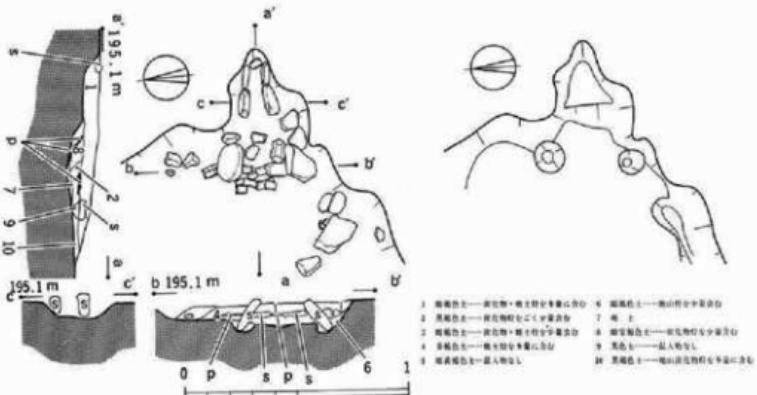


第28図 S14 実測図

は20cm前後であるが、北へ向って傾斜しており、北壁ではわずかに4cmと浅くなっている。床面は明瞭ではないが、2層が地山の傾斜に比べて割合平坦な堆積を示しており、しまりも良いことから貼り床の可能性もあるが、明確ではない。ピットは3本検出され、径30cm・深さ27~36cmとはほぼ同じであるが、北西隅では検出することはできなかった。周溝はみられない。

竈は本住居跡の南西コーナーから南東へ直角に横切るSD5によって破壊されたものと思われ、わずかに焼土の堆積を残すのみである。遺物はこれらの焼土周辺の1層中より比較的多く検出されている。また、中央やや南寄りに、長軸74cm・短軸44cm・深さ26cmの椭円形の土壙が検出されたが、これは通常竈付近にみられる貯蔵穴とも考えられる。

遺物の器種としては、土師器の杯・甕、須恵器の杯・長頸壺がみられる。



第29図 S I 4 窟実測図

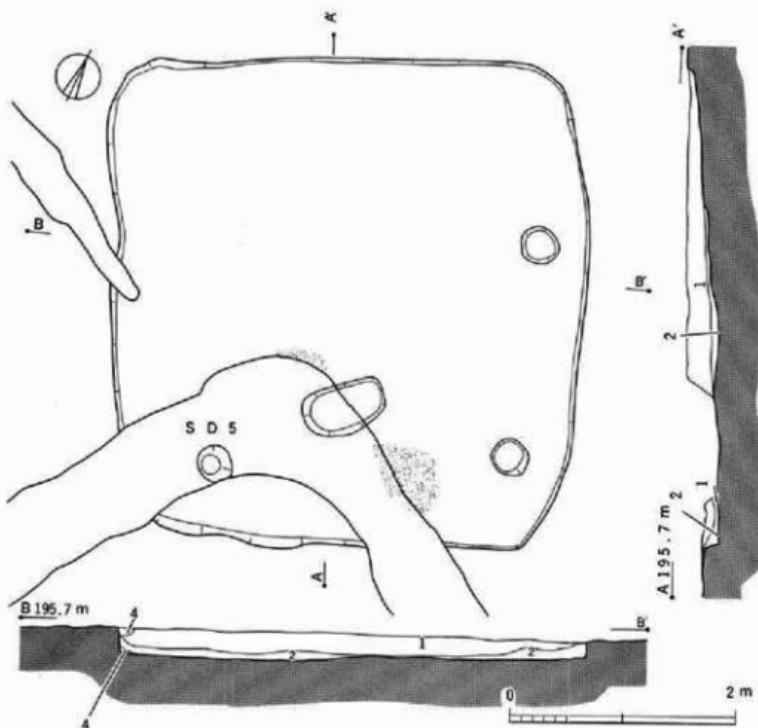
S I 6 (第31図 図版22)

150グリッドのほぼ中央に位置し、北側5mにはS I 1が隣接して営まれている。プランは不整隅丸方形を呈し、北側には梢円形の張り出し部が検出されているが、本跡との関係は不明である。主軸はN-45°-E、長軸2.63m・短軸2.56mと小型である。壁はそれぞれ様々な立ち上がりを示し、いずれも大きく内彎している。掘り込みは平均26cmであるが、南東側で36cmと深く落ち込んでいる。覆土には炭化物・焼土粒を若干含むが、竈などの施設の痕跡は全くみられない。また、床面にはほぼ全面に疊層の露出がみられ、ピットも存在しない。出土遺物は比較的多く、覆土の全体から出土し、器種も土師器の杯・碗・甕・羽釜・鍋、須恵器の杯とバラエティーに富む。遺物の出土状況は、7mほど西にあるSK14などの土壇と同様であり、竈の存在が考えられないことなどから、住居跡と断定することはできない。しかし、その可能性を全く否定する根拠もないことから、ここでは住居跡として扱った。

S I 7 (第32図 図版24・25)

15Mグリッドと15Nグリッドの境に位置し、5mほど東にはS I 10が営まれている。プランは東コーナーがやや突出した不整隅丸長方形を呈し、北西及び北東壁中央にそれぞれ小さなテラス状の張り出しをもつが、直接本住居跡に係るものかどうかは不明である。主軸はN-44°-Wを示し、長軸3.56m・短軸3.20mを測る。壁の立ち上りは、西コーナー付近で、22cmと割り合っかりしているが、ほかの部分では崩壊のため明瞭ではなく、ゆるく立ち上る。床面は南北対角線より西では砂質の地山が、また東では疊層が露出しているが平坦である。ただ、覆土最下層の7層がほぼ全面にみられ、比較的しまりも良いことから貼り床とも考えられる。ピットは住居跡内で8本検出されているが、大きさ・深さとも一定でなく、配置にも規則性はみられない。南西壁に掘られたピットなどは、本住居跡に伴わない可能性が強い。

竈は東コーナーの壁を若干掘り込んで構築されているが、攪乱のため原形は失っている。燃



- 1 明褐色土……炭化物を少量含む サラサラした砂質（遺物包含）
- 2 黄褐色砂質土……黄色及び灰色粘土が上部に薄くあるが、全体的には砂質
- 3 褐色土……燒土粒を多量に含む
- 4 地山ブロック

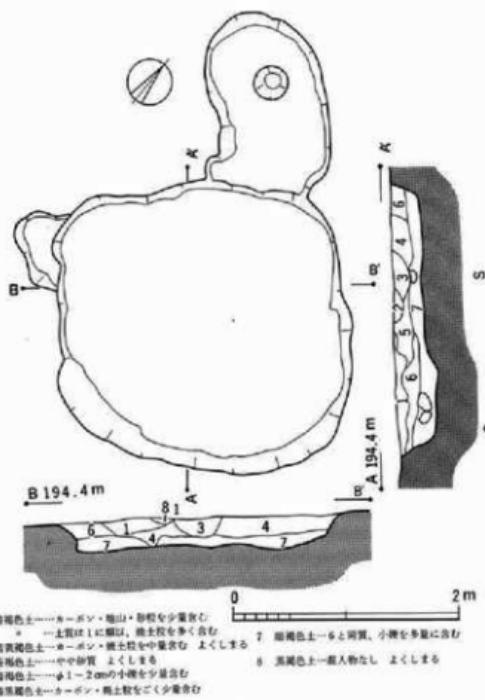
第30図 S I 5 実測図

焼部は床面を約12cm掘り込んで作られており、袖石に使用されたと思われる大小砾が散乱している。本体部はS I 4と同様の構造をもつものと思われるが、S I 4のように長い煙道部を有しない。また、住居跡外の竈の両側には、径30cm、深さ14cmと18cmのピットがそれぞれ1本づつ検出され、外に張り出した竈部分を覆うような上屋があったとも考えられる。

遺物は覆土全体から出土しているが、小片が多く、わずかに中央やや北よりの床面直上から内黒の有台杯及び小型の甕が完形に近い形で出土した程度である。ほかに器種としては、土師器の無台杯・碗・羽釜があるが、須恵器の出土はみられなかった。

#### S I 8 (第34図 図版23)

15Lグリッドの西隅に位置し、すぐ西にはS B 3・S B 4が、また10m東にはS I 9が営まれている。プランは全体的には不整長方形を呈しているが、南東コーナーが大きく張り出している。遺構確認時には2軒の重複とも考えられたが、覆土が同一であることや、明瞭な段差を



第31図 S I 6 実測図

呈するが、東壁に半円形の張り出し部をもつ。主軸はN-69°-Eを示し、長軸2.95m・短軸2.50mと小型である。全体に地山への掘り込みは浅く、北壁付近で約6cm、ほかの部分では壁が不明瞭になっている。床面には疊層の露出の部分が多く、凹凸が激しい。周溝は北壁の西半分から西壁にかけて巡っているが、深さは5cm前後と浅く、幅も不規則でしっかりしていない。ピットは検出されなかった。

竈は南東コーナーに構築されており、住居跡外へ大きく張り出している。また床面を20cm掘り下げる焼成部を作っている。S I 4と同様に、大型の偏平磚を立てて本体部を構築し、これらの磚の裏には小砂利を多く詰め込んで補強している。煙道部は、やはり大小の磚によって作られており、S I 4のように住居跡外へ長く張り出したものではない。焼成部最下層の2層は、かなりの厚さで焼成化している。

遺物は竈周辺でまとまって出土しており、器種としては土師器の無台杯・叩き目のある長脚の甕が出土している。

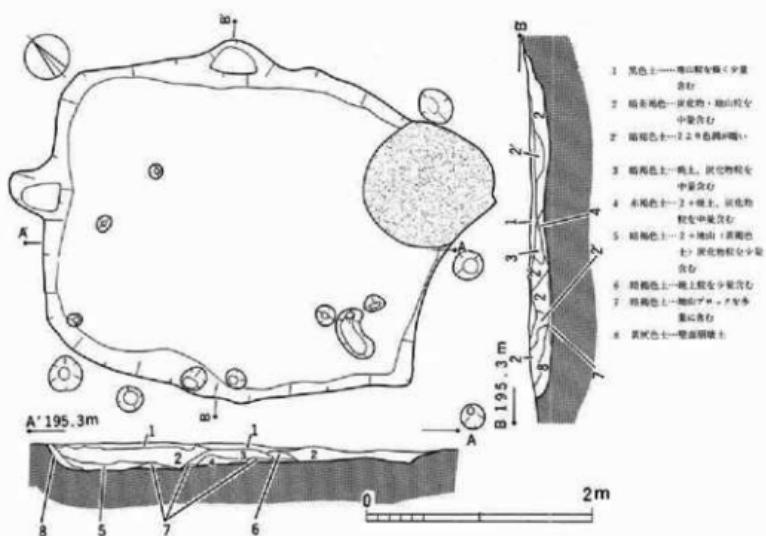
もたない点などから、1軒の住居跡として扱ったが詳細は不明である。主軸はN-97°-Eを示し、長軸3.46m・短軸2.50mを測る。掘り込みは深いところでも10cmと非常に浅く、壁の立ち上りも西壁の一部を除いて明瞭ではない。床面は比較的平坦で、大小9本のピットが検出されたが、深さ10~29cmと一定しておらず、南西隅の1本はSB3の柱穴と考えられる。周溝は検出されていない。

竈は東壁中央の突出部とも考えられるが、炭化物・焼土の分布もみられず、断定することはできない。

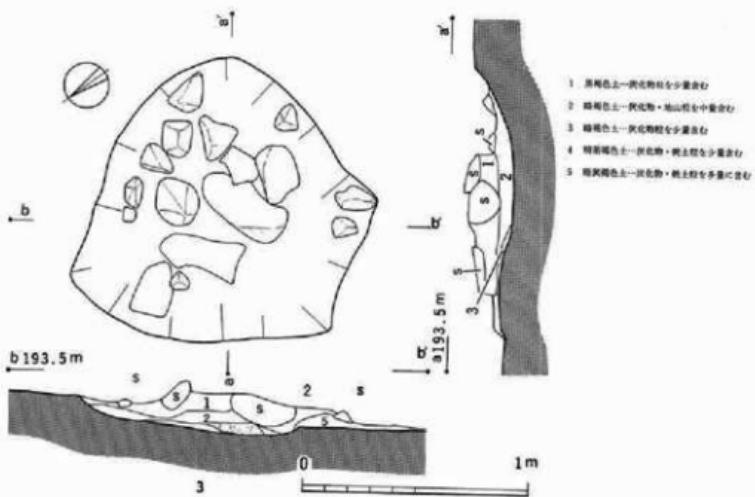
出土遺物は極くわずかで、土師器の有台・無台杯、内黒の椀がみられる。

#### S I 9 (第36・37図 図版26)

15Lグリッドの東隅に位置する。プランは不整隅丸長方形を

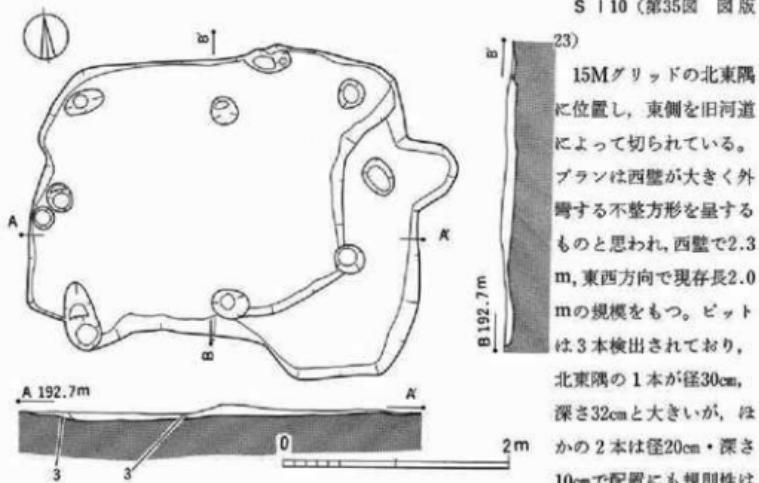


第32図 S I 7 実測図



第33図 S I 7 実測図

S I 10 (第35図 図版



1 黒褐色土…炭化物粒を含む

2 黒褐色土…地山をブロック状に含む

3 黄褐色土…地山と同質

だがしまりなし

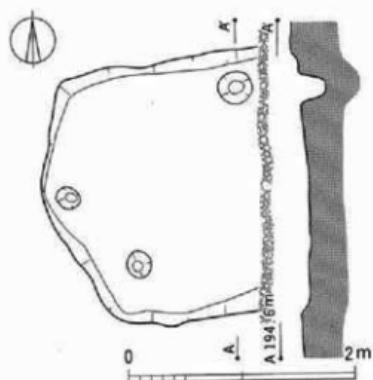
第34図 S I 8 実測図

15Mグリッドの北東隅に位置し、東側を旧河道によって切られている。プランは西壁が大きく外湾する不整方形を呈するものと思われ、西壁で2.3m、東西方向で現存長2.0mの規模をもつ。ピットは3本検出されており、北東隅の1本が径30cm、深さ32cmと大きいが、ほかの2本は径20cm・深さ10cmで配置にも規則性はみられない。掘り込みは10cmと浅く、壁も約30°でゆるく立ち上る。甕は現存部分では確認されなかった。遺物は出土していない。

**b. 挖立柱建物**

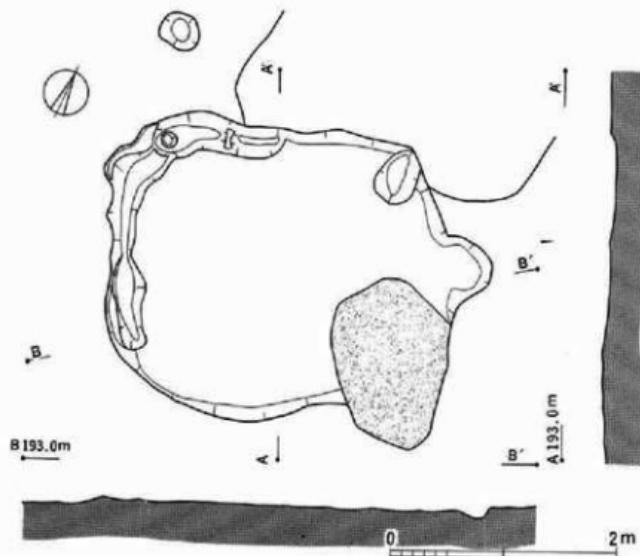
S B 1・S K 12 (第38・39図 図版27・29)

16Pグリッドに位置する6間(東11.0m・西10.5m)×2間(5.5m)の南北棟建物(N-16'-W)であり、南妻は桁行に対して歪む。柱間寸法は北梁間2.25m等間、南梁間が東から2.6m・2.9mである。桁行は東側が北から2.4m・2.1m・1.8m・1.7m・1.7m・1.3m、西側が北から2.4m・2.0m・1.6m・1.8m・1.1m・1.6mを測る。柱権形は、柱9が90cm×65cmの方形、柱11が一辺65cmの方形で、ほかは径35~65cmの楕円形あるいは円形である。深さは、柱1~4

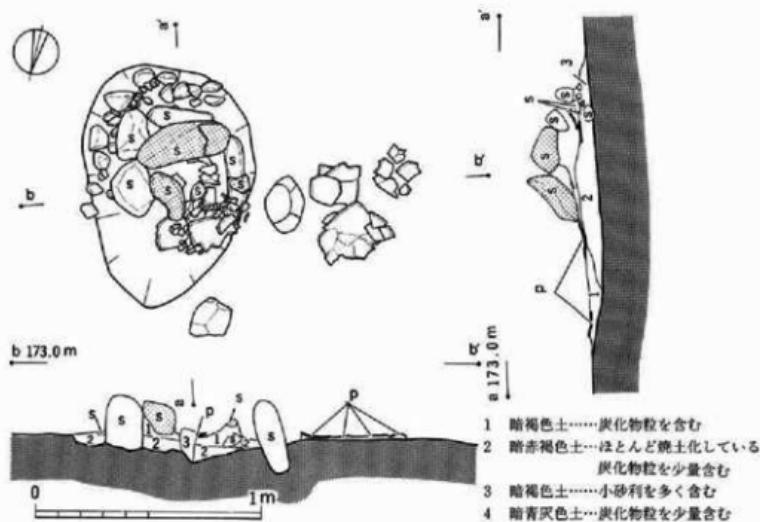


第35図 S I 10 実測図

~7・9・11・13・15・16が45~65cm、柱2・3・8・10・12・14が27~36cmを測る。埋土は暗褐色粘質土に炭化粒をわずかに混入しており、柱痕跡のわかるものはない。S K 12は柱16の東側、S B 1内に位置する浅い土壤である。径約50cmの円形を呈し、深さ15cmを測る。覆土は



第36図 S I 9 実測図

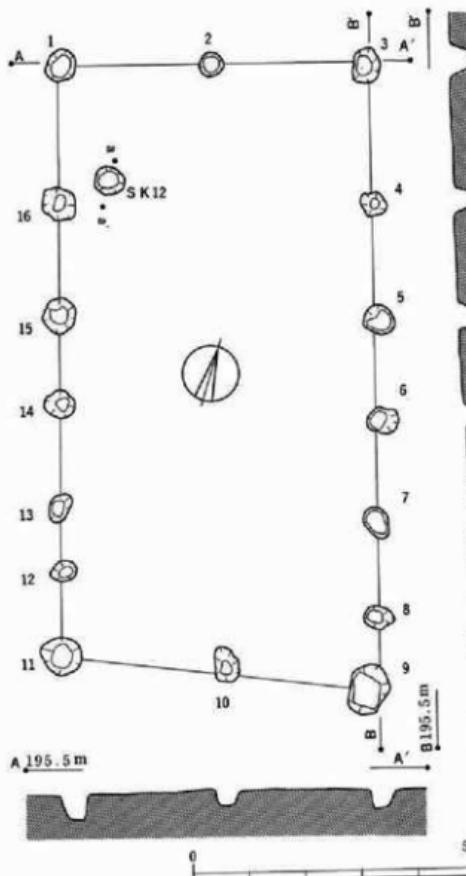


第37図 S I 9 薙実測図

黒色土で、炭化物を多量に混入し、焼土粒も混入する。SB 1と関連すると思われる。柱3とSK 12から土師器細片が若干出土した。

#### SB 2 (第40図 図版21・27)

15Nグリッドに位置する3間(7.7m)×2間(7.0m)の南北棟建物(N-30°-W)である。柱間寸法は梁間が3.5m等間である。桁行は東側が北から2.1m・2.7m・2.9m、西側が北から2.4m・2.7m・2.6mを測る。柱掘形は方形を呈し、柱3が130cm115cmと特に大型で、ほかは一辺45~100cmを測る。深さは柱7が36cmと比較的浅く、ほかは50~83cmを測る。埋土は暗褐色土~黒褐色土を基本とする。柱痕跡は柱9の底面で確認され、径25cmを測る。遺物は、柱10から土師



第39図 SB 1・SK 12 実測図

器短頭壺。柱1~3からは土師器細片が出土した。柱7と柱8の間、SB 2のやや南東部に焼土がある。地山が良く焼け、厚さ6cmを測る。この焼土はSB 2と関連する可能性も考えられる。また柱9は上面をSK 24に壊されている。SB 2の南東でもピットを多数検出した。

#### SB 3 (第41図 図版28)

14・15Lグリッドに位置する東西2間(北3.2m・南3.5m)×南北2間(東3.4m・西3.5m)の掘立柱建物(N-8°-E)で、西側柱列はやや歪む。柱間寸法は不等間で、北側柱列が東から1.5m・1.7m、南側柱列が東から1.6m・1.9m、東側柱列が北から1.8m・1.6m、西側柱列が北から1.7m・1.8mである。柱掘形は隅丸

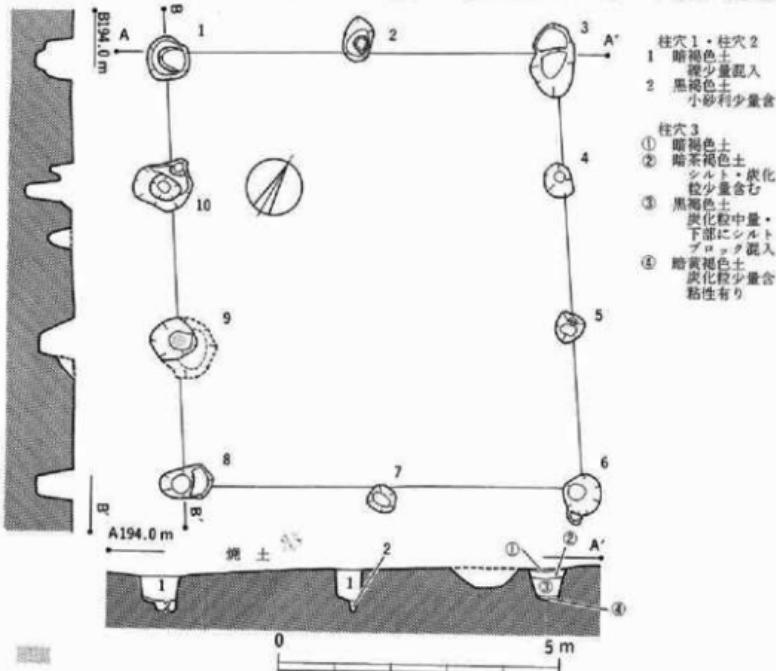


38図 SK 12 実測図

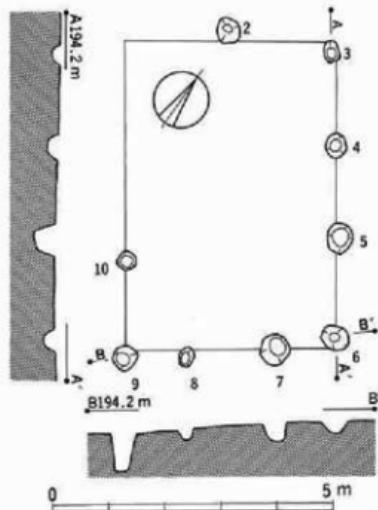
方形あるいは橢円形を呈し、一辺23~57cmを測る。深さは柱1・2・4・8が32~47cm、柱3・5~7が13~26cmである。遺物は柱1・4から土師器細片が出土した。建物の範囲内に2ヶ所の焼土があり、西側焼土付近からは刀子が出土した。SB3はSB4と重複しているが、新旧関係は不明であり、これらの焼土もどちらに伴うか不明である。SB3の位置する15L(6・11)・14L(10・15)グリッドでは遺物包含層中から比較的多くの遺物が出土した。またSB3・SB4以外にも多数のピットがあり、中には柱痕跡の確認されたものもあり、何回か建て替えたと思われる。

S B 4 (第41圖 圖版28)

14+15Lグリッドに位置し、SB3と重複する東西2間(北3.8m・南3.7m)×南北2間(東3.2m・西3.1m)の掘立柱建物(N-8'-N)である。柱間寸法は北側・南側柱列が約1.9m等間である。東側・西側柱列は不等間で、東側が北から1.8m・1.2m、西側が北から1.1m・2.0mとそれぞれ中柱が中央から離れている。柱断形は円形・橢円形・隅丸方形と様々で、柱1・6~8が径34~48cm、柱2~5が径22~30cmを測る。深さは柱2が17cmと浅く、ほかは32~45cmである。遺物は柱5・7から土師器杯片が出土した。柱3は壠土を切っている。この北東にも多数



第40図 SB2 審査図



第42図 SB 5 実測図

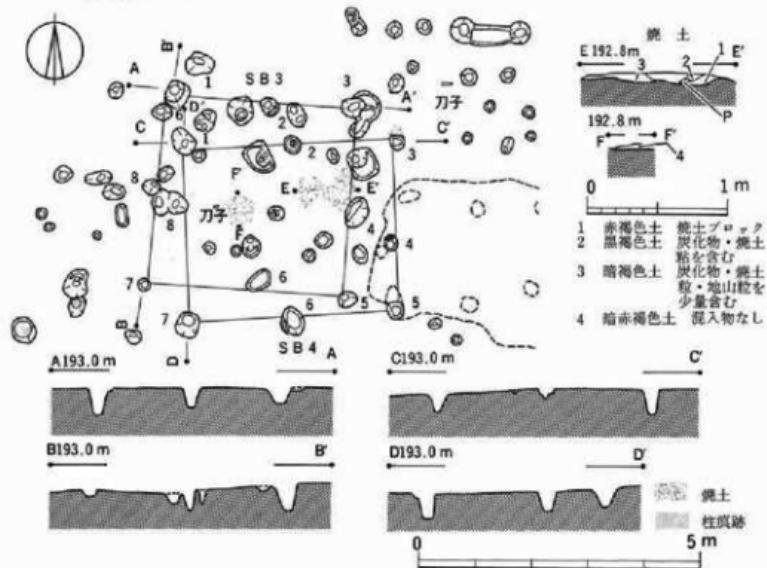
のピットがあり、また刀子も出土している。

SB 5 (第42図)

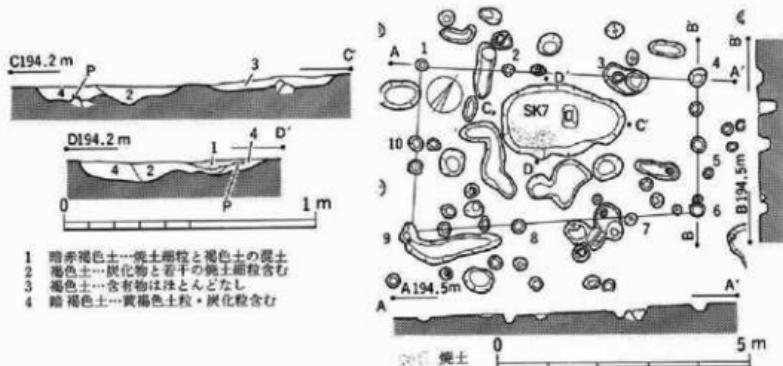
150グリッドに位置する南北3間(5.1m)×東西3間(3.8m)の南北棟建物(N-35°-W)であり、柱1・11は存在しない。柱間寸法は桁行が約1.7m等間、南梁間は両側1.1m・中央1.6m、北梁間は2間で柱2と柱3の間は1.8mを測る。柱掘形はほぼ円形を呈し、柱2・5・7・9は径40~53cm、柱3・4・8・10は径20~35cmを測る。深さは柱9が64cmと深く、柱2・5・7・10は27~36cm、柱3・4・6・8は13~20cmと浅い。遺物は柱4・5・9から土師器杯片、柱6から須恵器杯・長頸壺片、また柱7・10からも若干出土した。

SB 6 (第43図 図版28)

15・160グリッドに位置する東西3間(北5.4



第41図 SB 3・SB 4 実測図



第43図 SB6・SK7 実測図

m・南北5.6m)×南北2間(東2.7m・西3.3m)の東西棟建物(N-57-E)で、全体にやや歪む。柱間寸法は北側柱列が東から1.6m・2.1m・1.7m、南側柱列が東から1.25m・2.25m・2.1m、西梁間が北から1.5m・1.8m、東梁間が1.35m等間である。柱掘形は径24~36cmの円形を呈し、深さ10~23cm、埋土は暗褐色土である。遺物は柱4から若干出土した。SB6のはば中央にSK7が位置する。長軸240cm・短軸143cm・深さ約10cmの浅い土壇である。上層に焼土が堆積し、2層中より鉄錫が出土したSB6は掘立柱建物とするには若干ためらわれたが、SK7周辺には多数のビットがあり、これらはSB6とは多じ並びを呈しており、この位置に何回か建て替えられたのはばまちがいなく、一応提示した。

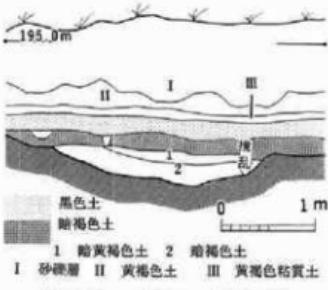
#### c. 溝 (第9・11・44図 図版7・8)

溝は計13本が検出されているが、第V章3節で述べたようにほとんどは自然の流路で、わずかにSD4・SD5・1SD3が人為的に掘り込まれたと思われる。遺物の出土はみられない。

**SD4** (第8・44図 図版7) A地区南隅で検出されたもので、現存長は約7mで、北西ではしだいに細くなつて旧河道の手前で消滅している。最大幅は1.8m、深さ0.35mを測り、断面は浅い皿状を呈する。覆土1層には、SI4と同様に暗褐色砂質土の堆積がみられる。

**SD5** (第11図) B地区的16Pグリッドから北西発掘区境界に沿って、北東から南北へやや蛇行しながら流れれる。南西端ではSK21を切って消滅している。幅は0.25~1.3mと不規則で、深さは0.5m前後である。覆土は粘性の強い暗褐色土で一様に埋られている。

**SD13** (第9図 図版8) C地区的北西隅で、ほぼ南北に流れれる。遺構確認面での幅は、北



第44図 SD4 土層断面図

半で0.7~1.2mであるが、南半では3.2mと急に広くなっている。この部分で溝底に2基のピットがみられることから異なる遺構が切り合っている可能性もあるが、確認はできなかった。また、断面観察(第6図)によれば、2層黒色土下より掘り込まれていることがわかった。本来3m近い幅であったことがわかる。なお、覆土最上層には暗黄褐色砂質土が堆積している。

#### d. 土 壤

##### S X21 (第45図 図版30)

20Gリッドに位置する一辺3.75~4.05mの隅丸方形の土壤で、東側隅に張り出し部をもつ。深さは35cmを測る。覆土は上から基本的には1層黄褐色砂・2層暗灰褐色粘土・3層黒色土・6層暗灰褐色粘質砂がレンズ状に堆積する。1・2層間から礫が多量に出土し、東側の礫群下からは底面に密着して土器がまとまって出土した。また、3層上面から鉗錘車が出土している。

##### S X22 (第45図 図版30・31)

20Gリッドに位置する隅丸方形と考えられる土壤で、東辺に張り出し部を有する。南北辺2.8mを測り、西側はSD2に切られている。深さは約15cmと浅く、覆土は上から1層黄褐色粘質土・2層暗褐色土が堆積する。壁はやや傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平らである。遺物は東側に若干の散布が認められた。

##### S K 1 (第45図)

19S(10)・20S(6)グリッドに位置する方形の土壤である。長軸1.75m・短軸1.18m・深さ約30cmを測る。覆土は上から1層暗褐色土・2層茶褐色砂質土・3層暗青灰色砂質土が堆積する。壁はやや傾斜して立ち上がり、底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

##### S K 2 (第45図)

19S(14)グリッドに位置する瓢形の浅い土壤である。長軸80cm・短軸73cm・深さ7cmを測る。覆土は1層暗赤褐色土(燒土)・2層暗褐色土・3層黄色土が堆積する。遺物は、遺構確認面上層で散布が若干認められたが、SK2からは出土していない。

##### S K 3 (第45図)

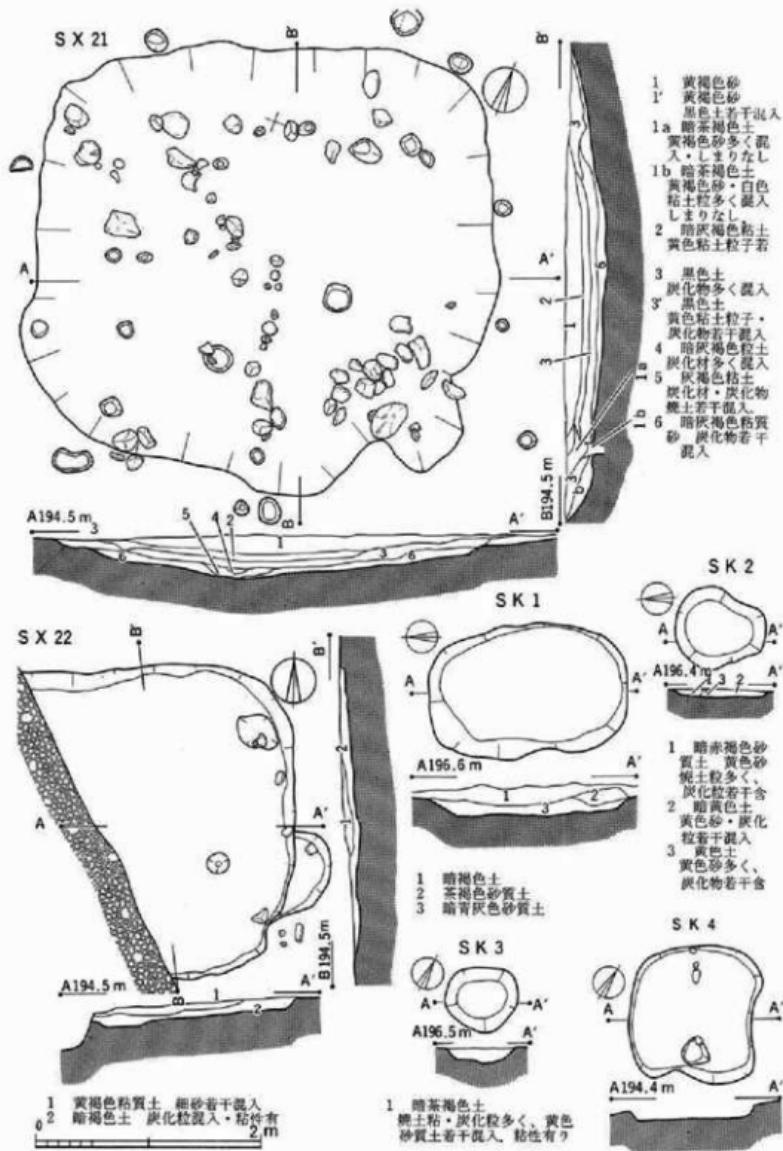
19S(14)グリッドに位置する楕円形の土壤で、長軸65cm・短軸58cm・深さ12cmを測る。覆土は暗茶褐色土で、壁はやや外傾し、底面には段を有する。遺物は土師器細片が出土している。

##### S K 4 (第45図)

20D(16・17)グリッドに位置する方形の土壤で、南側に小ピットを有する。南北軸122cm・東西軸108cm・深さ約10cmを測る。覆土は暗褐色土で、壁はやや傾斜して立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は出土していない。

##### S K 30 (第46図)

14L(14)グリッドに位置する不正形の浅い土壤である。長軸4.35m・短軸2.95m・深さ約10cmを測る。東側に径約80cm・深さ15cmの円形の土壤(14Lピット3)がある。覆土は上から1層暗青灰色粘土・2層黒青灰色粘質土・3層灰褐色土が堆積し、南側は1層褐色土を覆土とする落ち込みで切られている。14Lピット3の覆土は暗褐色土である。壁はだらだらと傾斜し、底



第 45 図 土壤実測図(1)

面は凹凸が著しい。遺物は14Lピット3付近で多く出土した。

S K 6 (第46図 図版33)

16Q (20) グリッドに位置する土壙で、北側を57年度の試掘場に、南側をS K 5に切られている。東西長130cm・深さ約10cmを測る。覆土は1層暗褐色土・2層褐色砂質土である。壁はゆるく傾斜し、底面には疊層が露出する。遺物は1層を中心に出土した。

S K 5 (第46図 図版32・33)

16Q (20) グリッドに位置するほぼ円形の土壙である。南北長約30cm・東西長92cm・深さ約20cmを測る。覆土は上から1層褐色土・2層明褐色土が堆積する。壁はやや傾斜して立ち上がり、底面に凹凸を有する。遺物は東壁付近を中心に出土した。S K 6より新しい。

S K 24 (第46図 図版34・35)

15N (14) グリッドに位置し、S B 2柱穴9を切る梢円形の土壙である。長軸114cm・短軸94cm・深さ30cmを測る。覆土は上下2層に分かれ、ともに暗褐色土である。壁はゆるく外反し、底面は平らである。東側に礫がまとまって出土し、遺物も礫とともに若干出土している。

S K 14 (第46図 図版34・35)

15O (11) グリッドに位置する隅丸方形の土壙である。長軸1.68m・短軸1.37m・深さ35cmを測る。覆土は上から1層黒褐色土・2層暗褐色土・3層黄褐色土・4層暗茶褐色土・5層暗褐色土が堆積する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は疊層が露出し、南東側へ傾斜する。遺物は2~5層中から比較的多く出土し、特に4層から砾石(第90図2)が出土した。

S K 16・S K 17 (第46図)

15D (11) グリッドに位置し、重複する土壙である。S K 16が新しく、方形を呈し、長軸約120cm・短軸76cm・深さ20cmを測る。覆土は上から基本的に1層暗茶褐色土・3層暗褐色土が堆積する。S K 17は古く、梢円形を呈し、短軸118cm・深さ15~20cmを測る。覆土は上から①層暗褐色土・②層黒褐色土が堆積し、遺物は若干出土している。いずれも壁はゆるく傾斜し、底面は砂利層である。

S K 18 (第46図 図版32・33)

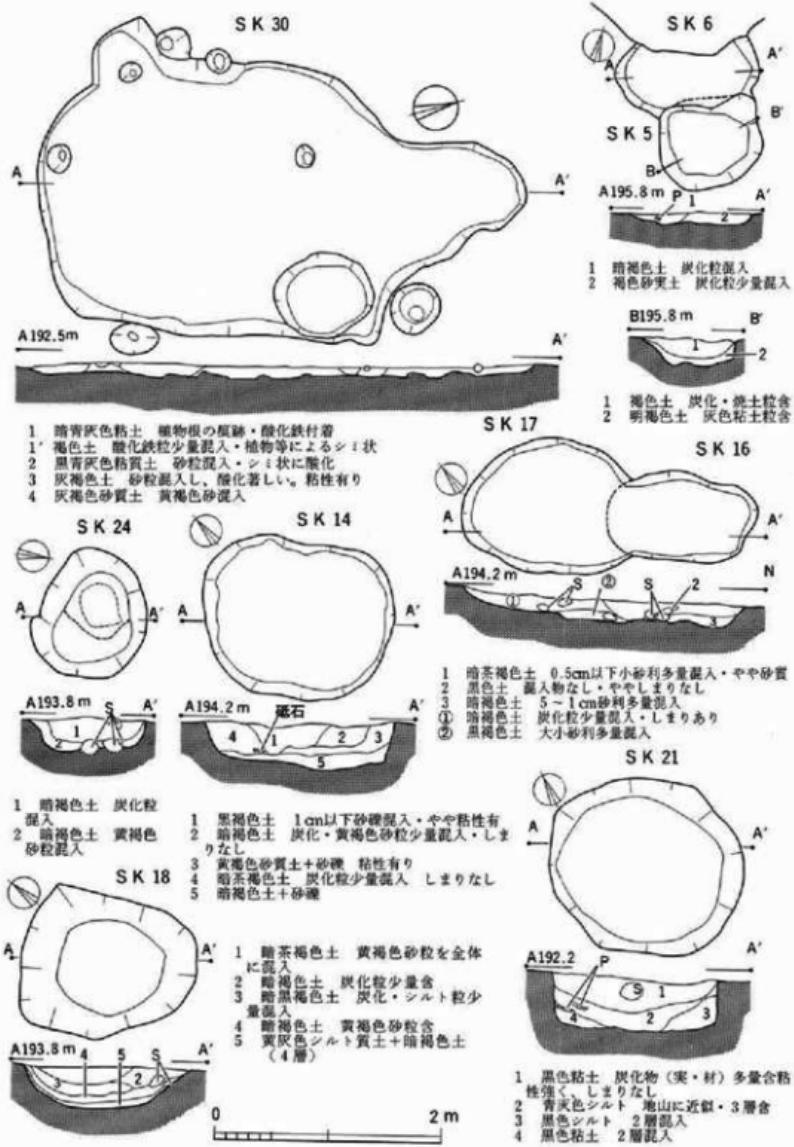
15N (10) グリッドに位置する卵形の土壙である。長軸1.57m・短軸1.28m・深さ35cmを測る。覆土は上から1層暗茶褐色土・2層暗褐色土・3層暗黒褐色土・4層暗褐色土・5層黄灰色土がほぼレンズ状に堆積する。断面形は椀形を呈する。遺物は土師器・須恵器片が出土した。

S K 27 (第46図)

14M (22) グリッドに位置する梢円形の土壙である。長軸1.79m・短軸1.65m・深さ45cmを測る。地山は青灰色シルトで、覆土は上から1層黒色粘土・2層青灰色シルト・3層黒色シルト・4層黑色粘土が堆積する。壁は直に立ち上がり、底面は平らである。遺物は1層から圧倒的に多く、次に4層からも比較的多く出土した。

S K 21 (第47図)

14O (23) グリッドに位置する梢円形の土壙で、上半をS D 5に切られている。長軸133cm・



第46図 土壤実測図(3)

短軸105cm・深さ約40cmを測る。覆土は2層暗茶褐色土で、上の1層暗褐色土はSD5の覆土である。壁は外反し、底面は平らである。遺物は比較的多く出土した。

S K 32 (第47図 図版32)

16P(9) グリッドに位置する隅丸方形の土壙である。長軸105cm・短軸74cm・深さ60cmを測り、深さ20~35cmの段を有する。覆土は上から1層暗褐色粘質土・2層褐色砂質土・3層黒色土・4層暗褐色土が堆積する。遺物は細片がわずかに出土している。

S K 28 (第47図)

14L(1) グリッドに位置するほぼ隅丸方形の浅い土壙である。長軸2.77m・短軸2.57mを測る。覆土は暗灰色粘質土で、上層からほぼ完形の土器甕・杯と穢が出土した。断面形は浅い摺鉢状を呈し、周辺の地山は穢を混入する青灰色シルトである。

S K 15 (第47図 図版34・35)

15O(12) グリッドに位置する梢円形の土壙で、長軸1.98m・短軸1.30m・深さ約40cmを測る。上から1層暗茶褐色土・2層暗褐色土・3層褐色土・4層暗灰黄色土・5層暗褐色土・6層暗黄色土が堆積する。壁は直に立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は若干出土する。

S K 20 (第47図)

14O(15) グリッドに位置する不整形の土壙で、西側を発掘調査のための排水溝によって破壊された。最大幅93cm・最少幅63cm・深さ約20cmを測る。壁はゆるく外反し、底面はほぼ平らである。遺物は細片がわずかに出土している。

S K 8 (第47図)

16O(3) グリッドに位置する梢円形の浅い土壙で、東側の溝を切っている。長軸1.86m・短軸1.35m・深さ約15cmを測る。覆土は上から1層暗褐色土・2層明褐色砂質土が堆積する。壁はゆるやかに傾斜し、底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

S K 25 (第47図)

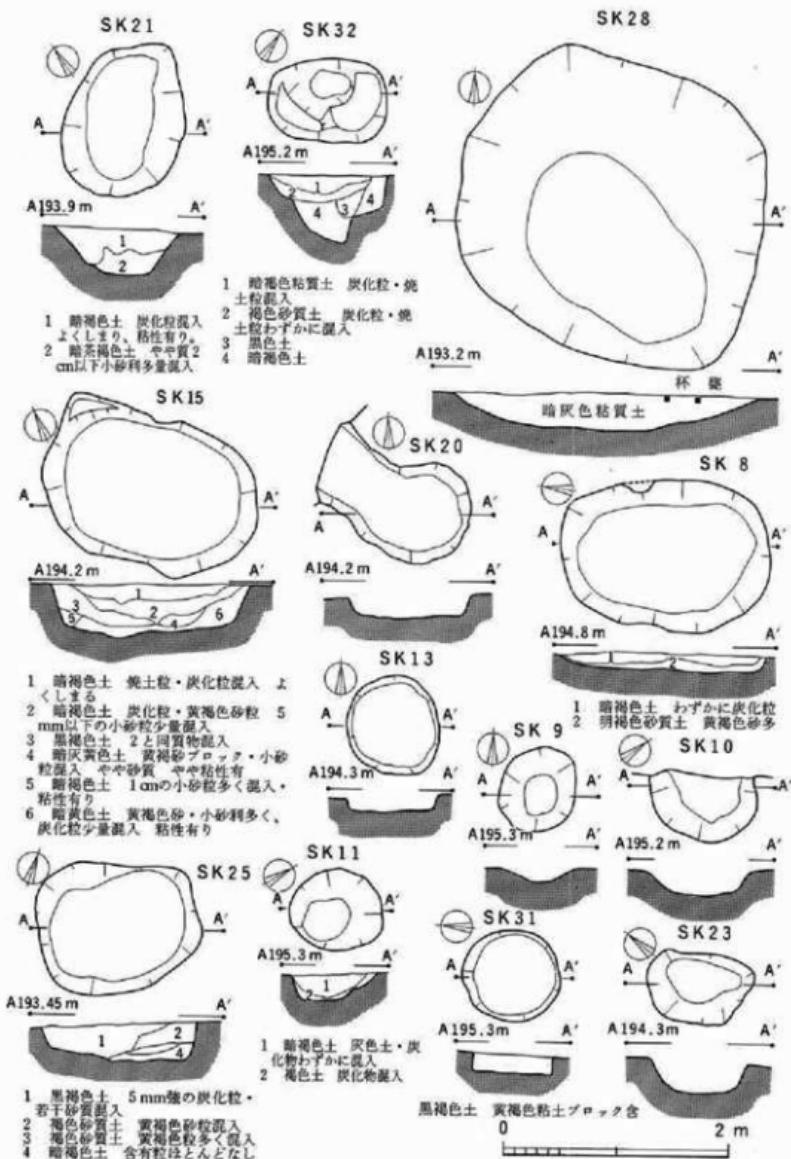
15N(9) グリッドに位置する梢円形の土壙で、長軸1.40m・短軸1.17m・深さ35cmを測る。覆土は上から基本的に1層黒褐色土・2層褐色砂質土・3層暗褐色土が堆積し、全体に5cm位の小砂利を多く含む。壁は直に立ち上がり、底面は東側が少し低い。遺物は細片がわずかに出土する。

S K 13 (第47図)

15O(6) グリッドに位置するほぼ円形の土壙である。長軸93cm・短軸80cm・深さ約10cmを測る。覆土は暗褐色土中に砂粒を混入する。壁は直に立ち上がり、底面は平らである。遺物は細片がわずかに出土している。

S K 9 (第47図)

16P(13) グリッドに位置するほぼ円形の土壙で、SD8と重複し、これより古い。径約70cm・深さ10cmを測る。暗褐色土が堆積し、断面形は摺鉢状を呈する。遺物は出土していない。



第47図 土壌実測図(3)

#### SK 10 (第47図)

15P(15)グリッドに位置する土壌で、発掘調査のための排水溝によって北西部を破壊された。南北長93cm・深さ約10cmを測り、暗褐色土(わずかに炭化物混入)が堆積する。壁は外反し、底面はほぼ平らである。遺物は出土していない。

#### SK 11 (第47図)

16P(6)グリッドに位置するほぼ円形の土壌である。径72~80cm・深さ約20cmを測る。覆土は上から1層暗褐色土・2層褐色土が堆積し、ともによくしまっている。底面は南に偏っている。出土遺物はない。

#### SK 31 (第47図)

16P(8)グリッドに位置する円形の土壌で、径約85cm・深さ17cmを測る。黒褐色土が堆積し、壁は青灰色粘土が直に立ち上がり、貼った可能性がある。底面は平らで、出土遺物はない。

#### SK 23 (第47図)

15O(19)グリッドに位置する梢円形の土壌である。長軸85cm・短軸62cm・深さ約20cmを測る。黒褐色土が堆積し、断面形はやや楕円形を呈する。遺物は出土していない。

#### SK 19 (第48図)

15N(5)グリッドに位置する梢円形の土壌で、東側は浅い落ち込みと接し、長軸130cm・短軸70cm・深さ約10cmを測る。暗褐色土(大小礫混入)が堆積し、底面は平らで、出土遺物はない。

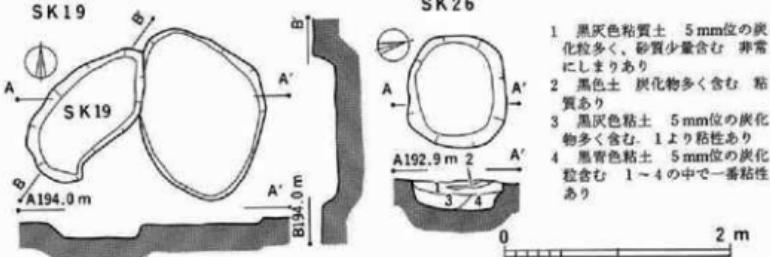
#### SK 26 (第48図)

14N(22)グリッドに位置する隅丸長方形の土壌である。長軸100cm・短軸86cm・深さ約25cmを測る。覆土は上から基本的に1層黒灰色粘質土・3層黒灰色粘質土・4層黒青色粘土が堆積し、全体的に酸化鉄分を含む。壁は直に立ち上がり、底面は平らである。遺物は出土していない。

### e. その他

#### S X20 (第9図)

13Mグリッドに位置し、北西から南東へまっすぐ延びる溝である。幅45cm・深さ10cmを測り、底面は南東方向へゆるく傾斜する。灰黒色粘質土(5~6cmの礫・1cm位の小砂利混入)が堆積するが、覆土全体には土器片がぎっしりと詰まっていた。遺物としては灰釉陶器長頸瓶も出土した。



第48図 土壌実測図(4)

## 第VI章 遺 物

金屋遺跡の2次にわたる発掘調査によってコンテナ約80箱の遺物が出土した。内容は縄文時代土器・石器、土師器・須恵器・灰釉陶器・中世陶質土器・鉄製品・石製品・土製品などである。主なものは古墳時代・平安時代の土器類であり、95%を占める。このうち特に平安時代の土器を詳細にみると、土師器・須恵器・灰釉陶器であるが、比率的には土師器：須恵器が5：1で土師器の出土量が圧倒的に多く、灰釉陶器は9個体と極めて少ない。以下、縄文時代から順に概要を述べる。特に古墳・平安時代については遺構一括資料を最初に、次に遺構外出土土器・特殊遺物・鉄製品・石製品・土製品の順に記述し、最後に中世の遺物について述べる。また鉄製品・石製品・土製品については時代にこだわらずそれぞれ一括した。

### 1. 縄 文 時 代

#### a. 縄文土器(第49図 図版36)

縄文土器はC地区側道から出土し、約150点を数えるが、その大半は磨滅の著しい小片である。そのため、所属時期を決定するのは困難であった。以下、その概略を記す。

1・2は縄文RLを施す口縁部破片である。3・4は撚糸文Lを施し、4には整形時の粘土が未処理のまま外面に残る。5は撚糸文Rを間隔をあけて施した口縁部破片で、6も同様に施す。7は撚りの弱い撚糸文を施す。8・9は撚糸文rを施す。10は数条の指頭状の圧痕を斜位に施し、外面に炭化物が付着する。11は尖底土器の底部小破片である。26は3本1組の柳状工具による条線を、27は平行沈線を数条施し、器厚は薄い。器面は、10・26・27は茶褐色、2・5・6・8・9は淡茶褐色、3・4・11は灰褐色、7は淡橙褐色を呈する。胎土は1が1mm位の砂粒を含み、2~11は淡黒色を呈し、2~4・7~9が1~2mmの小石、5・6・11が1mm位の砂粒、10が1~3mmの小石を含む。26・27は1mm以下の砂粒を含む。焼成は7・10を除き堅敏である。1~9は早期前半、10・11・26・27は早期後半の所産かと思われる。

12は縄文LRを施し、茶褐色を呈する。胎土は淡黒色で、1~3mmの小石を含み、燒成堅敏である。13~18は爪形文C・平行沈線等の竹管文を施し、19・20は縄文RLを施す。器面は17灰褐色、ほか13~16・18~20は茶褐色を呈する。胎土は粗く、1~2mmの白砂粒を含み、17以外焼成不良である。12は前期前半の所産、ほか13~20は前期後半諸模式に比定できよう。

21は無文で、外面淡茶褐色~黒褐色、内面黒色を呈し、胎土中に1~2mmの小石を含み、焼成堅敏である。22は突起を有する小破片で、淡橙褐色を呈し、1mm位の砂粒を含み、焼成はやや良好である。これと同一個体と思われる突起を有する把手も出土している。23は刷毛状工具で擦でられており、外面淡黒色、内面淡茶褐色を呈する。1mm以下の砂粒を含み、焼成堅敏である。24は口唇内外面に段を有する口縁部破片で、文様は磨滅が著しく、不明である。淡茶褐色を呈し、胎土は淡黒色で1~3mmの小石を含み、焼成は良好である。以上21~24は後期の所

産かと思われる。

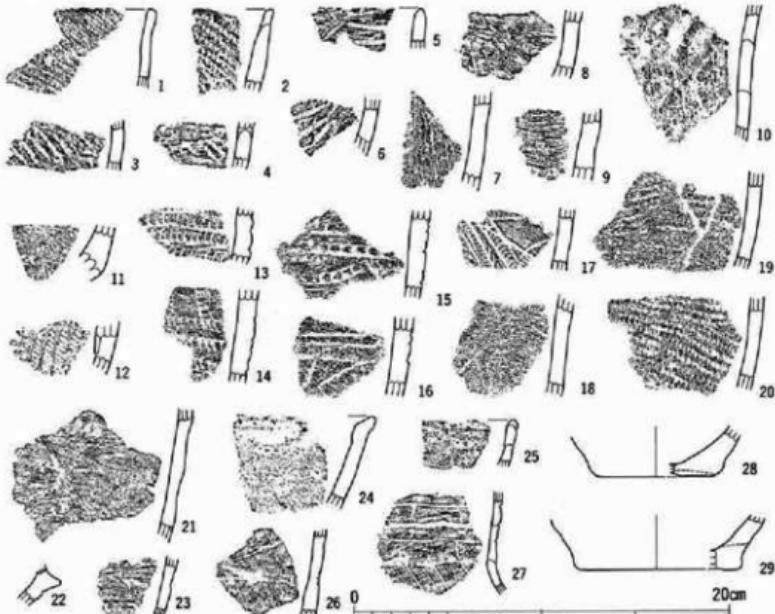
25は無文の口縁部破片で、淡橙褐色を呈し、1~2mmの小石を含み、焼成良好である。28・29は底部破片で、28は橙褐色を呈し、1~3mmの小石を含む。29は外面灰褐色、内面黒色を呈し、胎土は淡黒色で1~2mmの白砂粒を含む。ともに器面は荒れている。25~29は時期不明である。

以上で口縁部破片と文様の判明する土器片の大半を網羅した。今回図示しなかったものとしては、胎土が淡黒色で1~2mmの白砂粒を含み、内外面淡茶褐色~淡黒色を呈する土器約50片、茶褐色~橙褐色を呈する土器約30片がある。これらは器面が荒れており、文様の有無も定かではない。ほかに1~9の類似約10片、10・21の類似各数片がある。

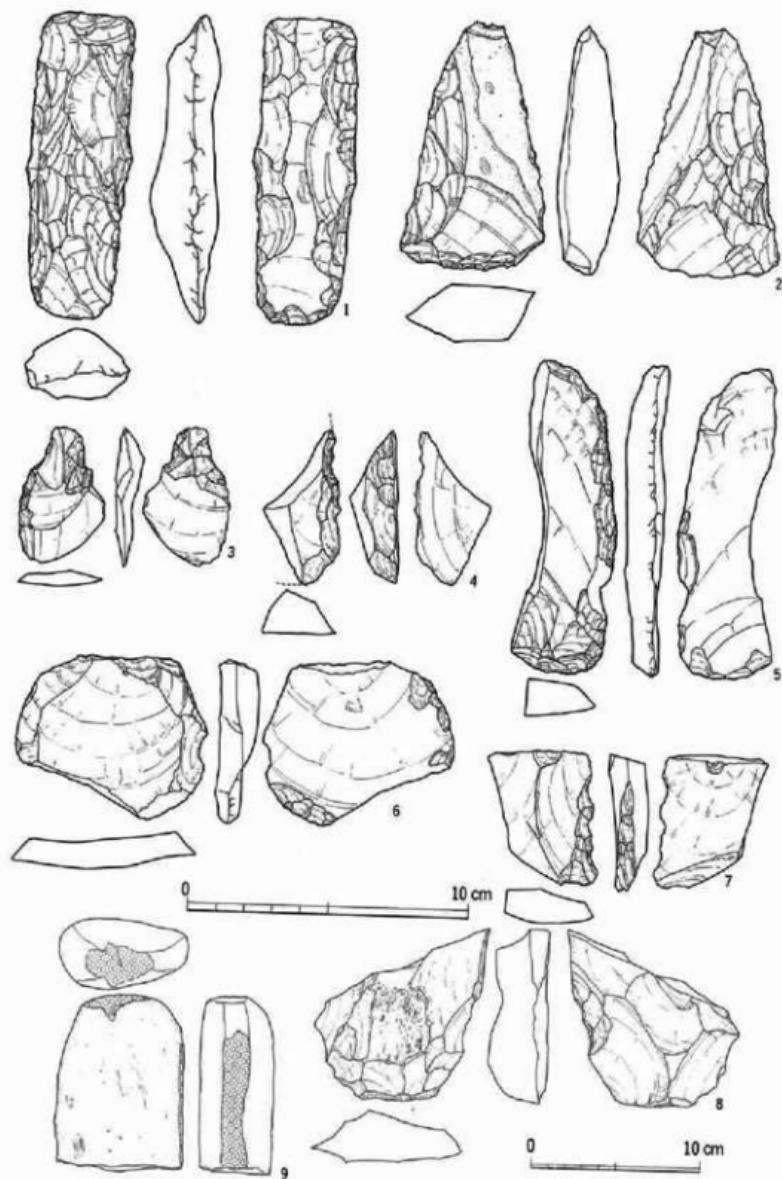
本遺跡出土の繩文土器は早期から後期までの多岐に渡るが、所属時期の判明したものでは、早期の所産のものが最も多く出土した。

#### b. 石 器 (第50図 図版36)

本遺跡より出土した石器の内訳は、打製石斧2点・スクレイバー5点・石核2点・叩き石1点・加工痕のある剝片11点・剝片65点の計86点である。石質別には、流紋岩が最も多く、全体の90%を占め、ほかにチャート・頁岩・凝灰岩・変成岩が少数出土している。出土地区はいずれもC地区側道部であり、暗褐色土層を中心に出土している。



第49図 繩文土器



第50図 縄文時代石器

1は両側縁がほぼ平行に位置し、断面形がほぼ三角形になる片刃の打製石斧である。裏面には素材剥離時の痕跡を残す。頭部側縁は方形を成す。それに対し刃部はゆるい曲線に仕上げてある。本県では、小瀬ヶ沢遺跡に類似の資料があり、縄文時代草創期の所産と考えられる。石質は細粒凝灰岩である。

2は正面に原石面を残した打製石斧であり、刃部には裏面からの急角度の剥離が施される。

3・4は広義のスクレイパーと思われる。3は素材の打点側に両側縁から、抉入状の加工を施し、ツマミ部としている石匕である。左側縁には裏面からの剥離が加えられているのに対し、右側縁は素材剥離時のままである。

4. 横長の剥片の一側縁に裏面からの急角度の剥離を加えたもので、縁は鋸歯状を成す。

5. 縦長の剥片の一側縁に連続した剥離を施し、鋭角な刃部を作り出している。素材には打面が残っており、正面には素材獲得以前の剥離痕をとどめている。

6. 原石面を打面とした剥片を素材とする。裏面には部分的に二次加工を施す。

7. 原石面を打面とした縦長の剥片を素材とする。4同様、一側縁にかなり急角度の剥離が施されている。

8. 石器側縁に部分的に原石面を残した両面加工の石器である。剥離の順序としては正面へ周縁からの剥離が施された後、その打点付近を除去する形で、裏面周縁への剥離が加えられている。両面加工でありながら側縁に原石面を残すことなど、ある種のプランクと考えられよう。

9. 長椭円形の転石を素材とするもので、側縁と端部に叩き潰し様の痕跡が認められる。スタンプ形石器に類似するが、ほかに近似する資料がないためここでは叩き石としたい。

ほかに、剥離面を打面とし、周辺に打撃を加え横長剥片を剥離したと思われる石核が1点出土しているが、ほかに定形化した剥離技法が顕著に表われているものはない。

また、4～7のように流紋岩製のものの中に、裏面に対しかなり急角度の折断様の面を作り出しているものが目立つ。剥片剥離技術、素材選択の段階で何らかの規制を感じさせる。

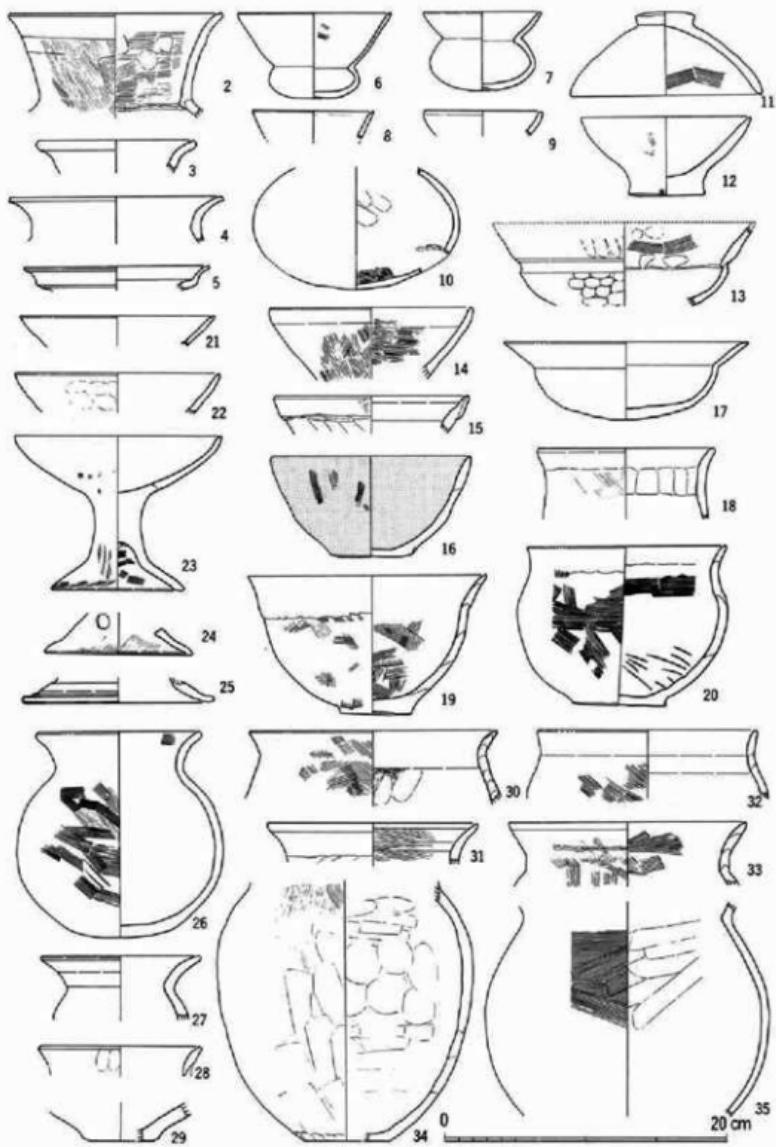
## 2. 古墳時代

### a. 中期

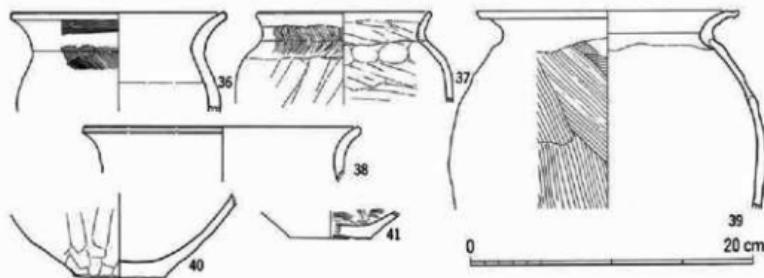
古墳時代中期と考えられる遺物はB地区の中央14Mグリッドを中心とした下層暗褐色土からの出土である。平安時代の遺物包含層とは厚さ1mの洪水堆積層によって区別された。遺物包含層(下層暗褐色土)は厚さも5cmと薄く、遺物のほとんどが遺構に伴って出土したものである。遺構外出土遺物として図示したものには、下層遺物包含層の存否を確認するための試掘トレン

第2表 石器計測表

No	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質	No	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 質						
1	11.0	3.8	2.5	94.9	凝灰岩	4	5.4	2.7	1.7	18.5	流紋岩	7	5.0	3.7	1.4	26.1	流紋岩
2	8.8	5.1	2.3	88.2	タ	5	11.1	3.5	1.4	54.1	"	8	10.5	7.7	4.4	596.0	不明
3	5.0	3.0	0.9	8.8	タ	6	5.8	6.7	1.3	59.3	"	9	10.3	10.4	3.5	335.0	流紋岩



第51图 S I 12出土土器(1)



第52図 S I 12出土土器(2)

チ出土のものと、ラベルが紛失して正確な造構が判別できなかったものも含む。遺物はいずれも土器類のみである。

S I 12 (第51・52図 図版37)

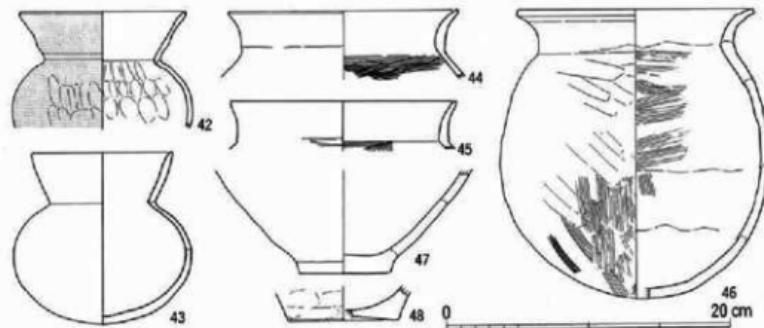
遺物は床面直上もしくは覆土下層から出土したものである。壺4・小型丸底壺5・鉢9・蓋1・高杯5・甕13・底部3の合計40個体が図示できる。これ以外にも甕片など細片が多くある。小型丸底壺は5個体と多いが、それに伴うと思われる器台がほとんどないことが一括資料を考える上で特異であろう。形態的に多少の時期差は認められるが、5世紀代の所産と考えられる。

S I 13 (第53図 図版38)

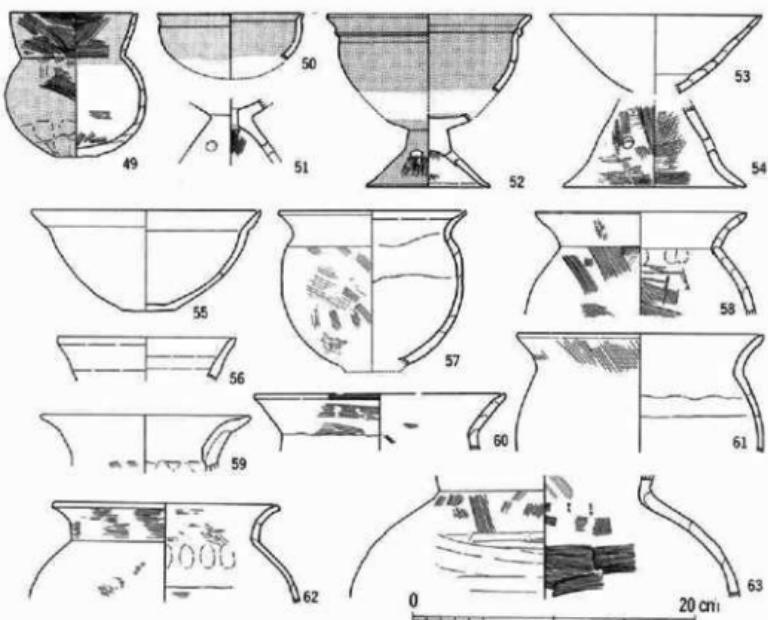
遺物は、いずれも覆土最下層から出土した。小型丸底壺2・甕3・底部2の計7個体が図示された。この住居跡はS I 12とくらべ、他の細片は少ない。43や46は、住居跡の中央に横転した状態で検出された。壺類は47の底部のみと少ない。

S X14

遺物は甕の細片と器種不明な破片が数点あるのみで、図示できるものはない。



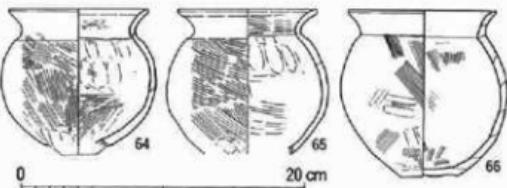
第53図 S I 13出土土器



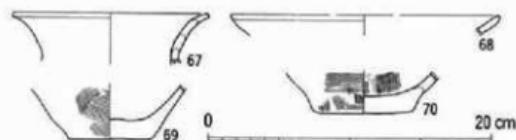
第54図 SX 15出土土器

S X 15(第54図 図版38)

遺物は暗褐色土層からおもに出土した。小型丸底壺1・鉢2・器台1・台付鉢1・高杯2・壺2・小型甕1・甕5の計15個体である。ほかに甕の口縁部片が4個体分あるが細片のため図示できなかつた。台付鉢(52)は接合部を欠損するが、胎土・調整・赤色塗彩の状況など類似したことから同一個体と考えた。50と52の脚が接合する可能性もある。

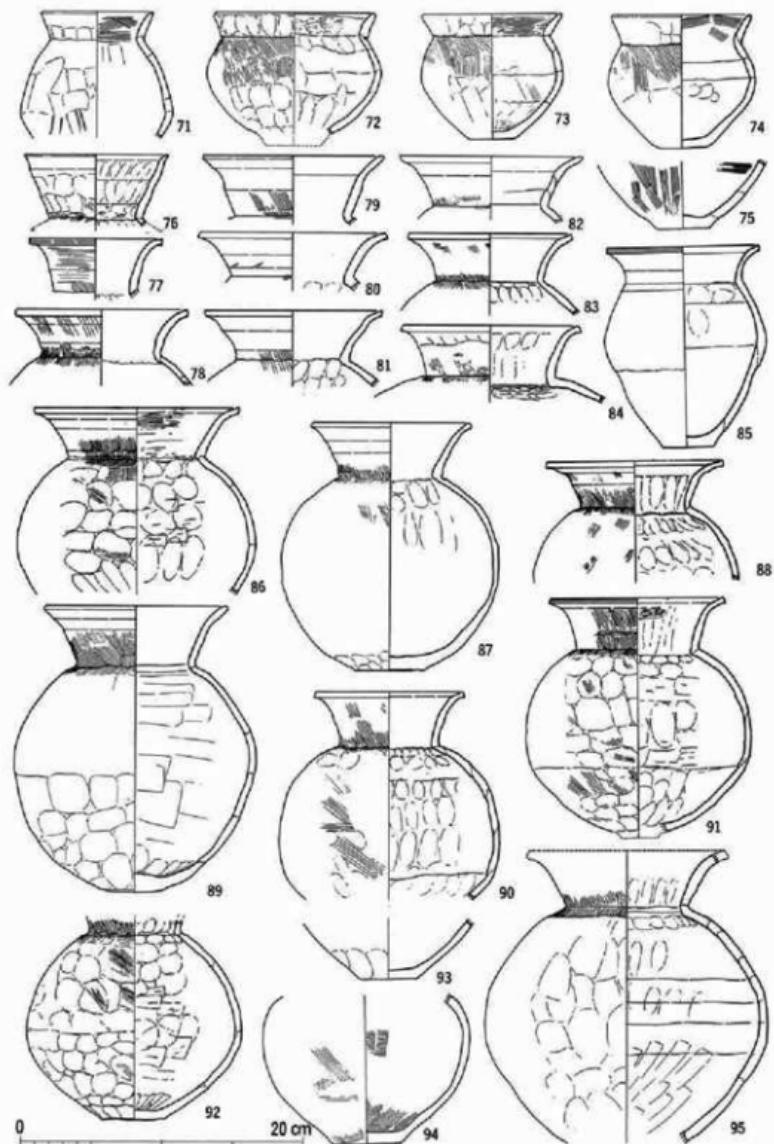


第55図 SX 16出土土器

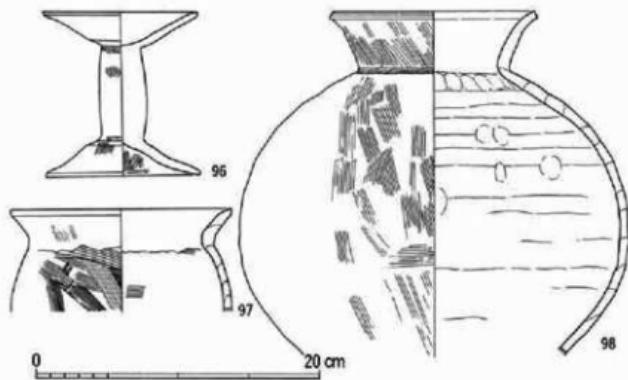


第56図 SX 17出土土器

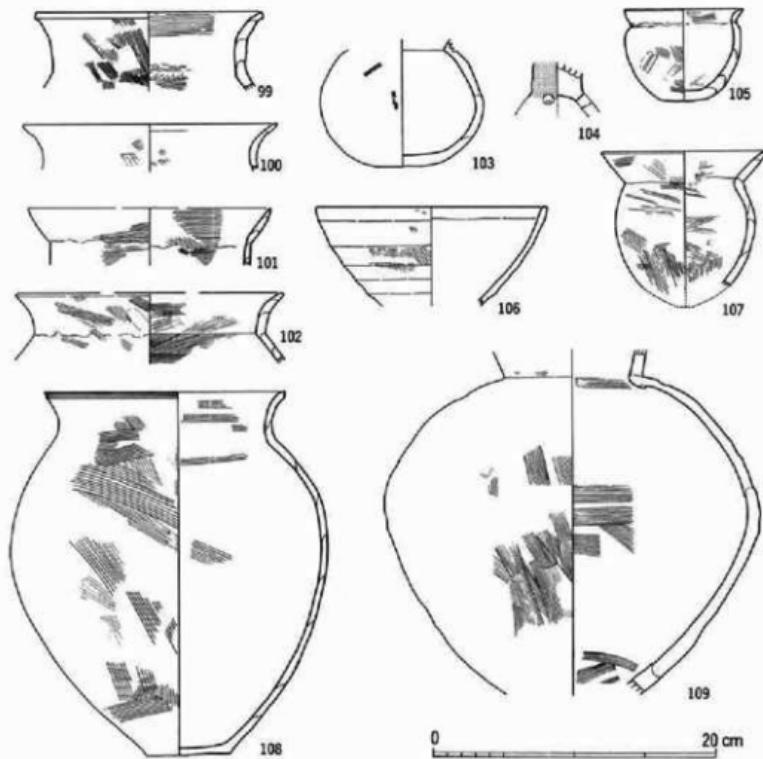
57の小型甕はSX 16の64などに類似するものである。51は本遺跡でただ1例の器台である。



第57圖 SX 18出土土器



第58図 SX19出土土器



第59図 古墳時代中期遣構外出土土器

甕は刷毛目調整を内外に施し、その後外面を箇削りする。

S X16 (第55図 図版38)

土器の量は少なく、図示できるものは小型甕3個体である。ほかに細片であるが、小型丸底壺の底部がある。この底部外面は丁寧な箇磨き調整である。

S X17 (第56図 図版38)

器種の判別されるものは少ない。図示されたものは壺口縁部2・底部2のみである。底部は刷毛撫でが施され、胎土は粗い。いずれも甕と考えられる。

S X18 (第57図 図版38・39)

いずれも土器集中範囲からの出土であり、小型甕・壺の器種のみである。図示したものはほかに口縁数で27個体以上がある。内訳は小形甕6・壺21である。壺は球形の体部から外反する口縁部となり、口縁端部を外削ぎ状に撫でられるものである。黄褐色を呈し、外面は刷毛目のち粗い箇磨きを施す。

S X19 (第58図 図版40)

高杯1・甕1・壺1が図示された。ほかに甕体部片が若干出土している。96も直線的に開く口縁部から柱状の脚基部となり、さらに「八」字に開く裾部となる。高杯とも器台とも考えられる。

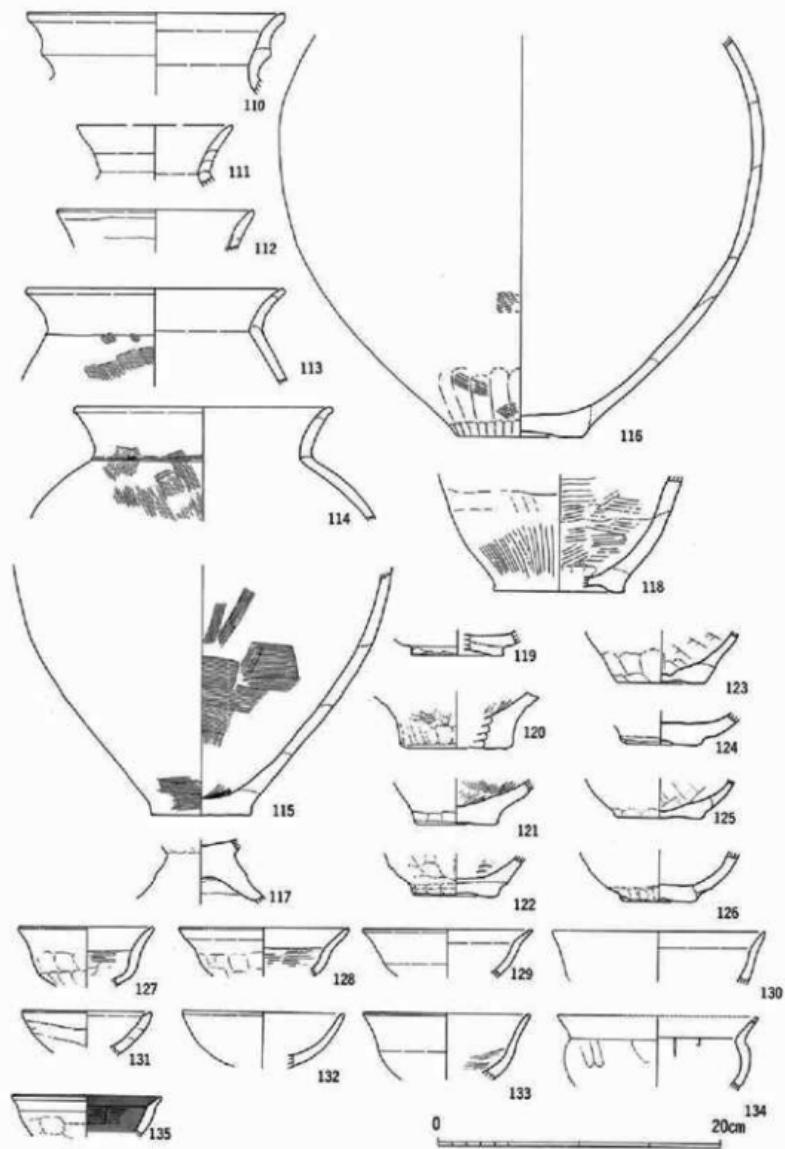
遺構出土の土器 (第59図 図版40)

甕6・小型甕2・鉢1・高杯1・小型丸底壺1がある。109は98に類似する。105・108はほぼ完形である。101・103・105~108は、下層暗褐色土層確認トレンドチ内から出土した土器で、S X19と共存すると思われる。99・102・104はS X17の東側土器集中地点から出土した。100・109は出地不明。

b. 後期 (第60図 図版41)

古墳時代後期の土器は、遺物の出土状況が平安時代の遺物と混在するものが多く、平安時代の遺物と同時に図示したため、本項では、遺構出土器で古墳時代後期のものと思われるものを抽出した。遺物の分布は、S I 1・S I 3・S I 6の周辺に集中している。

器種は、壺・甕・椀・高杯である。壺は有段口縁となるもの(110)、くの字に屈曲して開く単純口縁のもの(111・114)に分けられる。体部は卵形を呈し、底部は不安定な小平底のもの(115)、凹底を呈するもの(116)がある。外面は粗い箇磨きを施す。内面は刷毛目もしくは撫で調整となる。外面調整において一部に刷毛目を残すものもあり、箇磨きの前に刷毛目を施したと考えられる。平安時代の遺物に比べて、砂粒の混入が少く、きめの細かい胎土である。色調は灰褐色、赤褐色を呈し、焼成は硬質である。甕は頸部がくの字に屈曲する単純口縁のもので、口縁端部は丸く撫でられる。体部は刷毛目のち箇磨きされるものもある。118のように内外面とも粗い刷毛目を施すものもある。椀類は口縁部の形態で分類される。内輪気味の体部から、外反する口縁となるもの(128~130)や内輪する体部のまま口縁部となるもの(131・132)、体部からくびれた頸部をもち、外反する口縁となるもの(134)である。135のように口縁部が強く撫でら



第60図 古墳時代後期造謄出土土器

れるものもある。いずれも内外面撫でで調整。底部は平底となるものや凹底を呈するものがある。外面は籠撫でされる。壺か椀の底部であろう。高杯はしまった基部から朝顔状に開く脚部となる。壺・椀・高杯は茶褐色を呈し、きめ細かい胎土で、焼成はやや軟質である。

### 3. 平 安 時 代

平安時代の遺物は、土器・鉄製品・石製品・土製品がある。これらの遺物の90%以上は土器である。土器には須恵器・灰釉陶器・土師器があるが、ほかには特殊遺物として墨書き土器・刻書き土器・転用鏡が含まれる。以下土器から順に記述する。

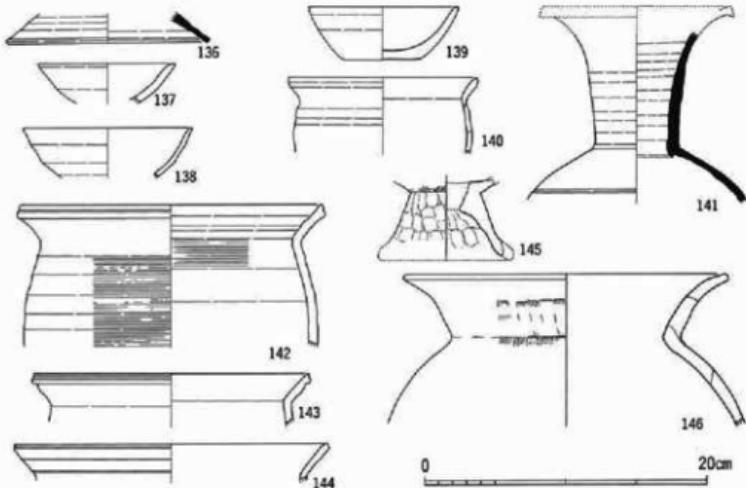
#### a. 土 器 (第61図～88図 図版42～53)

須恵器・灰釉陶器・土師器に分けられる。総数でコンテナ約70箱である。このうち土師器が65箱、須恵器5箱で灰釉陶器は9個体と非常に少なく、土師器が主体といえよう。

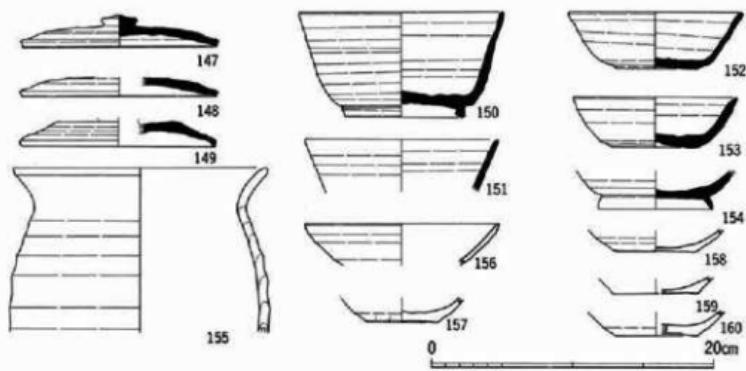
遺構出土の土器と遺構外出土の土器に分けて記述する。なお、S I 1・S I 3・S I 6・S K 14・S K 15においては、平安時代の遺物と古墳時代後期の遺物が混然となって出土した。古墳時代後期の遺物は前節で述べるべきであるが、挿図の関係上、本節で同時に記述する。古墳時代の遺物は胎土・器種・調整などが平安時代のものと異なり、茶褐色を呈し、きめ細かい。

#### S I 1 (第61図 図版42)

須恵器は蓋1・長頸壺1がある。136はかえしのない蓋である。杯とも考えられるが、傾き・釉の付着部などから蓋とした。141は口縁部を欠損した長頸壺である。口縁部は体部成形後、接合されたもので、頸部内面には余り粘土が垂下する。



第61図 S I 1 出土土器



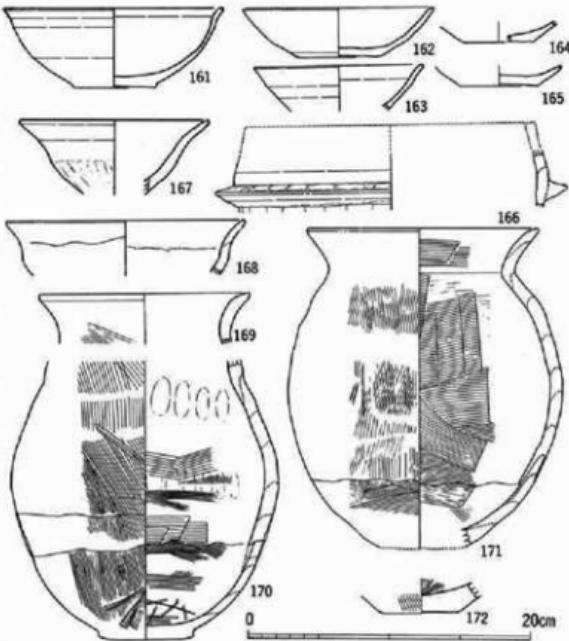
第62図 S I 2 出土土器

### 土器器の杯 3・甕

5・高杯 1 がある。杯はいずれも杯 B である。甕は甕 A 種が 3 個体ある。146 はくの字に開く単純口縁で、外面は刷毛目のち窓磨きを施す。色調は灰褐色を呈し、緻密な胎土で焼成は良好である。145 は高杯である。外面観撫で調整、茶褐色を呈し、緻密な胎土で焼成は軟質である。調整・胎土などから 145・146 は古墳時代後期の所産である。

S I 2 (第62図 図版  
42)

遺物は須恵器蓋 3・  
杯 3・椀 2、土器器杯  
5・甕 1 である。ほか



第63図 S I 3 出土土器

に図示できない土師器裏片がある。155の甕は竈内から出土した。土師器杯は杯Aが主体である。

S I 3 (第63図 図版42)

遺物は土師器のみである。杯4・碗1・羽釜1が平安時代のものである。167~172までは床下土壙(SK33)からの出土遺物である。古墳時代後期の所産と考えられる。土器のほかに劍・勾玉なども出土し、蟻子山古墳群との関係が考えられる。

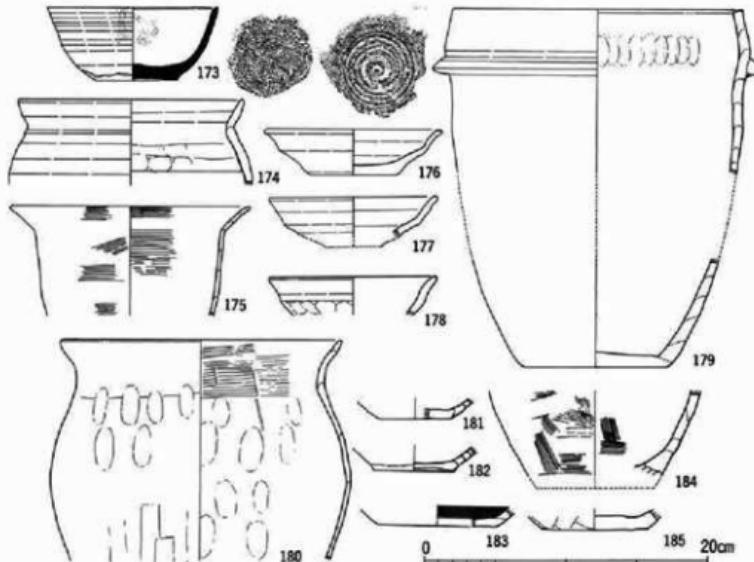
S I 4 (第64図 図版42)

遺物は須恵器碗1・土師器杯5・碗1・甕3・羽釜3である。

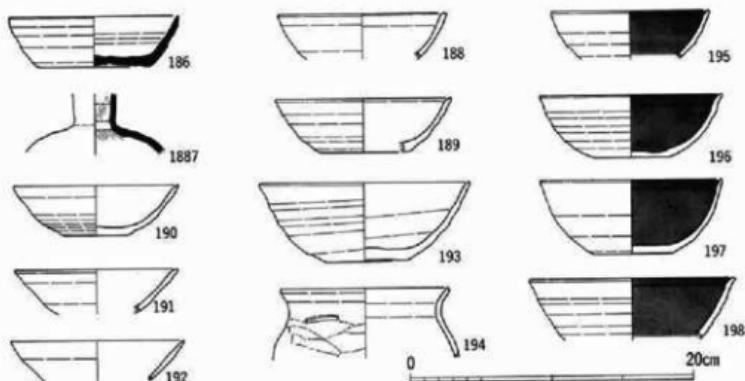
173は底部回転糸切り痕のほか、内面にもうず巻状の撫で痕跡を残す。胎土に白色砂粒を多く含み、質の悪いものである。内外面にタールが付着していた。179の羽釜は体部を欠損し、口縁部と底部との接合点はないが、色調・胎土・調整が酷似し、一括して竈内からつぶれた状態で検出されたことから同一個体と認定した。184・185は形態・法量から羽釜の底部とした。176~182はいずれも杯A2と考えられる。178は体部に指撫でを施す。甕はロクロ成形の174と輪積み成形の175・180の2種がある。175・180は器壁を薄く削り、茶褐色を呈する。

S I 5 (第65図 図版43)

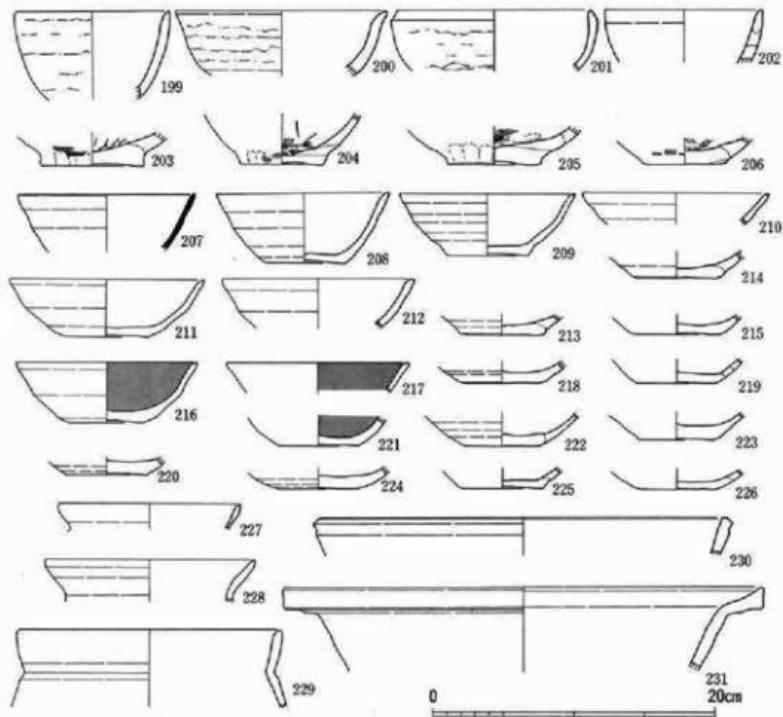
遺物は、須恵器杯1・小型臺1、土師器杯6・碗4・小型甕1の計13個体である。土師器のうち杯1・碗3は内黒土器である。186は底部鋸切りの杯で、187は頭部がすぼまった臺である。194は外面を鋸削りし、器壁を薄くしたもので、茶褐色を呈する。



第64図 S I 4 出土土器



第65図 S I 5 出土土器



第66図 S I 6 出土土器

### S I 6 (第66図 図版43)

遺物は古墳時代後期の土師器と平安時代の土師器・須恵器である。

古墳時代後期の土器(199~206)は碗4・底部4である。碗は器種が多い。底部のうち205・206は内面に刷毛目を残し、甕と考えられる。

平安時代の土器は須恵器碗1、土師器杯8・甕4・鍋1・底部11である。このうち杯3は内黒土器である。杯は杯A 2類が多い。特に209・211の杯と216の内黒土器は器形が類似している。230は甕としたが、羽釜の口縁部とも考えられる。

### S I 7 (第67図 図版43)

遺物はいづれも土師器である。杯4・有台杯1・碗2・小型甕1・羽釜1・底部8である。底部は杯類の底部であろう。杯類は計12個と多い。強い撫でにより、体部が二段に屈曲する杯A 3が主体である。239は器高にくらべ体径の大きい小型甕である。243は羽釜の底部と考えられる。ほかに図示できない破片であるが叩き成形による甕Gの体部細片も出土している。碗は内黒土器である。237は高台付きであろう。内黒土器は器壁が厚手のつくりである。

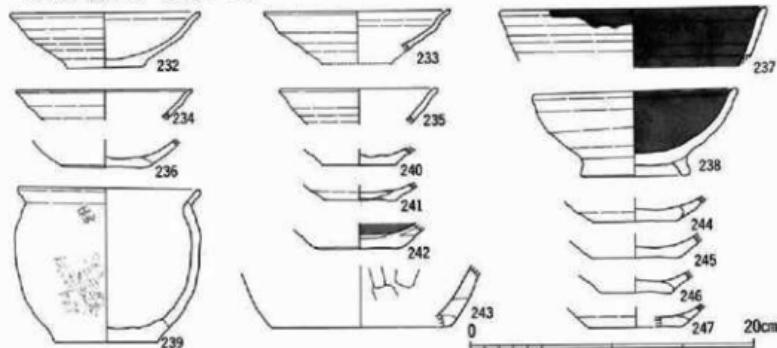
### S I 8 (第68図 図版43)

4個体実測され、全て土師器である。248・249は口径10cmの杯B 1である。250は有台杯(杯A 1)である。焼成は軟質でもろい。251の内黒土器は底部は欠損するが、併出した内黒土器の底部片は全て回転糸切り調整であり、251の底部も糸切りの平底であろう。

### S I 9 (第69図 図版43)

いづれも土師器で、杯2・甕4である。杯は杯Bに属し、内面は磨かれ、薄手のつくりである。254はコの字に屈曲する口縁部で、器壁は薄く笠削りされ、赤褐色を呈する。255~257は叩き成形による甕Gである。体部外面は格子叩きを笠削りで消し、底部内外面は叩きののち粗い刷毛目を使用している。

### S X 20 (第70図 図版44~46)



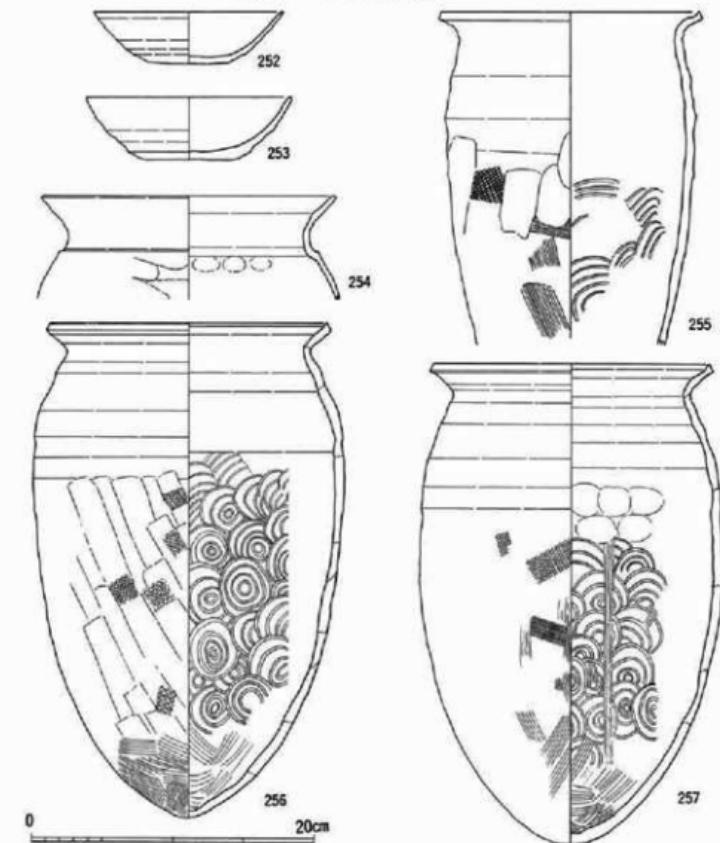
第67図 S I 7 出土土器

小川状の遺構から出土したもので、出土地は12M (8・13・14・19) グリッドにわたっている。図示したものは須恵器杯1・碗1・甕2・平瓶1、灰釉陶器長頸瓶1・碗1、土師器杯47・碗7（内黒土器4合）の計61である。図示したもの以外にも土師器の杯類が多数あるが、いずれも小片となっている。器種構成をみると、土師器の杯類の割合が非常に高いことがうかがえる。

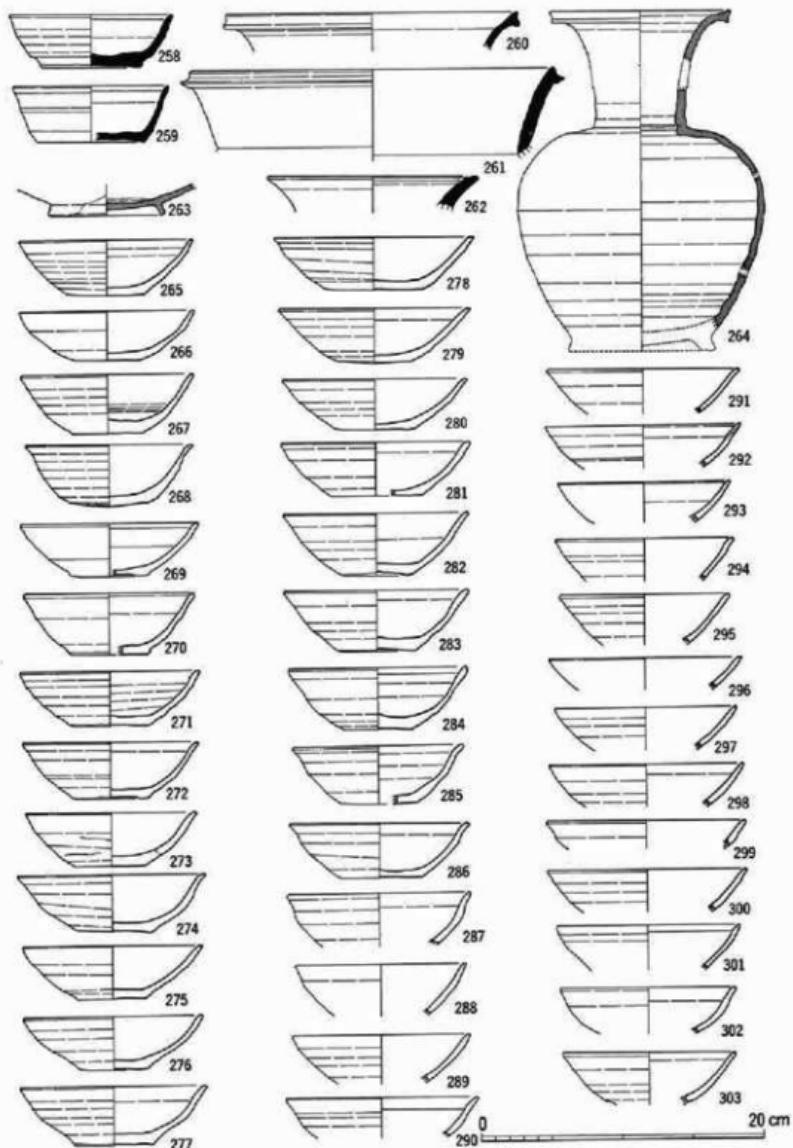
これら土師器杯については成形技法からロクロ成形後無調整の杯Bとロクロ成形後笠磨きを



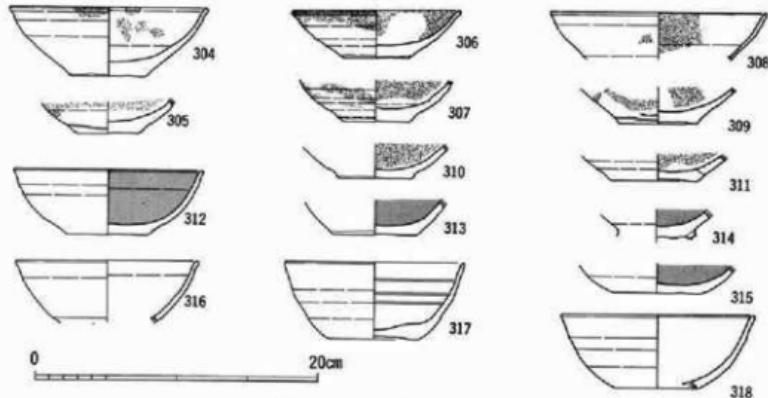
第68図 S I 8 出土土器



第69図 S I 9 出土土器



第70図 S X20出土土器(1)

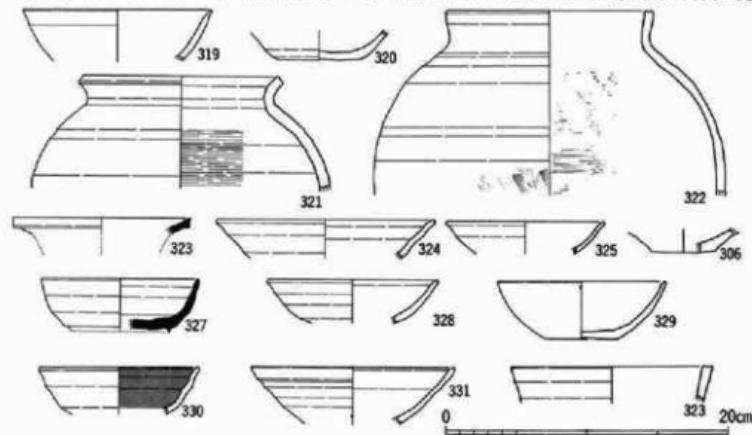


第71図 S X20出土土器(2)

施す杯Cに分類される。ロクロ成形後の底部切り離しは回転糸切り技法によるものが大多数を占める。窓削りされるものは268のみである。杯Bの中には304～311のように内外面にタール状の油煙が付着するものもある。器形が同一であること、付着範囲が体部から口縁部で底部内面における付着はほとんどないことから、灯明皿などに使用された杯と考えられる。263・264の灰釉陶器は東濃産の光ヶ丘I式と考えられる(註)。264は各部片を図上で復元したものである。262は、内面に自然釉が付着し、平底の口縁部と考えられる。

#### S B 2 (第72図 図版46)

柱穴から出土したもので、細片化している。土師器杯2・短頸壺1がある。319は内面が鏡磨



第72図 振立柱建物・柱穴出土土器

きされる杯である。322は器形からは焼成不良な須恵器とも考えられる。胎土には細砂を多く含み、色調は灰褐色を呈する。酸化焰焼成と考えられるため土師器とした。

S B 4 (第72図)

土師器杯 2・底部 1 である。杯は杯 B<sub>2</sub> と考えられる。底部はやや肥厚するが杯の底部であろう。造構が S B 3 と重複するが、年代差は不明である。

S B 5 (第72図 図版46)

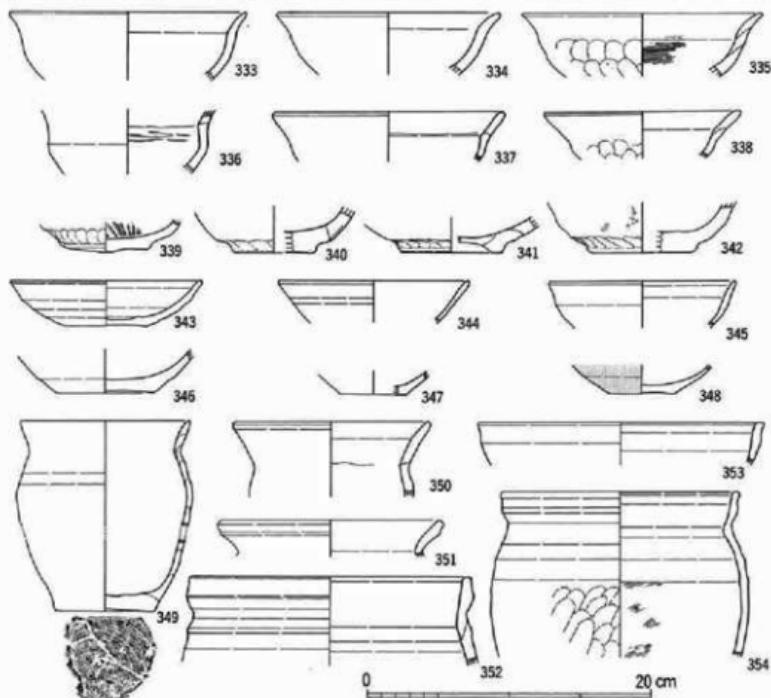
須恵器杯 1・長頸壺 1・土師器杯 2 がある。327の高台はつまみ上げられる。長頸壺は口縁部細片であり、つくりは丁寧で、胎土・構成は良好である。

S B 1・S B 3・S B 6

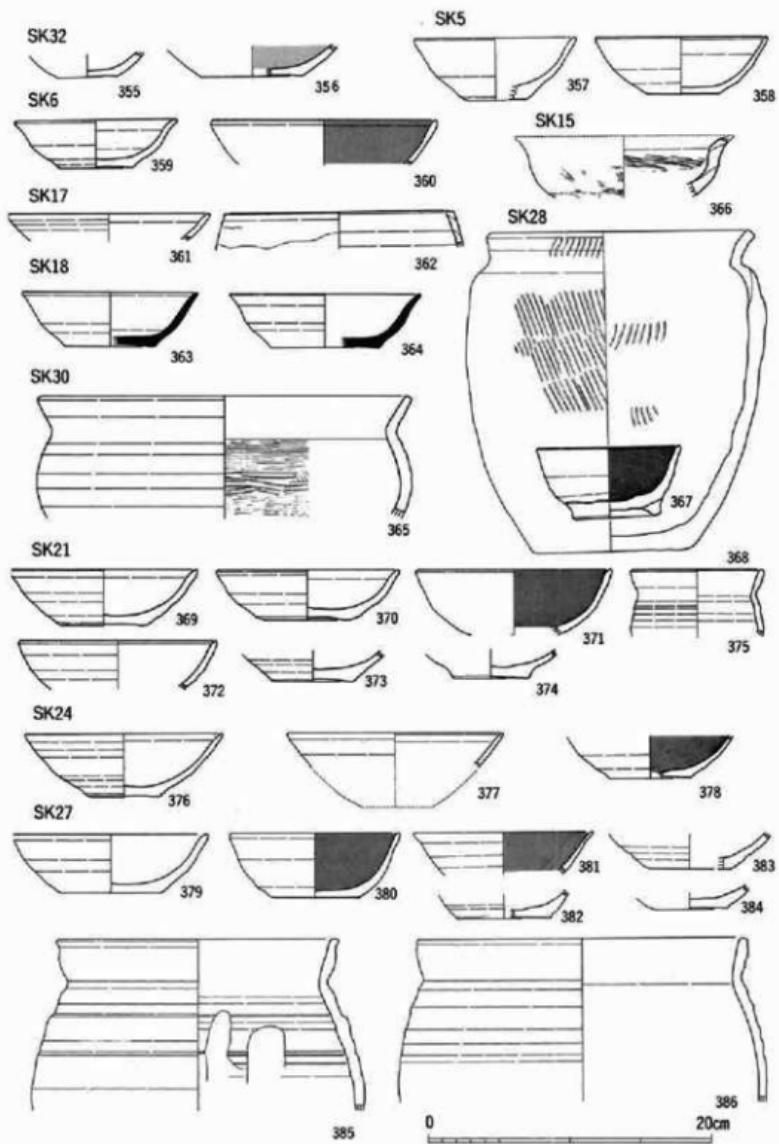
いずれも柱穴から土師器細片が出土しているが、図示できるものはない。

その他のピット出土土器

掘立柱建物以外の柱穴から出土した遺物である。321は短頸壺で、器形から焼成不良な須恵器とも考えられる。330は体部が撫でにより、やや屈曲する。332は、羽釜の口縁部と考えられる。



第73図 土墳出土土器(1) (S K14出土土器)



第74図 土壤出土土器(2)

口径は12cmと小さい。

S K 14 (第73図 図版41・46)

古墳時代後期の土器と平安時代のものが混然となって出土した。どちらも土師器である。

古墳時代の土器は椀6・底部4である。椀は内縛する体部から外方にのびる口縁部となる。いずれも椀Bである。底部は、肥厚するものが多い。体部は内縛する。指撫で調整を施すものが多い。厚さが厚いことから甕などの底部と考えられる。

平安時代の土器は、杯6・小型甕2・甕4である。杯類は杯B<sub>2</sub>のものが多い。348は外面が赤色塗彩のものである。349の甕C<sub>1</sub>は底部回転糸切りである。354は外面籠削り、内面に刷毛目を残す。

S K 32 (第74図)

土師器杯が出土した。355は小ぶりのもので、杯B<sub>1</sub>と考えられる。

S K 5 (第74図 図版46)

土師器杯2が出土した。ほかに細片が数点ある。357は身が深いものである。

S K 6 (第74図 図版46)

土師器杯1・椀1が出土した。359は杯B<sub>4</sub>である。360は内黒土器で、椀B<sub>1</sub>である。

S K 15 (第74図)

図示できたものは古墳時代の椀のみである。ほかに平安時代の杯・甕の体部細片が数点ある。

S K 17 (第74図)

土師器杯と羽釜がある。羽釜はつば部を欠損しているが、胎土・焼成とも良好なものである。

S K 18 (第74図)

須恵器杯2がある。形態は類似するものでB<sub>2</sub>である。焼成は不良で軟質である。

S K 21 (第74図 図版46)

土師器杯3・椀1・甕1・底部2がある。ほかに杯の細片が5・6個体分ある。底部はいずれも杯と考えられる。甕は小型のものでミニチュア土器とも考えられる。甕A<sub>1</sub>である。

S K 28 (第74図 図版46)

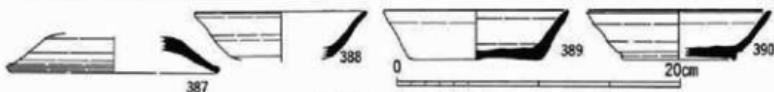
土師器甕と内黒土器の杯である。368の甕は叩き目を外面に残すが、他は丁寧に撫でられる。367の杯はやや雑なつくりで小ぶりである。高台は短くのびる。

S K 24 (第74図 図版46)

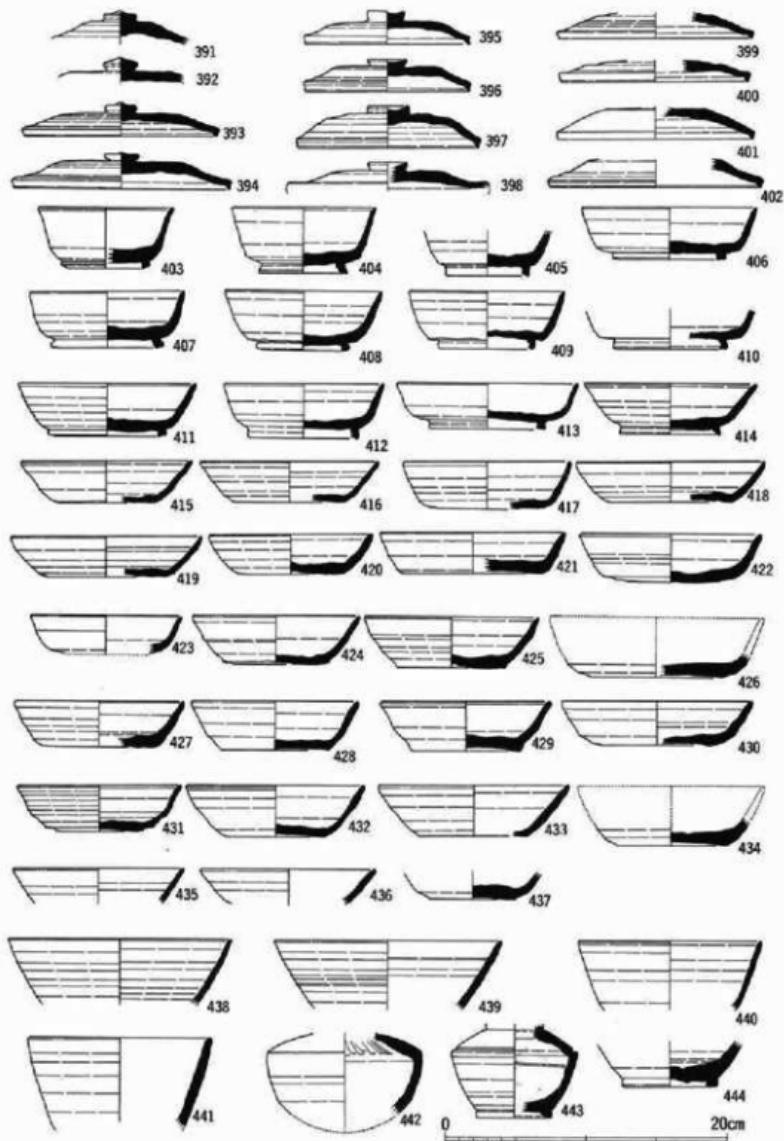
土師器杯3がある。376は杯B<sub>3</sub>である。377は椀とも考えられる。

S K 27 (第74図 図版46)

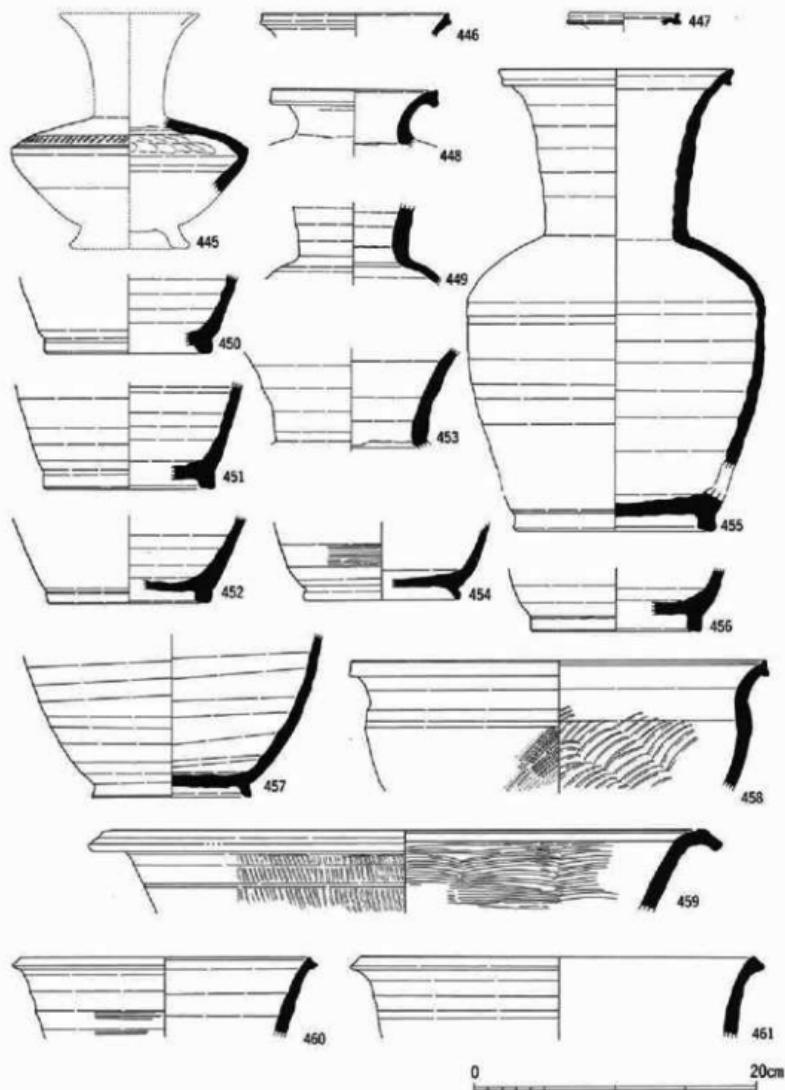
土師器のみが出土している。杯6・甕2である。杯の中には380・381の内黒土器も含まれる。



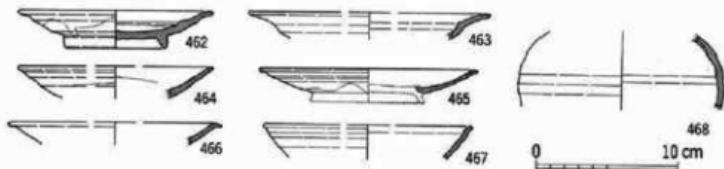
第75図 S D11出土土器



第76図 平安時代遺構外出出土器 須恵器(1)



第77図 平安時代遺構外出土土器 須恵器(2)



第78図 平安時代造構外出土土器 灰釉陶器

382~384はいづれも杯B<sub>2</sub>の底部であろう。甕はA<sub>3</sub>類のものであるが、385はロクロ撫での後、内面を箒で撫で、口縁外面は強く撫でられ凹んでいる。

#### S D 11 (第75図 図版46)

S I 3の南側において検出された。いづれも須恵器である。387はつまみが欠損する蓋である。390は高台を撫でてつまみ出したものである。389は杯Bで底部箒切りである。

#### 造構外出土の土器 (第71~85図 図版47~52)

造構外出土の土器は須恵器、土師器、灰釉陶器がある。細片が多い。出土個体数は、須恵器の口縁部片115個体、底部および体部片403個体となる。土師器の口縁部片1,892個体、底部2,704個体である。灰釉陶器は7個体であり、非常に少なかった。

須恵器の器種は杯(無台杯・有台杯)・碗・蓋・長頸壺・短頸壺・小型壺・甕・広口甕である。このうち甕は口縁部片は11個体と少ないが、体部片は400片と多く、杯類の底部切り離し技法を観察すると箒切りと回転糸切りとは量的には大きな相違ではなく、同等の数量である。広口甕の量は少ない。壺類は口縁部よりも底部の量が多く、いづれも方形のしっかりした高台である。灰釉陶器の器種は皿と瓶である。土師器の器種は、杯・碗・皿・甕・広口甕・直口壺・台付短頸壺・瓶・鍋・羽釜などである。量的には杯・碗が最も多く、口縁部個体数1,259個で全体の66.2%を占める。皿と認められたものは内黒土器2例のみである。壺は若干あるのみである。甕の中には羽釜の口縁片が混じっている可能性もあるが、口縁部数618個体(35.4%)で杯類について多く出土している。羽釜は55個体(2.7%)である。瓶、鍋はわずかではあるが存在する。

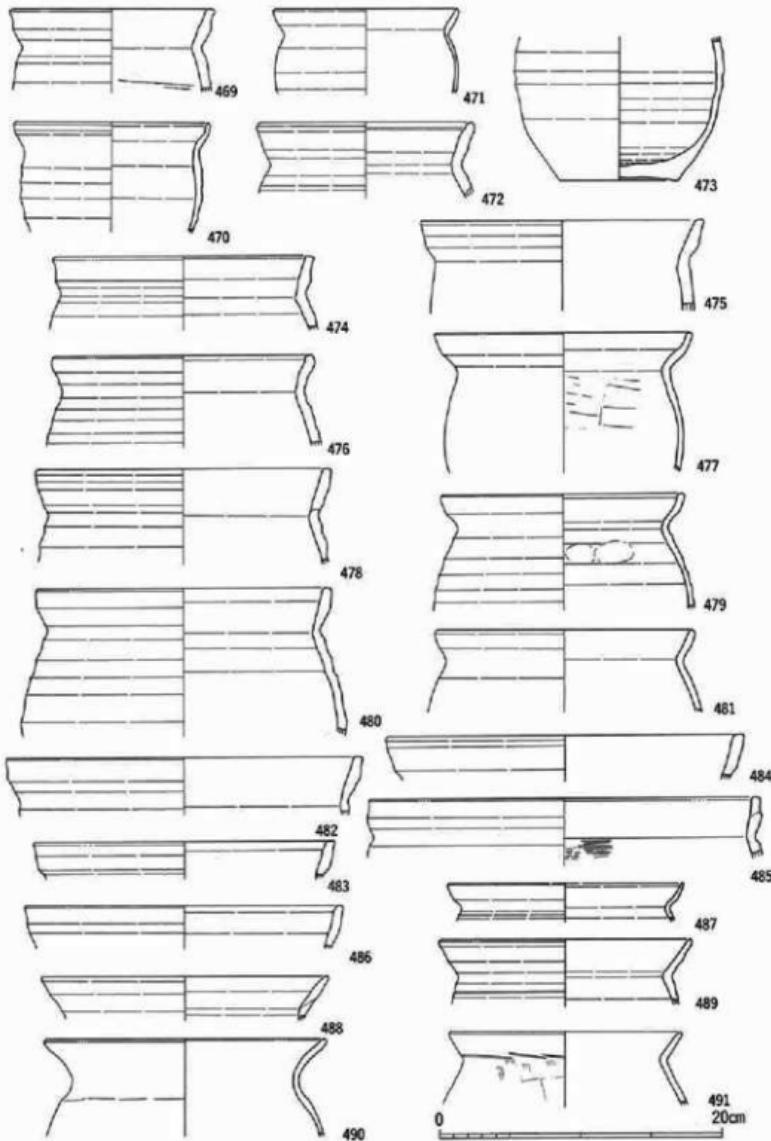
須恵器の分布は総数が少ないため、密集地区は不鮮明であるが、A地区においてはS D 4の周辺、B地区においてはS I 2・S I 5・S B 2・S B 5・S X 20周辺に集中する傾向が認められる。

土師器はA地区においてはS X 21・20O(6)・22O(9)グリッド周辺において集中し、B地区においては、北からS I 5・S B 1・S B 3・SK 7・SK 21・S B 5・S X 20・SK 30周辺に集中が認められ、最も集中するのはS X 20周辺である。

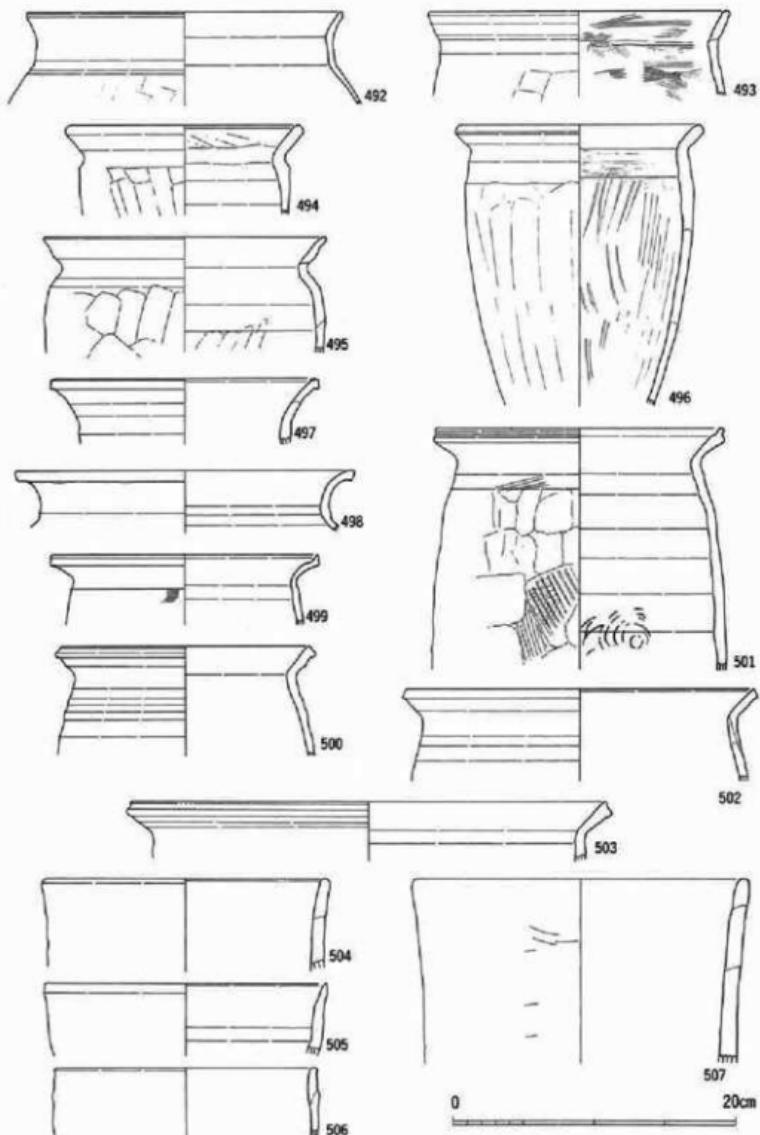
以下須恵器、灰釉陶器、土師器の順に記述する。

#### 須 恵 器 (第76・77・85・86図 図版47・48)

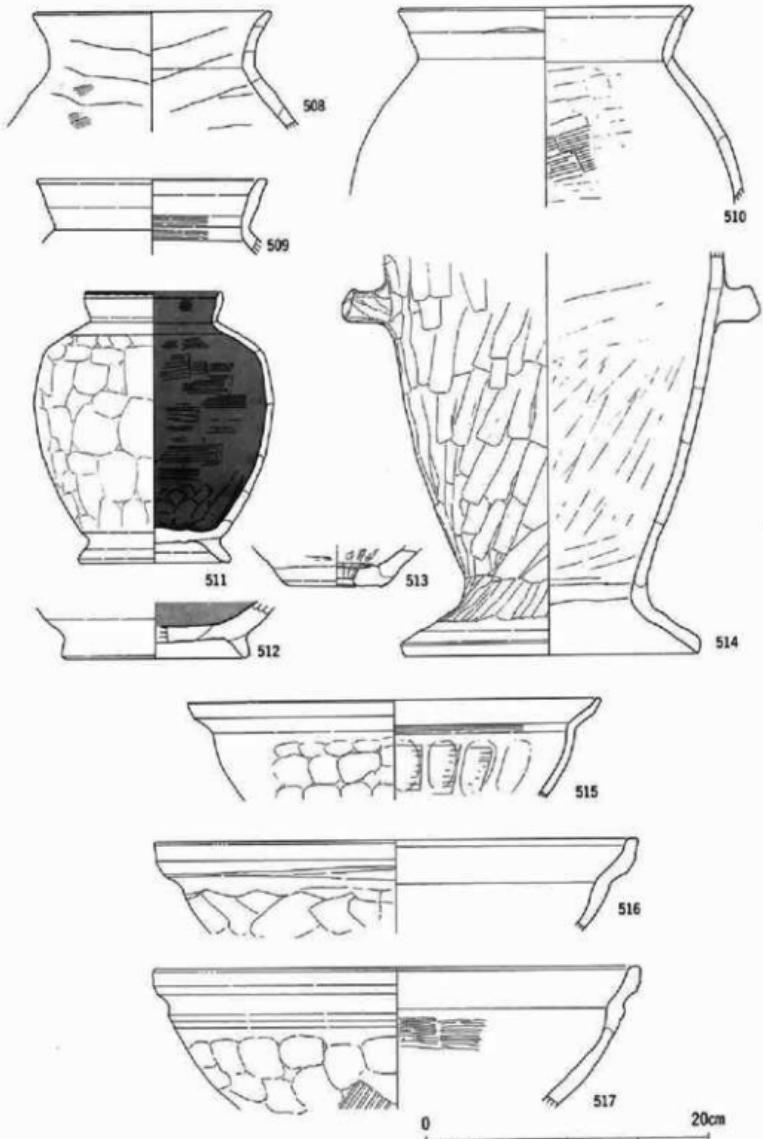
蓋(391~402) つまみの形態によって分類した。宝珠様つまみのAと偏平なつまみのBである。つまみの欠損するものはCとした。



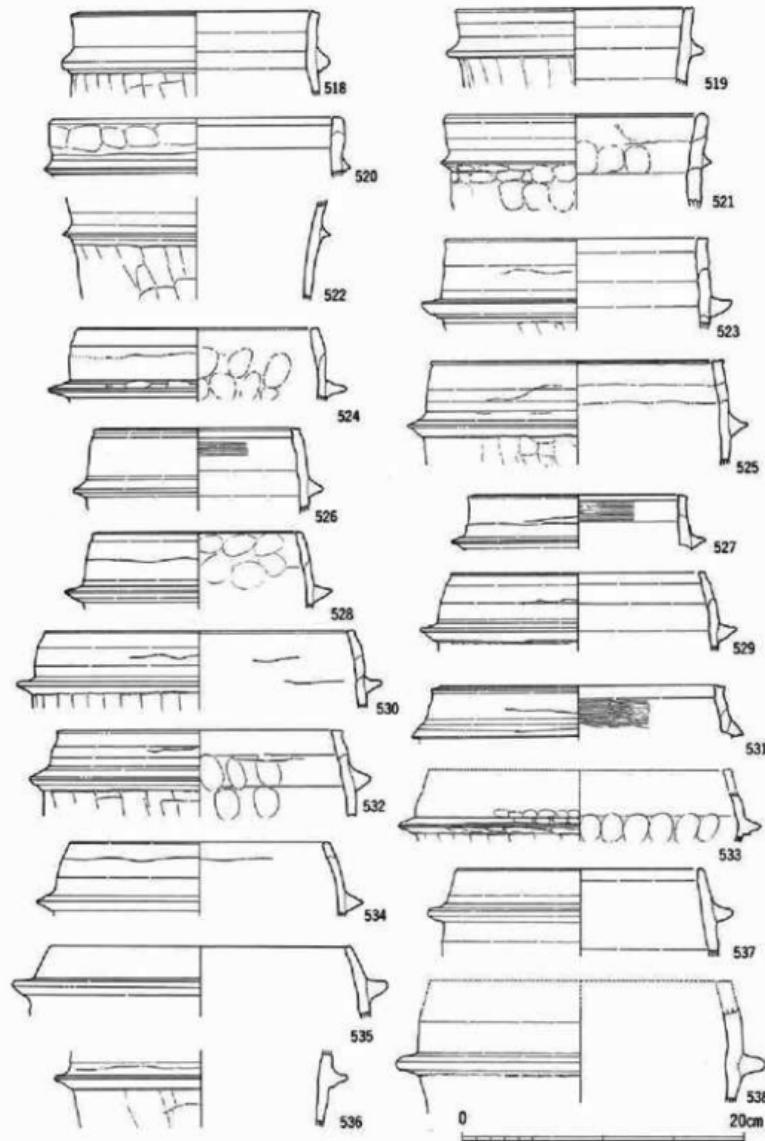
第79図 平安時代遺構外出土土器 土師器(1)



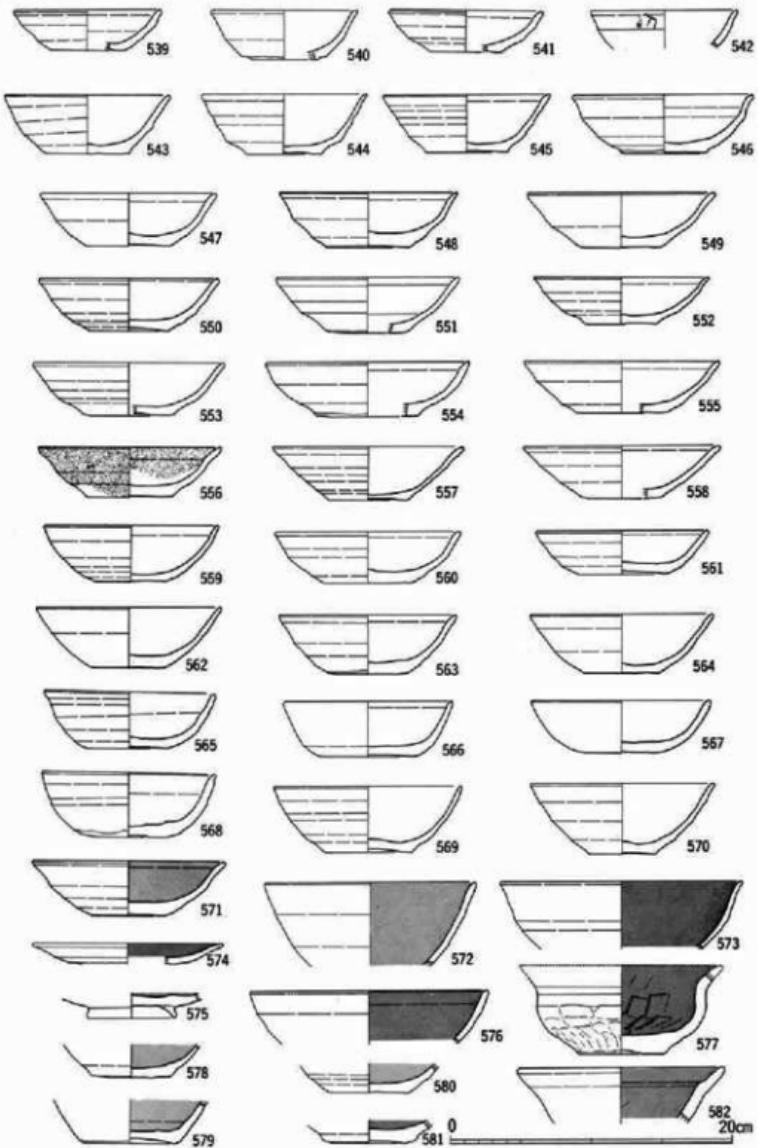
第30図 平安時代遺構外出土土器(2)



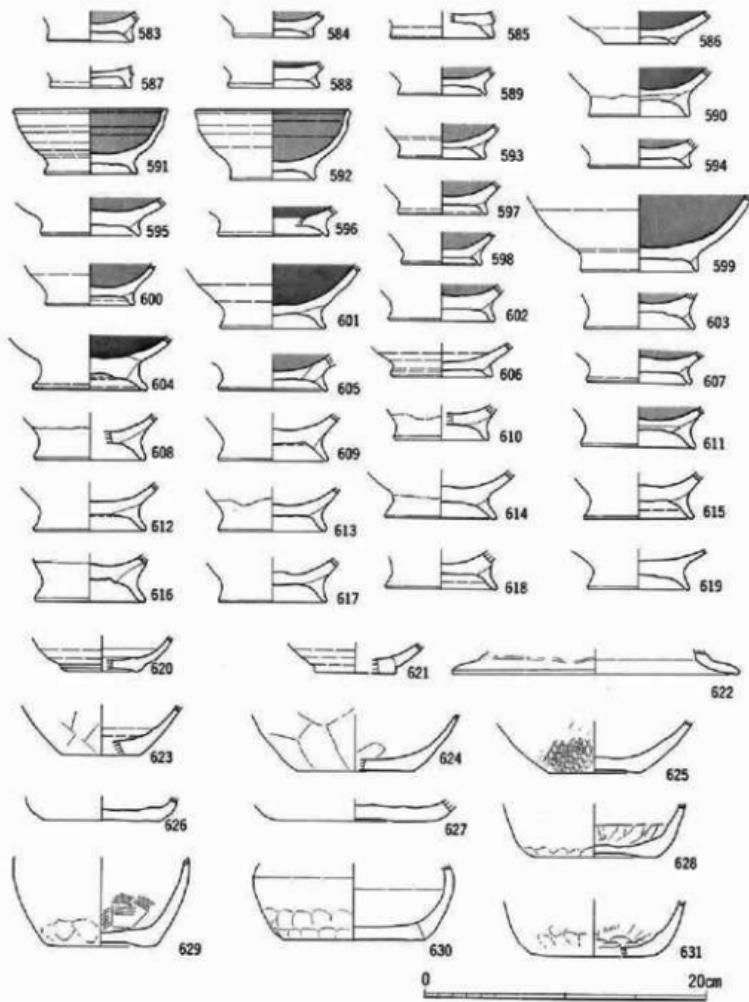
第81図 平安時代遺構外出土土器 土器(3)



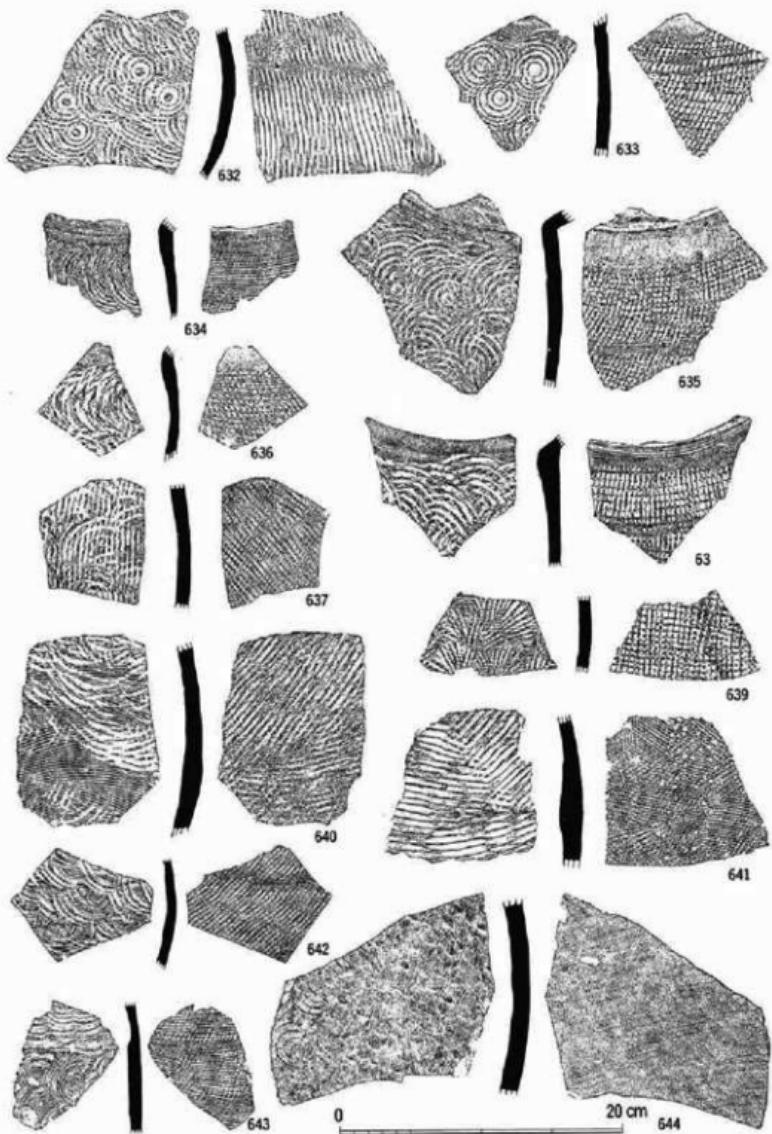
第82図 平安時代遺構外出土土器 土師器(4)



第83図 平安時代遺構外出土土器 土師品(5)



第84図 平安時代遺構外出土土器 土器(6)



第85圖 須惠器拓影圖(1)

杯(403~437) 高台のあるものA、ないものBに分類した。さらに底部の調整によって細分した。底部の状態については第86図に図示した。

椀(438~441) 底部のあるものはない。441のように器壁の厚いものもある。

甌(442) 是古墳時代のものである。外面に自然釉がかかる。

小型壺(443~444) 丁寧なつくりで、443内面にはタール状の付着が認められた。

壺(445~457) 口縁形態により分類した。445は古い様相を呈する。455は体部を欠損する。いずれも台部はしっかりしたものである。

広口壺(458) 内面同じ円文・外面格子叩き痕が残る。焼成は軟質で灰色を呈する。

甌(459~461) 口縁部片は少ないが、体部片が多い。また叩きは多種多様である。

灰釉陶器(第78図 図版51)

皿(462~467) 細片化しており、口径の不明確なものは破線とした。釉は灰緑色を呈す。462は段皿であり、施釉はつけがけと思われるが、ほとんど剥落しており、転用視の可能性もある。464の施釉は刷毛塗り、466は細片であるが綠釉陶器の可能性もある。

瓶(468) 淡黄緑色の釉がかかる。内面にわずかに炭化物が付着する。他に細片が2点ある。いずれも細片のため、不確かではあるが、462は大原II、464は虎峠山I、465は折戸53窯式の天場もの、466はS4'、467は大原II~虎峠山I、468は黒笠14窯式のものと推定される。

土師器(第79~84図、図版49・50・52)

甌(469~510) 甌はA~Hまで八種に分類した。量的にはA(469~486)が最も多く、D(489~493)は関東地方に多い器形である。薄手で箇削りされる。またG(499~503)は北陸地方に多い叩き土師器の甌である。H(504~507)は円筒形の土管状を呈する。底部の形は不明である。473は底部整止糸切りである(第86図)。

壺(511~512) 511は内黒土器で、須恵器の壺を模したものであろう。

瓶(513~514) 513は底部に1孔がある。514は特異な形態で甌を倒立させたものに似ているが、把手の形態で瓶とした。

鍋(515~517) 517は叩き成形である。底部片らしきものもある。

羽釜(518~538) 口縁・つばの形態でA・B・Cの三種に大別した。Bが焼成・つくりとも良い。Aのつばは貧弱で形式的である。Cは器壁の厚いつくりである。

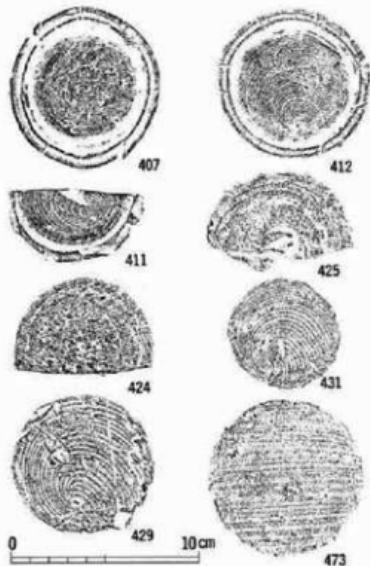
杯(539~567・571・583~619) A~Dに分類した。556は内外面に油煙が付着する。

皿(574~575) 575の内面は丁寧に磨かれている。

椀(568~570・572~57~576~582) 568は底部に箇削りを施す。他は回転糸切りの底部である。底部及び不明品(620~631) 620~621は杯の底部である。622は甌の口縁であろうか。623~624・626~627は羽釜の底部であろう。その他は椀類の底部であるが明確ではない。

須恵器甌片(第85図)

須恵器甌は口縁部数は11個体と少ないが、体部片は約400片と多い。叩きの種類も多種多様であり、すべてを図示することは困難である。よって代表的なもの13片を図示する。



第86図 須恵器等拓影図(2)（底部） b. 墨書土器・刻書土器（第87図 図版53）

本遺跡出土の墨書土器・刻書土器は、墨書土器9点・刻書土器2点の計11点である。

これらの墨書土器のうち、文字と判読できるものは「十」の1点のみである。他に不明確ながら「夫山」「山」「留女」と判読可能なものの3点がある。いずれも須恵器・土師器の杯類の底部もしくは体部外面に書かれたものである。

1は「夫山」と判読されたもので、墨が薄くなつており不明な点が多い。特に「夫」については「天」と判別しにくい。「山」は比較的判読が容易であった。2は行書の「山」と考えられる。一見矢印のような記号に見られたが、筆順・筆勢が「山」と同じく、最後にやや上方にはねて終っている。3は字の大きさなどから2文字分が考えられた。偏は「木」もしくは「禾」であり、「秧」とも「秋」とも読める。下の字については不明である。4は破片のため2文字の上の字が半分ほど不明であるが、「留」の「留」かんむりを欠損しているものと思われる。「田」は、中は「×」となっている。下の文字は筆順などから「女」と解せられた。合わせて「留女」（とめ）とも読める。5は4と同様に「女」と判読され、上に1字存在するが、墨が薄く判読が困難であった。9は小破片のため、判読困難であるが、墨痕は明瞭であった。6は口縁外面に書かれている。字が重複しているため、判読が困難である。本来は、底部に近い方が下と考えられるが、口縁部の方を下にして読むと「+」かんむりの下に2字存在する様にも見える。「……丸」とも読まれる。7は杯の体部から底部にかけて連続して書かれている。記号とも考えられる。右側の「ト」の部分はかすれている。8は有台杯の底部にあり、「十」と明瞭に読ま

632は内面同心円文で外側は平行叩きに横位のカキ目を施す。633は内面整った同心円文、外側斜格子叩きを施す。634は内面細かい同心円文と外側細かい横位平行叩きである。635・638は633と同様であるが、内面の同心円文中に木目が認められる。また外側に横位のカキ目を施す。636は粗い同心円文と斜格子叩きである。637は、内面に同心円文と平行文の2種がある。639は放射状文と平行文の2重となる。転用鏡（8・9）にも同様のものが使用されている。640は同心円文を刷毛目で施しており、外側も平行叩きである。641は内面平行文と外側細かい格子叩きである。642、643は細かい同心円文と細かい格子叩きである。644は外側平行叩き、内面は粗い同心円文のうち、丁寧に叩き痕を消し、内外面ともなめらかになっている。いずれも10世紀から11世紀の所産と考えられる。

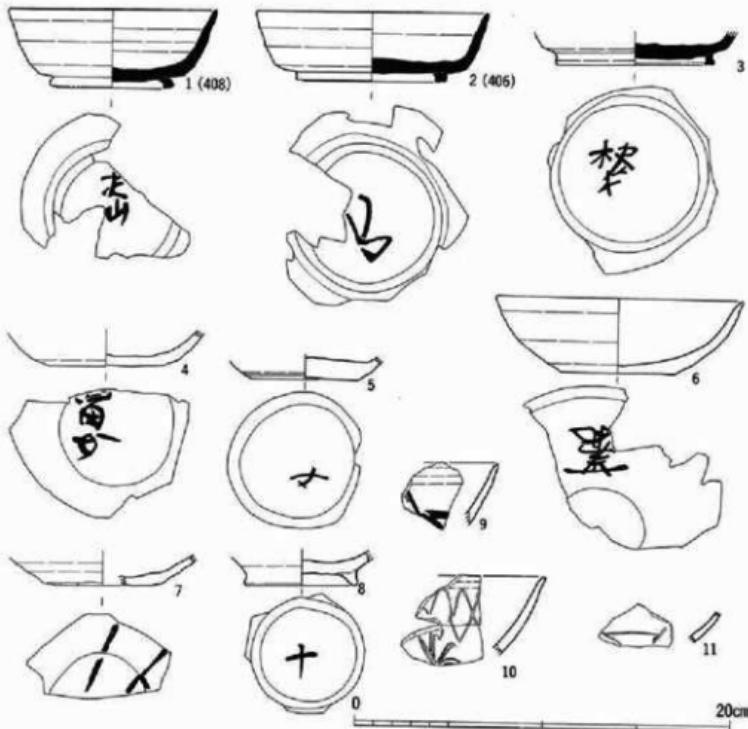
れる。

刻畫土器はいずれも文字ではなく、絵画もしくは記号と思われる。10は杯の口縁部に描かれ、菱形状の連続する文様と草花を模した絵画である。焼成前に描かれており、胎土中の砂粒が動いている。11は杯の口縁部外面に描かれている。舟とも見える文様であるが、小片のため断定はできない。焼成前に描かれている。

#### c. 転用 砥 (第88図 図版52)

本遺跡で出土した硯は須恵器・灰釉陶器の破片を再利用した転用硯のみである。転用硯と断定できないもの1片を含め計10個体出土している。

転用硯として認定した根拠は、1)すり面を有すること、2)墨痕が認められること、3)形態的に他遺跡で出土したものと類似していること、以上の三つの条件である。しかし、本遺跡出土例においては、水洗が強すぎたため墨痕の不鮮明なものが多くあり、条件の2項に適応しないものがあるため、主として条件1と3を重視して転用硯と認定した。

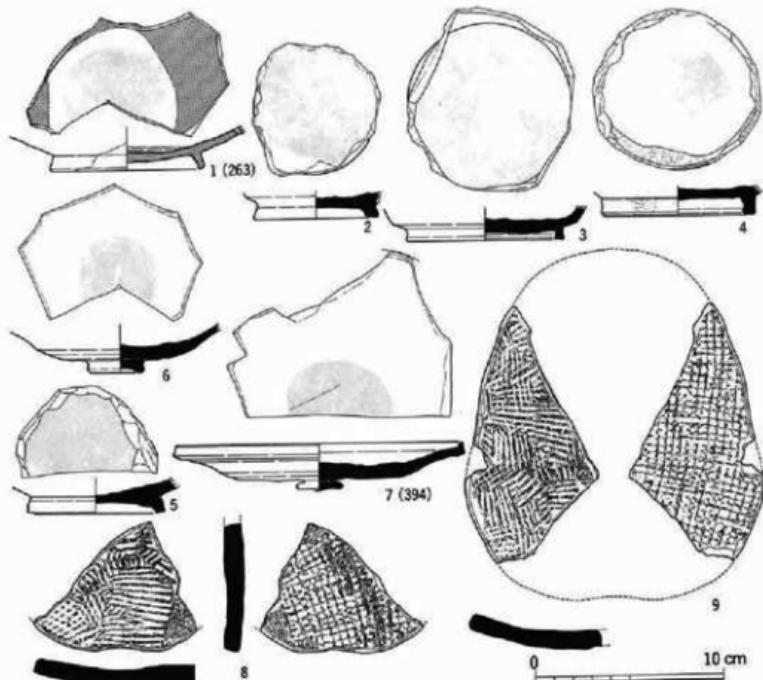


第87図 墓塗土器・刻畫土器実測図

以下転用される以前の須恵器などの器種により I ~ III に大別した。I 類は須恵器・灰釉陶器の杯(有台杯)を再利用したものである。すり面の部分により a ~ c に細分される。I a 類は底部内面をすり面としたもの、I b 類は底部外面をすり面としたもの、I c 類は、内外面ともすり面としたものである。しかし、I b 類は 1 例も認められなかった。II 類は須恵器の蓋を再利用したもので、内面のみをすり面とする。III 類は須恵器甕体部片を再利用したものである。

I a 類は、1 ~ 3 の 3 個体である。特に 1 は墨痕が認められるが、すりの状態は弱い。I c 類は 4 ~ 5 であり、内面のすり面に比べ底部外面がなめらかにすられている。II 類は 6 ~ 7 であり、特に 6 は口縁部を多角形(八角形)状に打ち割ったとも考えられ、ほぼ中央部のみすられている。III 類の 8 ~ 9 は甕体部の内面の凹みを利用したもので、縁辺部は丁寧に調整されている。どちらも同一の甕片であり、8 は甕部に近い部分を再利用している。墨痕は不鮮明である。同一個体となる可能性もあるが、接合面は見出せなかった。図示しなかったが縁辺部未調整の甕体部片で内面がすられたものも 1 片ある。

新潟県内における類例は I ~ II 類については、今池・下新町遺跡(戸根ほか 1984)などがあ



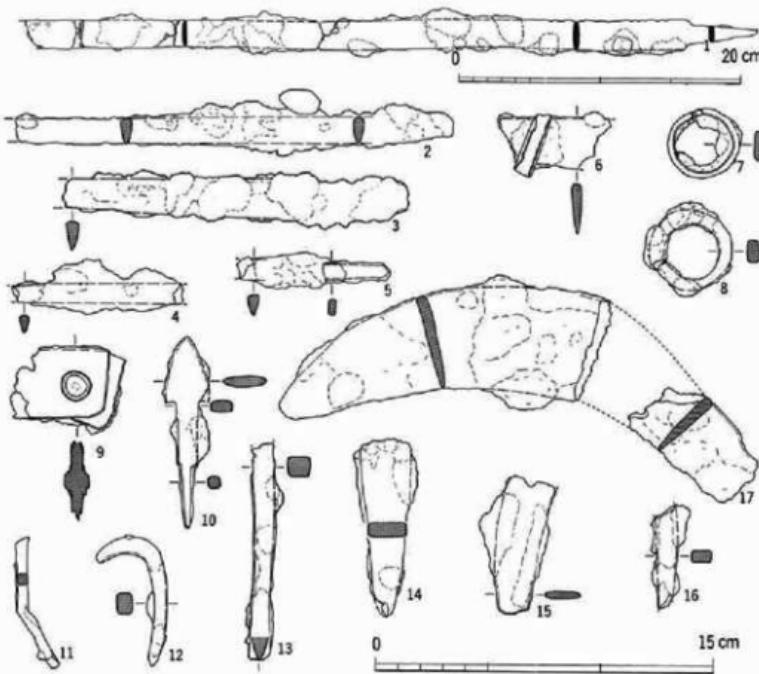
第88図 転用観実測図

る。しかし、III類については県内に類例はなく、宮城県多賀城跡などに類例が認められる。年代は、土器の年代から10世紀から11世紀前半の所産と考えられる。

d. 鉄製品 (第89図 図版54)

鉄製品としては、剣1・大刀1・刀子4・鉄環2・鎌1・鍛留鉄製品1・角釘1・鎌(かすがい)・鑿(のみ)・楔(くさび)類3・鍵1・板状鉄製品3・棒状鉄製品1の計19点が出土し、これらの出土地点・計測値等は鉄器観察表に記した。ほかに鉄滓4点がそれぞれS I 1・S I 3・16O (21) グリッド褐色砂・16P (?) グリッド褐色砂から出土した。鉄製品はサビの湧出が激しく、鉄自体もろくなっているため、サビを取り除くことが困難であり、全形を知り得ないものが多い。

1は先端部が欠失し、直刀・剣どちらとも判じかねたが、両刃であることから剣とした。6は2~5の刀子と比べ幅広であり、大刀の刃先と考えた。7・8の鉄環は本来全体がつながった輪形であったと思われ、断面が長方形であり、用途は不明である。9は薄板状のものを鍛で留めており、甲等の武具の可能性が強い。11~14・16・図版54-18は木工用具と思われる。図版



第89図 鉄製品実測図

第3表 鉄器観察表

No	名 称	出土地点・層位	計測 値	観 察
1	劍	S I 3	現存長52cm・刃部幅3cm・厚0.25~0.4cm, 刃部先端欠失。茎に目釘孔無。	
2	刀 子	15L (6)・黒色土	現存長19.5cm・刃部幅1.2cm・厚0.5cm, 片側欠失, 茎はナビで不明。	
3	刀 子	16P (19)・暗褐色土	現存長15.5cm・刃部幅1.2cm・厚0.5cm, 片側欠失, 茎はナビで不明。	
4	刀 子	14L (10)・黒色土	現存長7.5cm・刃部幅0.75cm・厚0.4cm, 兩端欠失 (S B 3・S B 4内)。	
5	刀 子	S I 12	現存長6.9cm・刃部幅0.9cm・厚0.5cm, 刃部欠失。	
6	大 刀	S I 3	現存長5cm・刃部幅2.2cm・厚0.4cm, 刃部先端残存, 鋸管(延0.6cm)付着。	
7	鉄 球	14M (7)・黒色土	径3.1cm・幅1.3cm・厚0.3cm, 一部破損。本来つながっていたかと思う。	
8	鉄 球	15O (13)・褐色砂	径3.7cm・幅1cm・厚0.5cm, 一部破損。本来つながっていたかと思う。	
9	新宿鉄製品	16Q (23)・褐色砂	幅3.2cm・厚0.1~0.2cm, 本来U字状の板が剣の板を挟む, 用途不明。	
10	鐵	S K 7	全長8.5cm, 有茎平根鉄。	
11	角 衛	15P (25)・褐色砂	全長約6cm・断面一辺0.5cmの角, 先端欠失。	
12	鎧 ?	15O (19)	全長約7cm・中央幅1cm・厚0.7cm, 先端尖鋭。	
13	櫛又は盤?	20O (16)・暗褐色土	現存長9.6cm・幅1cm・厚0.85cm, 先端尖鋭, 刃部欠失。	
14	櫛 ?	15N (6)・褐色砂	全長7.8cm・厚0.6cm, 先端やや尖鋭。	
15	板状鉄製品	19O (17)・暗褐色土	現存長6cm・幅1.5~2cm・厚0.3cm, 先端欠失, 刀又は劍の可能性有。	
16	棒状鉄製品	16Q (24)	現存長4.3cm・幅0.7~1cm・厚0.5cm, 先端欠失, 用途不明。	
17	錐	S I 7・黒色土	刀部現存長約14cm, 刀部最大幅4.8cm・厚0.5cm, 全形不明。	
18	板状鉄製品	S K 15	現存長3.2cm・幅2.1~2.4cm・厚0.5cm, 用途不明。	
19	板状鉄製品	15M (25)・黒色土	厚0.1~0.2cm, やや内凹, 同一個体片ながら接合せず。	

註：18・19については図版54Cのみ表示した。

54-19は何片かに割れているが、ゆるく内側する一枚の板と考えられ、全形・用途は不明である。

#### e. 石 製 品 (第90図 図版54)

砥石 (1・2) 1はS K 14の4層下部から出土したもので、表裏側面いずれにも研磨面を有し、特に表裏面は大きく内彎している。両側面には1~2本の断面「U」字形の浅い擦溝が走る。凝灰岩製で、長さ16.8cm・幅3.7cm。2はS I 4の覆土上面の黒色土から出土したもので、1と同様に表裏側面に研磨面を有する。凝灰岩製で折損しており、現存長5.2cm・幅3.6cm。

紡錘車 (3) S X 21から出土したので、下部径4.8cmである。丁寧に磨かれており、側面及び底面には細い条線が放射状に施されている。中央には径0.8cmの孔が穿たれている。一部欠損しているものの、全体には優美な製品である。滑石製で、重量は71gである。

勾玉 (4) S I 3の上部黒色土中から出土したので、仕上げは割合滑らかであるが、風化が著しい。蛇紋岩製で乳白色を呈し、長さ3.06cm・厚さ0.96cmである。

その他 (5) 16P (16) グリッドの暗褐色土中から出土したので、現存長4.4cm・径0.6cmの用途不明の棒状石製品である。先端部は面取りがなされ、丸くなっている。滑石製である。

#### f. 土 製 品 (第91図 図版54)

紡錘車 (6) 15N (20) グリッドから出土したので、下部径4.7cm、中央に径0.7cmの孔が開かれている。胎土には白色砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。磨滅が著しい。重量は68g。

羽口 (8) 14M (6) グリッドの黒色土中から出土した羽口の端部である。現存長10.8cm・推定径7.6cmで、孔の直径は2.2cmである。

その他 (7・9・10) 7は16P (10) グリッドから出土した四角柱状の用途不明土製品である。長さ6.5cm・幅2.5cm。9は14L (3) グリッドから出土した手捏ね土器(ミニチュア)の底

部である。胎土は緻密で白色細砂粒を混入し、灰白色を呈する。10は16P(16)グリッドから出土したもので、小型の高杯形土器の脚基部と思われる。胎土には黒色細砂粒を多量に含み、赤褐色を呈する。

#### 4. 中世

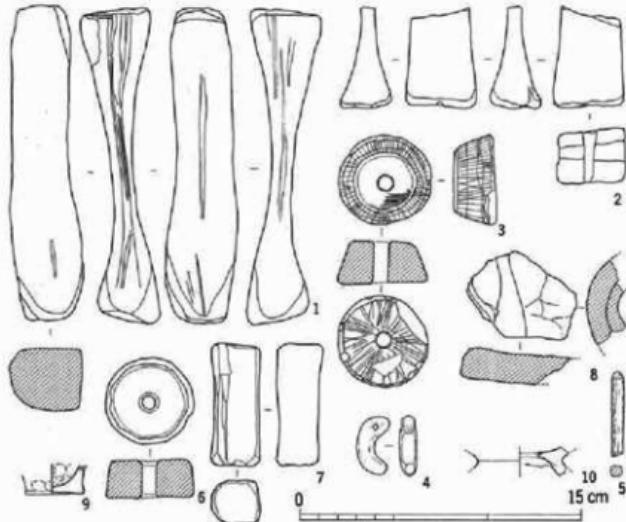
##### a. 珠洲系土器 (第91図 図版51)

器種は甕・鉢体である。1～5はいずれも甕片で、1が口縁部のほかはすべて胴部小片である。外面の叩きは平行叩き(1・5)と綾杉状叩き(2～4)がみられ、内面はいずれもよく撫でられているが、1・2には珠洲焼独特の丸いくぼみがみられる。6は鉢底の底部片である。灰褐色を呈し、胎土は粗く焼成もよくなない。摺り目は10本単位である。

##### b. 陶質土器 (第92図 図版51)

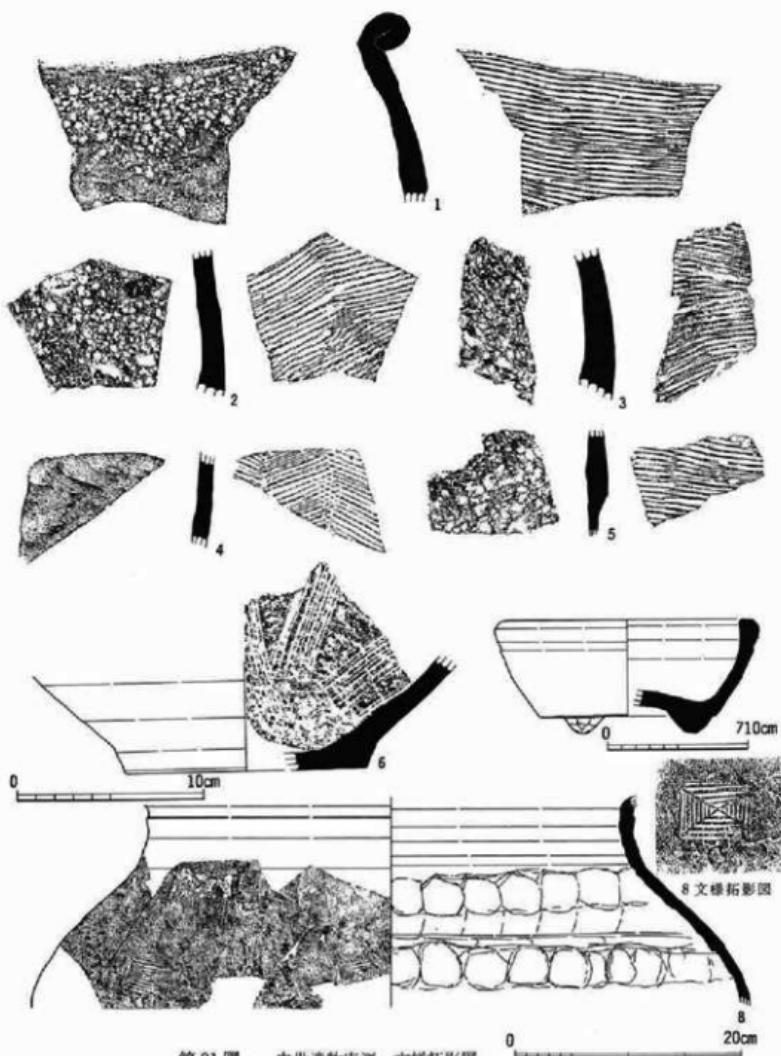
7は土師質の鉢で、底部には3ヶ所に脚がつけられている。胎土は緻密で白色細砂粒及び小石を多量に含み、色調は赤茶褐色を呈する。ロクロ撫でによって整形されており、底部窓切り後に脚を貼り付けている。口縁部端は撫でによって平坦面を作り出しており、外面口縁部下には浅い沈線が1本巡る。口径は推定18.7cmを測る。

8は口径43cm(推定)を測る大型の甕である。外面暗灰色、内面黒灰色を呈し、胎土には径0.1～3mmの白色砂及び小石を多量に含む。内・断面には輪積み痕を明瞭に残し、内面は指頭による粗い撫でが施されている。胴部最大径の部分には、約5cmの間隔で7つの方形を重ね、対



第90図 石製品・土製品実測図

角線を「×」で結んだ文様が連続して刻印されている。在地窯の製品と思われる。



第 91 図 中世遺物実測・文様拓影図

## 第VII章 考察—金屋遺跡出土土器の年代的 位置づけについて—

### はじめに

魚沼地方における古墳・奈良・平安時代の遺跡は、8世紀後半から9世紀後半の時期が想定されている六日町長表遺跡（中村ほか 1975）や、古墳時代中期から平安時代までの遺物が出土した十日町市馬場上遺跡（中川ほか 1975・1976）の調査例が知られるのみである。長表遺跡は溝状遺構から遺物が出土したのみで、付近に当該期の遺跡が存在したことをうかがわせるが、その実体については不明である。また、馬場上遺跡は古墳時代中期から奈良時代を経て平安時代まで営まれた集落跡であり、住居跡など50数軒が検出されたが、遺物の詳細については調査中である。このように魚沼地方における古代の土器研究は諸についたばかりである。

しかし近年、新潟県内においても西山町高塙B遺跡（金子ほか 1983）・内越遺跡（横山ほか 1983）などの調査により、弥生時代末から古墳時代前期の土器の編年案が提示され、また奈良時代以降においても新井市栗原遺跡（坂井 1983、高橋 1984）・上越市今池遺跡（戸根・坂井ほか 1984）では8世紀から10世紀までの土器の編年が試みられている。

これらの研究の現状をふまえて、金屋遺跡の年代について考察を述べることとする。なお記述は古墳時代中期と平安時代に分けて行う。

### 1. 古墳時代中期

金屋遺跡下層（暗褐色土層）から出土した土器群である。いずれも土師器で器種は小型丸底壺・蓋・高杯・器台・鉢・壺・小型甕・甕である。

#### a. 土器の分類（付図1、第4表 古墳時代中期土器器種説明表）

技法は、いずれも粘土紐輪積み成形で、器面調整は横撫で、刷毛目・篦磨きが主体である。一部篦磨きか削りが不明なものもある。以下土器の分類は器形と調整技法から行う。

小型丸底壺（1～6） 口縁部と体部の割合、法量によりA・B・Cの三種に大別される。A（2）・B（1）は精良な胎土で丁寧な篦磨きを施す土器である。C（3～5）はやや大型化し、篦磨きなども粗いものである。3・4は赤色塗彩を施す。

蓋（6） 鉢とも考えられるが、口縁部外面に媒が付着し、煮こぼれと考えられ、蓋とした。

高杯（23～25） 杯部の形態でA・B・C・Dの四種に分けた。他にラッパ状に開く脚部がある。外面刷毛目のち篦磨きを施す。基部は棒状を呈するものが主である。量的には少ない。D（26）は台付鉢とも考えられる。

器台（28） 脚基部片のみ1個体がある。杯・壺部は欠損しており、全形は不明である。

鉢（11～15） 形態、法量により六種に分類した。平底から内凹して開く体部となるA（7），有段口縁を呈するB（8・11・13），丸底で屈曲して開く口縁部を有する身の浅いC（10），内凹する体部と単純口縁部を有するD（9），甕に類似し、頸部がすぼまるE（12・14・15）。半球形の

体部から口縁部はつまれ外反するF(27)である。A・C・D・Fは内外面とも笠磨き調整、Bは内外面とも刷毛目調整である。特にCは丁寧な笠磨きを施す。

壺(17~22) 口縁部の形態により四種に分類される。長く外反してのびる口縁のA(17~21)、口縁端部が断面方形を呈するB(18~22)、有段口縁のC(19)と肥厚し、短く外反する口縁のD(20)である。A・Bはそれぞれ法量により小型なA<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>と大型なA<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>に細分される。

小型壺(31~36) 法量、口縁部の形態、体部の形状から五種に大別された。A~Dまではくの字に屈曲する口縁部でざん胴のA(31)・B(32・33)と長胴のC(34)・D(35)である。A・Bとは法量により分類した。Bは口縁が撫でられ薄くなるものB<sub>1</sub>(33)と肥厚するものB<sub>2</sub>(32)の2種に細分される。Cは体部下半に最大径がある。口縁端部が角ばり、長胴化したE(36)もある。

甕(37~44) 口縁部と体部の形態により三種に大別される。いずれも「く」の字に屈曲する口縁部である。A(37~39・41・42・44)はくの字に屈曲する口縁部と球形の体部である。口縁端部が撫でられ厚さを減ずるA<sub>1</sub>と肥厚し厚ぼったいつくりのA<sub>2</sub>、強く屈曲し、口縁端部の厚さの薄い大型なA<sub>3</sub>に細分される。B(40)は平底から倒卵形の体部となり、口縁部の屈曲は弱く、端部は外面に稜を有する。C(43)は短くつまみ上げられた口縁部となる。

調整はA<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>、Cは外面刷毛目のち笠撫でを施し刷毛目を消す。A<sub>3</sub>は刷毛目のままである。

以上、器形などにより器種を分類してきたが、色調・胎土によっても分類される。

色調は、二次焼成を受けたり、煤・黒斑などにより変色しているものもあるが、灰褐色・黄褐色・暗褐色などの三種に大別される。

灰褐色を呈する群は、小型丸底壺C、鉢B・D・F、壺B<sub>2</sub>・C・D、高杯D、器台、小型甕E、甕Bである。

黄褐色を呈する群は、小型丸底壺A・B、蓋、鉢A・C、壺A・B<sub>1</sub>、高杯A・B・C、脚部、甕A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>である。

暗褐色を呈する群は鉢B・E、小型甕A・B・C・D、甕A<sub>2</sub>、Cである。

胎土は色調にそれぞれ呼応し、灰褐色のものは白色砂粒を含み、黄褐色のものは1mmの大砂粒を含む。暗褐色のものは径2mm~4mmの大砂粒を多く含む傾向がみられる。

### b. 土器の年代

下層出土土器群の下限については、娘子山古墳群から出土した土器やC地区西側側道において出土した須恵器有蓋高杯の蓋が一つの決め手となろう。この蓋は田辺編年のTK47型式(田辺ほか 1966)・中村編年のI型式5段階(中村ほか 1976)に比定されるもので、5世紀末から6世紀初頭の所産と考えられる。娘子山古墳出土の蓋もTK208・TK213の時期に比定され、5世紀末葉の時期が考えられる(金子ほか 1977)。また下層からはコンテナで約10箱、個体数で約200個の土器が出土しているが、いずれも土師器のみで須恵器は共伴しない。須恵器が古墳などの副葬品であり、この時期一般の集落において、須恵器が出土することが一般的でない時期であることを考慮しても、須恵器を伴わない時期ではなかったかと考えられる。以上からも下限

については、蟻子山古墳出土の甕や高杯の蓋の年代から5世紀末葉から6世紀初頭の時期と設定したい（註1）。

上巻については、北陸地方において古墳時代前期古府タルビ式に併行すると考えられている、西山町高塩B遺跡（金子ほか 1983）や豊浦町曾根遺跡（家田ほか 1981）例などにより小型丸底壺器台の出土が認められるが、本遺跡では出土していないS字状口縁の甕などが併出しており、本遺跡例よりは古式の様相を示している。

新潟県内において、金屋遺跡と同時期もしくは相前後する時期の遺跡としては中之島杉村之森遺跡（通称根岸）の採集資料（戸根ほか 1976）、青海町大角地遺跡第7号住居跡出土土器（寺村ほか1979）、糸魚川市笛吹田遺跡（寺村ほか 1979、大森 1983）、十日町市馬場上遺跡（中川ほか 1973・1974）、糸魚川市田伏遺跡出土土器（田伏I式土器）（関ほか 1972）があげられる。

これらのうちで、田伏遺跡例は6世紀初頭に成立すると考えられる古墳時代後期の初現の土器と考えられている。また大角地7号住居跡例は、甕はすべて口縁端部が丸くおさまっており、高杯脚基部が筒状を呈し、裾部で大きく開く形態をもち、また5世紀後半に比定される須恵器杯身を共伴しており、ある程度年代が確定される資料と思われる。馬場上遺跡例では詳細は不明であるが、須恵器蓋の年代は金屋遺跡とほぼ同時期のものであろう。杉之森遺跡例について、鉢BやF、器台、甕Bの口縁部に類似性が認められる。また笛吹田遺跡例においては工作用ピット出土の甕と金屋遺跡出土甕B（44）が口縁部の作りに共通性が認められる。

このように金屋遺跡の前後の時に比定される、高塩B遺跡例、杉之森遺跡例、大角地遺跡例を検討すると以下のとおりとなる。

1. 高塩B遺跡は有段口縁の壺、S字状口縁の東海系の甕、小型丸底壺、小型器台、鉢がセットをなしており、甕などにも布留古式と併行する時期のものであり、金屋遺跡より古いものと考えられる。

2. 杉之森・笛吹田遺跡例は、甕の形態、鉢、器台など金屋遺跡に類似するものが多く認められる。しかし反面、鉄カブト形鉢の存在や丁寧な作りの小型丸底壺A・Bなど、杉之森・笛吹田遺跡例よりも古い様相を呈するものが、金屋遺跡例にあることが指摘される。

3. 大角地7号住居跡、馬場上遺跡例などは、甕の形態差において、口縁端部を丸くおさめることが一般となり、小型丸底壺は調整も粗いものとなり金屋遺跡よりも新しい様相を呈している。

以上三点から、金屋遺跡下層出土の土器は高塩B遺跡よりは新しく、大角地7号住居跡例よりも古いもので、杉之森例や笛吹田工作用ピット出土土器よりやや古式か併行する時期の所産と考えられる。

北陸地方においては、富山県南太閤山I遺跡（上野ほか 1983）や、石川県中村畠遺跡（橋本1982）のB地区大溝下層出土土器などに類例があり、これらの土器は5世紀前半に比定される高

註1 TK 47型式の須恵器について、埼玉県福荷山古墳例などの研究から検討されている。関川尚功は奈良県下の須恵器の検討からこの型式を5世紀末葉から6世紀初頭に推定している。（関川 1984）

島遺跡（橋本 1979）の後に位置づけられ、須恵器が共伴する5世紀末葉以前の年代が考えられている。これは吉岡編年（吉岡 1967）の第IV様式に併行すると思われる。

畿内においては、奈良県登志院遺跡（藤井ほか 1980）などの成果により、金屋遺跡の高杯や甕などは布留式III段階において類例が認められることや、大阪府船橋遺跡0-I-II期（原口ほか 1961）などと併行関係にあり、5世紀中頃から後半の年代と考えられる。

関東地方においては、いわゆる和泉式土器のものに多く類例が認められる。しかし5世紀前半に比定される群馬県下郷遺跡（松本ほか 1980）の土器群の中に、本遺跡の小型丸底壺A・B、壺B1・2、鉢Fなどと類似するものがあり、金屋遺跡例の中に五領式土器の新しい時期ものに類例があるものも含まれている。しかし多くの甕や、高杯の棒状脚などの特徴も和泉式土器と併行すると考えられ、5世紀中頃を前後とする時期の所産と思われる。つまり土器は5世紀前半のものよりは、5世紀中頃から後半にかけてのものが主である。

以上、金屋遺跡下層出土土器を中心として土器の年代を考えてきたが、新潟県においても5世紀代（5世紀前半を上限とし、5世紀末を下限とする時期）におさまり、畿内、北陸地方、関東地方においてもほぼ同様の時期に併行すると考えられる。小型丸底壺A・Bや鉢Cなどはやや古いものであり、5世紀前半までさかのぼるものも認められるが、住居跡（S I 12）において一括出土しており、また須恵器を共伴していないことから、住居跡の年代は5世紀中頃から後半にかけての時期と考えられる。またその他の遺構も同様の時期と考えられることから、金屋遺跡下層出土の土器の年代は5世紀中頃を前後とする時期の所産と考えたい。

## 2. 平 安 時 代

金屋遺跡B地区上層から出土した土器群である。一部古墳時代の遺物と混然となって出土したものがある。遺構内からの出土数は全体の約20%であり、ほとんどは遺構外・遺物包含層中からの出土である。器種は須恵器、灰陶器・土師器（内黒土器も含む）である。

### a. 土 器 の 分 類（付図3・4、第6表 平安時代土器器種説明表）

須恵器 器種は蓋・杯・碗・平瓶・小型壺・長頸壺・短頸壺・甕・広口甕である。

杯と碗の区別は明確ではないが、口径：器高が2：1前後のものを碗とし、5：2もしくは3：1以上と口径が大きいものを杯とした。また広口甕は鍋とも考えられる。

蓋（1～4） 器高の低い平坦なもので、口縁端部は屈曲し、断面三角形を呈する。つまみの形状により細分した。中央の尖る宝珠様のつまみのA（1・2）、平偏な瓶宝珠様のつまみのB（3・4）、つまみ部が欠損して不明なCである。しかしCは他遺跡の例から、AかBに分けられよう。

杯（5～16） 高台を有するA（5～10）と無台のB（11～16）に大別される。それぞれ成形時の底部切り離しが範切りであるか、糸切りであるかでさらに細分した。つまり、高台杯の範切りのものをA<sub>1</sub>、高台杯の糸切りのものをA<sub>2</sub>、無台杯の範切りのものをB<sub>1</sub>と無台杯の糸切りのものをB<sub>2</sub>である。糸切りはいずれも回転糸切りであり、切り離し後の調整はされていない。高台はいずれも貼り付けである。

**椀 (17~19)** 杯と同様に高台のあるものA(17)と無いものB(18~19)に分け、底部調整により細分した。椀Aは底部調整は箇切りのみで糸切りはない。椀Bは箇切りではなく、糸切り無調のもののみである。椀Bについて内面にも撫でによるうず巻き状の痕跡を残すものがある。

**平瓶 (20)** 外反して短く開く口縁部である。口縁端部に突帯を施す。器壁は1cm前後と厚いため、台付壺の台部と考えられた。しかし、内面に自然釉が付着し、撫でが丁寧であることから平瓶の口縁部とした。体部は欠損していて不明である。

**小型壺 (23~24)** 体部最大径が10cm以下のものである。小片のもので全体がわかるものはないが、肩部の形態から2種に分けられる。丸味をおびたなで肩状のA(23)と、肩部に稜をなし、平底に高台のつくB(24)である。Aの頸部は細くしまる。口縁部と底部は欠損していて不明。

**長頸壺 (22~25~27)** 体部の形態と法量から三種に大別される。ややなで肩の体部から細くすぼまり外反する口縁部となり、体部最大径15cm前後のものA(22~25)、肩部に稜を有し、最大径約15cmの体部がそろばん玉に近い形のB(26)、体部最大径が20cm前後でなで肩状の体部から、長く外反する口縁部となり、平底の底部には安定した高台がつくC(27)である。A・Bは数量的に少なく、多くはCの底部である。

**短頸壺 (21)** 球形に近い体部から、短く外反する口縁部となる。口縁端部は肥厚し稜を有する。体部下半は欠損していて不明である。

**甕 (28~30~32)** 外反して開く口縁部である。全体の形を推察されるものではなく、口縁部の形態は端部が肥厚し、稜をなすものである。口径により三種に分けた。口径20cm前後のものA<sub>1</sub>(28)、口径25cm前後のものA<sub>2</sub>(29~30)、口径30cm以上のものA<sub>3</sub>(32)である。

**広口甕 (31)** 短く外反する口縁部で口縁端部は折り返され垂下する。体部(肩)は張らず、最大径は口径にある。口径は20~25cmほどである。

**土師器** 器種は杯・椀・皿・甕・広口甕・直口壺・台付短頸壺・鍋・羽釜・瓶がある。

量的には杯・椀・甕が多い。杯と椀との区別はむづかしいが、口径：器高の比率が3:1をこえて口径が大きいものを杯とし、2:1前後と器高が深いものを椀とした。また直口壺は須恵器に類似したものであるが、灰褐色を呈し、焼成が軟質であったため土師器とした。

**杯 (21~33~39, 41~49~51~74)** 形態、調整などで大別し、法量によって細分した。有台杯A(41~42)、無台杯B(34~36~39)、無台杯で内面を丁寧に笠磨きするものC(33~35)、内黒土器D(49~51~74)とした。杯Dは細分の基準についてほかの杯とは異なる。D<sub>1</sub>は無台杯、D<sub>2</sub>は高台杯で口径10cm前後のもの、D<sub>3</sub>は高台杯で口径12~15cmのものとした。

**椀 (43~46・52・53)** いざれも無台のものである。内黒土器B(46・52)・C(53)とそうでないものA(43~45)に大別される。Aは底部の形・調整で細分される。つまり、回転糸切り調整の平底A<sub>1</sub>と箇削り調整丸底のA<sub>2</sub>である。Bは口径12~14cmのB<sub>1</sub>と、口径14cm以上のB<sub>2</sub>に細分される。Cは内側する体部から屈曲して外反する口縁部となり、口縁端部は丸く撫でられる。

**皿 (47~48)** 内黒土器で高台が付く。器高が口径の1/4以下である。

**甕 (54~70)** 口縁部の形態によりA~Hの八種に大別される。それぞれ法量により細分が可

能である。底部まであるものは、G, C<sub>1</sub>, E<sub>1</sub>と少なく、多くは口縁部のみである。

A (54・55・61・62) は長胴の体部からわずかにくびれる頭部となり、口縁部はほぼ直立する。調整は口縁部ロクロ撫で、体部外面は笠削りである。口径により A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>に分けられる。B (65) は短く「く」の字に屈曲する口縁部と長胴の体部からなる。体部外面は継位の笠削り調整である。口縁は肥厚する。C (56・58・63・64・68・69) は「く」の字に屈曲し、Bよりも長くのびる口縁部である。口径・形態・調整により C<sub>1</sub>～C<sub>4</sub>に細分される。C<sub>1</sub> (56・58)・C<sub>4</sub> (64) はロクロ撫で、C<sub>2</sub> (63) は刷毛目、C<sub>3</sub> (68・69) は刷毛目のち撫でが施される。C<sub>4</sub>は器壁が薄く丁寧な作りである。D (59・60) は口縁部が「コ」の字に屈曲するもので、口径により D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>に細分される。体部外面は継位笠削りにより器壁は薄く削られる。茶褐色を呈し、細砂を多く含む胎土である。D<sub>1</sub>は台付甕とも考えられる。E (57・73) は平底から器高の割合には体径の大きい体部となり、口縁部は短く外反する。法量により E<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>に細分される。E<sub>1</sub> (57) は刷毛目の中撫で調整。E<sub>2</sub> (73) は叩きを撫でて消している。F (67) はすぼまる頭部から大きく外反する口縁部となる。口縁端部は角ばる。G (66) は丸底から長胴の体部となり「く」の字に屈曲する口縁部となる。口縁端部はつままれる。体部外面には叩き痕がこのこ。外面は継位笠削りで叩き目を消している。内面は同心円文、底部は内外面とも刷毛目により叩き痕を消している。H (70) は体部と口縁部の区別がなく、円筒形を呈するものである。

広口甕 (71) 偏球形の体部から外反する口縁部となる。内面には刷毛目を施す。須恵器広口甕に類似するものである。

直口壺 (72) 球形の体部から短く直立する口縁部となる。内面刷毛目・外面撫でを施す。須恵器直口壺に類似するものである。

台付短頸壺 (77) 平底から肩の張った体部となり、短くのびる口縁部となる。台は外方にぶんぱった形態をとる。内外面笠撫でを施す。内面は黒色処理される。

鍋 (78・79) 口縁部の形態・調整により A・B に分けられる。ロクロ撫でによる体部から外反する口縁部となり、端部は撫でてつまみ上げられる A (78) と叩き成形による体部から直立する口縁部となる B (79) である。内面のあて板痕は丁寧に撫でて消される。

羽釜 (76・77・80) つばの長さ・口縁部の形態により A～C に分類される。A (80) は直立する口縁部と貧弱で形式的つばである。B (75) は内嚢する口縁部で、体部外面は笠削りされる。つばは断面三角形を呈し、2 cmほどの長さである。C (76) は強く内傾する口縁部で、つばは肥厚したものがつけられる。

瓢 (81・82) 平底の底部に孔をあけた A (81) と「く」の字に屈曲する口縁部の甕を倒立させた形のものに把手をつけた B (82) に分けられる。A は全形などは不明である。

以上器形により分類してきたが、胎土、色調によりいくつかに分類される。

須恵器の色調はいずれも灰色を呈するものが多く、一部焼成不良で灰褐色のものがある。

胎土は①緻密で、わずかに細砂（直径 1 mm ほどのもの）を含むもの。②緻密であるが長石粒（白色）、黒色砂粒（直径 1 mm～3 mm）を含むもの、③砂粒（直径 2～4 mm のもの）を多く含む

ものに分けられる。

①は蓋A・B・C、杯A<sub>1</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>、椀A、長頸壺A・B、小型壺A・B、甕A<sub>1</sub>～A<sub>3</sub>などに多く認められる。

②は杯A<sub>1</sub>、長頸壺C、平瓶などに使用される。

③は椀B、広口甕に使用される。

土器類の胎土は①灰褐色・黄褐色を呈し、緻密で細砂をわずかに含む良質な胎土。②灰褐色もしくは暗褐色を呈し砂粒（2mm～4mm大の砂）をわずかに含む胎土。③暗褐色・灰褐色を呈し、砂粒を多く含む胎土。④茶褐色を呈し、砂粒（3mm大）をわずかに含むものに大別される。各胎土の器種はほぼ以下の通りである。

①は杯C<sub>1</sub>～C<sub>3</sub>・D<sub>1</sub>～D<sub>3</sub>、椀A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>、甕A<sub>1</sub>～A<sub>4</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>4</sub>・F・Hなどである。

②は杯A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>～B<sub>2</sub>、甕C<sub>1</sub>・B・D<sub>1</sub>・G、鍋A、羽釜Bなどである。

③は甕B、広口甕、直口壺、椀A、羽釜A・C、台付短頸壺などである。

④は甕D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>、C<sub>3</sub>、E<sub>1</sub>・E<sub>2</sub>、瓶B、鍋Bである。

特に④については甕D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>にみられるように箇削りなどにより器壁を薄くしたものに多く共通の胎土のものがある。また内黒土器と内面箇削りした杯Cには胎土において共通した特徴①が認められた。

#### b. 各土器の共伴関係について

平安時代の土器の共伴関係はSI 1やSI 6、SK 14などでは古墳時代後期の遺物と混然となっており、共伴関係抽出の資料とはなり得ないが、他の住居跡のいくつかにおいては、良好なものがある。たとえばSI 2・SI 4・SI 5・SI 7～SI 9、SX 20、SK 21・SK 27・SK 28である。特にSX 20では灰釉陶器の瓶と皿に伴なって土器類が多く出土している。

これらの住居跡や土壤のなかで須恵器と土器類を伴出した遺構はSI 2、SI 4、SI 5、SX 20で、他のものは土器類のみの出土である。

また土器の出土した遺構（住居跡）については主軸の方向で三種に分類された。

A類は主軸が南北から10度西偏するものでSI 2・SI 10の2棟、また主軸が東西棟となるSI 8・SI 9がある。

B類は西へ20度から30度偏よるもの。SI 1・SI 3・SI 4・SI 5・SB 1・SB 2がある。

C類は西へ30度から60度ほど偏るもののSI 6・SI 7・SB 3・SB 6がある。

#### c. 各期の設定

金屋遺跡では遺構の重複が少なく、わずかにSB 3とSB 4、SK 5とSK 6、SD 5とSI 5があるのみで、出土土器の重複関係による相対年代の決定はほとんどできなかった。また遺構内出土土器は全体の土器の20%弱で、遺物の相対年代の決定は型式的追求のみで行った。

以上のように各期の設定については、遺構出土土器を可能な限り図示し、型態・調整などにより分類し、土器の型式により相対年代を決める方法を採用した。

各期の設定については、SI 1やSI 6のように古墳時代の遺物が含まれるものは縦年の対象

からはずしたが、また同一遺構内出土遺物ながら、いくつか時間差のあるものも含まれたため、各期を細かく分類せず、ある程度の幅をもたらせた。

また近年北陸地方においては横江庄遺跡(吉岡ほか 1984)、群馬県においては清里・陣場遺(中沢ほか 1981)・有馬条里遺跡(錦貫ほか 1984)などにおいて当該期の研究がなされており、新潟県においても今池・下新町・子安遺跡(戸根ほか 1984)などの調査で編年がなされており、それらの成果を利用した。

#### I期

須恵器と土師器を共伴するものでSI 2・SI 9出土土器の一部が当刻期に含まれる。

須恵器では、蓋A・B、杯A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の一部。椀A<sub>1</sub>、小型壺A・B、長頸壺A・B、広口壺、甕などである。土師器は、杯B<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>・D<sub>1</sub>の一部、椀A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>、甕A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>の一部、C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>・D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>・Gの一部、瓶Bなどである。

須恵器の杯類は底部範切りのものと回転糸切りのものが存在する。特に範切りのものがやや多い。比較的丁寧な撫でを施すものが多い。長頸壺、小型壺などは丁寧な作りである。土師器の杯類は底部回転糸切りのものが多く、わずかに範切り、範削りの椀A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>が含まれる。作りは丁寧で、内面を範磨きをする杯C<sub>2</sub>が多くみられる。甕類には関東地方に類例のある薄手の作りの「コ」の字形口縁のDや、「く」の字に屈曲する口縁部のC<sub>3</sub>などがある。また叩き土師器のG類も注目される。直口壺は須恵器の器形を模したものと考えられる。

#### II期

SI 4、SX20出土の土器を中心とするものである。関東地方や長野地方にみられる羽釜が出現し、灰釉陶器が共伴する時期と考えられる。

須恵器は無台の椀と器高の低い皿状の杯B・A<sub>2</sub>の一部が少数あるのみで、供膳形態の須恵器は減少化傾向にある。長頸壺、甕類は引き続き使われる。土師器は、前述した羽釜が出現したほかは杯類はB<sub>2</sub>・B<sub>3</sub>・D<sub>1</sub>、椀B<sub>1</sub>、甕A<sub>2</sub>・A<sub>3</sub>・Bなどがある。一部杯B<sub>4</sub>など後出的なものもSI 4出土遺物の中に含まれるが、供膳形態はSX20などに多く出土する杯B<sub>1</sub>・B<sub>3</sub>・C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>が主体である。また杯B<sub>2</sub>に灯明皿として使用されたものも出現する。灰釉陶器はSX20から東濃産の光ヶ丘1式のものが共伴する。

#### III期

須恵器の供膳形態のものはほとんどなくなり、貯蔵形態の甕のみとなる時期で、SI 7・SI 8・SK28出土土器を主とする土器群である。

土師器が主体となり、杯A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>4</sub>・D<sub>1</sub>、皿、羽釜を構成器種とする。

杯類はII期C<sub>2</sub>・C<sub>3</sub>など内面丁寧な範磨きを施すものから、B<sub>4</sub>のようにロクロ撫でのみのものとなり、またB<sub>2</sub>などが小型化したB<sub>1</sub>が併出するようになる。B<sub>3</sub>と同様の杯に高台を貼り付けたA<sub>3</sub>なども出現する。内黒土器においてはD<sub>1</sub>のように口径12cm前後の高台杯が多く出現し、内黒土器の皿も当期の所産と考えられる。甕類については遺構出土のものが少なく明確ではないが、E<sub>1</sub>、E<sub>2</sub>など体部がずん胴で口縁部が短く屈曲するものが認められる。

#### d. 各期の年代

これまで、金屋遺跡の平安時代土器についてのべてきたが、新潟県における他遺跡の類例や北陸地方の編年・群馬県・長野県などを参考にして年代観を想定したい(註2)。

I期 吉岡編年の第II段階IV期に併行し、戸水C遺跡(26号溝)出土遺物などに類例が認められる。また甕Bなどは富山県流通団地No21遺跡(上野ほか 1983)に類例が認められる(註3)。また「コ」の字口縁の甕C類については群馬県清里・陣馬遺跡の第2期土器群に類例がある。また新潟県においても今池遺跡などから9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。

以上から、やや古く9世紀前半と考えられるものも含まれるが、I期土器群は9世紀後半を中心とする平安時代前半の土器群と考えられる。これは遺構のA類にあてはまるであろう。

II期 S X20で共伴した灰釉陶器が一つの年代的資料と思われる。これは東濃産の光ヶ丘I式のものと考えられており、一応本期については10世紀前半を上限とする時期と考えられる。また他の灰釉陶器についてはやや後出するものであり、加えて羽釜が出現する時期であることから考えて、10世紀中葉から後半を中心とする10世紀代の所産としたい。またこのことは群馬県清里・陣場遺跡の第3期、第4期土器と共通なものが多く、吉岡編年のV期に類例があることからも妥当と考えられる。本遺跡の主体となる時期で遺構のB類がこの時期であろう。

III期 SI 7, SI 8の出土土器にみられる土器で、土師器高台杯が出現することと杯B<sub>1</sub>やB<sub>4</sub>にみられる様相から吉岡編年の第VI期、加賀三浦遺跡上層土器に多く類例が認められるものである。また甕E<sub>1</sub>や羽釜のつばが退化したものなどは清里・陣場遺跡の第6期などに類例が認められ、どちらも11世紀後半を下限とする年代と考えられる。上限については明確ではないが、羽釜の形態において、清里・陣場遺跡の第5期のものに類似があり、これら羽釜は群馬県では須恵器として考えられてやや相違するが11世紀前半と考えられるため、本期を11世紀中ごろを中心とする平安時代後半の所産と推定される。

#### 3. 羽釜について

金屋遺跡からは55個体の羽釜が出土した。口縁部で確認したものが多く、全体の判明するものは少ない。いざれも酸化炎焼成のもので、粘土紐巻き上げ後、回転台にて器面調整し、つばは2~3cmと短いものを貼り付ける。体部外面は縦位窓削りを施すものである。

羽釜の分布は関西を中心に発達し、関東地方においては、長野県・山梨県と群馬県・埼玉県の北部に多く分布することが認められている。特に群馬県・埼玉県北部には集中的な分布状況を呈している。これは、古代において、東山道を伝播して関西から関東地方に流入した結果と考えられている(註4)。

羽釜の形態は、関西のものが可搬式の置き竈とセットとして用いられたものであり、つばは

註2 金屋遺跡では木簡などの絶対年代を推定し得る資料はなく、また重複関係など少ないため年代の決定は、他の遺跡例から推定した。なお灰釉陶器の年代については齊藤の見解に従った。

註3 流田No21遺跡は吉岡編年の第II段階II期にあり、年代的には金屋遺跡のものより古いものである。

註4 荒川正男ほか 1981「大久保山I」



第92図 羽釜出土遺跡分布図  
藍川正男ほか1981「大久保山I」から作成

長くのびるものであるのに対し、関東地方のものは置き竈とセットになるものではなく、つばも短いものが主体であり、つばは羽釜の形のみを模倣したものとなっており、機能的には、長胴の竈と同様であったと考えられる。このことは、金屋遺跡においてもS14出土の羽釜が竈の中央にまとまって検出されたことから類推される。

羽釜の出現した時期は明確ではないが、清里・陣馬遺跡例では10世紀前半に還元炎焼成のものがあり、10世紀後半に酸化炎焼成のものにかわって11世紀までつづいている。長野県においては詳しい年代は不明であるが、更埴市生仁遺跡12号住(筆者ほか 1983)などにおいて灰釉陶器との共伴例から10世紀後半ころと推定される。金屋遺跡例においては酸化炎焼成のものであり、伴出する土器から10世紀後半以後の所産と考えられ、清里・陣馬遺跡の古いものよりはやや新しいものである。

年代的に金屋遺跡例は新しいものであるが、今

後魚沼地方において、羽釜が出土する可能性があり、古代の東山道を経由して、長野・山梨県から群馬・埼玉県へ伝播した羽釜の系統が、新潟県魚沼地方にも存在したことは、この魚沼地方が、古代信濃国と上野国と密接な関係にあったことがうかがわれ、今後当地方の文化交流をさぐる課題となろう。

#### 4. 小結

金屋遺跡の上層および下層出土の土器について述べてきたが、上層の土器群は平安時代前期～後期・下層の土器群は古墳時代中期（5世紀中ごろ）の時期に比定された。

古墳時代中期は遺跡数が少なく、年代を限定することは困難であった。また平安時代も、木簡などの決定的な年代資料が少なく、また遺構の重複も少なく各期の細分はさしつかえた。

また、魚沼地方における平安時代の集落の発掘調査としては十日町市馬場上遺跡に次いで2例目であり、平安時代中期から後期に依然として堅穴住を中心とした集落の存在したことは今後の当地方の古代史に大きな影響を与えるものと思われる。

## 第VII章 まとめ

昭和57・58年度2年にわたって実施した金屋遺跡の調査では、堅穴住居跡・掘立柱建物・土壙・溝・ピットなどの遺構と、コンテナで80箱を数える多くの遺物が検出され、大きな成果を収めた。遺物や遺構の検出状況から、本遺跡は大別して五時期にわたり営まれたことが知られる。すなわち第1期縄文時代草創期から後期にわたる時期・第2期古墳時代中期・第3期古墳時代後期・第4期平安時代・第5期中世である。これら五期について調査の結果を述べる。

第1期 縄文時代は、土器・石器がC地区側道から多く出土した。土器は細片となっており、摩耗を受けているものが多い。施文などの特徴から、早期から後期までの所産と考えられる。石器は、草創期から早期の所産と考えられる打製石斧がある。出土地区的地形は、魚野川の段丘である蟻子山の段丘崖の下に舌状にのびる低位段丘面の縁辺に位置し、北東にゆるく傾斜する斜面に遺物（特に石器は同一母岩らしきものが多い）が集中して出土した。これまで蟻子山A～E遺跡は縄文時代中期～後期と考えられていた（池田 1973）が、以上のことから低位段丘上に縄文時代草創期の遺跡の存在が考えられる。

第2期 古墳時代中期の遺構・遺物は、B地区の中央平安時代の遺構が検出された面から約1m下において検出された。S I 12の検出状況などから遺構が完全に埋没する前の凹地状を呈している段階において、黄褐色砂質土が堆積したと判断された。この黄褐色砂質土には、人頭大の段丘疊も含まれ、最下層には黄褐色粘質土も約5cm堆積する洪水堆積土である。遺構は14Mグリッドに集中している。なお北東側は旧河道に伴う洪水により浸食されていた。南西部は西に急な斜面となっていた。

遺構は住居跡2軒(SI12・SI13)と、凹地状遺構1基(S X14)、性格不明遺構5基(S X15～S X19)が検出された。住居跡は地山が砂質土であるため、壁が崩れやすかったことも原因であるが、いずれも隅丸不整形である。柱穴は整然とは並ばないがSI12において柱根も検出された。炉跡はSI12では明確ではないが、SI13で浅い掘り形のものが検出された。性格不明遺構は、床面らしき硬化面があるものの掘り込みも浅く、住居跡とは相違している。S X18において、小型壺と壺といった特定の器種の土器が多く検出され、遺構の性格の特殊性がうかがえる。

遺物は良好な遺存状態を呈しており、5世紀中葉を中心とした時期の所産と考えられる。土器によっては5世紀前半から後半までの時期差が認められた。県内において当該期の調査された遺跡は高塩B遺跡（金子ほか 1983）、杉ヶ森遺跡（戸根ほか 1977）、大角地遺跡（寺村ほか 1979）、馬場上遺跡（中川ほか 1973）などがあげられるが、非常に少ないものである。土器の様相から北陸地方や関東地方の影響をうけた土器である。

第3期 古墳時代後期の遺構はSI 3の下部土壤(S K33)がある。遺物は、S K33から碗と壺の一括土器が出土した。ほかにSI 1・SI 6・S K14などにおいて平安時代の土器と混然となって出土した。土器の胎土は緻密で砂の混入は少なく、土師器の色調は茶褐色を呈している。器

種は椀、高杯、甕、瓶である。椀は粗い範囲で多用する。土器のほかに S I 3 からは劍や、勾玉も出土している。このことは近接する蟻子山古墳群が 6 世紀からの構築と考えられており（註）、遺物の年代観はほぼ同時期の所産と考えられ、古墳群と金屋遺跡の関係が密であったことがうかがわれる。

第4期 平安時代の遣構、遺物が本遺跡でもっとも主体となるものである。年代的には 9 世紀後半から 11 世紀まで約 200 年間にわたると考えられる。南魚沼地方においては当該期の遺跡で調査されたものは六日町長表遺跡（中村ほか 1977）のみである。また魚沼丘陵をはさんだ西側では十日町市馬場上遺跡（中川ほか 1975・76）があげられる。

堅穴住居跡は、平面形は限丸不整形である。

主軸の傾きから三種に大別される。主軸がほぼ南北もしくは東西であるもの（S I 2・S I 8・S I 9）、20 度～30 度西偏するもの（S I 1・S I 3・S I 4・S I 5）、30 度～60 度西偏するもの（S I 6・S I 7）である。S I 10 は旧河道に切られているため平面形・主軸方向などは不明である。

柱穴は主柱穴が 4 本整然あるものは 1 例もない。柱穴が全くないもの（S I 1・S I 2・S I 6・S I 9）、住居跡の相対する 2 辺の中央に 2 個あるもの（S I 4・S I 7）。整然とは並ばないが、2～3 個あるもの（S I 3・S I 5・S I 8・S I 10）に分けられる。S I 4 は壁の外側に支柱穴と考えられるものが存在する。周溝はないものが多い。

埴はないものもあるが、あるものはすべて南壁に構築されていた。構築材は周辺で入手しやすい川原石を使用した（S I 4・S I 7・S I 9）や、土・砂のみで石材を使用しない（S I 2・S I 3・S I 5）などである。

床面は S I 5 で貼り床らしきものは認められたが、そのほかの住居跡は疊層が露出するものであった。

住居跡の配置をみると、旧河道に沿って営まれているが、S I 10 のように旧河道に一部切られたものもあることや、A 地区にも S X 21 など住居跡と考えられるものがあることから、旧河に切られた住居跡がかなりあったものと考えられる。

堀立柱建物は不整形の柱穴であり、規模は一定しない。南北棟 3 棟は大規模なものであり、東西棟 1 棟は比較的小規模である。配置には規則性はなく、性格は不明である。

造物は、土師器・須恵器・灰釉陶器がほとんどである。量的には 90% が土師器、10% が須恵器、1% 弱が灰釉陶器であった。このことは、平安時代中期から後期にかけての須恵器が減少するのに対し、土師器が多くなるという年代の変化とも呼応した現象であろう。土器の様相から時期は平安時代前半（9 世紀後半を中心とする時期）、平安時代中頃（10 世紀中頃を中心とする時期）、平安時代後半（11 世紀中頃を中心とする時期）の三期に分けられる。

註 猿子山古墳群の年代については中川成夫は 6 世紀前半からのものと考え（中川ほか 1973），その後金子拓男により 5 世紀後半に一部の古墳が構築された可能性が強いことが指摘した（金子ほか 1977）。ここでは古墳群全体の年代を 6 世紀代から 7 世紀にわたる後期古墳とした。

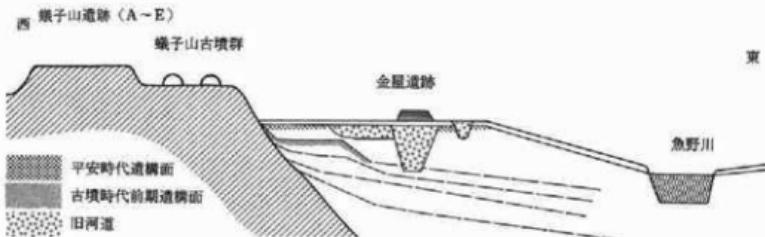
10世紀後半のころに羽釜を伴う住居跡(SI 4)があった。羽釜は新潟県内においては初例である。羽釜の分布は北関東を中心とし、東山道の信濃国(長野県)・上野国(群馬県)に分布が多く認められ、両国との接点にあたる本遺跡は土器の伝播において重要な地点であったことがうかがえる。

ほかに墨書き土器・刻書き土器・須恵器を再利用した転用窯などが若干出土した。墨書き土器については同じ六日町地内において長表遺跡がある。刻書き土器には、蓮花文を思わせる文様を施したもののが検出された。

第5期 中世の遺構は確認されなかった。遺物はわずかではあるが珠洲焼などがある。平安時代以後、中世にも集落が存続したものと考えられる。

以上、金屋遺跡は縄文時代から古墳時代・平安時代を経て中世に至る複合遺跡である。縄文時代遺物の出土は、縄文時代に段丘の上ののみでなく低位段丘縁辺部にも遺跡が存在したことが判明した。また古墳時代中期からは庄ノ又川の扇状地上、段丘麓に集落が営まれたが、数度の洪水にあり、厚さ1m以上の洪水堆積層におおわれ、その後、古墳時代後期にはほぼ現地形となり、平安時代まで集落が形成されていた。しかし、その後も山麓は洪水の影響をわずかではあるがうけながら中世まで続いたものと思われる。特に現在の集落が魚沼丘陵の東麓に立地していることは、山麓に湧く水を求めて発生した山麓集落と考えられ、同様に金屋遺跡も山麓に発生した集落であったと考えられる。

また、本遺跡に近接する蟻子山古墳群については、中川成夫は6世紀前半から7世紀にかけてのものと考察し(中川成夫 1973), 定説化していた。その後、金子拓男は石室構造や大型聴などの出土土器の検討から、後期古墳群の中で蟻子山5号墳などは5世紀後半に築造された可能性が強いことを指摘した(金子ほか 1977)。その後、古墳の発掘調査が不可能であり、古墳についての研究は進展していない。しかし、金屋遺跡において5世紀後半の住居跡が確認されたことは蟻子山古墳群および魚沼古墳群の発生期を解明する鍵を得たものと思われ、今後の研究に期待したい。

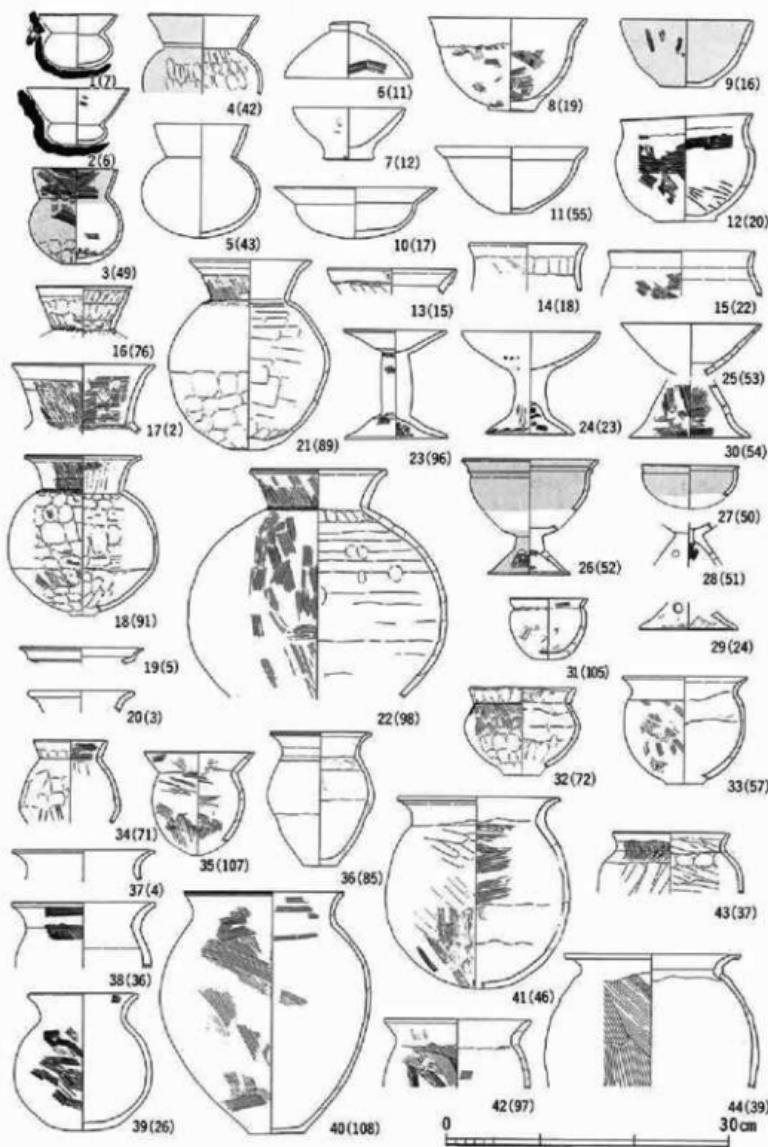


第93図 遺跡周辺の地形模式図

## 引用参考文献

- 愛知県陶磁資料館編 1983「研究記要 2」
- 安達厚三・木下正史 1974「飛島地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻 第2号
- 甘粕健・古川一明・古川知明・半沢正 1981「大沢遺跡—B'・B地区の調査概報一」卷町・湯東村教育委員会
- 荒川正男ほか 1981「大久保 I」早稲田大学出版会
- 池田亨 1977「六日町の歴史」
- 池野正明・関清ほか 1983「南太閤山 I 遺跡」「七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要」富山県教育委員会
- 磯崎正彦・水峯光一「新潟県の土器」1971「土師器集成」本編1、2 東京堂出版
- 磯崎正彦ほか 1979「諸立遺跡第2次発掘調査実績報告書」黒崎町教育委員会
- 井上唯雄・大江正行 1982「歌舞伎道路」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 上原甲子郎ほか 1967「越後諸立遺跡の古式土師器について」『考古学雑誌』第25巻3号
- 大森勉 1984「笛吹田遺跡範囲確認調査報告書」糸魚川市教育委員会
- 上野章 1978「道林寺 I 遺跡」「富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書」富山県教育委員会
- 大場磐雄ほか 1953「千種」新潟県教育委員会
- 大場磐雄ほか 1963「加賀片山津王造遺跡の研究」加賀市教育委員会
- 大場磐雄ほか 1969「はまやま」富山県教育委員会・朝日町教育委員会
- 金子拓男ほか 1977「南魚沼」新潟県教育委員会
- 金子拓男ほか 1981「狐崎遺跡」「三条市史資料編第1巻 考古編」三条市
- 川上元 1979「土師系器の展開と終焉」「中部高地の考古学」長野考古学会
- 間雅之・戸根与八郎 1972「田伏玉作遺跡」糸魚川市教育委員会
- 間雅之 1973「下金田遺跡」新潟県教育委員会
- 間雅之・本間信昭 1974「長峰遺跡・発掘調査報告書」吉川町教育委員会
- 間雅之・本間信昭 1984「長峰遺跡II発掘調査報告書」吉川町教育委員会
- 間雅之・本間信昭・本間嘉晴 1975「浜田遺跡」真野町教育委員会
- 間川尚功 1984「奈良県下出土の初期須恵器」「考古学論考 第10冊」奈良県立橿原考古学研究所
- 笠沢治ほか 1970「上水内郡誌」
- 笠沢浩ほか 1983「長野県史考古資料編全第1巻(2)」長野県
- 坂井秀弥 1983「栗原遺跡第6調査報告書」新潟県教育委員会
- 高橋勉 1984「栗原遺跡 第7次・第8次発掘調査報告書」新井市教育委員会
- 田辺昭三ほか 1966「陶邑古窯址群 I」平安学園
- 寺村光晴・安藤文一・千家和比古・山本肇「笛吹田遺跡」糸魚川市教育委員会
- 寺村光晴ほか 1979「大角地遺跡」青海町教育委員会
- 戸根与八郎・家田順一郎・駒形敏郎・和田寿久 1976「杉之森遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第8」新潟県教育委員会

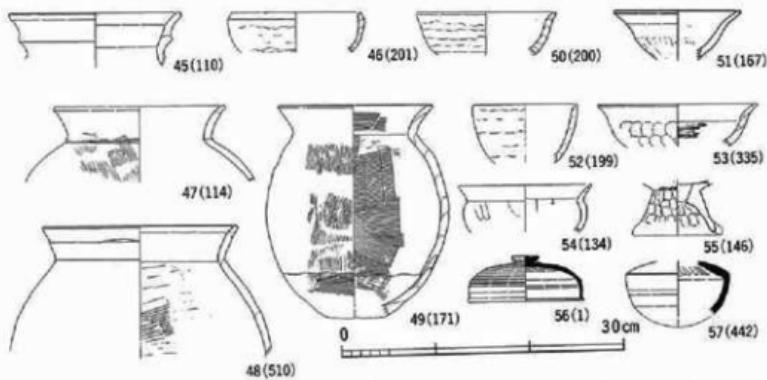
- 戸根与八郎ほか 1984「上新バイパス内遺跡発掘調査報告書」今池・子安・下新町遺跡 新潟県教育委員会
- 中川成夫・土井義夫 1973「魚野川流域の古墳群について」「塩沢町における考古学・民俗学の調査 III」塩沢町教育委員会 立教大学・学校・社会教育講座
- 中川成夫・佐野良吉・大島伊一・島田靖久・小川秀政・阿部恭平 1975「馬場上遺跡第一第1次・第2次発掘調査概要一」十日町市教育委員会
- 中川成夫・川上貞雄・戸田有二・土井義夫・大島伊一・島田靖久・小川秀政 1976「馬場上遺跡第一第3次・第4次発掘調査概要一」十日町市教育委員会
- 橋本澄夫 1975「金沢市高畠遺跡」金沢市教育委員会
- 中沢悟ほか 1981「清里・陣馬遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中村浩ほか 1976「陶色 I」大阪府教育委員会
- 橋本正・藤田富士夫 1971「小杉町中山南遺跡調査報告書」富山県教育委員会
- 中村孝三郎・金子拓男・中島栄一・池田亨 1975「長表遺跡」六日町教育委員会
- 橋本澄夫 1982「志賀町中村畑遺跡」「能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書 I」石川県立埋蔵文化財センター
- 原口正三・田辺昭三・田中琢・佐原真 1961「船橋 II」平安学園クラブ
- 比田井克仁 1983「古墳時代前期高杯考」「古代」第74号
- 藤井利章ほか 1980「免志院遺跡」奈良県立橿原考古学研究所
- 藤田富士夫・橋本正春 1974「富山市境野新遺跡発掘調査報告書」富山市教育委員会
- 本間信昭 1969「若宮遺跡出土の古式土師器」「佐渡国府緊急調査報告書II」真野町教育委員会
- 松本浩一・横倉興一・柿沼恵介・佐藤明人 1980「下郷」群馬県教育委員会
- 横山勝栄・坂井秀弥ほか 1983「内越遺跡」新潟県教育委員会
- 吉岡康暢ほか 1965「石川県鹿島郡鹿西町金丸宮地遺跡の土器」「石川考古学研究会会誌 9」石川考古学研究会
- 吉岡康暢ほか 1967「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1967「北陸における土師器の編年」「考古学ジャーナル 6号」 ニューサイエンス社
- 吉岡康暢ほか 1983「東大寺領横江庄遺跡」江沼市教育委員会
- 吉田恵二ほか 1982「諸立八幡神社遺跡」黒崎町教育委員会
- 綿貫綾子ほか 1984「有馬条里遺跡」波川市教育委員会



付図 1 古墳時代中期土器 ( )内は本文の遺物番号

第4表 古墳時代中期土器器種説明表

器種	No	器形の特徴
土器器 小型丸底壺A	2	口縁部は直線的に外方に開き、体部が小さく、体高は浅い。底部は指でおされて凹む。調整は丁寧な荒削きを施す。頸部は器高の中央より下にある。口径は10cmと小さい。
土器器 小型丸底壺B	1	口縁部は直線的に外方に開き、体部はわずかに盛りをもつ。底部は指でおされて凹む。器高の中央に頸部がくる。内外面は丁寧な荒削き調整。口径は8cm以下と小さい。
土器器 小型丸底壺C	3~5	小型丸底壺Bより大型のもので口径10cm以上のものである。口縁部は外方に開き、球形の体部と不安定な底部を有する。内外面は粗い荒削き調整。赤色塗彩を施すものもある。
土器器 盖	6	内側して聞く口縁部から、肥厚した滑平な天井。鉢とも考えられるが内面には刷毛目のち粗い荒削き、外面には粗い削ぎを施しており、口縁部は丸く無でられる。
土器器 鉢A	7	肥厚した底部から、体部は内側しながら聞く。口縁端部は丸く無でられている。外面には刷毛目の中筋を施す。内面は丁寧に無でされている。口径12cm前後の小型のものと15cmを越えるものがある。
土器器 鉢B	8・11 ・13	平底の底部から、体部は内側して聞く。口縁部は粘土を貼り付けたのち指捺でし。有段口縁状を呈する。口縁端部は丸く無でられている。体部内外面は刷毛目調整。
土器器 鉢C	10	偏球形の丸底の体部から、屈曲して直線的に聞く口縁部となる。口縁端部は丸く無でされている。内外面とも丁寧な荒削き調整。
土器器 鉢D	9	平底の底部から、内側して立ち上り、丸く推でられた端部となる。外面は刷毛目のもの、荒削き調整。内面は荒削き調整。赤色塗彩である。
土器器 鉢E	12・14 ・15	平底から偏球形の体部となり、わずかに頸部が屈曲し、屈く聞く口縁部となる。口縁端部は丸く無でされ、体部内外面は刷毛目調整。頸部内面に指捺された痕を残す。
土器器 鉢F	27	体部のみである。半球形の体部から矧く外反する口縁部となる。内外荒削き調整。赤色塗彩。
土器器 壺A	17・21	矧く外反して聞く口縁部を有する壺で、体部は頸状形を呈する。外面とも刷毛目調整、口縁端部は丸く無でられている。大型のA2(17)と小型のA1(21)に分けられる。
土器器 壺B	18・22	丸底に近い不安定な平底から、球形の体部となり、頸部から外反する口縁部となる。口縁端部は外側削ぎ状で断面台形を呈する。若高20cm前後のB1(18)と体部が大きくふくらむ大型のB2(22)に区分される。
土器器 壺C	19	細い頸部から、矧く外反する有段口縁部となる。口縁端部は丸く無でられている。
土器器 壺D	20	矧く外反する口縁部で、器壁は厚い。口縁端部は外削ぎ状に施でられている。
土器器 高杯A	23	高脚・口縁部は直線的に聞き、棒状の脚基部となる。底部内面は刷毛目。ほかは丁寧な無で調整。
土器器 高杯B	24	わずかに内側する口縁部。棒状の脚基部からタッパ状に聞く脚部となる。外面は粗い荒削き、内部には内側荒削き、脚内面は刷毛目調整。
土器器 高杯C	25	舟の底い杯底から、直線的に外方に聞く口縁部となる。口縁端部は丸くおさまる。
土器器 高杯D	26	杯は半球形で有段口縁となる。脚基部は矧い棒状を呈し、脚部は直線的に聞く。内外面は丁寧な荒削き調整。赤色塗彩。(付付鉢とも考えられる形状である。)
土器器 脚部	29・30	脚部なら直線タッパ状に聞く脚部である。焼成前に3孔1単位で穿孔される。内外面刷毛目調整。高杯もしくは器台の脚部である。
土器器 器台	28	ぐの字に屈曲する脚基部である。脚部に3孔1単位で穿孔される。脚部と脚部は、焼成前に穿孔される。
土器器 小型壺A	31	不安定な平底から内側して立ち上がる体部となり、ぐの字に屈曲し矧く外反する口縁部となる。口縁部は矧でにより矧く外反して聞く。口縫と体縫が重複して、口縫は8cm前後と小型である。
土器器 小型壺B	32・33	不安定な平底から偏球形の体部となり、ぐの字に屈曲し矧く外反する口縁部となる。口縁部は矧く無でられ脚部となる。口縫部はつままれて外側に板を残すB2(33)に分類される。口径12~13cmを限る。
土器器 小型壺C	34	ぐの字に屈曲する口縁部の壺である。最大径は体部の下半にあり、体部は細長い。外面に刷毛目調整。
土器器 小型壺D	35	脚部底の体部に直線的に聞く口縁部となる。口縁端部は丸く無でられる。最大径は口縫である。
土器器 小型壺E	36	不安定な平底から細長い体部となる。体部最大径は上半部にある。底部はぐの字に屈曲し、外反する口縁部となる。口縁端部は断面四角形となり、外削ぎ状を呈する。

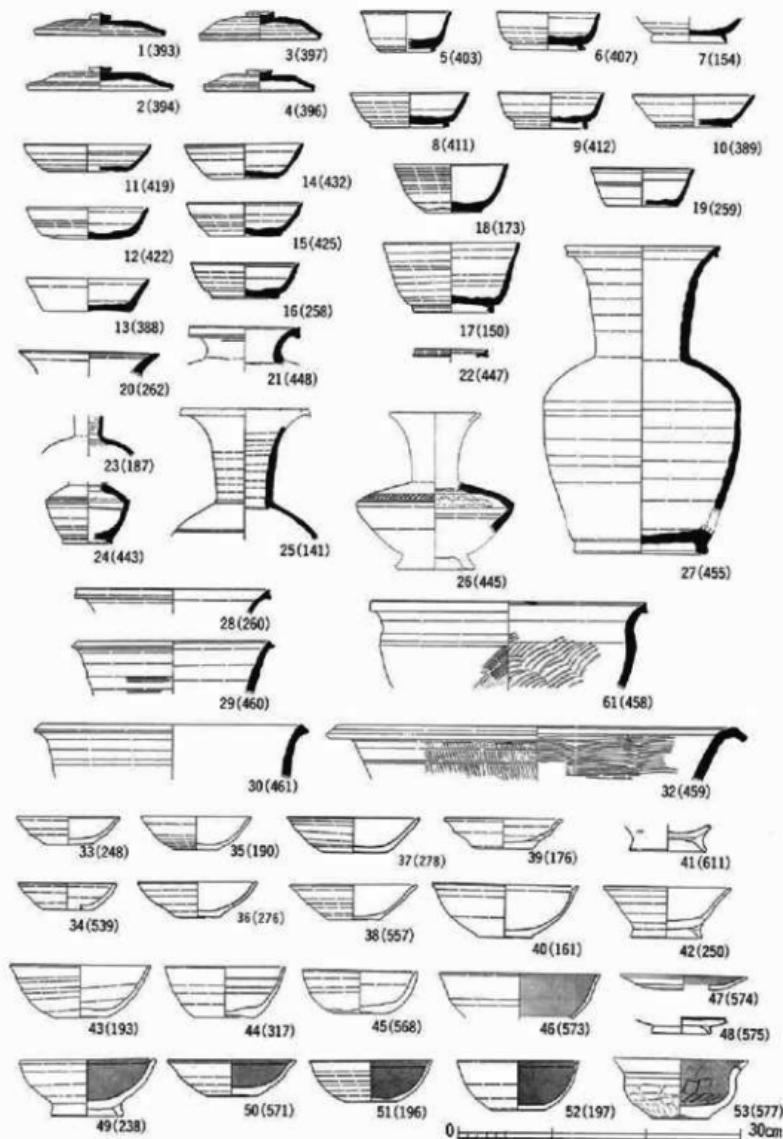


付図2 古墳時代後期土器 ( )内は本文の遺物番号

器種	No.	器形の特徴
土師器 瓢A	37~39 41~42 • 44	口縁部は強く施でられ、大きく外反する。体部は球形を呈する。口縁端部が薄く角ばるA1 (37・39), 肥厚し器底が厚いA2 (38・39・42), 口縁端部がほぼ横にのひ、有段口縁を呈するA3 (44) の三種に分けられる。
土師器 瓢B	40	平底から球形の体部となり、ゆるく外反する口縁部となる。口縁端部は角ばる。最大径は体部上半にある。
土師器 瓢C	43	球形の体部から、強くつまみ上げられる口縁部となる。(口縁端部は丸く撫でられる。)

第5表 古墳時代後期土器器種説明表

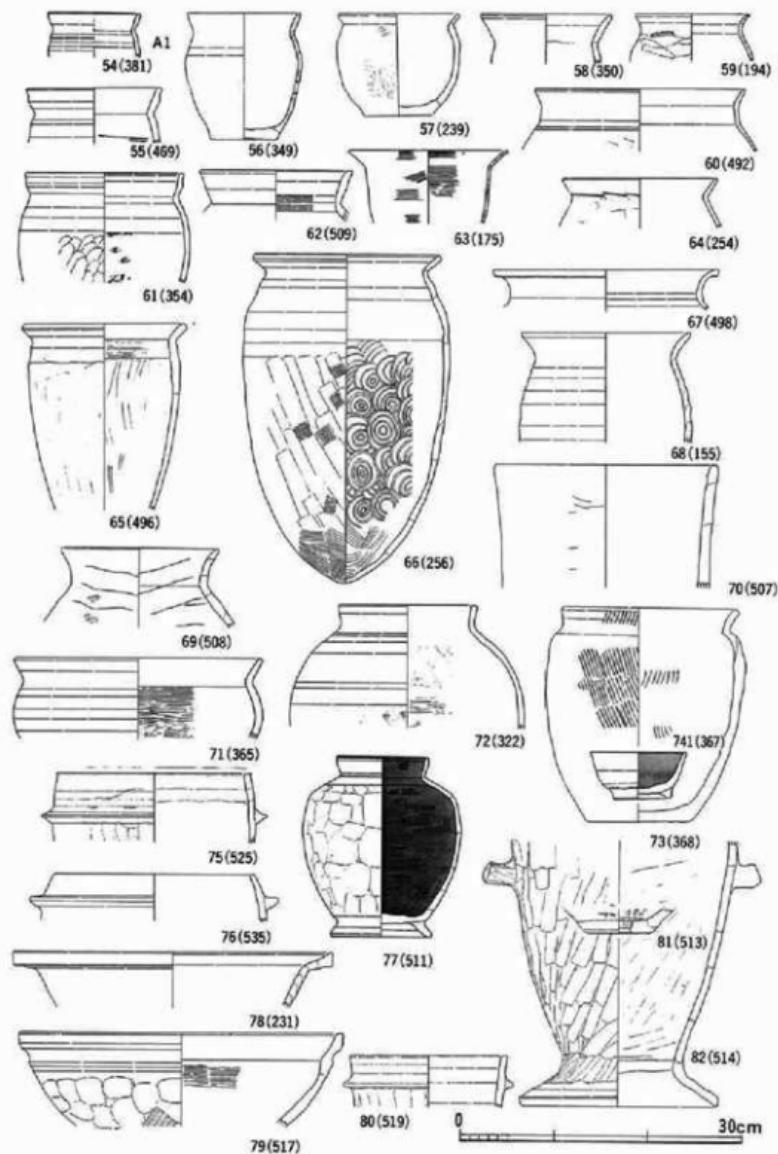
器種	No.	器形の特徴
土師器 瓢E	45	細くしまる頸部から、ラッパ状に外反し、有段口縁となる。(丁寧に模倣でされる。)
土師器 瓢F	47~48	小さい不安定な底部から、倒卵型の体部となり、くの字に屈曲して外反する口縁部となる。口縁端部は丸く撫でられる。外面は磨き状の擦り調査。
土師器 瓢D	49	不安定な平底から、やや長脚化した体部、くの字に屈曲し、外反する口縁部となる。内外面とも粗い削毛目調査。
土師器 桶A	50~51 • 53	半円形に内側する体部から、屈曲して外反する口縁部となる。口縁端部は丸くおさまる。長くのびる口縁部のA1 (51) と短くつままれた口縁部のA2 (50・53) に分類される。
土師器 桶B	54	漏斗形の体部から屈曲して外反する口縁部となる。器壁は薄い。頭部内外面に稜線を有する。
土師器 桶C	52	身の深いもので、半円形の体部から、丸味をもつ口縁部となる。
土師器 桶D	46	身の深い半円形の体部から、口縁部はつまみ上げられ強く内傾する。
土師器 高杯E	55	ラッパ状に開く脚部となる。外面は模倣でされる。
須恵器 有蓋高杯	56	偏平なつまみから、やや内傾して下する天井部となり、口縁部と天井部の境は、わずかな段を有する。口縁部は内側して下り、口縁端部は外方へつままれ屈曲する。天井部中位まで尾切後撫でられる。
須恵器 越	57	丸底から、なで肩の体部となる。口縁部は欠損していて不明である。



付図3 平安時代土器 (1) ( )内は本文の遺物番号

第6表 平安時代土器器種説明表

器種	No	器形の特徴
須臾器 蓋A	1・2	偏平ながらも宝珠様を呈するつまみをもち、平坦な天井部から開く口縁部となる。口縁端部は断面三角形を呈し垂下する。口径は概して大ぶりである。
* 蓋B	3・4	偏平な凝灰珠のつまみを有し、やや内傾する口縁部となる。口縁端部はつままれ、断面三角形を呈し垂下する。口径は小ぶりである。Aに比して、器高の深いものがある。
* 蓋C		つまみが欠損、不明なもの。口縁端部のつくりからはAかBかは判断がつかない。
* 杯A	5・10	高台を有するもので、口径：器高が3：1である。切り離し方法から、麓切りのA1(5～7)と、糸切りのA2(8～10)に分類される。平底から、直線的に外方へ開く口縁部となり、口縁端部は撫でられる。台の形態から、外端擦地のもの(7・9)、内端擦地のもの(5・6・8)、底部をつまみ上げてつくりだした(10)などに細分可能である。
* 杯B	11～16	無台杯である。わざかに内傾して立ち上がる体部で、直線的に外方に開くものもある。底部削除から細分される。麓切りのB1(11～13)と、糸切りのB2(14～16)である。B2は比較的底部が肥厚し、口径：器高が3：1前後である。
* 梗A	17	高台を有するもので、麓切り後、高台貼り付け。口径：器高が2：1を測り、杯が3：1に比べ、器高が深い。
* 梗B	18・19	無台のもので、杯Bと同様に底部は回転糸切り技法による。口径：器高が2：1と杯をしのぐ身の深いものである。
* 平底	20	ハの字に開く口縁で内面に撫でによる接線がある。器壁は厚い。
* 小型壺A	23	肩部は丸足をおびて下り、頸部は細くしづらされている。口縁部、底部は不明。
* 小型壺B	24	肩部に棱をなし、平底に高台をつけたもの。口縁形態は不明。
* 長颈壺A	22・25	ややなで肩の体部から、丸く外反してのびる口縁部となる。口縁端部は、外方に接をなし、つままれて断面三角形を呈すると言われる。
* 長颈壺B	26	肩部には棱を有し、柳状工具により列点文をめぐらす。口縁部は外反して広がる。
* 長颈壺C	27	安定した平底から、なで肩部の体部となり、やや太い頸部から外反する口縁となる。口縁端部は折り返され、外面に接をなす。高台は安定感のある断面方形のものが貼り付けられる。
* 短颈壺A	21	球形に近い体部から、屈曲して短く強く外反する口縁部となる。口縁端部は折り返され、接をなす。
* 壺A	28・30 ・32	いずれも外反しながら腰くもので、端部は折り返され、外間につままれた突端がある。口径により、大中小に細分される。A1(28・29)は21cm前後、A2(30)は30cm前後、A3(32)は径45cmほどの口径を測る。
* 広口壺	31	外反する短い口縁部で、口縁端部は折り返され垂下する。肩は張らずに最大径は口径にある。
土器器 杯A	41・42	有台杯である。体部の形態は内傾して立ち上がる。口径10cm前後の小ぶりのA1。内傾する体部で口径12cm以上のA2、直線的に外反する体部のA3(42)に分けられる。ほかに高台の形式により細分也可能である。
* 杯B	34・35 ・38・39	無台杯である。体部の形態は内傾して立ち上がり、口縁部で屈曲する。口径10cm前後の小ぶりのものB1(34)、B1に藝術的に類似するが口径が12cm～14cmのものB2(35)、直線的に外方にのびるB3(38)、B2の直面が強くなるB4(39)に分けられる。いずれもロクロ彫形、底面回転糸切り技法である。
* 杯C	33・36 ・37	藝術的にはB類と同じ無台杯。内面は丁寧に施墨される。口径10cm前後のものC1(33)、口径12cm～14cmのものC2(36)、直線的にのびる体部のものC3(37)。
* 杯D	49・51 ・74	内面黒色処理するものいわゆる内墨土器である。無台杯で形態が杯B2に類するものD1(50・51)、有台杯で口径が10cm前後の小ぶりのものD2(74)、12cm～14cmの大ぶりのものD3(49)に分けられる。
* 梗A	43・45	体部は内傾して立ち上り、口縁部は丸く撫でられる。口径：器高が2：1前後で身の深いものである。底面回転糸切りで平底のものA1(43・44)、底面尾削りで丸底風のものA2(45)に分けられる。
* 梗B	46・52	内墨土器で口径が12cm～14cmのものB1(52)、14cmを超える大ぶりのものB2(46)に分けられる。
* 梗C	53	凹底から内傾して立ち上がる体部となり、口縁部で屈曲して頸部をつくる。口縁部はハの字に開く。内墨土器である。
* 盆A	47・48	内墨土器で高台が付くものである。高台は断面三角形を呈する。



付図4 平安時代土器(2) ( )内は本文の遺物番号

器種	No.	器形の特徴
土師器 裏A	54・55 61・62	長胴の体部から、わずかにくびれる頸部となり、口縁部は直立する。口縁端部は肥厚し、方形となる。口縁部はロクロで撫で、外側体部下半は薬剤りが施される。口径により小ぶりのA1(54)、中ぶりのA2(55)、大ぶりのA3(61)、体部径が口径をしのぐA4(62)に分けられる。
タ 裏B	65	長胴の体部から、短く外反する口縁部となる。口縁端部は肥厚する。
タ 裏C	56・58 63・64 68・69	くの字の頭部から、丸く撫でられる口縁部となる。体部は長胴となるものが多い。口径により細分される。口径10cm前後で小ぶりなC1(56・58)、口径12cmをこえる大ぶりなC2(68・69)である。口径が、体部径を上まわるC3(63)もある。ロクロ撫で、刷毛目調整がある。また底盤の薄いもののC4(64)は口径は18cm前後で、体部は薬剤りを施す。
タ 裏D	59・60	口縁部がいわゆるコの字に屈曲するものである。外側の腰輪は明顯ではないが、内面には撫でた跡がはっきり残る。器壁は薄く、ていねいなつくりである。外側は薬剤りされる。口径により小ぶりなD1(59)と大ぶりなD2(60)に分類される。(D1は台付能の可能性がある。)
タ 裏E	57・73	平底からずん胴の体部となり、短く外反する口縁部となる。口縁端部断面は角ばる。口径により細分される。口径10cm前後のE1(57)と18cm前後のE2(73)である。73は叩き目を外側に残す。
タ 裏F	67	すぼまる頭部から、外反する口縁部となる。口縁端部は肥厚し角ばる。
タ 裏G	66	丸底から長胴の体部となり、くの字に屈曲し外反する口縁部となる。口縁端部はつままれ、断面三角形を呈する。体部は上半は回転腹で、下半は叩き技法による。外側は薬剤りにより、叩き目を消す。底部外側面に刷毛を施す。
タ 裏H	70	円筒形を呈する体部で口縁部は撫でられている。
タ 広口型	71	偏球形の体部から外反する口縁部となる。口縁端部は角ばる。内面は刷毛目調整。須恵器の広口型に似る器形である。
タ 直口型	72	球形の体部から、短く直立する口縁部となる。内外面刷毛目調整。
タ 古村焼縁壺	77	平底から肩の張った体部となり、短くくびれる口縁部となる。台は外方にふんばった形となる。内面黒色処理を施す。外側は施無で、内面は施無で状を呈する。
タ 鍋A	78	壺鉢状の体部から直曲する口縁部となる。口縁端部はつままれて断面三角形を呈する。
タ 鍋B	79	半球形の体部からわざかに屈曲し、直立する口縁部となる。底部外側には叩き目が残る。
タ 羽釜A	80	直立気味に立つ口縁部と貧弱なつばを有する。口縁端部は角ばる。
タ 羽釜B	75	すん胴の体部からやや内側する口縁部となる。口縁端部は撫でられ凹む。体部外側は施無りを施す。つばの断面は三角形を呈する。
タ 羽釜C	76	最大径が体部中央にあり、内側する口縁部となる。つばは肥厚し、ぼったりしたもののがつけられる。
タ 茶 A	81	平底の底部に旋成前に、穿孔されたものである。体部、口縁部の形態は不明。
タ 茶 B	82	くの字に屈曲する口縁部から長胴の体部となる器を倒立させた形である。把手の状態から横とした。

第1表 古墳時代中期土器観察表

No.	器種	出土地区 遺物	法量(cm) 口径・脚高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
1	須恵器有蓋高杯 蓋	C区西側 街道	12.2・4.8・— つまみ径2.8	暗灰色	砂粒を少量 含む	良好	1/3	口縁部ロクロ削で、天井部 ロクロ削り。口縁端部つま み上げ。
2	土器器 盆A 1	S I 12	10.8・—・—	黄褐色	細砂を含む	良好	3/4	口縁端部丸く削で、口縁部 内外面刷毛目、内面擦で。
3	〃 盆D	S I 12	11.0・—・—	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/3	内外面横擦で。
4	〃 壺A 1	S I 12	15.1・—・—	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/8	内外面横擦で。
5	〃 盆C	S I 12	13.2・—・—	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/6	内外面横擦の範囲き。
6	〃 小型丸底壺A	S I 12	10.8・6.0・2.2	黄褐色	細砂を含む	良好	完形	外面丁寧な範囲き。口縁部 内面刷毛目一箇所。
7	〃 小型丸底壺B	S I 12	8.2・5.6・1.4	黄褐色	細砂を含む	良好	完形	外面丁寧な範囲き。
8	〃 小型丸底壺A	S I 12	8.6・—・—	黄褐色	砂粒を少量 含む	良好	1/6	外面範囲き、内面横擦 で、口縁端部無地。
9	〃 小型丸底壺B	S I 12	8.2・—・—	灰褐色	白色粉を少 量含む	良好	1/6	外面丁寧な範囲き。
10	〃 小型丸底壺C	S I 12	—・—・— 胴部径14.6	茶褐色	砂粒を含む	良好	3/4	外面丁寧な範囲き、底部・ 内面・刷毛目・上半、無で、 指頭圧痕を残す。
11	〃 蓋	S I 12	13.4・5.9・— つまみ径4.2	黄褐色	砂粒を含む	良好	完形	外面丁寧な範囲き、内面口 縁部刷毛目。天井部内面丁 寧な範囲き。外側保付査。
12	〃 鉢A	S I 12	11.8・5.6・—	黄褐色	砂粒を含む	良好	完形	外側刷毛目一箇所範囲き、 内面不定方向の範囲き。口 縁端部内外面横擦で。
13	〃 鉢C	S I 12	(10.5)・(6.3)・—	灰褐色	砂粒を少量 含む	良好	1/4	口縁部内面板擦で。(一部指 頭圧痕)。外側無地。
14	〃 鉢A	S I 12	14.2・—・—	灰褐色	砂粒を少量 含む	良好	1/3	外側刷毛目。口縁端部横 擦で。
15	〃 鉢B	S I 12	13.6・—・—	灰褐色	緻密	良好	1/10	内面擦で、外側底部刷毛目。 口縁外側粘土貼り付けによ り肥厚。
16	〃 鉢D	S I 12	14.0・7.1・5.8	黄褐色	砂粒を少量 含む	良好	3/4	外側刷毛目範囲き、内面 範囲き。底部剥離り。口縁 端部横擦で。赤色塗装。
17	〃 鉢C	S I 12	17.2・5.5・— 強径13.0	黄褐色	砂粒を少量 含む	良好	1/2	外側丁寧な範囲き。
18	〃 鉢E	S I 12	12.4・—・—	暗褐色	長石粒を含 む	普通	1/6	内面擦で(一部指頭圧痕)、 外側刷毛目強で、口縁端部 横擦で。
19	〃 鉢B	S I 12	17.0・9.8・5.0	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/2	外側刷毛目無で一箇所範 囲き、内面刷毛目→擦で。口 縁部横擦で。
20	〃 鉢E	S I 12	14.2・11.2・6.6	暗褐色	砂粒を含む	良好	2/3	外側刷毛目→擦で、内面刷 毛目→擦で、口縁端部横擦で。
21	〃 高杯B	S I 12	12.6・—・—	灰褐色	砂粒を含む	魚肝	1/6	外側丁寧な範囲き。
22	〃 高杯B	S I 12	14.4・—・—	灰褐色	砂粒を少量 含む	良好	1/10	外側丁寧な範囲き。外側 指頭圧痕。
23	〃 高杯B	S I 12	14.6・11.0・9.5	黄褐色	砂粒を多く 含む	良好	完形	杯部は不整方向の範囲き、 口縁端部横擦で。脚部刷毛 目→擦り範囲き。振部内面刷 毛目。
24	〃 高杯脚部	S I 12	—・—・10.1	暗褐色	長石粒を含 む	良好	1/4	外側刷毛目→擦で、内面刷 毛目。
25	〃 高杯脚部	S I 12	—・—・13.8	暗褐色	砂粒を多く 含む	良好	1/6	内外面横擦で、底部 内面刷毛目。
26	〃 横A 2	S I 12	11.4・14.6・—	黄褐色	砂粒を含む	良好	完形	外側刷毛目範囲き、内面刷 毛目→擦で。口縁部横擦で。
27	〃 壺A 2	S I 12	6.4・—・—	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/4	口縁部内外面横擦で、体部 外側刷毛目。
28	〃 壺B	S I 12	12.0・—・—	暗褐色	長石粒を混 入	普通	1/6	内外面横擦で、外側に指頭 圧痕。

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・浴高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
29	土師器 親	S I 12	- - - - 4.4	黄褐色	細砂を含む	普通	底1/3	外面磨き、内面鏡撫で。
30	〃 親A 1	S I 12	17.6 - - -	暗褐色	砂粒を少量含む	普通	1/8	口縁部横撫で、外面部毛目→撫で、内面無地。
31	〃 親A 1	S I 12	14.8 - - -	灰褐色	砂粒を少量含む	良好	1/10	口縁部横撫で、内面・体部外面部毛目、外面上に保付着。
32	〃 親C	S I 12	15.4 - - -	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/6	口縁部横撫で、内外面とも毛目→撫で。
33	〃 親A 1	S I 12	16.8 - - -	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	1/3	口縁部横撫で、外面部毛目→撫で。
34	〃 親	S I 12	- - - - 6.0	暗灰色	砂粒を少量含む	良好	1/4	底部鏡削り、外面部毛目→鏡削り、内面鏡削り。
35	〃 親	S I 12	体部径20.1	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	1/3	内面鏡削り(撫で?)。外面部毛目、炭化物付着。
36	〃 親A 2	S I 12	15.2 - - -	黄褐色	砂粒を多く含む	良好	1/4	外面部毛目、内面鏡で、口縁部横撫で。
37	〃 親C	S I 12	12.0 - - -	灰褐色	細砂を含む	良好	1/4	外面部毛目→撫で、内面鏡削で、口縁部横撫で。
38	〃 親B	S I 12	19.4 - - -	赤褐色	細砂を含む	不良	1/6	口縁部横撫で、二次焼成を受ける。
39	〃 煙A 3	S I 12	18.6 - - -	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	1/4	外面部毛目、内面鏡削で、口縁部横撫で。
40	〃 親	S I 12	- - - - 6.5	黄褐色	細砂を含む	良好	底部	外面部粗い鏡磨き、内面鏡削で、底部鏡削り。
41	〃 親	S I 12	- - - - 5.6	灰褐色	緻密	良好	底1/2	外面部粗い鏡磨き、内面鏡毛目、底部鏡削り。
42	〃 小型丸底蓋C	S I 13	12.0 - - -	灰褐色	細砂を含む	良好	1/4	外面部磨き、内面鏡で、口縁部横撫で→鏡磨き。
43	〃 小型丸底蓋C	S I 13	10.0-12.2 -	赤褐色	細砂を含む	不良	4/5	外面部二次焼成のため調整不明。
44	〃 親A 1	S I 13	15.2 - - -	黄褐色	白色砂を含む	普通	1/5	口縁横撫で、外面部磨きで、炭化物付着。
45	〃 親A 1	S I 13	15.0 - - -	暗褐色	砂粒を含む	良好	1/10	口縁横撫で、外面部で、内面鏡毛目、炭化物付着。
46	〃 親A 1	S I 13	16.8-20.5 -	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	4/5	口縁横撫で、外面部毛目→鏡削、内面鏡削毛目。
47	〃 親	S I 13	- - - - 6.2	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/6	外面部磨き、内面鏡で、内面に炭化物付着。
48	〃 親	S I 13	- - - - 7.8	灰褐色	砂粒を少量含む	良好	底部	外面部磨き、内面鏡毛目、上げ毛。
49	〃 小型丸底蓋C	S X 15	9.0-10.2-2.8	褐色	砂粒を多く含む	良好	2/3	外面部削り、上部鏡毛目、内面鏡毛目、赤色塗彩。
50	〃 鉢F	S X 15	10.4 - - -	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/4	口縁部横撫で、外面部粗い鏡磨き、赤色塗彩。
51	〃 鉢台	S X 15	頸径	黄褐色	細砂を含む	良好	1/2	台部内外面鏡磨き、脚部内面鏡毛目。
52	〃 高杯D	S X 15	14.4-(2.2)-8.8	灰褐色	細砂を含む	良好	1/6	鉢部内外面鏡磨き、脚部鏡毛目→撫で、赤色塗彩、孔は3個。
53	〃 高杯C	S X 15	15.0 - - -	暗灰色	細砂を含む	良好	1/3	外面部鏡磨き。
54	〃 高杯脚部	S X 15	- - - - 13.0	黄褐色	細砂を含む	良好	1/6	外面部鏡毛目→撫で、外面部磨き状、孔は3個。
55	〃 鉢B	S X 15	16.2-7.2-3.8	黄褐色	緻密	良好	1/4	外面部鏡削で状の鏡磨き、底部は鏡削り。
56	〃 親A 1	S X 15	12.6 - - -	灰褐色	黒色砂を多く含む	普通	1/8	口縁部横撫で。
57	〃 小型親B 2	S X 15	13.2 - - -	暗褐色	細砂を含む	良好	1/3	口縁部横撫で、外面部毛目→撫で。
58	〃 親A 2	S X 15	15.0 - - -	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/3	口縁部横撫で、外面部毛目→撫で、内面一部に指撫で。
59	〃 親A 1	S X 15	15.0 - - -	黄褐色	砂粒を多く含む	普通	1/4	外面部横撫で、体部外面部毛目→磨き。

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・容高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
60	土師器 壺A 2	S X15	17.5* - - -	暗褐色	細砂を多く含む	良好	1/8	内外面刷毛目→横撚で。口縁は小片で不明。
61	〃 壺A 2	S X15	17.4* - - -	褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	口縁部刷毛目→横撚で、体部撚で。
62	〃 壺A 2	S X15	15.8* - - -	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/4	口縁部刷毛目→横撚で、外面刷毛目、内面刷毛目で。
63	〃 壺A	S X15	頸部径15.0	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/8	内面刷毛目、外面刷毛目、観削り。
64	〃 小型壺B 2	S X16	9.8* (10.0)* -	暗褐色	細砂わずかに含む	普通	1/4	口縁部横撚で、外面刷毛目、内面刷毛目撚で。
65	〃 小型壺B 2	S X16	9.8* - - -	灰褐色	細砂を含む	良好	1/6	口縁部横撚で、外面刷毛目、内面刷毛目撚で。
66	〃 小型壺B 2	S X16	10.5*11.8* 4.1	灰褐色	砂粒を含む	良好	完形	口縁部横撚で、外面刷毛目、観削り。
67	〃 壺B 1	S X17	14.0* - - -	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/3	口縁部横撚で。
68	〃 壺	S X17	(9.2)* - - -	黄褐色	緻密	良好	1/10	口縁部横撚で、小片のため口縁は推定。
69	〃 壺	S X17	- - - - 5.8	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	内外面刷毛目、底部撚で。
70	〃 壺	S X17	- - - - 7.1	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	内外面刷毛目、底部撚で。
71	〃 小型壺C	S X18	7.8* - - -	暗褐色	細砂を含む	良好	1/8	口縁部刷毛目→撚で、外面観削りで、内面撚で。
72	〃 小型壺B 1	S X18	11.2* - - -	暗褐色	細砂を含む	良好	1/3	口縁部刷毛目→撚で、外面刷毛目→撚で、内面撚で。
73	〃 小型壺B 1	S X18	9.8* 8.8* 3.4	暗褐色	細砂を少量含む	良好	1/4	口縁部刷毛目→撚で、外面刷毛目→撚で、内面撚で。
74	〃 小型壺B 1	S X18	9.8* 9.4* 3.4	暗褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	口縁部刷毛目、外面刷毛目→撚で、底部観削り。
75	〃 小型壺	S X18	- - - - 4.0	暗褐色	細砂を多く含む	良好	底1/3	外面刷毛目→撚で、底部外観削り、内面撚で。
76	〃 小型壺C	S X18	9.8* - - -	灰褐色	緻密	良好	1/4	内外面観磨き。
77	〃 壺B 1	S X18	9.4* - - -	黄褐色	細砂を含む	良好	1/8	外面刷毛目観磨き、内面観磨で、口縁部観磨。
78	〃 壺B 1	S X18	12.0* - - -	黄褐色	緻密	良好	1/2	口縁部横撚で、外面刷毛目→撚で、内面観磨。
79	〃 壺A	S X18	12.8* - - -	黄褐色	細砂を含む	良好	1/4	口縁部横撚で、外面刷毛目→撚で、内面観磨。
80	〃 壺B 1	S X18	13.4* - - -	黄褐色	砂粒を少量含む	良好	1/8	外面刷毛目→横撚で、内面観磨。
81	〃 壺B 1	S X18	12.7* - - -	黄褐色	砂粒を少量含む	良好	1/3	口縁部横撚で、外面刷毛目→観磨、内面撚で。
82	〃 壺A 1	S X18	13.0* - - -	黄褐色	砂粒を少量含む	不良	1/4	外面刷毛目→観磨、内面観磨。
83	〃 壺B 1	S X18	12.4* - - -	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/2	外面刷毛目→観磨、内面撚で。
84	〃 壺B 1	S X18	12.8* - - -	黄褐色	砂粒を少量含む	良好	1/4	外面刷毛目観磨と、内面撚で。
85	〃 小型壺E	S X18	10.6*14.3* 3.5	赤褐色	砂粒を少量含む	良好	1/4	内外面観磨き、口縁部撚で。
86	〃 壺A	S X18	14.6* - - -	灰褐色	緻密	良好	1/3	外面刷毛目→粗い観磨、内面観磨で、口縁部横撚で。
87	〃 壺B	S X18	11.0*17.5* 5.0	灰褐色	緻密	良好	1/4	外面刷毛目粗い観磨、内面観磨で→指撚で。
88	〃 壺B	S X18	12.5* - - -	黄褐色	砂粒を多く含む	良好	1/4	外面刷毛目→粗い観磨、内面観磨で→指撚で。
89	〃 壺A 2	S X18	12.0*20.2* 4.6	灰褐色	緻密	普通	1/2	外面刷毛目→粗い観磨、内面観磨で→観磨で。
90	〃 壺B	S X18	10.6* - - -	黄褐色	緻密	良好	1/5	外面刷毛目→粗い観磨、内面撚で。
91	〃 壺B	S X18	12.2* - - -	灰褐色	緻密	良好	1/3	外面刷毛目→粗い観磨、内面撚で、体部に穿孔。
92	〃 壺E	S X18	- - - - 4.5	灰褐色	砂粒を少量含む	普通	1/4	外面刷毛目→粗い観磨、内面観磨で。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
93	土師器 壺	S X18	- - - 4.0	黄褐色	砂粒を多く含む	良好	底1/3	外面刷毛目→粗い荒磨き、内面丁寧な荒削り。
94	" 壺	S X18	- - - 4.8	灰褐色	砂粒を少量含む	不良	1/2	外面刷毛目→荒磨き。内面荒削り、二次荒成受ける。
95	" 壺	S X18	(13.8)-(22.5)-(6.5)	黄褐色	緻密	良好	体部1/2	外面粗い荒磨き、内面粗で→荒磨り。
96	" 高杯A	S X19	11.0-11.6-11.0	黄褐色	細砂を少量含む	良好	完形	外面刷毛目→荒磨き。内面杯部刷毛目、脚部刷毛目。
97	" 壺A 2	S X19	15.6- - -	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	外面刷毛目、口縁部横撫で、内面刷毛目→無で。
98	" 壺B 2	S X19	13.8- - -	灰褐色	細砂を少量含む	良好	1/2	外面刷毛目→荒磨き、内面無。
99	" 壺B 2	14M(19)	(6.2)- - -	黄褐色	細砂を少量含む	良好	1/8	口縁部横撫で、内外面刷毛目。
100	" 壺A 1	不明	(8.0)- - -	明褐色	細砂を少量含む	普通	1/10	口縁部横撫で、内外面刷毛目。
101	" 壺B	14M(19)	(7.2)- - -	黄褐色	細砂を含む	良好	1/10	内外面とも刷毛目。口縁部刷毛目→無。
102	" 壺B	14M(19)	(9.0)- - -	暗褐色	細砂を多く含む	良好	1/4	口縁部刷毛目→機械で、外側刷毛目→削り、内面刷毛目。
103	" 小型丸底壺C	14L(4)	- - - 3.5	黄褐色	砂粒を少量含む	良好	1/3	外面荒削り、内面無で、底部内面刷毛目→無。
104	" 高杯	14M(23)	基部径3.5	灰褐色	細砂を少量含む	良好	脚基部	外面荒磨き、脚部内面無で、孔は3個、赤色旋影。
105	" 小型壺A	14M(9)	8.4- 6.5- 3.4	灰褐色	細砂を多く含む	良好	完形	外面刷毛目→粗い荒磨き、内面口縁部横撫で。
106	" 鉢G	14M(9)	16.8- - -	灰褐色	細砂を含む	良好	1/2	外面刷毛目→荒磨き、内面横荒磨り。
107	" 小型壺D 2	14M(9)	11.8- - -	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	外面刷毛目、内面刷毛目→削り、口縁部横撫で。
108	" 壺E	14M(10)	17.0-25.8- 5.0	灰褐色	細砂を多く含む	良好	完形	内外面刷毛目→無で、一部削前り。
109	" 壺E	不明	体部径26.8	暗褐色	細砂を含む	良好	1/2	内外面刷毛目→荒磨り。

第2表 古墳時代後期土器觀察表

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
110	土師器 壺E	16O(21)	18.0- - -	褐色	細砂を含む	良好	1/5	内外面荒磨き。
111	" 壺F	16O(22)	11.0- - -	黄褐色	砂粒を含む	良好	1/6	内外面横撫で。
112	" 壺F	16O(22)	13.8- - -	灰褐色	白色砂を含む	普通	1/10	内外面横撫で。
113	" 壺D	16N(2)	18.0- - -	茶褐色	砂粒を含む	普通	1/5	口縁部内外面横撫で、体部外側刷毛目、内面無。
114	" 壺D	16N(2)	18.0- - -	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/4	口縁部内外面横撫で、体部外側刷毛目内面無。
115	" 壺	15N(4)	- - - 7.0	明褐色	砂粒を含む	良好	1/5	底部荒削り、体部外側刷毛目→荒磨き、内面刷毛目→無。
116	" 壺	16N(2)	- - - 9.0	灰褐色	緻密	良好	1/4	底部荒削り、体部外側刷毛目→荒磨き、内面荒磨き。
117	" 高杯E	15O(8)	基部径4.72	茶褐色	細砂を含む	不良	1/3	外側荒削り、内面荒磨。
118	" 壺	15N(11)	- - - 9.3	茶褐色	細砂を含む	普通	底1/3	上げ底、外側削で、内面は調整不良。
119	" 壺	16O(22)	- - - 5.6	茶褐色	緻密	不良	底1/2	内面刷毛目、外側刷毛目、底部荒削り→削て。
120	" 壺	16N(2)	- - - 7.2	茶褐色	白色砂を含む	普通	底1/3	内面刷毛目、外側刷毛目、底部荒削り。
121	" 壺	16N(2)	- - - 5.4	赤褐色	緻密	普通	底部	内面刷毛目、外側刷毛目→荒磨り。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
122	土師器 壺	160(22)	— · · · 5.6	赤褐色	白色砂を含む	普通	2/3	上げ底、内面刷毛目→撫で、外面無地。
123	〃 壺	150(20)	— · · · 6.0	茶褐色	砂粒を少量含む	良好	1/3	内面荒削り、底部荒削り。
124	〃 壺	140(23)	— · · · 4.9	茶褐色	白色砂を含む	良好	底部	上げ底、内外面撫で、底部荒削り。
125	〃 壺	150(20)	— · · · 5.6	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	内面刷毛目→撫で、外面撫で。
126	〃 壺	160(22)	— · · · 6.0	茶褐色	細砂を含む	良好	底部	上げ底、内外面撫で、焼の底ふか?
127	〃 梗A 1	16N(2)	9.4 · · ·	茶褐色	細砂を少量含む	普通	1/8	口縁部内外面撫で、体部内外面無地。
128	〃 梗A 2	16N(2)	12.0 · · ·	茶褐色	細砂を少量含む	普通	1/6	口縁部内外面撫で、体部内外面無地。
129	〃 梗A 2	160(22)	12.0 · · ·	茶褐色	砂粒を含む	普通	1/8	内外面無地、内面刷毛目→撫で。
130	〃 梗A 2	160(22)	15.1 · · ·	茶褐色	砂粒を多く含む	普通	1/3	内外面撫で、体部丁寧な撫で。
131	〃 梗C	160(22)	9.0 · · ·	茶褐色	砂粒を含む	普通	1/8	内面荒削り、外側無地。
132	〃 梗C	160(17)	11.5 · · ·	茶褐色	細砂を含む	不良	1/3	燒成不良で調査不明。
133	〃 梗A 2	160(22)	11.8 · · ·	茶褐色	砂粒を多く含む	普通	1/10	口縁部内外面撫で、体部内面刷毛目→荒削り。
134	〃 梗B	160(23)	14.2 · · ·	茶褐色	細砂を少量含む	普通	1/10	口縁部病弱で、体部内面荒削り、外側無地。
135	〃 梗B	150(22)	10.5 · · ·	灰褐色	砂粒を少量含む	普通	1/8	内黒土器、口縁部病弱で、内面粗荒削り、外側無地。

第3表 平安時代土器観察表（一部古墳時代後期土器を含む）

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
136	須恵器 盖C	S I 1	14.0 · · ·	灰色	黑色砂含む	良好	1/10	天井部不明、ロクロ撫で。
137	土師器 杯B 1	S I 1	9.8 · · ·	灰褐色	細砂を含む	普通	1/8	ロクロ撫で。
138	〃 杯B 2	S I 1	12.0 · · ·	黄褐色	鐵青	良好	1/8	ロクロ撫で。
139	〃 杯B 2	S I 1	10.6 · 3.7 · 5.4	暗褐色	鐵青	良好	1/2	ロクロ撫で、底部回転み切り。
140	〃 壺C 1	S I 1	13.4 · · ·	黄褐色	鐵青	良好	1/4	ロクロ撫で、口縁部内外面に横付有。
141	須恵器長頸壺A	S I 1	頸部径6.0	灰色	鐵青	良好	1/6	ロクロ撫で、外側自然釉付有。
142	土師器 壺G	S I 1	21.0 · · ·	暗灰色	白色砂を含む	良好	1/6	ロクロ撫で、内面刷毛目、口縁部横撫で。
143	〃 壺G	S I 1	22.2 · · ·	灰褐色	鐵青	良好	1/8	ロクロ撫で。
144	〃 壺G	S I 1	19.0 · · ·	灰褐色	鐵青	良好	1/12	ロクロ撫で。
145	〃 高杯E (古墳後期)	S I 1	頸部径5.2	赤褐色	鐵青	不良	1/2	杯部内面荒削り、外側荒削り、脚内面撫で。
146	〃 壺D (古墳後期)	S I 1	22.6 · · ·	茶褐色	細砂を含む	良好	1/2	外側刷毛目→荒削り、内面粗荒削り。
147	須恵器 盖A	S I 2	13.8 · 2.3 · —	灰褐色	鐵青	良好	1/4	ロクロ撫で、天井部荒削り。
148	〃 盖C	S I 2	13.8 · · ·	灰色	細砂を含む	良好	1/5	ロクロ撫で、器面は荒れて有る。
149	〃 盖C	S I 2	13.7 · · ·	灰褐色	白色砂を含む	良好	1/8	ロクロ撫で。
150	〃 梗A 1	S I 2	14.4 · 7.4 · 8.2	暗灰色	黑色砂を少量含む	良好	完形	ロクロ撫で、底部荒切り、高台貼り付け。
151	〃 梗A 1	S I 2	13.6 · · ·	灰色	白色砂粒を含む	良好	1/10	ロクロ撫で。
152	〃 杯B 1	S I 2	12.2 · 4.0 · 5.9	灰色	細砂を少量含む	良好	完形	ロクロ撫で、底部回転み切り、口縁部に自然釉。

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・添高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
153	須恵器 杯B 1	S I 2	11.6・3.6・6.0	暗灰色 白色砂を多く含む	良好	1/5	ロクロ施で、底部窓切り、内面にうるし付着。	
154	〃 杯A 1	S I 2	—・—・8.0	灰色 細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、底部窓切り、高台貼り付け。	
155	土師器 見C 2	S I 2	18.0・—・—	茶褐色 小礫を含む	良好	1/5	ロクロ施で、口縁端部窓付着。	
156	〃 杯C 3	S I 2	13.8・—・—	明褐色 細砂を多く含む	普通	1/8	ロクロ施で、内面窓磨き。	
157	〃 杯B	S I 2	—・—・5.0	褐色 細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、底部窓切り。	
158	〃 杯C 3	S I 2	—・—・—	明褐色 細砂を少量含む	普通	底1/4	ロクロ施で、内面窓磨き、底部窓切り。	
159	〃 杯B	S I 2	—・—・6.2	灰褐色 細砂を含む	不良	底1/4	器肌が漆耗しており調整不明、底部糸切りか?	
160	〃 杯B	S I 2	—・—・5.8	明褐色 白色砂を含む	良好	底1/2	ロクロ施で、底部窓切り。	
161	〃 瓢A	S I 3	15.4・5.6・5.8	明褐色 砂粒を少量含む	良好	2/3	ロクロ施で、底部糸切り、内面窓磨き。	
162	〃 杯B	S I 3	13.4・3.5・6.2	灰褐色 細砂を含む	不良	1/3	ロクロ施で、底部窓切り。	
163	〃 杯B	S I 3	12.0・—・—	明褐色 緻密	良好	1/3	ロクロ施で。	
164	〃 杯B	S I 3	—・—・4.8	明褐色 緻密	良好	底部	ロクロ施で。	
165	〃 杯B	S I 3	—・—・5.5	褐色 緻密	普通	底1/3	ロクロ施で、底部窓切り。	
166	〃 羽釜B	S I 3	(20.0)・—・—	褐色 緻密	不良	1/6	ロクロ施で、体部外面窓磨削。	
167	〃 茶碗A 1 (古墳後期)	S K33	13.4・—・—	茶褐色 細砂を含む	普通	1/5	内外窓磨で、粘土輪積み廻线。	
168	〃 茶碗A 2 (古墳後期)	S K33	17.0・—・—	茶褐色 白色砂含む	良好	1/4	外窓磨で、内面窓磨で、ロ縁部横擦。	
169	〃 見D (古墳後期)	D S K33	15.0・—・—	茶褐色 緻密	良好	1/6	ロ縁部横擦で、外面に粗い刷毛目。	
170	〃 見D (古墳後期)	D S K33	—・—・6.8	茶褐色 砂粒を少量含む	良好	4/5	外窓磨で、内面粗い刷毛目、颈部内面は指おさえ。	
171	〃 見D (古墳後期)	D S K33	16.5・22.5・6.0	茶褐色 砂粒を含む	良好	4/5	外窓磨で、体部下半に接合面が剥落。	
172	〃 見 (古墳後期)	S K33	—・—・5.6	褐色 砂粒を多く含む	良好	底部	外窓磨で、内面粗い刷毛目。	
173	須恵器 拗B 2	S I 4	12.0・—・5.6	灰色 砂粒を多く含む	普通	1/3	内外窓ロクロ施で、底部糸切り、内面うづ巻き状の擦で削。内面にうるし(?)付着。	
174	土師器 瓢A 3	S I 4	15.6・—・—	灰褐色 砂粒を含む	不良	1/6	ロクロ施で。	
175	〃 見C 3	S I 4	17.0・—・—	茶褐色 砂粒を多く含む	良好	1/8	外窓磨毛目。	
176	〃 杯B 4	S I 4	12.6・3.2・6.0	灰褐色 白色砂を多く含む	良好	2/3	ロクロ施で、底部窓切り。	
177	〃 杯B 4	S I 4	12.0・—・—	灰褐色 白色砂を少量含む	良好	1/6	ロクロ施で、底部糸切りか?	
178	〃 杯B 4	S I 4	11.8・—・—	灰褐色 砂粒を含む	普通	1/8	ロクロ施で、外窓下半は擦で。	
179	〃 羽釜B	S I 4	20.6(25.3)10.0	暗褐色 砂粒を多く含む	普通	2/3	ロ縁部刷毛目→擦で、外窓下半細窓削り、内面擦。	
180	〃 見C 2	S I 4	20.0・—・—	赤褐色 細砂を少量含む	良好	1/2	ロ縁部内面刷毛擦で、外窓磨削。	
181	〃 杯B	S I 4	—・—・5.0	褐色 白色砂を多く含む	良好	底1/4	ロクロ施で、底部窓切り。	
182	〃 杯B	S I 4	—・—・5.6	灰褐色 白色砂を多く含む	良好	底部	ロクロ施で、底部窓切り。	
183	〃 杯B 2	S I 4	—・—・8.4	灰褐色 緻密	良好	底1/6	ロクロ施で、底部窓磨き→黒色処理。	
184	〃 羽釜	S I 4	—・—・8.4	暗褐色 砂粒を多く含む	良好	底1/4	外窓磨で、外窓は粗い刷毛目→擦で。	

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口徑・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
185	土師器 羽釜	S I 4	— * — 7.4	暗褐色	砂粒を含む	良好	底4/5	内外面刷毛目→撫で。
186	須恵器 杯B 2	S I 5	12.0* 3.6* 7.8	灰褐色	細砂を含む	良好	1/3	ロクロ撫で、底部窓切り。
187	“ 小型壺A	S I 5	— * — * —	灰色	緻密	良好	1/3	ロクロ撫で、内面にしぶり痕、颈部内面自然釉付着。
188	土師器 杯B 2	S I 5	11.8* — * —	灰褐色	緻密	不良	1/4	摩耗が著しく開盤不明。ロクロ撫で？
189	“ 杯B 2	S I 5	12.4* 3.8* 6.2	褐色	細砂を多く含む	不良	1/3	摩耗が著しく調整不明。ロクロ撫で？
190	“ 杯B 2	S I 5	11.6* 3.5* 4.5	褐色	細砂を少量含む	不良	1/3	ロクロ撫で、摩耗のため不明。
191	“ 杯B 2	S I 5	11.5* — * —	灰褐色	砂粒を少量含む	不良	1/4	摩耗が著しく調整不明。“含む”
192	“ 杯B 2	S I 5	12.2* — * —	灰褐色	砂粒を含む	不良	1/4	摩耗が著しく開盤不明。
193	“ 壺A 1	S I 5	14.8* 5.6* 5.7	褐色	白色砂を含む	良好	完形	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
194	“ 壺D 1	S I 5	11.0* — * —	茶褐色	緻密	良好	1/5	ロクロ機撫で、外面部削り。
195	“ 壺B 1	S I 5	11.2* — * —	褐色	砂粒を少量含む	良好	1/5	外面部撫で、内面窓底き→黒色處理。
196	“ 壺B 1	S I 5	12.8* 4.4* 5.3	灰褐色	石英粒を少量含む	良好	1/2	外面部撫で、内面窓底き→黒色處理。
197	“ 壺B 1	S I 5	12.9* 5.3* 5.5	灰褐色	砂粒を含む	不良	完形	外面部擦磨き、内面黒色處理。
198	“ 壺B 2	S I 5	14.4* — * —	灰褐色	緻密	不良	1/6	外面部撫で、内面窓底き→黒色處理。
199	“ 壺C (古墳後期)	S I 6	11.0* — * —	明褐色	砂粒を多く含む	良好	1/6	外面部機撫で、輪積み底を残す。
200	“ 壺A 2 (古墳後期)	S I 6	13.6* — * —	茶褐色	砂粒を多く含む	良好	1/4	外面部機撫で、輪積み底を残す。
201	“ 壺D (古墳後期)	S I 6	15.0* — * —	茶褐色	砂粒を多く含む	良好	1/4	外面部機撫で、輪積み底を残す。
202	“ 壺C (古墳後期)	S I 6	11.2* — * —	明褐色	砂粒を多く含む	良好	1/6	外面部機撫で。
203	“ 壺 (古墳後期)	S I 6	— * — 7.2	明褐色	細砂を含む	良好	底部	内面刷毛目、外面部擦磨で。
204	“ 壺 (古墳後期)	S I 6	— * — 5.8	明褐色	細砂を含む	良好	底部	外面部刷毛目、外面部擦磨で。
205	“ 壺 (古墳後期)	S I 6	— * — 6.7	明褐色	細砂を含む	良好	底部	内面刷毛目、外面部擦磨で。
206	“ 壺 (古墳後期)	S I 6	— * — 5.9	明褐色	細砂を含む	良好	底部	内面刷毛目、外面部擦磨で。
207	須恵器 壺	S I 6	6.4* — * —	灰色	緻密	良好	1/8	ロクロ撫で。
208	土師器 壺B 2	S I 6	12.4* 5.0* 5.6	明褐色	砂粒を含む	良好	2/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
209	“ 杯B 2	S I 6	12.4* 4.4* 5.6	明褐色	砂粒を多く含む	良好	2/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
210	“ 杯B 2	S I 6	13.2* — * —	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/8	ロクロ撫で。
211	“ 杯B 2	S I 6	13.8* 4.1* 5.8	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	完形	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
212	“ 杯B 2	S I 6	13.6* — * —	灰褐色	細砂を含む	良好	1/8	ロクロ撫で。
213	“ 杯	S I 6	— * — 6.0	明褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
214	“ 杯	S I 6	— * — 5.8	明褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
215	“ 杯	S I 6	— * — 6.3	明褐色	砂粒を多く含む	普通	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
216	“ 杯D 1	S I 6	12.8* 4.3* 5.2	黃褐色	砂粒を多く含む	良好	4/5	外面部ロクロ撫で、底部回転糸切り、内面黒色處理。
217	“ 杯D 1	S I 6	13.0* — * —	暗灰褐色	細砂を含む	良好	1/10	外面部ロクロ撫で、内面黒色處理。
218	“ 杯	S I 6	— * — 5.9	暗灰褐色	砂粒を少量含む	良好	底部	外面部ロクロ撫で、底部回転糸切り。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
219	土器器杯	S I 6	— * — * 5.6	暗灰褐色	白色砂を含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
220	杯	S I 6	— * — * 5.8	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	底部	内外面ロクロ撫で、底部回転糸切り。
221	杯D 1	S I 6	— * — * 5.6	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。内面黒色處理。
222	杯	S I 6	— * — * 5.3	明褐色	砂粒を含む	普通	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
223	杯	S I 6	— * — * 5.4	暗灰褐色	砂粒を含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
224	杯	S I 6	— * — * 5.8	暗灰褐色	砂粒を含む	良好	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
225	杯	S I 6	— * — * 5.8	暗灰褐色	白色砂を含む	良好	底1/2	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
226	杯	S I 6	— * — * 5.0	褐色	砂粒を多く含む	良好	底1/2	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
227	甕C 1	S I 6	12.6 * — —	暗灰褐色	砂粒を含む	良好	1/4	内外面ロクロ撫で。
228	甕C 3	S I 6	15.0 * — —	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/10	内外面ロクロ撫で。
229	甕A 3	S I 6	18.8 * — —	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/10	内外面ロクロ撫で。
230	甕A(引釜?)	S I 6	08.6 * — —	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/16	内外面ロクロ撫で。
231	甕A	S I 6	34.0 * — —	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/12	内外面ロクロ撫で。
232	杯B 3	S I 7	13.4 * 3.9 * 5.4	明褐色	細砂を含む	良好	1/4	ロクロ撫で、底部回転糸切り。油煙が付着。
233	杯B 4	S I 7	13.2 * — —	灰褐色	細砂を含む	良好	1/6	ロクロ撫で、内面に煤付着。
234	杯B 4	S I 7	12.4 * — —	明褐色	細砂を含む	不良	1/8	ロクロ撫で、内面に煤付着。
235	杯B 3	S I 7	10.0 * — —	明褐色	砂粒を含む	普通	1/6	ロクロ撫で。
236	杯	S I 7	— * — * 6.4	明褐色	細砂を多く含む	普通	底4/5	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
237	甕B 2	S I 7	18.8 * — —	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/8	ロクロ撫で、内面黒色處理。
238	杯D 3	S I 7	14.4 * 6.0 * 7.0	明褐色	砂粒を含む	良好	2/3	ロクロ撫で、底部は撫で、内面黒色処理。
239	甕E 1	S I 7	12.9*10.9*7.2	灰褐色	細砂を含む	良好	1/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り、外面刷毛目。
240	杯	S I 7	— * — * 5.3	灰褐色	細砂を含む	普通	底部	ロクロ撫で、底部回転糸切り、内面に煤付着。
241	杯	S I 7	— * — * 5.2	灰褐色	緻密	普通	底1/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
242	甕	S I 7	— * — * 6.4	灰褐色	細砂を多く含む	普通	底4/5	ロクロ撫で、底部底部切り、内面黒色処理。
243	羽釜	S I 7	— * — * 12.6	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	底1/10	外面撫で、内面刷毛目一撫で、外面に煤付着。
244	杯	S I 7	— * — * 6.0	明褐色	砂粒を多く含む	普通	底1/4	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
245	杯	S I 7	— * — * 6.2	明褐色	細砂を含む	普通	底2/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
246	杯	S I 7	— * — * 5.0	明褐色	細砂を含む	普通	底2/3	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
247	杯	S I 7	— * — * 6.4	明褐色	石英粒を含む	良好	底1/4	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
248	杯B 1	S I 8	10.8 * 3.0 * 5.0	褐色	細砂を含む	普通	1/3	内外面ロクロ撫で、底部回転糸切り。
249	杯B 1	S I 8	10.8 * 3.1 * 5.3	褐色	細砂を含む	良好	1/5	ロクロ撫で、底部回転糸切り。
250	杯A 3	S I 8	13.6 * 5.4 * 7.2	灰褐色	細砂を多く含む	良好	完形	ロクロ撫で、底部丁寧な撫で、高台貼付け。
251	甕B 1	S I 8	14.0 * — —	褐色	細砂を含む	良好	1/6	ロクロ撫で、内面黒色處理。
252	杯B 2	S I 9	13.4 * 3.6 * 5.7	灰褐色	細砂を含む	良好	2/3	ロクロ撫で、底部荒削り。
253	杯B 2	S I 9	14.4 * 4.4 * 6.0	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/2	ロクロ撫で、底部荒削り、口縁部内外面に煤付着。

No	器種	出土地点 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
254	土師器 壺D 4	S I 9	20.6・—・—	茶褐色	細砂を含む	良好	2/3	口縁部擦拂で、外面削り、内面削で指頭圧痕あり。
255	〃 壺G	S I 9	18.6・—・—	灰褐色	砂粒を多く含む	普通	2/3	上半部内外面回転擦拂で、下半部外表面は格子叩き荒削り、内面は同心円文→無で、二次焼成を受ける。
256	〃 壺G	S I 9	19.5・35.1・—	灰褐色	砂粒を多く含む	普通	4/5	上半部内外面は回転擦拂で、下半部外表面格子叩き→窓型削り、底部磨毛目、内面同心円文→刷毛目。
257	〃 壺G	S I 9	19.5・34.0・—	灰褐色	細砂を多く含む	普通	完形	上半部内外面回転擦拂で、下半部外表面格子叩き→窓型削り、一部磨毛目。内面同心円文→刷毛目。
258	須恵器 杯B 2	S X20	11.5・3.7・7.0	暗褐色	黑色砂を含む	良好	1/5	クロコ擦で、底部回転糸切り。
259	〃 杯B 2	S X20	11.0・4.0・7.6	灰色	緻密	良好	1/4	クロコ擦で、底部回転糸切り。
260	〃 壺A 2	S X20	20.6・—・—	暗褐色	砂粒を含む	良好	1/8	クロコ擦で。
261	〃 壺A 2	S X20	25.6・—・—	灰色	砂粒を含む	良好	1/6	クロコ擦で。
262	〃 平瓶	S X20	14.8・—・—	灰褐色	緻密	良好	4/5	クロコ擦で、内面に自然釉付着。
263	灰釉陶器 杯	S X20	—・—・8.0	灰白色	緻密	良好	2/3	クロコ擦で、底部回転糸切り、粗面鏡か？
264	〃 長頸瓶	S X20	12.7・24.1・—	灰白色	緻密	良好	1/4	クロコ擦で、体部下半は回転箝削り、口縁・体部・底部を三つに分けて製作。
265	土師器 杯B 2	S X20	12.1・3.8・5.4	褐色	細砂を含む	普通	完形	クロコ擦で、底部回転糸切り。
266	〃 杯B 2	S X20	12.3・3.5・4.5	茶褐色	砂粒を少量含む	不良	完形	クロコ擦で、底部回転糸切り。
267	〃 杯B 2	S X20	12.0・4.2・5.0	褐色	黑色砂を含む	普通	3/4	クロコ擦で、底部回転糸切り。
268	〃 杯B 2	S X20	11.7・4.4・5.5	褐色	砂粒を少量含む	普通	3/4	クロコ擦で、底部箝削り。
269	〃 杯B 2	S X20	12.6・3.8・4.1	灰褐色	緻密	良好	1/6	クロコ擦で、底部回転糸切り。
270	〃 杯B 2	S X20	12.0・4.3・5.3	暗褐色	緻密	良好	1/5	クロコ擦で、底部回転糸切り。
271	〃 杯B 2	S X20	12.6・3.8・5.5	灰褐色	黑色砂を含む	普通	2/3	クロコ擦で、底部回転糸切り。
272	〃 杯B 2	S X20	12.6・3.9・5.4	灰褐色	黑色砂を含む	普通	2/3	クロコ擦で、底部回転糸切り。
273	〃 杯B 2	S X20	12.1・4.8・5.1	褐色	砂粒を含む	不良	完形	クロコ擦で、指痕痕を残す、底部回転糸切り。
274	〃 杯B 2	S X20	13.0・4.1・5.3	褐色	黑色砂を含む	良好	2/3	クロコ擦で、底部箝削り、内面丁寧な撫で。
275	〃 杯B 2	S X20	12.6・3.8・4.9	灰褐色	砂粒を含む	不良	完形	クロコ擦で、底部回転糸切り、内面丁寧な撫で。
276	〃 杯C 2	S X20	12.6・3.8・5.0	褐色	黑色砂を含む	良好	1/10	クロコ擦で、底部回転糸切り、内面瓦署き。
277	〃 杯B 2	S X20	13.1・4.2・5.5	灰褐色	細砂を含む	普通	1/3	クロコ擦で、底部回転糸切り。
278	〃 杯C 2	S X20	14.0・3.3・7.0	褐色	緻密	普通	1/3	外側クロコ擦で、底部回転糸切り、内面瓦署き。
279	〃 杯B 2	S X20	13.4・3.9・5.4	灰褐色	緻密	普通	1/2	内外面クロコ擦で、底部回転糸切り。
280	〃 杯B 2	S X20	13.0・3.6・5.6	灰褐色	細砂を少量含む	普通	完形	外側クロコ擦で、底部回転糸切り。
281	〃 杯C 2	S X20	13.2・3.8・6.6	灰褐色	緻密	良好	1/3	外側無で、内面輕き、底部回転糸切り。
282	〃 杯B 2	S X20	13.0・4.4・5.0	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/3	外側クロコ擦で、底部回転糸切り。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	保存率	手洗の特徴		
								砂粒を少量含む	普通	
283	土器	杯B 2	S X20	13.0・4.3・5.8	灰褐色	普通	1/3	内外面クロロ無で、底部回転糸切り。		
284	"	杯B 2	S X20	12.6・4.4・4.9	褐色	良好	1/2	内外面クロロ無で、底部回転糸切り。		
285	"	杯B 2	S X20	12.0・4.2・5.5	褐色	良好	3/4	内外面クロロ無で、底部回転糸切り。		
286	"	杯C 2	S X20	12.6・3.9・5.4	灰褐色	普通	1/3	外面クロロ無で、内面荒削り状? 底部回転糸切り。		
287	"	杯B 2	S X20	12.8・---	灰褐色	良好	1/5	内外面クロロ無で。		
288	"	杯C 2	S X20	12.0・---	茶褐色	良好	1/4	外面クロロ無で、内面荒磨き。		
289	"	杯C 2	S X20	12.6・---	灰褐色	普通	1/6	外面クロロ無で、内面荒磨き。		
290	"	杯B 2	S X20	13.5・---	茶褐色	緻密	1/4	外面クロロ無で、内外面に捺付着。		
291	"	杯B 2	S X20	13.6・---	灰褐色	黑色砂を少量含む	不良	1/6	内外面クロロ無で。	
292	"	杯C 2	S X20	13.8・---	灰褐色	砂粒を少量含む	普通	1/8	外面クロロ無で、内面荒磨き。	
293	"	杯C 2	S X20	12.0・---	灰褐色	白色砂を少量含む	普通	1/6	外面クロロ無で、内面荒磨き。	
294	"	杯C 2	S X20	12.6・---	灰褐色	緻密	不良	1/6	外面クロロ無で(内面磨きか?)	
295	"	杯C 2	S X20	12.0・---	灰褐色	緻密	良好	1/8	外面クロロ無で、内面荒磨き、内面に捺付着。	
296	"	杯C 2	S X20	13.6・---	灰褐色	緻密	普通	1/6	内外面クロロ無で一層き状?	
297	"	杯C 2	S X20	12.8・---	灰褐色	緻密	普通	1/8	外面クロロ無で、内面荒磨き。	
298	"	杯C 2	S X20	11.8・---	灰褐色	細砂を少量含む	普通	1/6	外面クロロ無で、(内面磨きか?)	
299	"	杯C 2	S X20	14.0・---	灰褐色	緻密	良好	1/6	外面クロロ無で、内面荒磨き(赤色微か?)	
300	"	杯C 2	S X20	14.0・---	灰褐色	緻密	良好	1/8	外面クロロ無で、内面荒磨き。	
301	"	杯C 2	S X20	12.8・---	茶褐色	緻密	良好	1/6	外面クロロ無で、(内面磨き?)	
302	"	杯C 2	S X20	12.4・---	茶褐色	緻密	普通	1/8	外面クロロ無で、内面荒磨き。	
303	"	杯C 2	S X20	12.0・(4.2)・(4.0)	暗褐色	砂粒を少量含む	良好	1/4	外面クロロ無で、内面荒磨き、外面上に油煙付着。	
304	"	杯B 2	S X20	13.8・4.9・5.3	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/4	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、油煙付着。	
305	"	杯B 2	S X20	---・---・4.3	灰褐色	細砂を含む	普通	底部	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面に油煙付着。	
306	"	杯B 2	S X20	11.8・3.4・4.8	灰褐色	細砂を多く含む	普通	1/4	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面に油煙付着。	
307	"	杯B 2	S X20	---・---・4.8	灰褐色	細砂を多く含む	良好	底部	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面に油煙付着。	
308	"	杯B 2	S X20	15.6・---	灰褐色	緻密	良好	1/6	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面に油煙付着。	
309	"	杯B 2	S X20	---・---・5.6	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、油煙付着。	
310	"	杯B 2	S X20	---・---・5.0	灰褐色	細砂を含む	良好	底完形	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、油煙付着。	
311	"	杯B 2	S X20	---・---・5.4	灰褐色	細砂を含む	良好	底完形	内外面クロロ無で、底部回転糸切り、油煙付着。	
312	"	杯D 1	S X20	13.4・4.6・5.6	褐色	緻密	良好	2/3	外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面黒色処理。	
313	"	杯D 1	S X20	---・---・5.8	灰褐色	細砂を少量含む	良好	底部	外面クロロ無で、底部回転糸切り、内面黒色処理。	

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
314	土師器	杯D 4	S X20	—・—・—	褐色	細砂を含む	良好	底部直削り→高台貼り付け、内面磨き→黒色処理。
315	"	碗D 1	S X20	—・—・6.0	褐色	細砂を含む	良好	1/2
316	"	碗A 1	S X20	12.8・—・—	灰褐色	緻密	良好	1/4
317	"	碗A 1	S X20	12.6・5.4・6.2	茶褐色	砂粒を多く含む	普通	完形
318	"	碗A 1	S X20	13.6・5.2・6.0	褐色	緻密	良好	1/4
319	"	杯A 1	S B2-3	12.6・—・—	明褐色	細砂を多く含む	普通	1/2
320	"	杯C 2	S B2-10	—・—・5.6	明褐色	細砂を多く含む	普通	1/8
321	"	直口壺	150P10	13.6・—・—	灰褐色	黒色跡を含む	普通	1/8
322	"	直口壺	S B2-10	14.0・—・—	茶褐色	細砂を多く含む	良好	1/6
323	須恵器	長颈壺A	S B5-6	12.6・—・—	灰色	緻密	良好	1/10
324	土師器	杯B 2	S B4-7	15.4・—・—	灰褐色	緻密	良好	1/6
325	"	杯B 2	S B4-7	11.0・—・—	明褐色	緻密	良好	1/6
326	"	杯	S B4-7	—・—・5.4	明褐色	緻密	良好	1/5
327	須恵器	杯A 2	S B5-6	11.0・3.6・5.2	灰褐色	緻密	良好	1/5
328	土師器	杯B 2	S B5-9	12.1・—・—	褐色	細砂を含む	普通	1/4
329	"	杯B 2	S B5-4.5	11.8・4.0・5.2	褐色	砂粒を含む	普通	1/4
330	"	杯D 1	15Lpit 4	11.3・—・—	褐色	緻密	普通	1/4
331	"	杯B 3	14Npit 3	14.4・—・—	灰褐色	細砂を含む	普通	1/8
332	"	羽釜A?	150P19	14.2・—・—	灰褐色	緻密	不良	1/10
333	"	碗A 2	S K14	17.0・—・—	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/4
334	"	碗A 2	S K14	15.8・—・—	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/4
335	"	碗A 2	S K14	17.0・—・—	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/5
336	"	碗A 2	S K14	(5.0)・—・—	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/3
337	"	碗A 2	S K14	16.9・—・—	茶褐色	細砂を含む	良好	1/3
338	"	碗A 2	S K14	13.9・—・—	茶褐色	細砂を含む	良好	1/3
339	"	碗	S K14	—・—・6.2	茶褐色	砂粒を多く含む	良好	底部
340	"	碗	S K14	—・—・7.2	茶褐色	砂粒を多く含む	良好	2/3
341	"	碗	S K14	—・—・7.2	茶褐色	砂粒を多く含む	良好	2/3
342	"	碗	S K14	—・—・7.2	茶褐色	砂粒を含む	良好	2/3
343	"	杯B 2	S K14	13.2・3.6・5.4	暗褐色	砂粒を含む	良好	1/3
344	"	杯B 3	S K14	13.4・—・—	暗褐色	細砂を含む	良好	1/10
345	"	杯B 2	S K14	13.0・—・—	暗褐色	細砂を含む	普通	1/6
346	"	杯	S K14	—・—・4.6	茶褐色	細砂を含む	良好	底1/4
347	"	杯	S K14	—・—・4.7	灰褐色	緻密	良好	1/6
348	"	杯C 3	S K14	—・—・6.8	茶褐色	細砂を含む	良好	2/3

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	透存率	手法の特徴
349	土師器 楕C 1	S K14	12.2・(13.5)・7.2	赤褐色	砂粒を含む	良好	2/3	口部クロロ撫で、底部回転糸切り、内外面に模倣者。
350	〃 楕C 1	S K14	13.8・—・—	褐色	砂粒を含む	良好	1/9	口部クロロ撫で。
351	〃 楕C 2	S K14	16.0・—・—	赤褐色	砂粒を含む	不良	1/6	内外面横擦で。
352	〃 楕A 3	S K14	19.8・—・—	褐色	緻密	良好	1/10	内外面クロロ撫で。
353	〃 楕A 3	S K14	20.3・—・—	褐色	緻密	良好	1/12	内外面クロロ撫で。
354	〃 楕A 3	S K14	16.8・—・—	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	口縁クロロ撫で、外面部擦で、内面部刷毛目一撫で。
355	〃 杯	S K32	—・—・4.2	茶褐色	緻密	普通	底1/4	底部回転糸切り、内外面擦で。
356	〃 杯	S K32	—・—・7.1	褐色	細砂を含む	普通	底1/4	底部回転糸切り、内面擦磨き→黒色処理。
357	〃 杯C 2	S K5	11.4・4.4・4.2	灰褐色	細砂を少量含む	不良	1/6	底部回転糸切り、外面クロロ撫で、内面擦磨き。
358	〃 杯B 2	S K5	12.1・4.1・5.1	褐色	細砂を多く含む	良好	4/5	底部回転糸切り、内外面クロロ撫で。
359	〃 杯B 4	S K6	11.5・3.4・5.2	褐色	細砂を含む	良好	1/2	底部回転糸切り、内外面クロロ撫で。
360	〃 杯D 1	S K6	15.8・—・—	灰褐色	緻密	良好	1/10	外面クロロ撫で、内面擦磨き→黒色処理。
361	〃 杯B 3	S K17	14.2・—・—	褐色	緻密	良好	1/8	内外面クロロ撫で。
362	〃 羽釜B	S K17	16.4・—・—	褐色	緻密	良好	1/4	内外面横擦で。
363	須恵器 杯B 2	S K18	12.8・3.8・6.4	灰褐色	細砂を少量含む	普通	1/4	底部回転糸切り、内外面クロロ撫で。
364	〃 杯B 2	S K18	13.5・3.8・7.6	暗灰色	緻密	不良	1/3	底部回転糸切り、内外面クロロ撫で。
365	土師器 広口甕	S K30	25.8・—・—	灰褐色	黑色砂を含む	不良	1/10	口縁部横擦で、外面無で下半は削り、内面刷毛目。
366	〃 梅A 2 (古墳後期)	S K15	(5.6)・—・—	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/5	口縁部横擦で、内面擦磨で、外面擦で。
367	〃 杯D 2	S K28	10.0・5.0・5.6	褐色	白色砂を含む	良好	完形	内面擦磨き→黒色処理、台貼り付け、外面擦り無い。
368	〃 瓢E 2	S K28	19.0・22.6・11.5	暗褐色	細砂を少量含む	良好	完形	口縁部横擦で、内外面叩き一撫で、底部無。
369	〃 杯B 2	S K21	13.0・4.0・—	暗褐色	砂粒を多く含む	普通	1/8	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り。
370	〃 杯B 2	S K21	12.8・4.6・6.1	暗褐色	細砂を含む	良好	1/3	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り。
371	〃 瓢A 1	S K21	13.6・—・—	茶褐色	緻密	良好	1/4	外面クロロ撫で、内面擦磨き→黒色処理。
372	〃 杯B 2	S K21	14.0・—・—	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/6	内外面クロロ撫で。
373	〃 杯	S K21	—・—・5.4	茶褐色	細砂を多く含む	良好	底部	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り。
374	〃 杯	S K21	—・—・5.2	暗褐色	細砂を多く含む	良好	底部	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り。
375	〃 瓢A 1	S K21	9.4・—・—	褐色	緻密	良好	1/5	内外面クロロ撫で、内面に模倣者。
376	〃 杯B 3	S K24	14.0・4.5・4.8	暗褐色	細砂を含む	良好	1/3	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り。
377	〃 瓢A 1	S K24	15.0・—・—	褐色	緻密	良好	1/12	内外面クロロ撫で。
378	〃 杯D 1	S K24	—・—・5.7	灰褐色	緻密	良好	底1/2	外面部クロロ撫で、内面擦磨き→黒色処理、底部回転糸切り。
379	〃 杯B 2	S K27	13.9・4.1・7.0	灰褐色	細砂を多く含む	良好	2/3	内外面クロロ撫で、底部回転糸切り、内面に煤竹管。
380	〃 杯D 1	S K27	12.1・4.1・6.0	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/3	内面擦磨き→黒色処理、底部回転糸切り、外面部無。
381	〃 杯D 1	S K27	12.7・—・—	茶褐色	細砂を少量含む	良好	1/10	外面部クロロ撫で、内面擦磨き→黒色処理。
382	〃 杯	S K27	—・—・6.7	茶褐色	細砂を少量含む	良好	底1/3	外面部クロロ撫で、内面擦磨き、底部回転糸切り。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
383	土師器 杯	SK27	— · · · 5.9	茶褐色	細砂を少量含む	良好	底L/3	内外面ロクロ削で、底部回転糸切り。
384	“ 杯	SK27	— · · · 5.3	灰褐色	白色砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ削で、底部回転糸切り。
385	“ 壺A 3	SK27	20.0 · — · —	灰褐色	細砂を少量含む	普通	1/4	内外面ロクロ削で、内面擦で→縦道削で。
386	“ 壺A 3	SK27	23.4 · — · —	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/6	摩耗が著しく調整不明。ロクロ削か?
387	須磨器 盖C	SD11	14.7 · — · —	灰褐色	細砂を含む	良好	1/10	口縁部ロクロ削で、天井部窓削り→削で付け。
388	“ 杯B 1	SD11	13.0 · 3.5 · —	灰褐色	細砂を含む	良好	1/2	内外面ロクロ削で。
389	“ 杯B 1	SD11	12.8 · 3.5 · 9.0	灰褐色	緻密	良好	1/4	内外面ロクロ削で、底部回転糸切り。
390	“ 杯A 2	SD11	12.1 · — · 7.8	灰色	緻密	良好	1/5	内外面ロクロ削で。
391	“ 盖A	16P(17)	つまみ紐 2.4	暗灰褐色	細砂を含む	良好	1/3	口縁部ロクロ削で、天井部窓削り→削で付け。
392	“ 盖A	12M(20)	つまみ紐 2.4	灰褐色	細砂を含む	不良	1/3	ロクロ削で。
393	“ 盖A	15M(21)	12.6 · 2.4 · —	灰色	緻密	良好	1/5	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
394	“ 盖A	16N(1)	15.2 · 2.5 · —	灰色	緻密	良好	1/6	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
395	“ 盖B	15N(7)	11.6 · 2.3 · —	灰褐色	細砂を含む	良好	完形	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
396	“ 盖B	16N(1)	11.6 · 2.3 · —	灰色	緻密	良好	1/3	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
397	“ 盖B	15O(20)	12.6 · 3.0 · —	灰褐色	緻密	良好	1/4	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
398	“ 盖B	14N(9)	— · — · —	暗灰色	細砂を多く含む	良好	1/4	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
399	“ 盖C	13L(5)	13.6 · — · —	灰色	緻密	良好	1/5	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
400	“ 盖C	13N(25)	13.3 · — · —	灰色	緻密	良好	1/5	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
401	“ 盖C	15O(20)	13.8 · — · —	灰褐色	細砂を含む	良好	1/3	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
402	“ 盖C	15N(15)	14.8 · — · —	灰色	緻密	良好	1/4	ロクロ削で、天井部外縁窓削り。
403	土師器 杯A 1	15M(17)	9.4 · 4.3 · 6.4	灰色	緻密	良好	完形	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
404	“ 杯A 1	16P(19)	10.2 · 4.7 · 6.4	灰褐色	緻密	良好	1/4	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
405	“ 杯A 1	15N(1)	— · — · 5.9	暗灰色	細砂を多く含む	良好	1/2	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
406	“ 杯A 1	12M(22)	12.4 · 3.7 · 7.6	灰色	細砂を含む	良好	3/4	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
407	“ 杯A 1	14M(21)	10.8 · 4.0 · 7.4	灰色	緻密	良好	1/3	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
408	“ 杯A 1	14L(23)	11.0 · 4.2 · 5.7	灰色	細砂を多く含む	良好	1/5	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
409	“ 杯A 1	13L(10)	11.0 · 4.1 · 7.8	灰色	緻密	良好	1/3	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
410	“ 杯A 1	13L(5)	— · — · 7.9	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/4	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
411	“ 杯A 2	15K(8)	12.4 · 3.7 · 7.7	灰色	細砂を多く含む	良好	1/2	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
412	“ 杯A 2	16P(10)	11.4 · 3.9 · 7.7	灰白色	細砂を含む	良好	1/6	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
413	“ 杯A 2	12M(23)	12.6 · 3.3 · 8.2	灰色	緻密	良好	1/8	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。
414	“ 杯A 2	14N(4)	12.0 · 3.6 · 7.0	灰褐色	緻密	良好	1/4	ロクロ削で、底部回転糸切り、高台貼り付け。

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・標高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
415	土師器	杯B 1	15(20)	12.0・3.0・6.8	暗灰色	細砂を含む	良好	1/5
416	"	杯B 1	16P(19)	12.6・2.9・7.8	暗灰色	細砂を含む	良好	2/5
417	"	杯B 1	16P(10)	11.8・3.4・7.3	暗灰色	緻密	良好	1/4
418	"	杯B 1	16P(12)	13.2・2.9・8.7	暗灰色	細砂を含む	良好	1/4
419	"	杯B 1	16P(13-14)	13.5・2.9・8.2	暗灰色	細砂を含む	良好	1/4
420	須恵器	杯B 1	15M(21)	11.4・2.8・7.6	灰褐色	緻密	良好	1/4
421	"	杯B 1	20Q(11)	13.0・2.9・9.7	灰褐色	緻密	良好	1/3
422	"	杯B 1	16N(2)	12.6・3.4・—	灰褐色	細砂を含む	良好	4/5
423	"	杯	12M(23)	10.6・—・—	灰白色	緻密	良好	1/3
424	"	杯B 1	15N(15)	11.8・3.4・—	灰色	細砂を多く含む	良好	1/2
425	"	杯B 1	16P(5) 15N(1)	12.3・3.6・7.6	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/3
426	"	杯B 2	12M(22)	—・—・9.3	灰色	細砂を含む	良好	4/5
427	"	杯B 1	15N(1)	12.0・3.3・7.2	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/4
428	"	杯B 1	14M(10)	11.7・3.5・7.8	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/2
429	"	杯B 2	16L(1)	11.9・3.5・7.6	暗灰色	細砂を含む	良好	1/3
430	"	杯B 2	16Q(20)	13.5・3.1・7.6	灰褐色	細砂を含む	良好	1/3
431	"	杯B 2	13K(5)	11.6・3.3・5.5	灰色	緻密	良好	1/4
432	"	杯B 2	16O	12.6・3.7・7.0	暗灰色	細砂を含む	良好	1/4
433	"	杯B 2	15M(20)	13.6・3.6・7.6	灰色	緻密	良好	1/6
434	"	杯B 2	16M(19)	—・—・8.0	灰色	緻密	普通	1/2
435	"	杯?	15N(16)	12.0・—・—	灰色	緻密	良好	1/10
436	"	杯?	14L(18)	12.3・—・—	暗灰色	細砂を含む	良好	1/8
437	"	杯B 2	16O(10)	—・—・5.0	灰色	緻密	良好	底部
438	"	碗A 1	15K(2)	15.8・—・—	灰色	緻密	良好	1/6
439	"	碗A 1	15L(20)	16.0・—・—	灰色	細砂を含む	良好	1/4
440	"	碗A 1	16P(12)	12.8・—・—	灰色	細砂を含む	良好	1/6
441	"	碗A 1	19P(20)	12.8・—・—	灰色	白色砂を含む	良好	1/4
442	"	盤 (古賀後期)	14M(5)	体径11.0	暗灰色	緻密	良好	1/3
443	"	小型盤B	14M(4)	—・—・5.2	暗灰色	緻密	良好	1/2
444	"	小型盤B	15N(2)	—・—・6.6	暗灰色	緻密	良好	底部
445	"	長頸甌B	15L(1) 15M(1)	体部径16.8	暗灰色	緻密	良好	1/4
446	"	長頸甌B	14N(22)	13.0・—・—	暗灰色	緻密	良好	1/8
447	"	長頸甌A	16N(1)	7.8・—・—	暗灰色	緻密	良好	1/6
448	"	短頸甌A	15N(3)	11.7・—・—	暗灰色	白色砂を含む	良好	1/3

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴	
449	須恵器長颈壺C	14O(19)	頸径7.8	灰色	砂粒を含む	良好	1/3	外面ロクロ掘で、体部内面擦で付け。	
450	ク 罐	14N(19)	- - - 11.6	灰色	緻密	良好	底1/4	外面ロクロ掘で、高台貼り付け。底部荒切りか?	
451	ク 罐	16P+16Q	- - - 12.0	灰色	黒色砂を含む	良好	底1/3	外面ロクロ掘で、高台貼り付け。底部荒切りか?	
452	ク 罐	14N(25)	- - - 11.3	灰色	黒色砂を含む	良好	底1/5	外面ロクロ掘で、高台貼り付け。底部荒切りか?	
453	ク 罐	15L(6)	頸径10.7	灰色	緻密	良好	壁1/3	外面ロクロ掘で。	
454	ク 罐	14N(19)	- - - 10.8	灰色	白色砂を少量含む	良好	底1/3	底部荒切り。体部ロクロ掘で、外面刷毛目。	
455	ク 長颈壺C	14N(23)	16.5-32.6-13.5	暗灰色	細砂を含む	良好	1/3	底部荒切り。ロクロ掘で、高台貼り付け。	
456	ク 罐	14M(6)	- - - 11.8	暗灰色	白色砂を少量含む	良好	底1/3	底部荒切り。体部ロクロ掘で、高台貼り付け。	
457	ク 罐	15M(21)	- - - 11.3	暗灰色	黒色砂を含む	良好	底部	底部荒切り。体部ロクロ掘で、高台貼り付け。	
458	ク 広口瓶	14L(19)	29.4- - -	灰褐色	緻密	良好	1/8	ロクロ掘擦で、体部叩き目。	
459	ク 見A 3	試掘坑	45.0- - -	暗灰色	白色砂を含む	良好	1/4	内部擦刷毛目。外面平行叩き→擦で。	
460	ク 見A 1	15N(9)	20.4- - -	暗灰色	緻密	良好	1/8	内外面横擦で。	
461	ク 見A 1	14N(14)	25.6- - -	灰褐色	黒色砂を含む	良好	1/6	内外面横擦で	
462	灰釉陶器 段皿	16M(19)	14.6- 2.7- 7.6	浅灰色	緻密	良好	1/3	底部ロクロ削り。体部ロクロ削で、端部は削落	
463	ク 段皿	14M(14)	(37.0)- - -	灰白色	緻密	良好	1/6	ロクロ削で。	
464	ク 皿	14N(22)	(33.5)- - -	淡灰色	緻密	良好	1/6	ロクロ削で。釉は刷毛目塗りか?	
465	ク 皿	16P(11)	15.6- - -	浅灰色	砂粒を含む	良好	1/4	ロクロ削で。	
466	縁物か?	皿	14N(20)	34.0- - -	淡綠色	緻密	良好	1/5	内外面ロクロ削で。
467	灰釉陶器 振	14M(6)	(44.5)- - -	淡灰色	緻密	良好	1/4	内外面ロクロ削で。	
468	ク 瓢	14N(23)	体部深	淡灰色	緻密	良好	1/3	内外面ロクロ削で。	
469	土師器 見A 2	16O(13)	14.0- - -	灰褐色	緻密	良好	1/6	内外面ロクロ削で。	
470	ク 見A 2	16O(3)	13.8- - -	褐色	砂粒を含む	良好	1/5	内外面ロクロ削で。	
471	ク 見A 2	20Q(7)	13.0- - -	灰褐色	砂粒を少量含む	不良	2/3	内外面ロクロ削で。二次焼成。外側に焼付着。	
472	ク 見A 2	14L(3)	15.0- - -	茶褐色	砂粒を含む	良好	1/8	内外面ロクロ削で。	
473	ク 見	20Q(12)	- - - 8.2	灰褐色	緻密	良好	底1/3	内外面ロクロ削で。底部静止系切り。	
474	ク 見A 3	16O(13)	17.8- - -	褐色	緻密	良好	1/4	内外面ロクロ削で。	
475	ク 見A 3	14L(3)	20.6- - -	灰褐色	砂粒を多く含む	良好	1/10	内外面ロクロ削で。	
476	ク 見A 3	19P(20)	18.1- - -	褐色	緻密	良好	1/8	内外面ロクロ削で。	
477	ク 見A 3	16O(13)	18.2- - -	茶褐色	砂粒を含む	良好	2/3	ロクロ削で。体部外面擦で。内面刷毛目→削で。	
478	ク 見A 3	19P(20)	21.0- - -	暗褐色	砂粒を含む	良好	1/10	内外面ロクロ削で。	
479	ク 見A 3	15O(15)	17.0- - -	暗褐色	緻密	良好	2/3	ロクロ削で。体部内面擦で。	
480	ク 見A 3	20O(18)	21.0- - -	褐色	砂粒を含む	良好	1/3	ロクロ削で。	
481	ク 見A 3	19Q(8)	18.0- - -	褐色	砂粒を多く含む	普通	1/8	ロクロ削で。内面擦で。	
482	ク 見A 3	14L(3)	25.2- - -	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/10	内外面ロクロ削で。	
483	ク 見A 3	16N(2)	21.4- - -	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/10	内外面ロクロ削で。	
484	ク 見A 3	15N(23)	25.2- - -	茶褐色	砂粒を含む	普通	1/12	内外面ロクロ削で。	
485	ク 見A 3	16Q(23)	27.6- - -	褐色	砂粒を含む	普通	1/12	内外面ロクロ削で。内面刷毛目。	
486	ク 見A 3	14L pit	22.5- - -	灰褐色	砂粒を含む	良好	1/4	内外面ロクロ削で。	

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
487	土師器 麦C 4	16P	16.7・--・-	褐色	緻密	良好	1/10	内外面ロクロ無で、薄く仕上げる。
488	麦C 4	14L(3)	20.4・--・-	褐色	細砂を含む	普通	1/8	内外面横挽で。
489	麦C 4	14M(120)	17.8・--・-	明褐色	緻密	良好	1/4	内外面横挽で。
490	麦D 2	20O(12)	20.0・--・-	褐色	細砂を含む	良好	1/4	口縁部横挽で、内面横挽で、外面荒削りか?
491	麦C 4	15N(2)	16.3・--・-	灰褐色	細砂を含む	普通	1/4	口縁部横挽で、外表面荒削り、内面横挽で。
492	麦D 2	20R(1)	22.4・--・-	茶褐色	緻密	良好	1/10	口縁部ロクロ無で、外表面削り。
493	麦B	15N(2)	21.0・--・-	褐色	緻密	良好	1/7	口縁部横挽で、内面刷毛目、外面荒削り→削る。
494	麦B	15N(18)	16.0・--・-	灰褐色	細砂を含む	良好	1/4	口縁部横挽で、内面刷毛目で、外表面荒削り。
495	麦B	19N(18)	20.0・--・-	褐色	細砂を含む	良好	1/2	口縁部横挽で、内面荒削りで、外表面削りで、体部荒削り。
496	麦B	19O(5)	17.0・--・-	褐色	細砂を多く含む	良好	1/6	口縁部横挽で、外表面荒削り、内面荒削り。
497	麦F	16N(22)	19.6・--・-	灰褐色	砂粒を含む	普通	1/6	内外面横挽で。
498	麦F	16N(10)	23.8・--・-	褐色	細砂を含む	良好	1/5	口縁部横挽で。
499	麦G	20O(12)	19.0・--・-	明褐色	細砂を多く含む	良好	1/8	口縁部横挽で、内面刷毛目→削る。
500	麦G	15O(8)	17.0・--・-	灰褐色	細砂を含む	良好	1/6	口縁部および内外面、ロクロ無で。
501	麦G	15N(20)	20.2・--・-	灰褐色	砂粒を含む	不良	1/3	口縁部ロクロ無で、内面叩き→荒削りで、外表面叩き→荒削り。
502	麦G	16N(21)	24.6・--・-	灰褐色	砂粒を含む	普通	1/7	口縁部横挽で。
503	麦G	15N(15)	33.3・--・-	明褐色	細砂を含む	普通	1/8	口縁部横挽で。
504	麦H	16N(16)	20.0・--・-	灰褐色	細砂を含む	普通	1/8	内外面横挽で。
505	麦H	14L(19)	19.8・--・-	明褐色	細砂を含む	良好	1/10	内外面横挽で。
506	麦H	16N(18)	18.6・--・-	灰褐色	細砂を含む	良好	1/7	内外面横挽で。
507	麦H	14L(23)	24.0・--・-	灰褐色	白色砂を含む	良好	1/6	口縁部横挽で、内面削で、外表面荒削り。
508	麦C 2	15O(9)	18.0・--・-	明褐色	細砂を多く含む	良好	1/10	口縁部横挽で、内外面刷毛目→削る。輪抜孔あり。
509	麦A 4	14O(23)	16.0・--・-	灰褐色	緻密	普通	1/5	内外面ロクロ無で、内面刷毛目を削て削す。
510	麦C 2	15N(4)	20.4・--・-	明褐色	細砂を多く含む	良好	1/4	体部、外表面磨き、内面刷毛目無。
511	台付短頸壺	19P(15)	9.7・19.7・10.6	茶褐色	細砂を少量含む	普通	1/2	口縁部横挽で、外表面粗い窓削で、内面磨き。
512	壺	14L(15)	--・--・12.6	褐色	細砂を含む	良好	底1/2	外表面無で、内面磨き→墨色処理。
513	壺A	15O(24)	--・--・8.5	褐色	細砂を含む	良好	1/3	外表面無で、内面磨き。
514	壺B	19Q(25)	--・--・21.0	茶褐色	細砂を少量含む	良好	4/5	底部横挽で、外表面横挽で。
515	壺B	16P(19)	29.0・--・-	灰褐色	砂粒を含む	普通	1/8	口縁部横挽で、外表面荒削り、内面刷毛目→削る。
516	壺B	20Q(7)	34.0・--・-	褐色	砂粒を含む	普通	1/6	口縁部横挽で、外表面荒削り、内面無。
517	壺B	20Q(76)	34.8・--・-	褐色	砂粒を含む	普通	1/6	口縁部横挽で、外表面叩き→削り、内面刷毛目。
518	羽釜A	14N(18)	17.4・--・-	暗灰褐色	細砂を含む	不良	1/6	口縁部横挽で、体部外表面窓削前。
519	羽釜A	15O(19)	17.6・--・-	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/6	口縁部横挽で、体部外表面窓削前。
520	羽釜A	14N(10)	19.8・--・-	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/8	口縁部横挽で、体部外表面窓削前。

No.	器種	出土地区 遺構	決量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
521	土師器 羽釜A	15O(21)	19.0・—・—	灰褐色	砂粒を少量含む	不良	1/8	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
522	" 羽釜A	14M(5)	—・—・—	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/8	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り、外側に焦付巻。
523	" 羽釜B	15O(18)	18.0・—・—	灰褐色	緻密	良好	1/8	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
524	" 羽釜B	15O(14)	17.6・—・—	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/6	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
525	" 羽釜B	15P(20)	21.0・—・—	暗褐色	砂粒を多く含む	良好	1/6	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
526	" 羽釜B	14N(7)	14.6・—・—	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/8	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
527	" 羽釜B	15N(23)	15.4・—・—	灰褐色	緻密	不良	1/10	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り、内面に一部刷毛目。
528	" 羽釜B	14N(13)	14.8・—・—	灰褐色	緻密	不良	1/6	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
529	" 羽釜B	15O(13)	18.0・—・—	茶褐色	緻密	不良	1/10	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
530	" 羽釜B	14N(23)	22.0・—・—	灰褐色	砂粒を多く含む	不良	1/12	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
531	" 羽釜B	14N(23)	20.8・—・—	灰褐色	砂粒を含む	普通	1/10	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
532	" 羽釜B	14M(2)	22.4・—・—	暗褐色	砂粒を少量含む	普通	1/4	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
533	" 羽釜B	13N(25)	21.0・—・—	灰褐色	緻密	普通	1/6	口縁部横撫で。
534	" 羽釜C	16O(14)	18.0・—・—	灰褐色	緻密	不良	1/10	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
535	" 羽釜C	15L(6)	21.4・—・—	灰褐色	砂粒を少量含む	不良	1/8	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
536	" 羽釜C	15N(2)	—・—・—	茶褐色	砂粒を多く含む	不良	1/10	口縁部横撫で、体部外面継ぎ削り。
537	" 羽釜C	B区実探	17.4・—・—	茶褐色	緻密	不良	1/6	口縁部横撫で、外側削り。
538	" 羽釜C	14N(22)	20.0・—・—	灰褐色	砂粒を含む	不良	1/10	口縁部横撫で、外側削り。
539	" 杯B 1	14L(11)	10.3・2.9・5.4	暗褐色	緻密	良好	3/4	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
540	" 杯B 1	14L(7)	10.4・3.5・4.6	茶褐色	細砂を含む	普通	1/4	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
541	" 杯B 1	14L(16)	10.5・2.9・4.8	暗褐色	細砂を含む	良好	1/4	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
542	" 杯B 1	16O(18)	10.4・—・—	茶褐色	緻密	不良	1/6	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
543	" 杯B 2	16P(5)	11.5・4.2・6.0	茶褐色	緻密	良好	完形	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
544	" 杯B 2	16O(18)	11.7・4.3・5.2	茶褐色	緻密	良好	1/3	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
545	" 杯B 2	13L(10)	11.8・4.1・7.8	茶褐色	細砂を含む	良好	1/2	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
546	" 杯B 2	15O(15)	12.4・4.2・6.2	茶褐色	細砂を含む	良好	1/2	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
547	" 杯B 2	15N(4)	12.5・3.7・6.0	灰褐色	細砂を含む	良好	1/5	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
548	" 杯B 2	14M(16)	12.6・3.9・5.8	明褐色	細砂を含む	良好	1/2	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
549	" 杯B 2	14L(16)	13.2・3.9・4.9	暗褐色	細砂を含む	良好	1/10	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
550	" 杯B 2	13L(4)	12.6・3.7・5.6	暗褐色	細砂を含む	良好	1/3	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
551	" 杯B 2	15O(20)	12.9・4.0・5.6	褐色	緻密	普通	1/4	体部ロクロ無で、底部回転系切り。
552	" 杯B 2	15M(8)	12.4・3.4・5.0	明褐色	細砂を含む	良好	1/4	体部ロクロ無で、底部回転系切り。

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
553	土師器 瓶B 2	15N(9)	13.5・3.7・6.5	明褐色	細砂を含む	良好	1/5	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
554	ク 瓶B 2	20O(22)	14.4・3.9・7.4	灰褐色	細砂を含む	普通	1/2	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
555	ク 瓶B 3	19O(22)	13.9・3.7・6.7	褐色	細砂を含む	普通	1/4	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
556	ク 瓶B 4	20O(13)	12.9・3.5・5.9	褐色	細砂を含む	普通	1/4	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
557	ク 瓶B 3	20O(6)	13.5・3.7・5.6	明褐色	緻密	普通	1/3	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
558	ク 瓶B 3	14N(19)	13.4・3.7・5.6	明褐色	緻密	良好	1/4	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
559	ク 瓶B 2	15M(2)	12.4・4.6・5.1	褐色	細砂を含む	良好	1/2	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
560	ク 瓶B 2	14L(14)	13.0・3.7・6.1	暗褐色	細砂を含む	良好	1/10	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
561	ク 瓶B 2	19N(17)	12.2・3.1・6.0	褐色	細砂を含む	良好	1/4	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
562	ク 瓶B 2	19N(3)	13.0・4.2・5.0	明褐色	細砂を含む	普通	完形	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
563	ク 瓶B 2	14M(3)	12.6・4.2・5.4	灰褐色	細砂を多く含む	良好	1/4	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
564	ク 瓶B 2	15N(12)	12.8・4.1・5.3	明褐色	細砂を多く含む	普通	1/3	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
565	ク 瓶A 2	19P(20)	12.0・4.1・5.8	褐色	砂粒を含む	普通	完形	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
566	ク 瓶A 2	19O(9)	11.8・3.9・6.8	明褐色	砂粒を含む	普通	1/5	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
567	ク 瓶A 2	15O(13)	12.6・3.7・5.2	明褐色	砂粒を含む	普通	完形	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
568	ク 瓶A 2	14L(6)	12.4・3.6・5.1	明褐色	細砂を含む	良好	完形	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
569	ク 瓶A 1	15N(13)	13.2・4.7・6.1	明褐色	緻密	良好	1/6	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
570	ク 瓶A 1	15N(15)	13.0・5.0・4.8	明褐色	砂粒を含む	普通	1/3	体部ロクロ無で、底部回転糸切り。
571	ク 瓶D 1	14M(3)	13.4・3.9・5.3	褐色	砂粒を含む	良好	1/2	体部ロクロ無で、内面窓磨き→黒色処理。
572	ク 瓶B 2	15L(2)	15.0・--・--	褐色	緻密	良好	1/6	体部ロクロ無で、内面窓磨き→黒色処理。
573	ク 瓶B 2	15N(2)	17.1・--・--	灰褐色	緻密	良好	1/10	体部ロクロ無で、内面窓磨き→黒色処理。
574	ク 瓶	15N(11)	13.5・--・--	褐色	細砂を含む	良好	1/5	体部ロクロ無で、内面窓磨き→黒色処理。
575	ク 瓶	15O(12)	--・--・6.0	灰褐色	緻密	良好	底部	底部剥り、外表面で、内面窓磨き→黒色処理。
576	ク 瓶B 2	16P(23)	16.8・--・--	褐色	細砂を含む	良好	1/3	口縁部剥離で、外表面で、内面窓磨き→黒色処理。
577	ク 瓶C	19S(14)	(13.0・(5.7)・5.6	褐色	細砂を含む	普通	1/3	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。
578	ク 瓶	15M(24)	--・--・5.2	褐色	細砂を含む	良好	底部	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。底部回転糸切り。
579	ク 瓶	14M(21)	--・--・6.5	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。底部回転糸切り。
580	ク 瓶	14L(17)	--・--・5.5	灰褐色	細砂を含む	良好	底部1/2	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。底部回転糸切り。
581	ク 瓶	16O(6)	--・--・5.8	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。底部回転糸切り。
582	ク 瓶C	15L(12)	14.8・--・--	褐色	緻密	普通	1/4	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。高台貼り付け。
583	ク 瓶D	13L(14)	--・--・6.0	褐色	細砂を含む	良好	底部	外表面剥離で、内面窓磨き→黒色処理。高台貼り付け。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・基高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴	
584	土器	杯D	14L(10)	—・—・5.6	明褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
585	"	杯D	15N(1)	—・—・7.4	褐色	細砂を含む	普通	底1/2	底部底切り、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
586	"	杯D	14N(19)	—・—・5.0	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
587	"	杯D	16P(20)	—・—・5.7	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
588	"	杯D	14M(8)	—・—・6.4	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
589	"	杯D	13L(15)	—・—・6.2	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
590	"	杯D	14L(16)	—・—・7.0	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
591	"	杯D 2	13L(15)	10.8・4.6・6.4	褐色	緻密	良好	完形	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
592	"	杯D 2	15L(1)	10.6・5.0・5.8	褐色	細砂を含む	良好	完形	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
593	"	杯D	13L(17)	—・—・6.1	明褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
594	"	杯D	14L(17)	—・—・7.2	明褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
595	"	杯D	13L(18)	—・—・6.8	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
596	"	杯D	14L(24)	—・—・7.6	灰褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
597	"	杯D	14L(17)	—・—・6.2	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
598	"	杯D	14L(19)	—・—・5.6	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
599	"	碗B 3	14L(16)	—・—・8.2	暗褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
600	"	杯D	14L(16)	—・—・6.2	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
601	"	碗B 3	14L(15)	—・—・7.6	明褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
602	"	杯D	14L(17)	—・—・7.4	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
603	"	杯D	14L(24)	—・—・7.8	褐色	細砂を含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
604	"	杯D	13L(10)	—・—・8.0	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
605	"	杯D	14L(10)	—・—・7.8	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
606	"	杯D	14L(8)	—・—・6.8	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
607	"	杯D	13L(14)	—・—・7.2	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	ロクロ施で、内面笠磨き→黒色処理。高台貼り付け。
608	"	杯A	13L(14)	—・—・7.6	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、高台貼り付け。
609	"	杯A	14L(11)	—・—・7.8	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、内面磨き、高台貼り付け。
610	"	杯A	14L(15)	—・—・6.6	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、内面磨き、高台貼り付け。
611	"	杯A	13L(15)	—・—・8.0	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、高台貼り付け。
612	"	杯A	14L(24)	—・—・7.8	褐色	細砂を少量含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、高台貼り付け。
613	"	杯A	14L(16)	—・—・7.6	褐色	細砂を含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、高台貼り付け。
614	"	杯A	14L(16)	—・—・7.6	褐色	細砂を含む	良好	底部	内外面ロクロ施で、高台貼り付け。

No	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
615	土器	杯A	13L(15)	— * — * 7.8	褐色	細砂を含む	良好	底部 内外面クロコロ施で、高台貼り付け。
616	ク	杯A	13L(14)	— * — * 7.6	褐色	細砂を含む	良好	底部 内外面クロコロ施で、高台貼り付け。
617	ク	杯A	14L(11)	— * — * 7.6	褐色	細砂を含む	良好	底部 内外面クロコロ施で、高台貼り付け。
618	ク	杯A	14L(10)	— * — * 7.6	褐色	細砂を含む	良好	底部 内外面クロコロ施で、高台貼り付け。
619	ク	杯A	15L(12)	— * — * 7.4	褐色	細砂を含む	良好	底部 内外面クロコロ施で、高台貼り付け。
620	ク	杯B	14L(6)	— * — * 6.9	灰褐色	細砂を含む	良好	底1/3 底部回転糸切り、側か?
621	ク	杯B	16O(13)	— * — * 5.8	灰褐色	細砂を含む	良好	底1/4 底部回転糸切り。
622	ク	甕?	18P(24)	20.7 * — —	褐色	緻密	良好	頸部下半箝削り、口縁部横擦で。
623	ク	壺	19P(21)	— * — * 5.5	褐色	砂粒を含む	良好	底1/4 外面窓削り、内面擦で。
624	ク	壺	15O(13)	— * — * 8.5	灰褐色	砂粒を含む	良好	底1/2 外面窓削り、内面擦で、蓋の底?
625	ク	甕	16O(2)	— * — * 6.4	明褐色	砂粒を含む	不良	外面叩き痕・内面は調整不明。
626	ク	羽釜	15M(25)	— * — * 8.2	褐色	砂粒を含む	不良	底部回転糸切りか? 内面擦で。
627	ク	羽釜	14L(8)	— * — * 11.8	褐色	砂粒を含む	不良	底4/5 外面窓削り→一部箝削り、内面箝削で。
628	ク	羽釜	16O(21)	— * — * 9.0	茶褐色	細砂を含む	良好	底1/2 外面窓削り、内面刷毛目、底部箝削で。
629	ク	甕	16O(28)	— * — * 7.6	茶褐色	細砂を含む	普通	底2/3 外面窓削り、内面刷毛目、底部箝削で。
630	ク	甕	15O(21)	— * — * 10.0	褐色	細砂を含む	普通	底1/3 外面擦で、底部箝削り。
631	ク	甕	16O(21)	— * — * 9.0	茶褐色	緻密	普通	底1/2 外面擦で、内面箝削で。
632	須恵器	甕	15M(25)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面平行叩き→カキ目、内面同心円文(大)。
633	ク	甕	16P(9)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面細かい格子叩き、内面同心円文(大)。
634	ク	甕	14O(23)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面細かい格子叩き、内面同心円文。
635	ク	甕	16P(23)	— * — * —	暗灰色	緻密	良好	— 外面格子叩き→カキ目、内面同心円文(大)木目。
636	ク	甕	16P(25)	— * — * —	暗灰色	緻密	良好	— 外面格子叩き、内面同心円文→平行叩き。
637	ク	甕	16O(19)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面格子叩き、内面同心円文→平行叩き。
638	ク	甕	14N(14)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面長方形格子叩き→カキ目、内面粗い同心円文。
639	ク	甕	14O(25)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面格子叩き、内面木目のある放射状叩き。
640	ク	甕	15N(12)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面平行叩き→擦で、内面粗い同心円文→カキ目。
641	ク	甕	14O(23)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面細かい平行叩き、内面平行叩き。
642	ク	甕	14N(23)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面細かい平行叩き(木目)、内面同心円文。
643	ク	甕	15O(22)	— * — * —	灰色	緻密	良好	— 外面格子叩き、内面同心円文(2種)。
644	ク	甕	15O(12)	— * — * —	暗灰色	緻密	良好	— 外面平行叩き→擦で、内面同心円文→擦で。

第4表 墨書き器・刻書き器観察表

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
1	須恵器 杯A 1	14L(23)	11.0・5.7・4.2	灰色	細砂を多く含む	良好	1/5	底部回転窓切り、ロクロ施で、高台貼り付け。
2	〃 杯A 1	12M(22)	12.4・3.7・7.6	灰色	細砂を含む	良好	3/4	底部回転窓切り、ロクロ施で、高台貼り付け。
3	〃 杯A 1	12M(23)	—・—・8.4	灰色	細砂を含む	良好	底部	底部回転窓切り（内面にすり面あり）。
4	土器器 杯	15M(14)	—・—・6.0	褐色	細砂を含む	良好	底1/2	ロクロ施で、底部回転窓切り。
5	〃 杯	13M(25)	—・—・5.8	灰色	砂粒を多く含む	不良	底部	ロクロ施で、底部回転窓切り。
6	〃 杯	13M(25)	13.0・4.0・6.0	灰褐色	緻密	良好	底1/10	底部回転窓切り、内面窓磨き。
7	〃 杯	13M(1)	—・—・5.6	灰褐色	緻密	良好	底1/2	底部窓削り。
8	〃 杯	14N(5)	—・—・6.0	暗灰色	砂粒を含む	不良	底部	底部窓切り、内面窓磨き、内黒土添か？
9	〃 杯	13M(14)	—・—・—	茶褐色	緻密	良好	—	内面窓磨き。
10	〃 杯	16Q(25)	—・—・—	茶褐色	細砂を含む	良好	—	ロクロ施で。
11	〃 杯	13M(8)	—・—・—	茶褐色	緻密	良好	—	内面窓磨き。

第5表 転用窓観察表

No.	器種	出土地区 遺構	法量(cm) 口径・器高・底径	色調	胎土	焼成	遺存率	手法の特徴
1	灰陶器 杯	S X20	—・—・8.0	灰白色	緻密	良好	2/3	ロクロ施で、底部回転窓切り。
2	須恵器 杯	16P(7)	—・—・6.4	灰色	緻密	良好	—	底部窓切り。
3	〃 杯	12M(23)	—・—・8.4	灰色	細砂を含む	良好	—	底部回転窓切り（底面に墨書き）。
4	〃 杯	14M(3)	—・—・7.2	灰色	緻密	良好	—	底部窓切り。
5	〃 杯	14N(10)	—・—・7.2	灰色	緻密	良好	1/2	底部回転窓切り。
6	〃 盖B	15O(12)	つまみ縁 2.6	灰色	緻密	良好	3/4	天井部窓削り。
7	〃 盖A	16N(1)	15.2・2.5・—	灰色	緻密	良好	—	天井部窓削り。
8	〃 見	14N(5)	—・—・—	灰色	緻密	良好	—	外表面格子叩き、内面放射状叩き。
9	〃 見	14O(24)	—・—・—	灰色	緻密	良好	—	外表面格子叩き、内面放射状叩き。

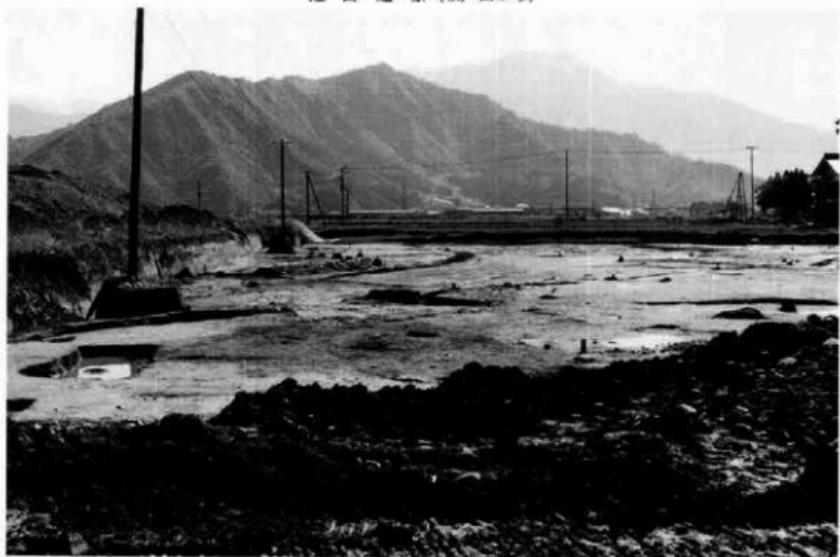


周辺の地形（空中写真は国土地理院発行 CCB-76-5 C8-49）

図版 2



遠 跡 遠 景 (坂戸山から)



A 地 区 全 景 (北西から)



A 区 全景 西半分(南西から)

図版 4



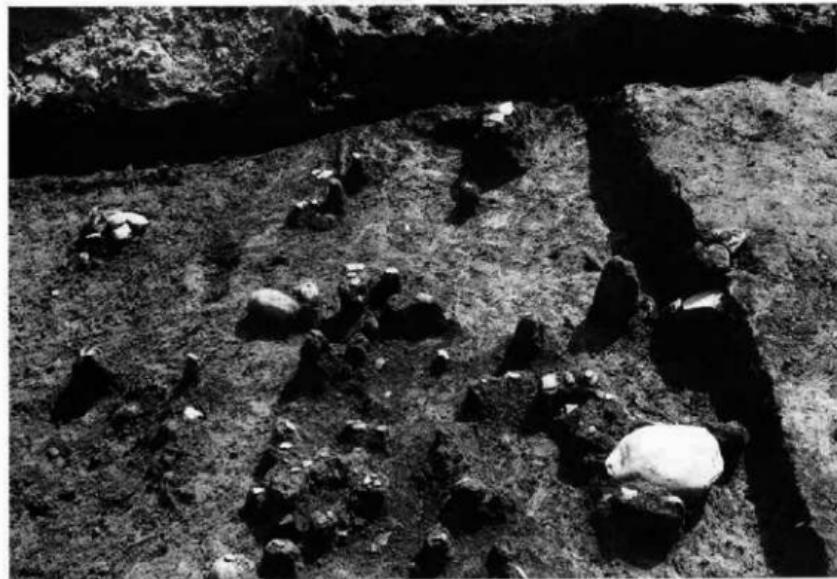
引き渡し部分 完掘状況（南東から）



平安時代遺構面 完掘状況（北から）



C地区 東側側道 発掘風景（北から）



C地区 東側側道 遺物出土状況（西から）



C地区 側道 SK 29 (縄文時代) 完掘状況 (北から)



C地区 側道 SK 29 南西土層断面 (北から)



SD 1 土層断面（南西から）  
(A 地区 北壁土層断面)



SD 4 完掘状況（西から）

図版 8



B地区 古墳時代中期の遺構全景（南から）



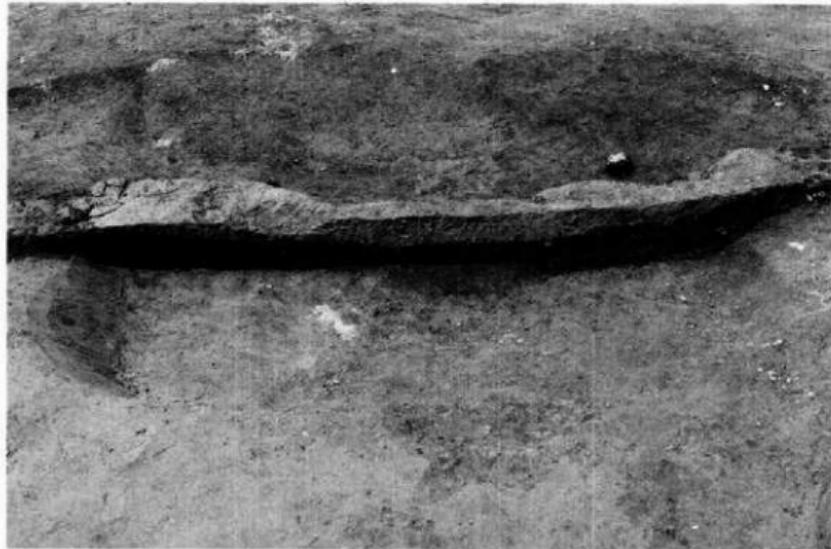
C地区 SD13 検出状況



S I 12 土層断面（南西から）



S I 12 完掘状況（南西から）



S I 13 土層断面（北から）



S I 13 完掘状況（東から）

S I13 炉  
(南から)

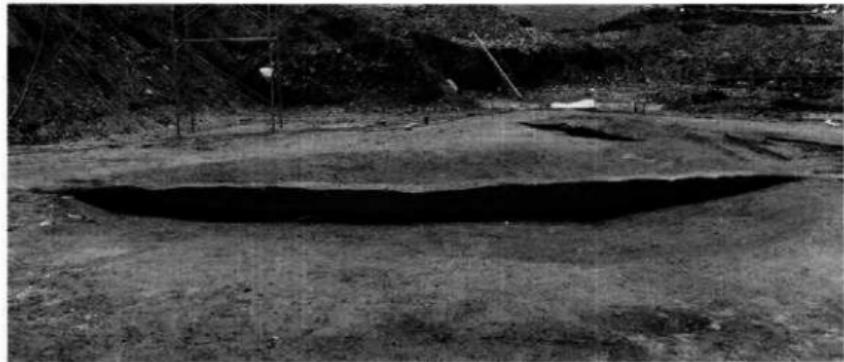


S I13 内 土壌  
土層断面  
(南西から)

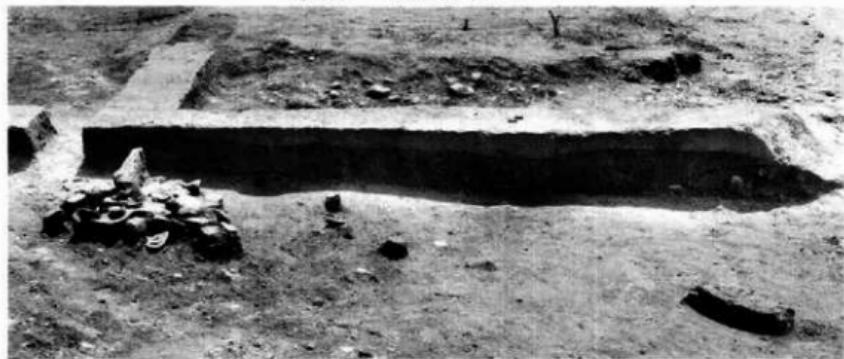


S X15 遺物出土状況

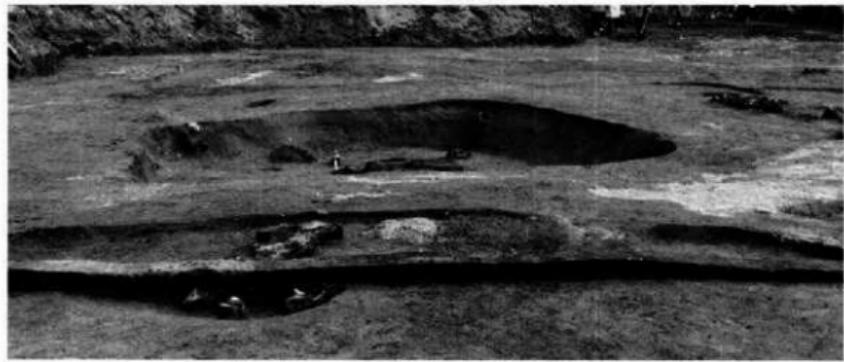




S X 14 土層断面（北から）



S X 15 土層断面



S X 16 土層断面・奥はS I-12（南から）



S X 15 完壊状況（南から）



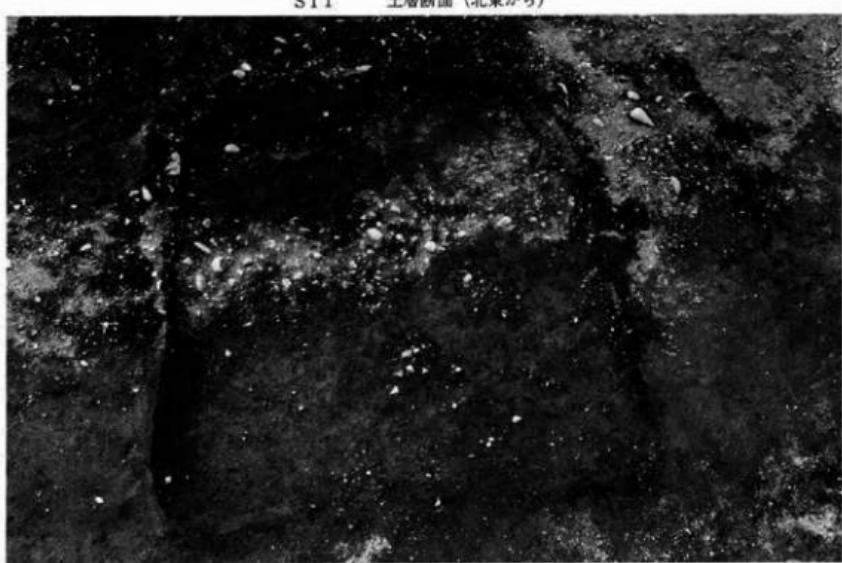
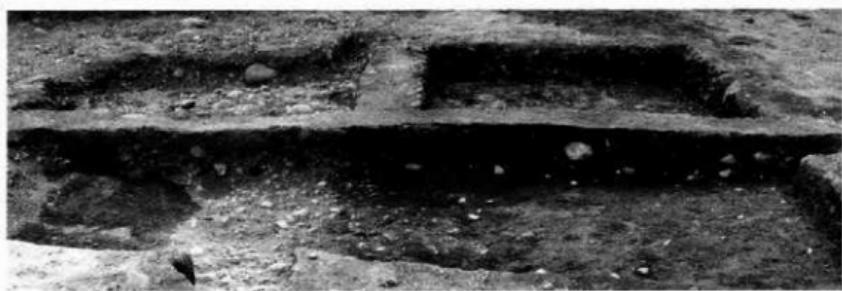
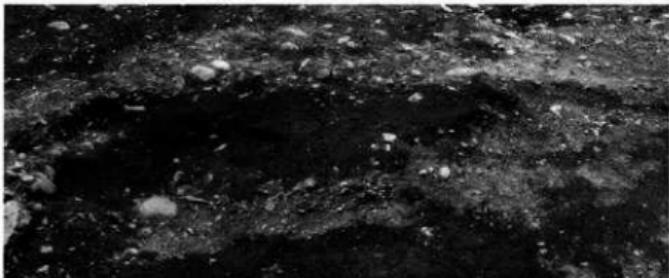
S X 17 完壊状況（南から）

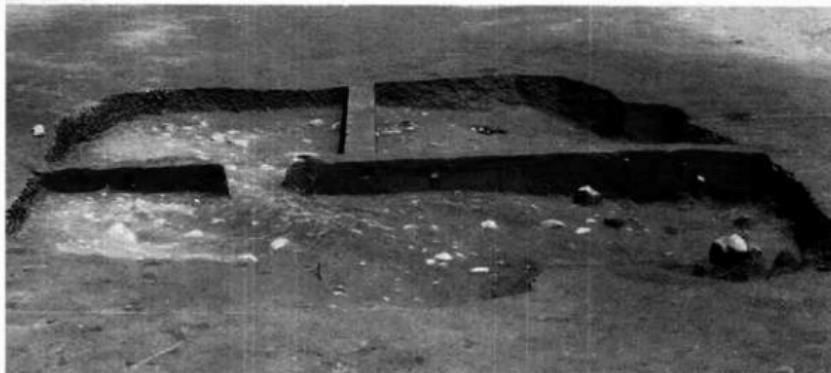


S X 18 完掘状況（南から）



S X 19 完掘状況（南から）

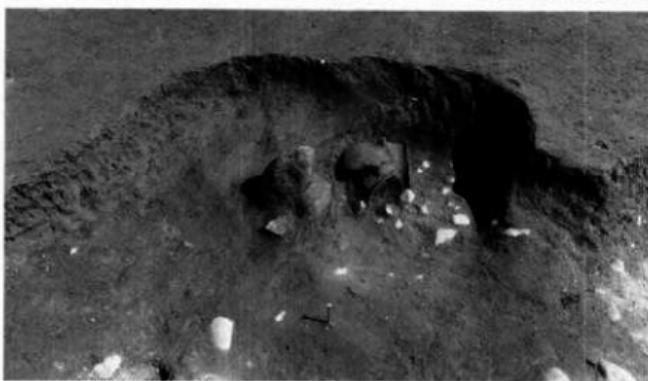




S I 2 土層断面  
(B-B')  
(南から)



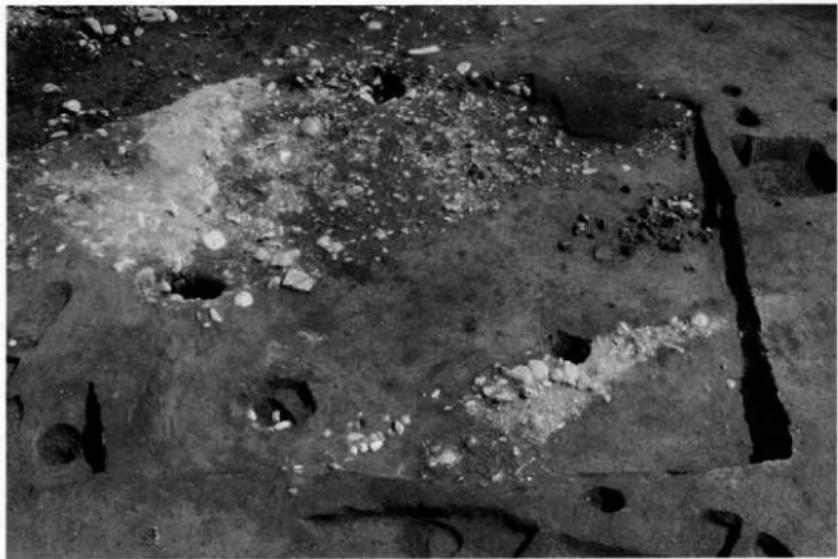
S I 2 窟検出状況  
(北から)



S I 2 窟完掘状況  
(北から)



S12 完掘状況（北から）



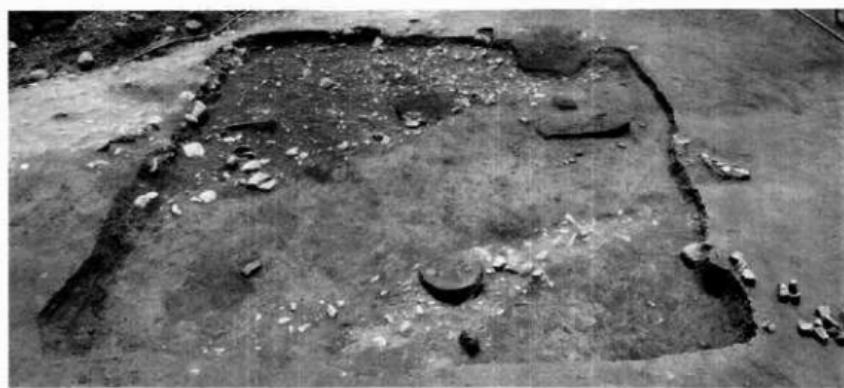
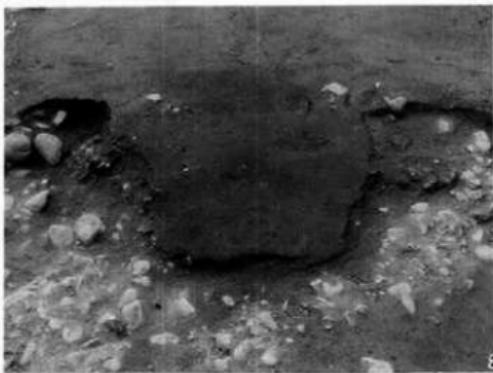
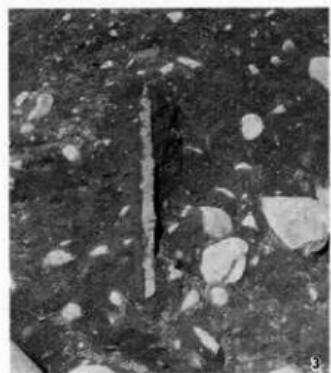
S13 完掘状況（北から）



① SI 3 下部土塊  
(SK 33)  
遺物出土状況  
(南から)

② SI 3 殻  
(西から)

③ 刺出土状況



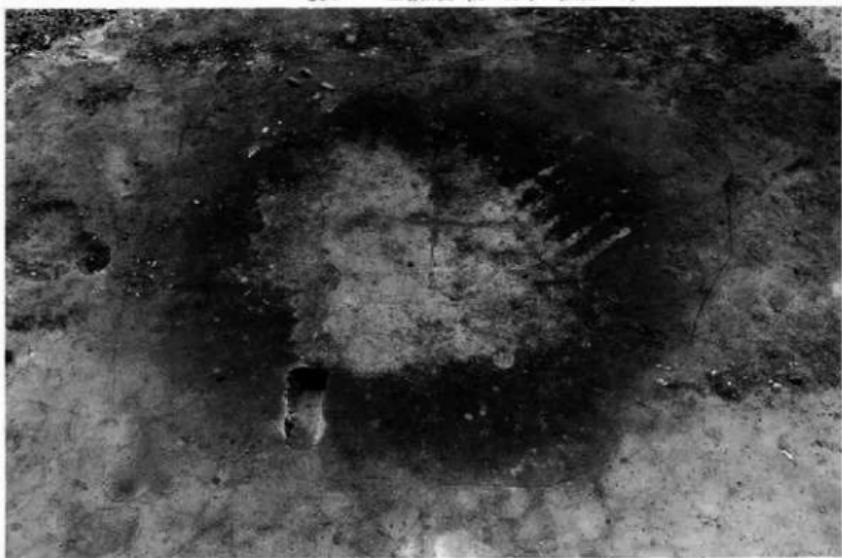
SI 3 遺物出土状況 (西から)



SI4 土層断面 (北東から)



SI4 土層断面 (A-A') (南西から)



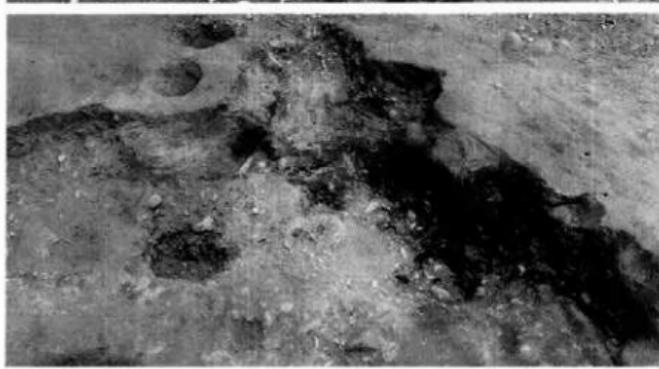
SI4 造構検出状況 (北西から)



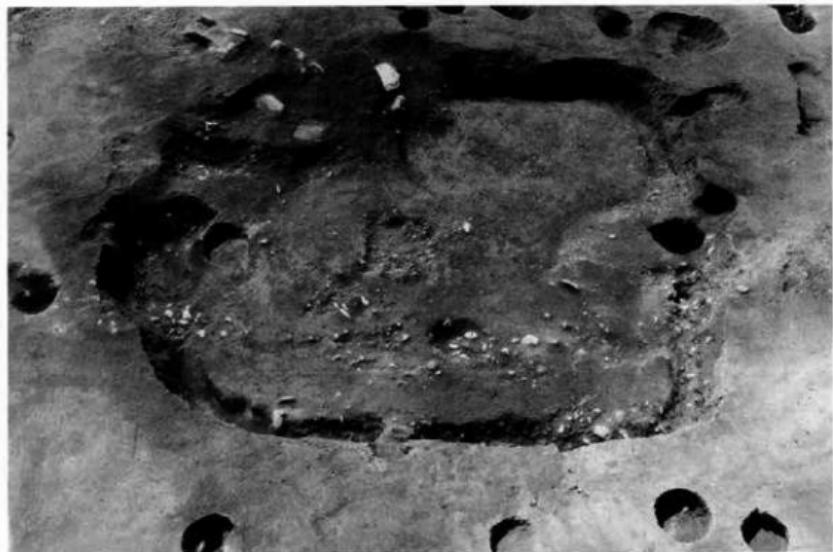
S14 窟  
調査前  
(南西から)



S14 窟  
完掘状況  
(南西から)



S14 窟  
掘り形完掘状況  
(南西から)



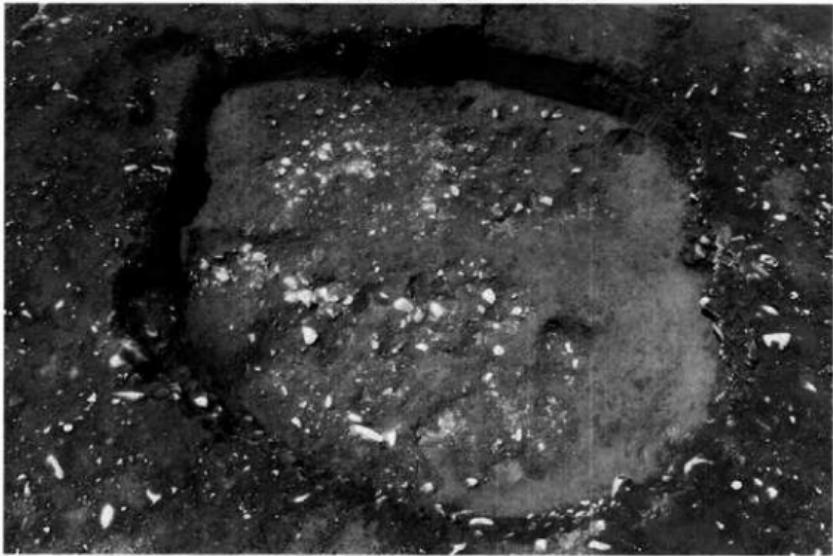
S14 完掘状況（北西から）



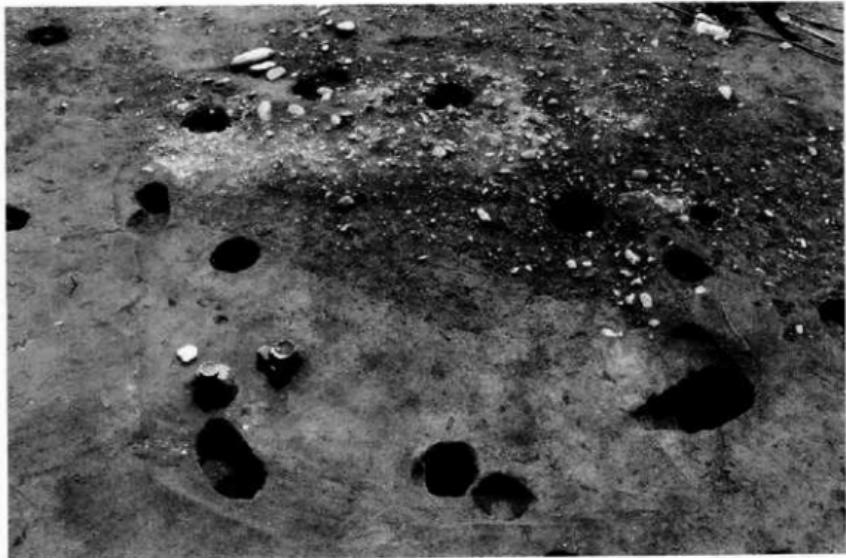
S15 完掘状況（南から）



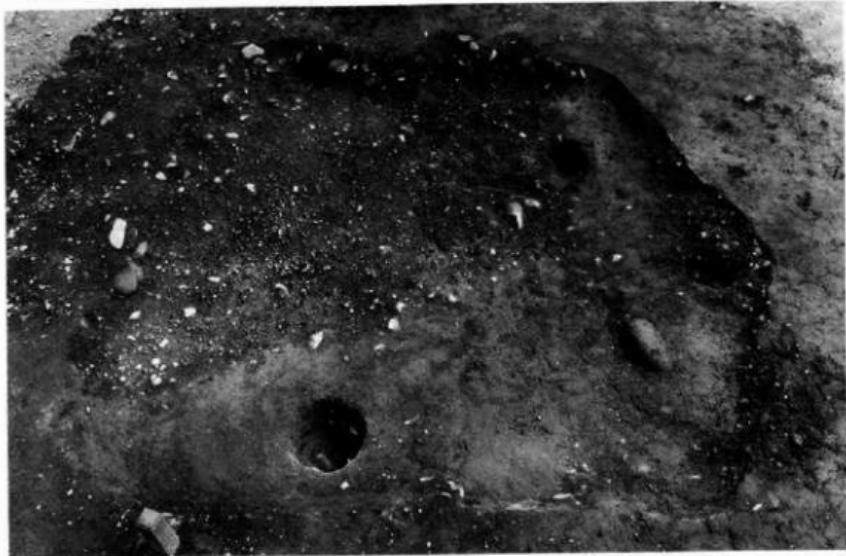
SI6 土層断面 (A-A') (北西から)



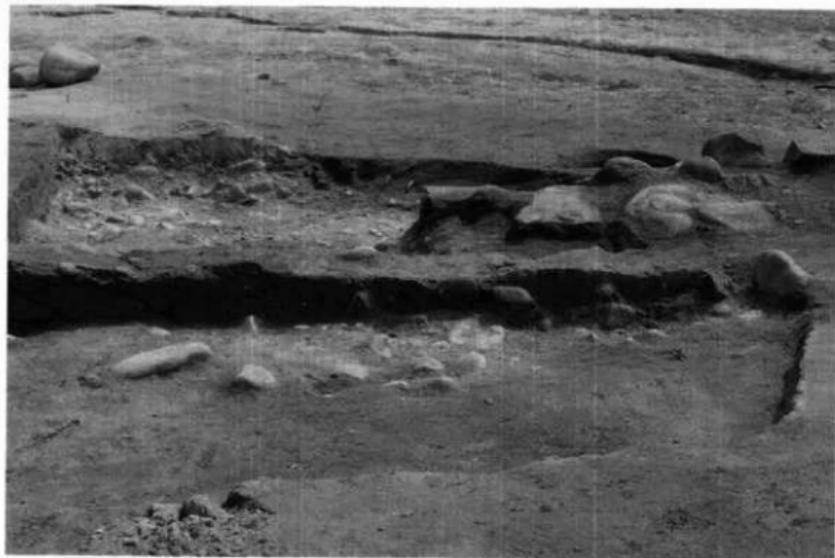
SI6 完掘状況 (南西から)



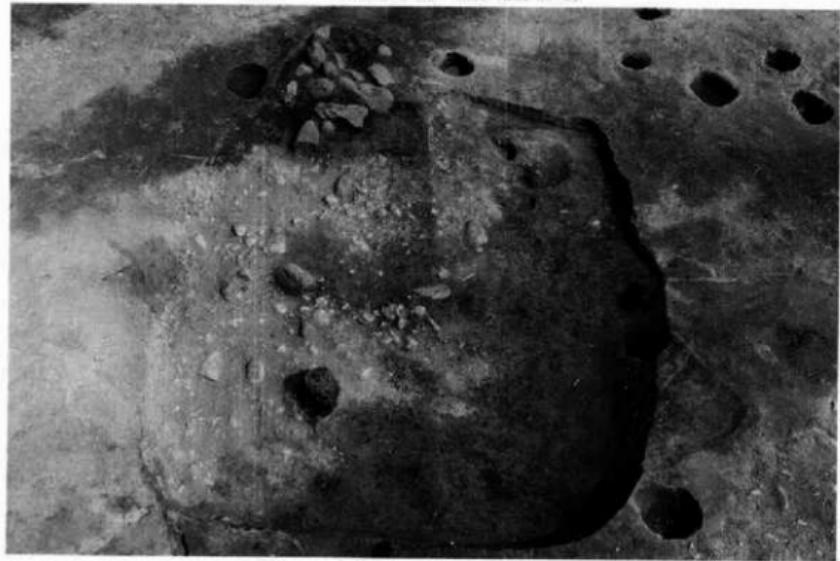
S I 8 完掘状況（西から）



S I 10 完掘状況（北から）



S I 7 土層断面 (A-A') (南西から)



S I 7 完掘状況 (竪未掘) (北西から)



S17 窓  
(北西から)



S17 窓  
土層断面  
(b-b')  
(西から)



S17 完掘状況  
(北西から)



S19 完搬状況



S19 瓦  
(北西から)



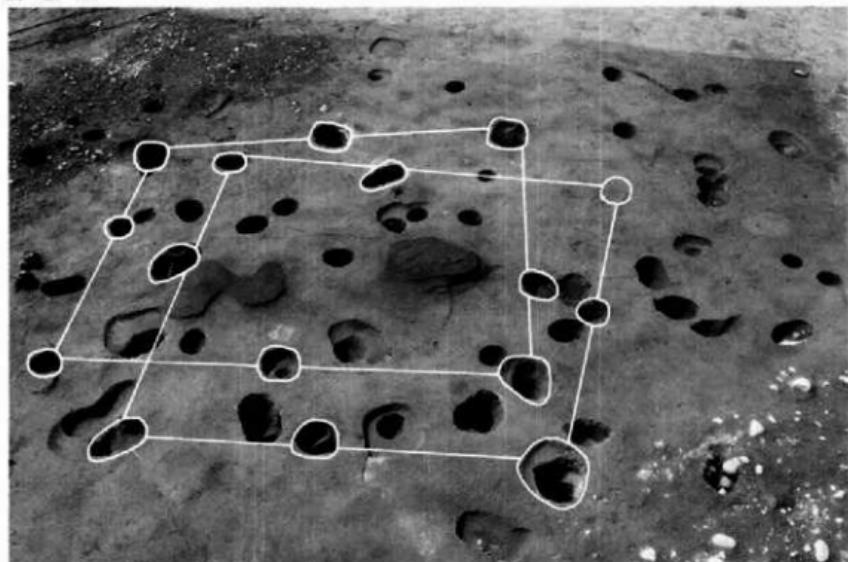
S19 瓦  
土器出土状況  
(北西から)



S B 1 完掘状況（南から）



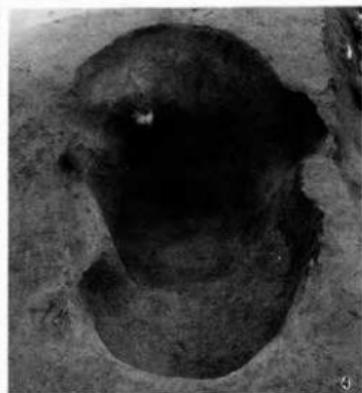
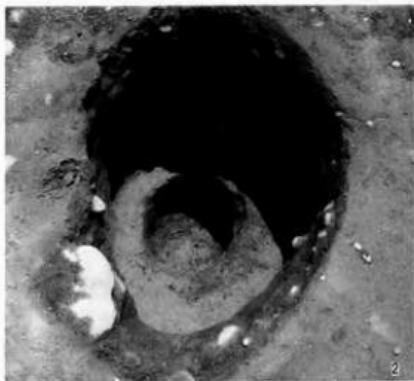
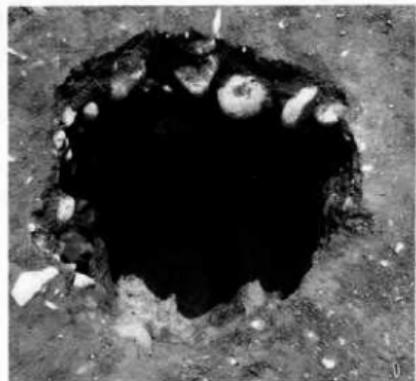
S B 2 完掘状況（南から）



SB3・SB4 (北上から)



SI3・SB6 周辺全景 (東から)



1. SB 1 柱穴 9

2. SB 2 柱穴 1

3. SB 2 柱穴 2

4. SB 2 柱穴 3

5. SB 2 柱穴 3

土層断面  
(西から)





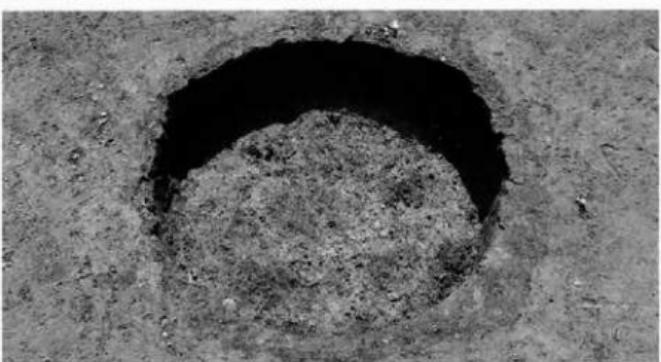
S X 21 土層断面（西から）



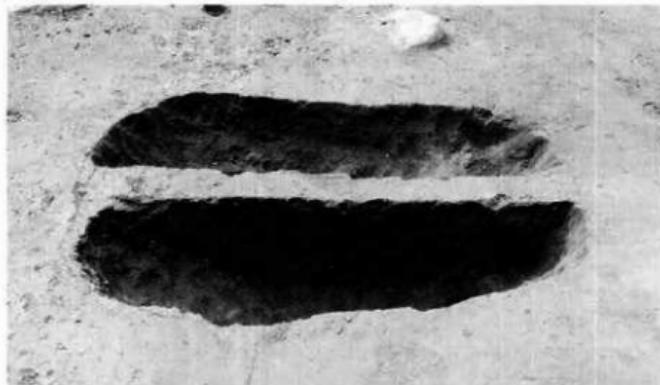
S X 21 完整状況（南から）



S X 22 土層断面（西から）



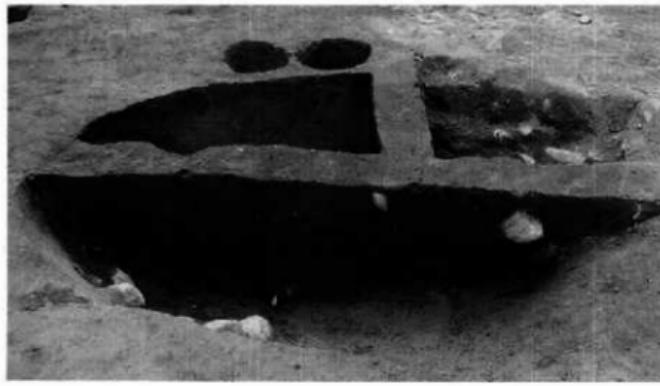
図版 32



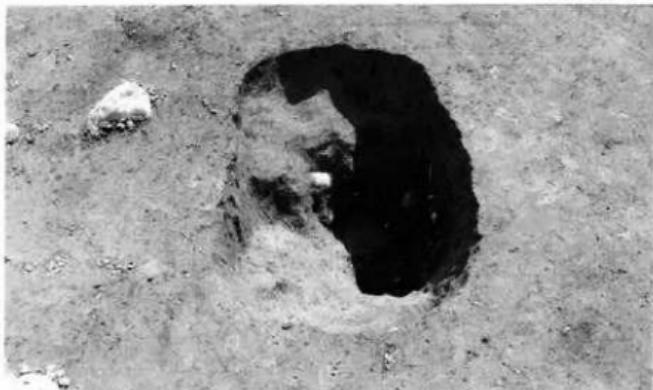
SK32 土層断面  
(北西から)



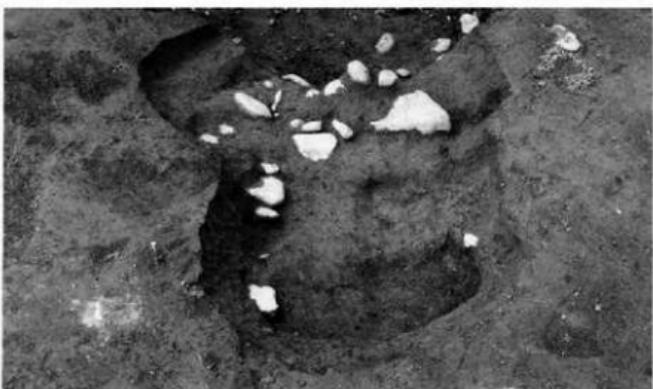
SK5 土層断面  
(北から)



SK18 土層断面  
(西から)



SK 32 完掘状況  
(東から)



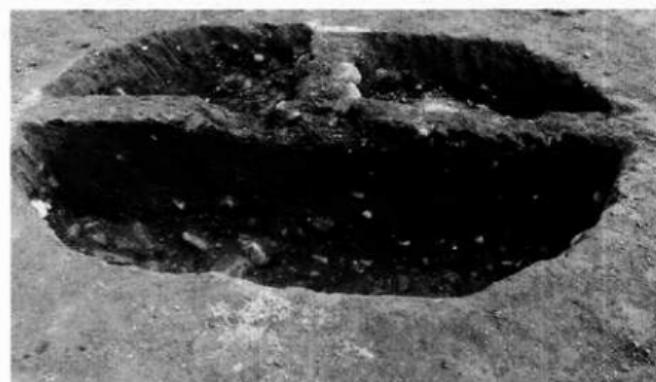
SK5 (奥)・SK6  
完掘状況  
(南から)



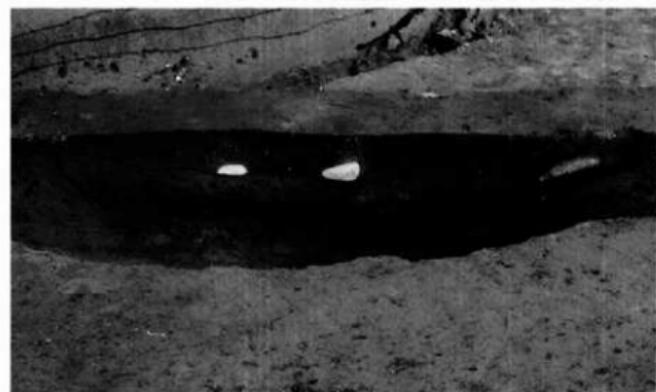
SK 18 完掘状況  
(南から)



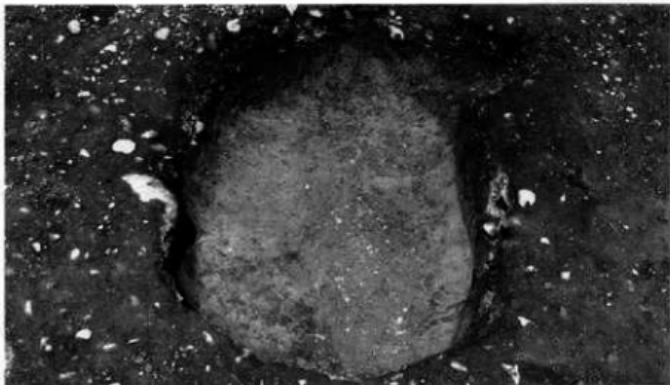
SK 15 土層断面  
(北東から)



SK 14 土層断面  
(南西から)



SK 1 土層断面  
(東から)



SK 15 完整状況  
(南から)

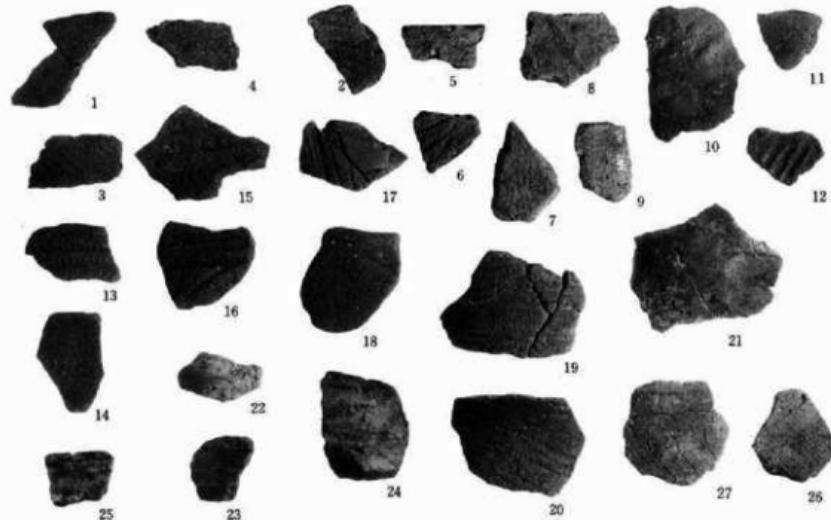


SK 14 完整状況  
(南から)

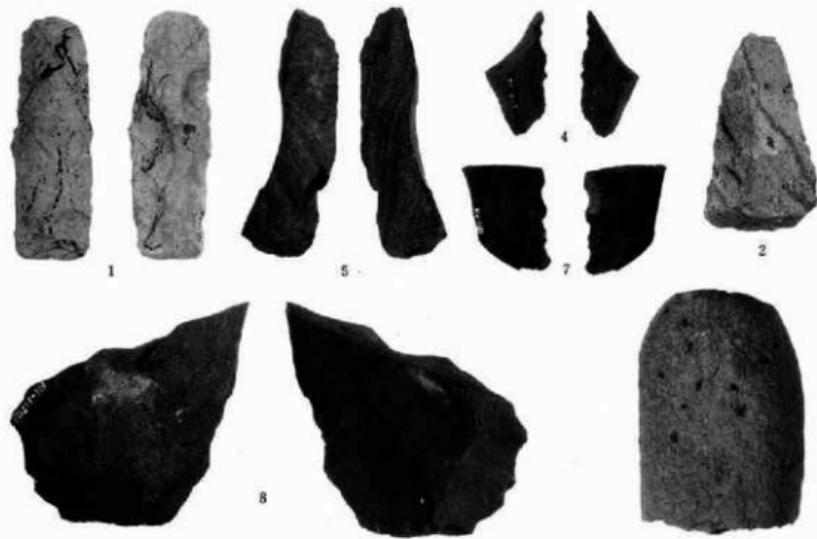


SK 24 完整状況  
(南から)

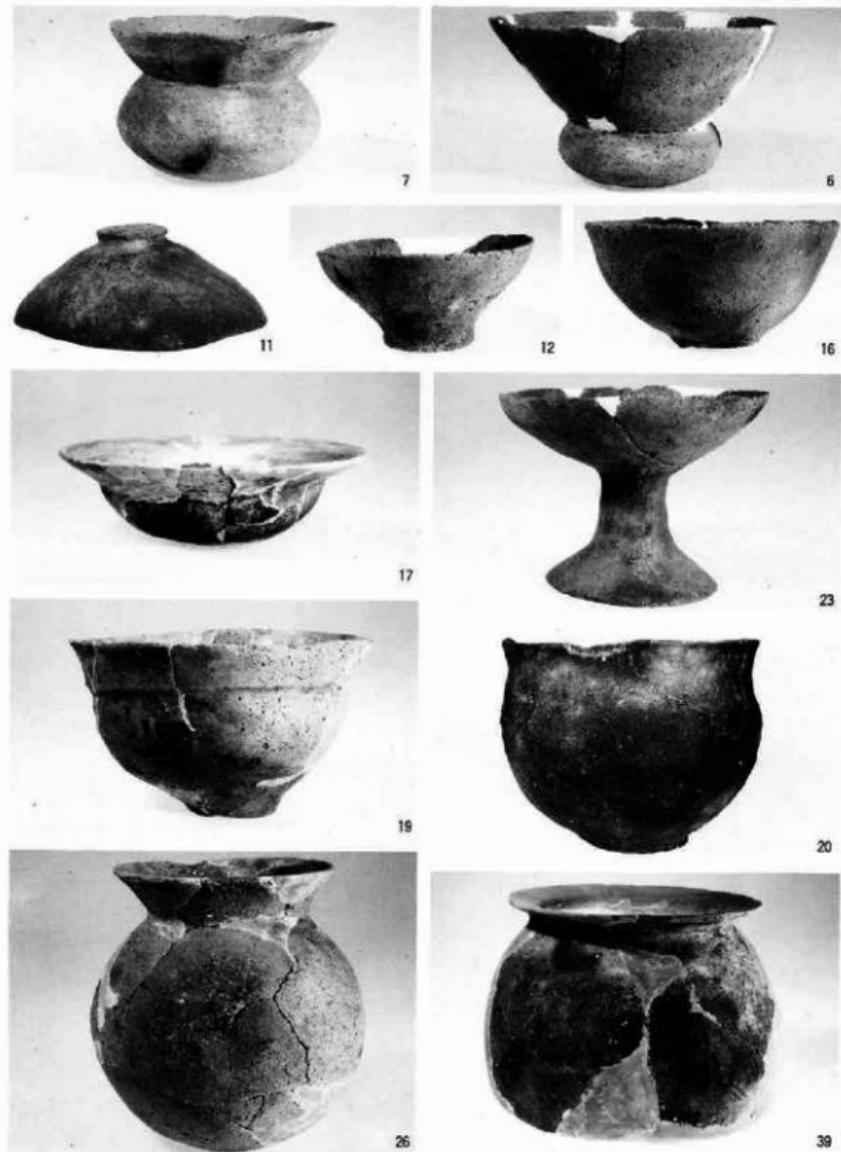
図版 36



縄文土器  $S = \frac{1}{2}$

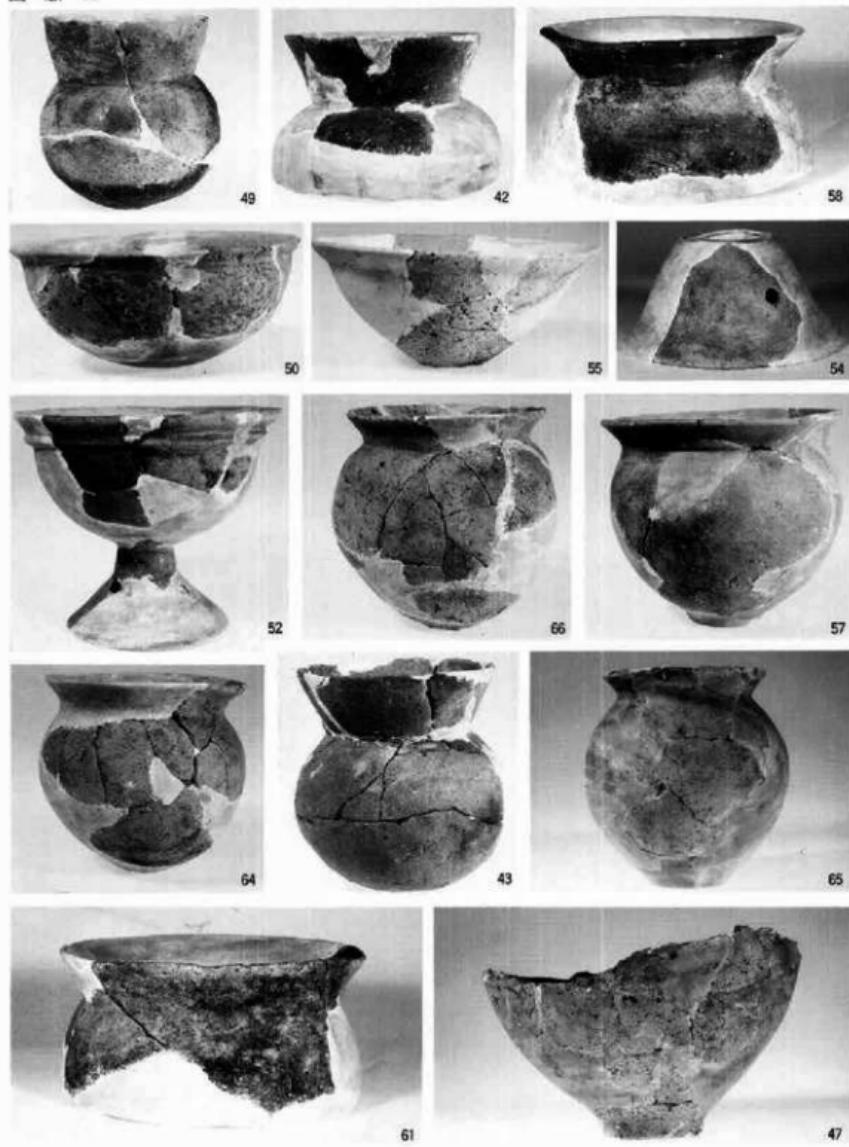


縄文時代石器  $S = \frac{1}{2}$



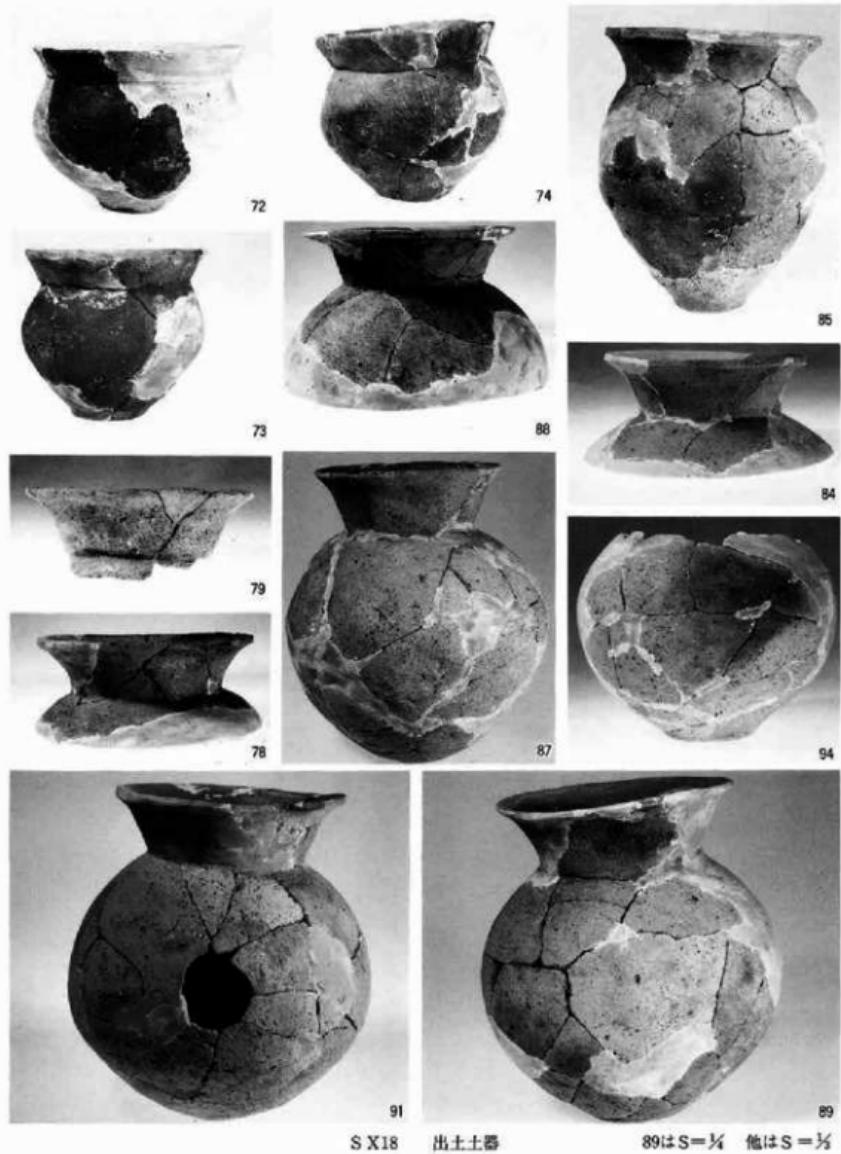
S 112 出土土器

7.6はS =  $\frac{1}{5}$ , 他はS =  $\frac{1}{4}$  26.39はS =  $\frac{1}{4}$

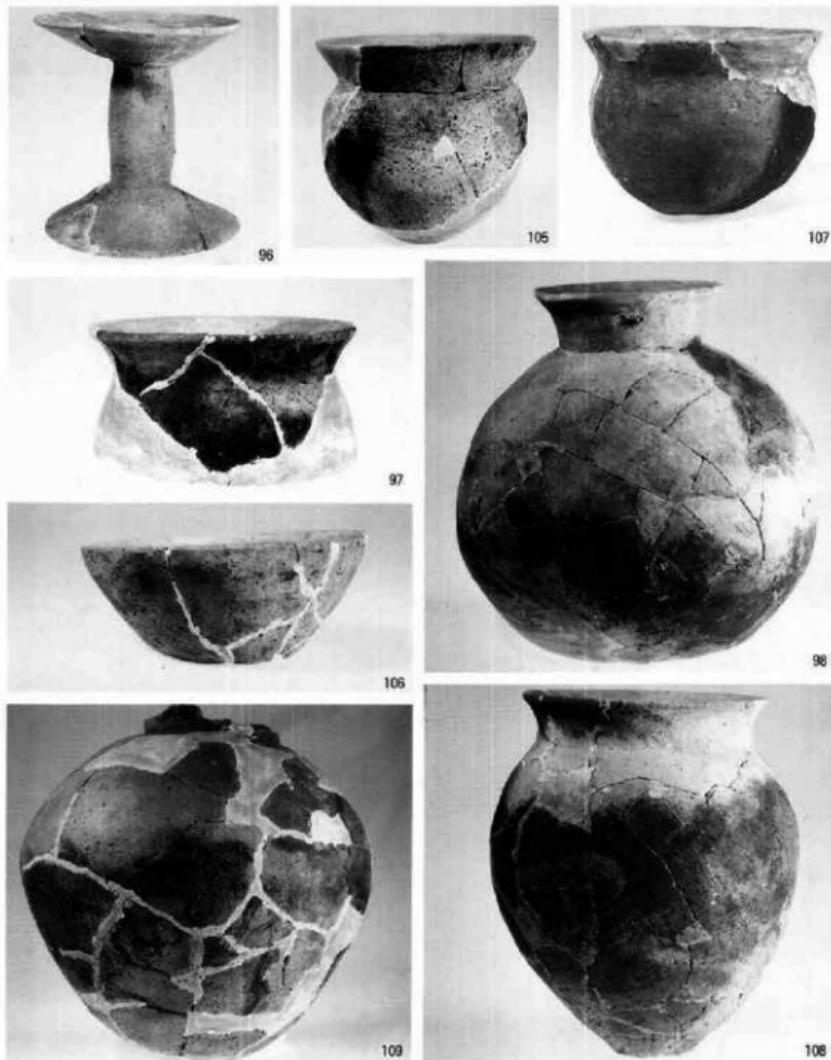


S I13・S X15・SX16 出土土器

42~50 は S = 1/2, 他は 1/4

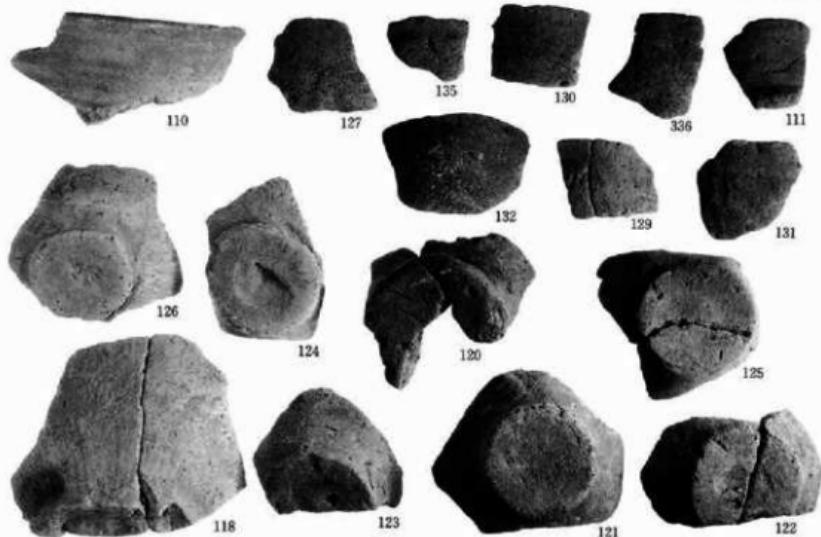


図版 40

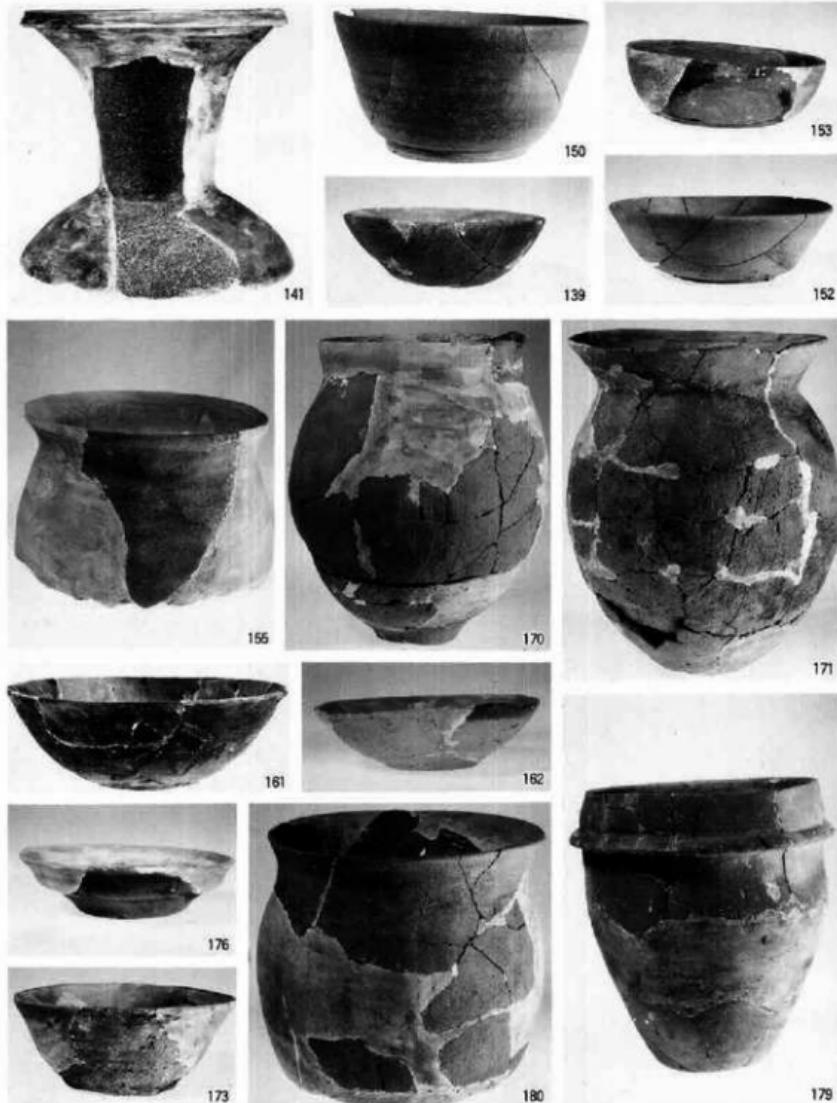


S X19 古墳時代中期遼河外出土土器

105・107はS =  $\frac{1}{2}$ , 98・108・109はS =  $\frac{1}{4}$  他はS =  $\frac{1}{2}$

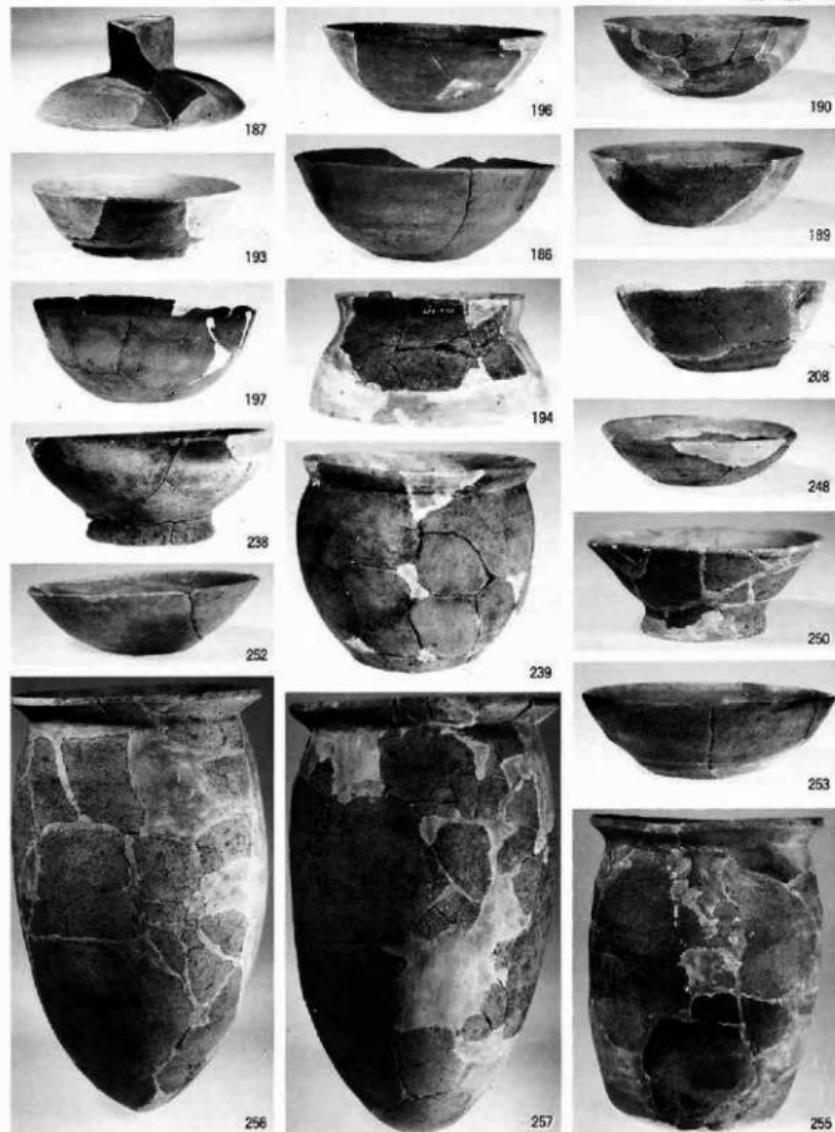


古墳時代後期土器 110-135は S = 1/3 115・116は S = 1/4 ①-③はモミ压痕



S11~S14 出土土器

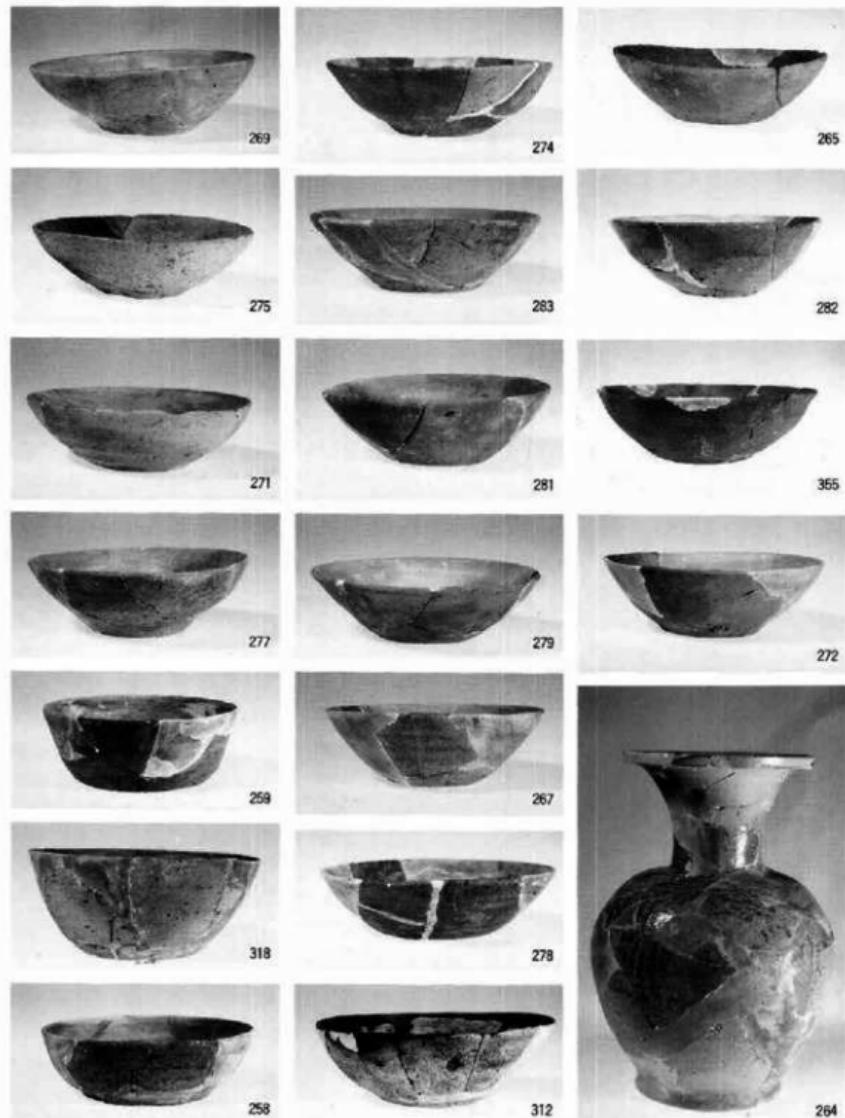
179はS=3% 141.155.170.171.180はS=1%他はS=3%



S15~S19出土土器

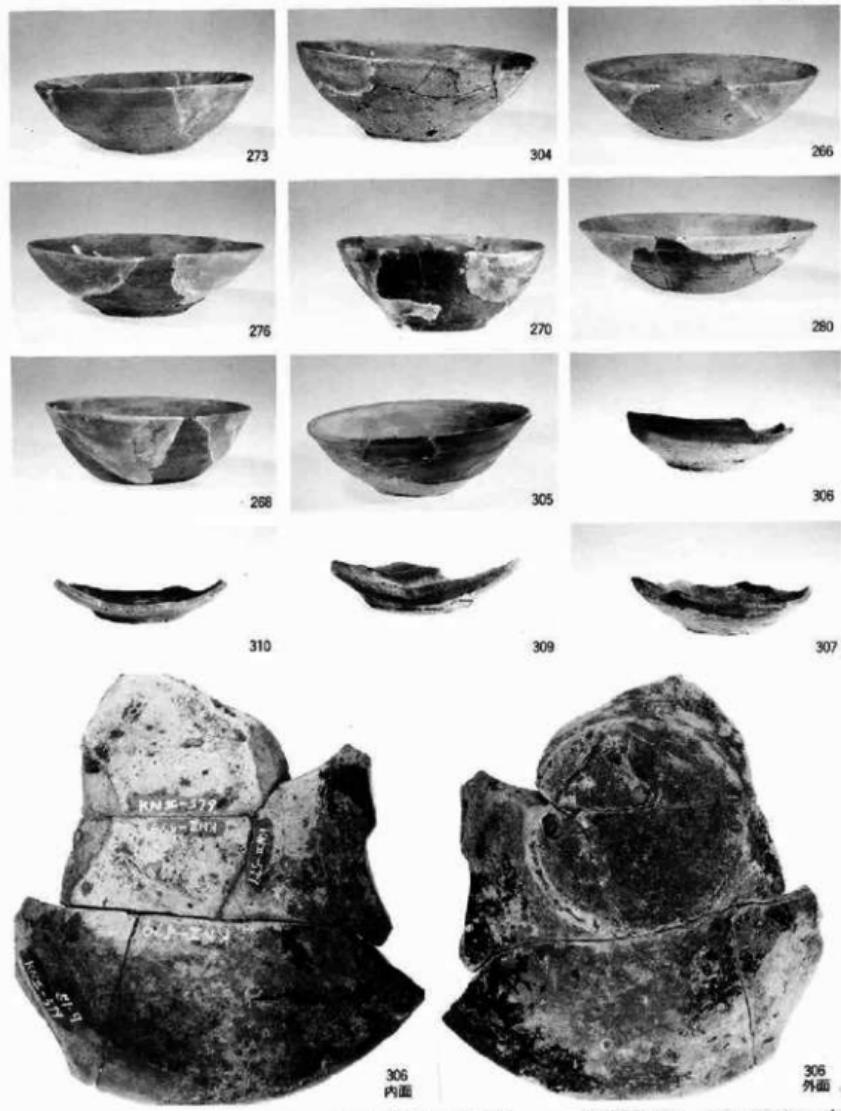
255~256はS=1/4 他はS=1/2

図版 44



S X 20 出土土器 (1)

246は S =  $\frac{1}{4}$  他は S =  $\frac{1}{3}$



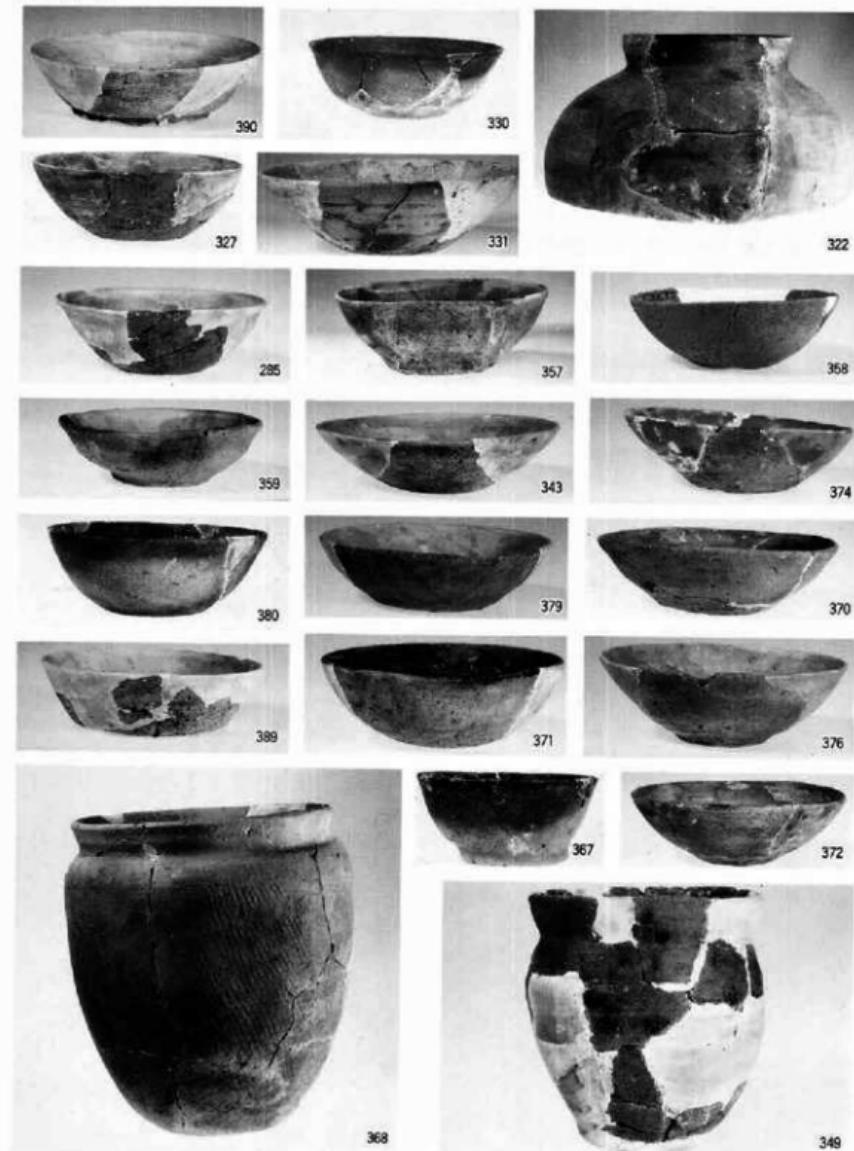
S X 20 出土土器 (2)

油煙付着状況 266~310はS=1/4

306  
内面

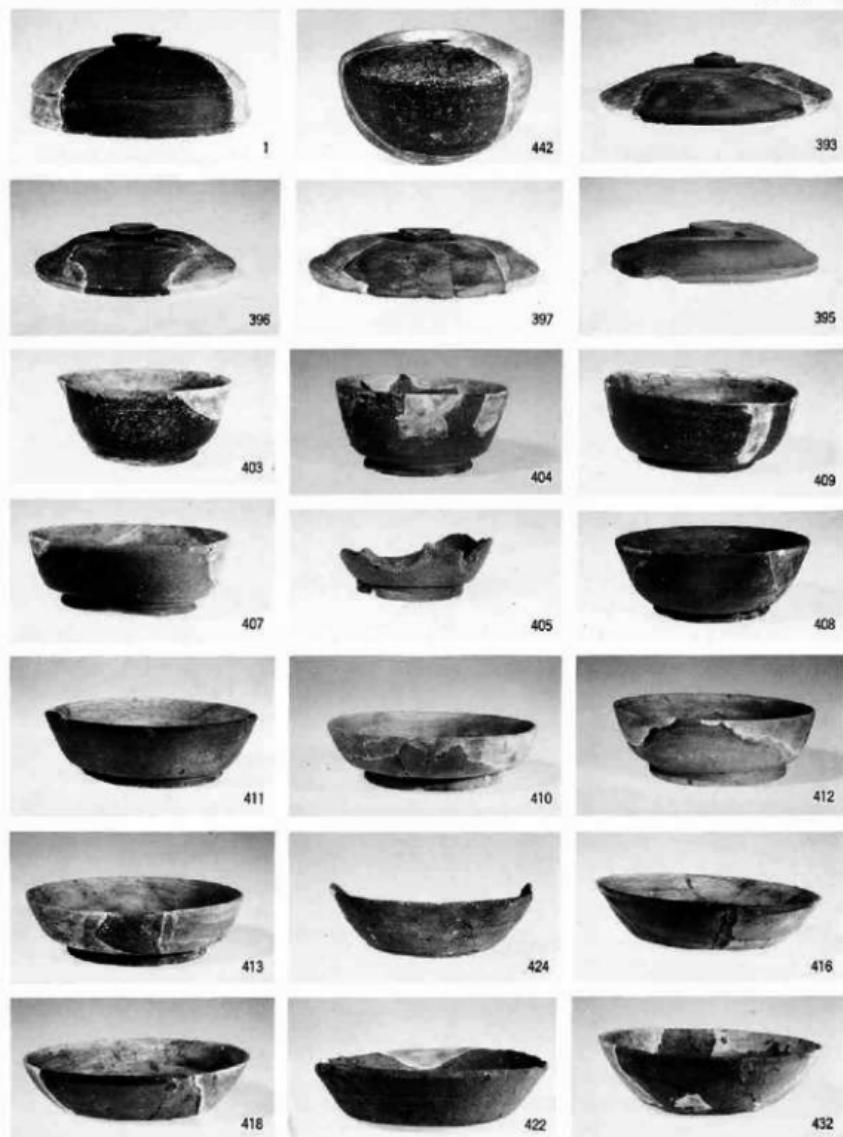
306  
外面

図版 46



SX20・掘立柱建物・溝・土壤・出土土器

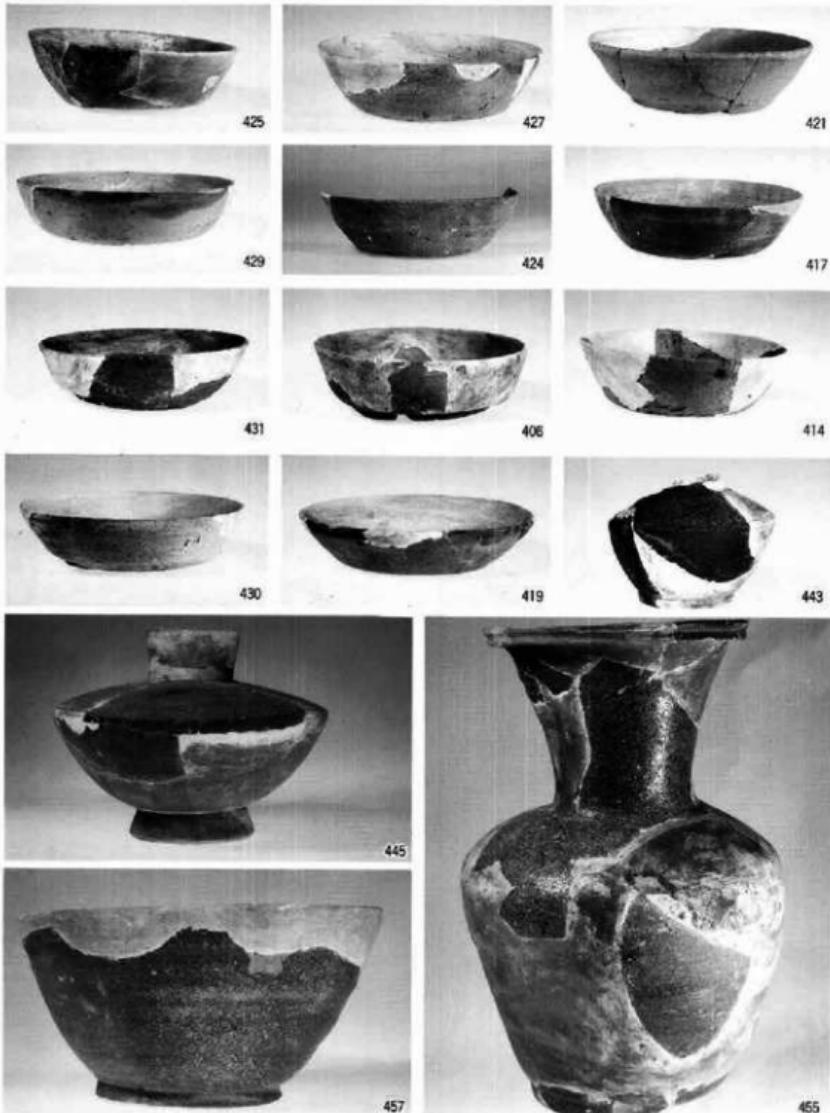
322,368はS=¼ 他はS=½



造構外出土土器 1 (須恵器)

S = ½

図版 48



造構外出土土器 2 (須恵器)

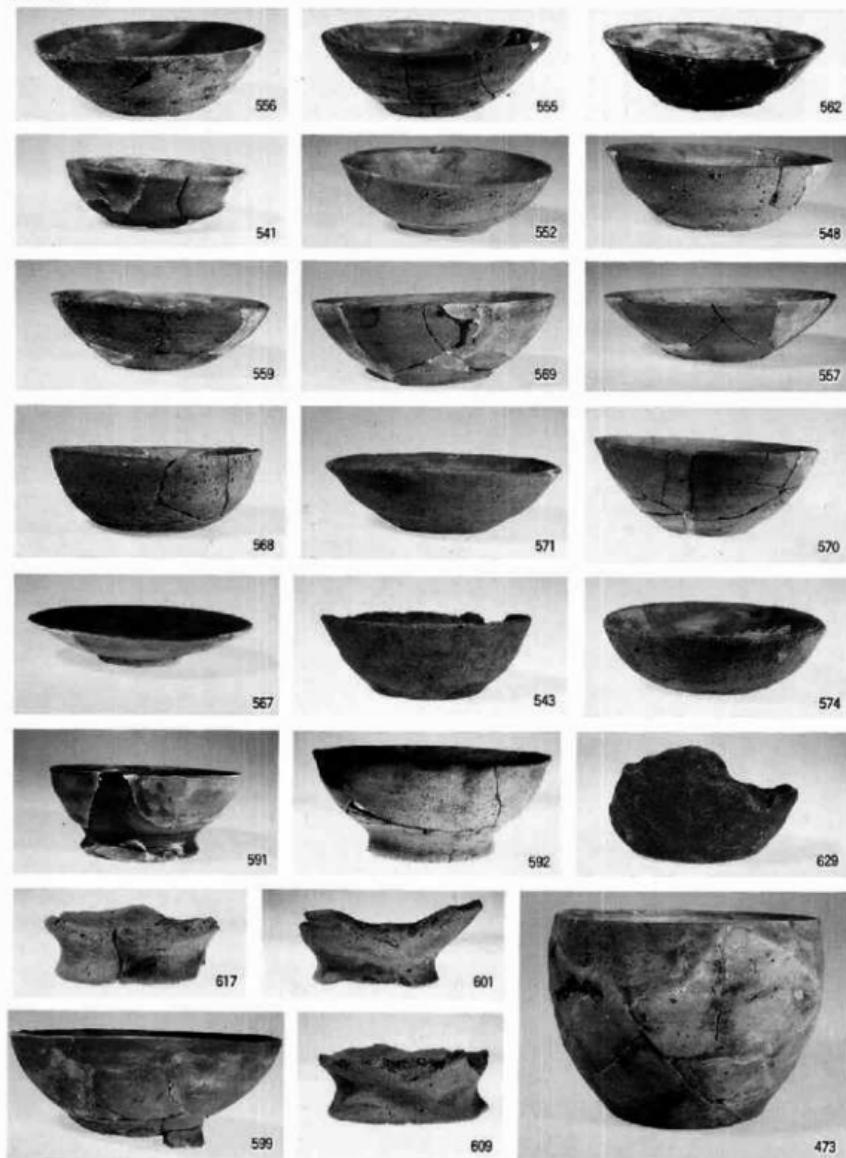
445.455.457はS =  $\frac{1}{4}$  他はS =  $\frac{1}{2}$



透構外出土土器 3 (土師器)

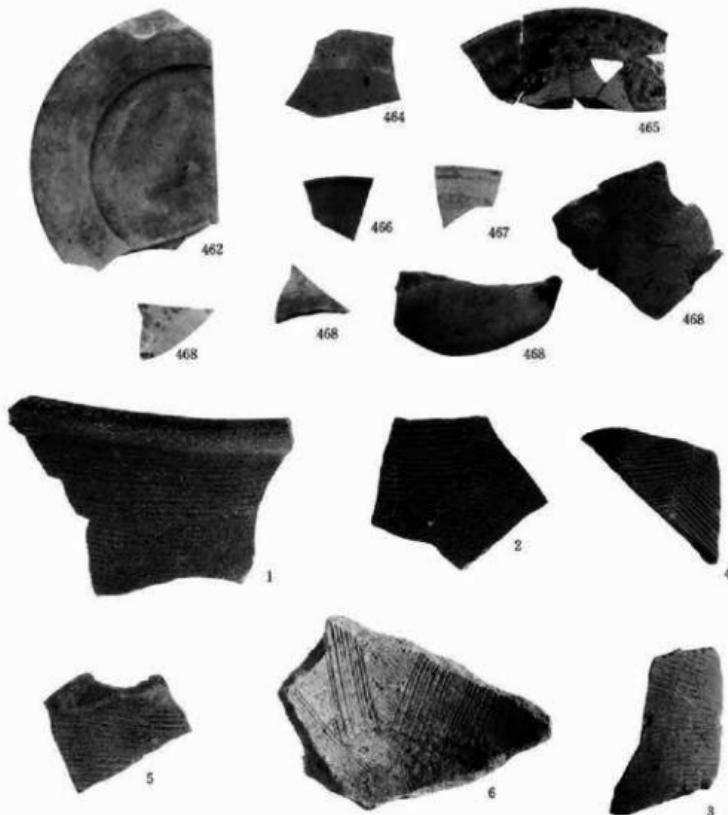
471はS=1/3 他はS=1/4

圖版 50



遺構外出土土器 4 (土師器)

591はS=¼ 他はS=½



46~468 は灰釉陶器

$S = \frac{1}{4}$

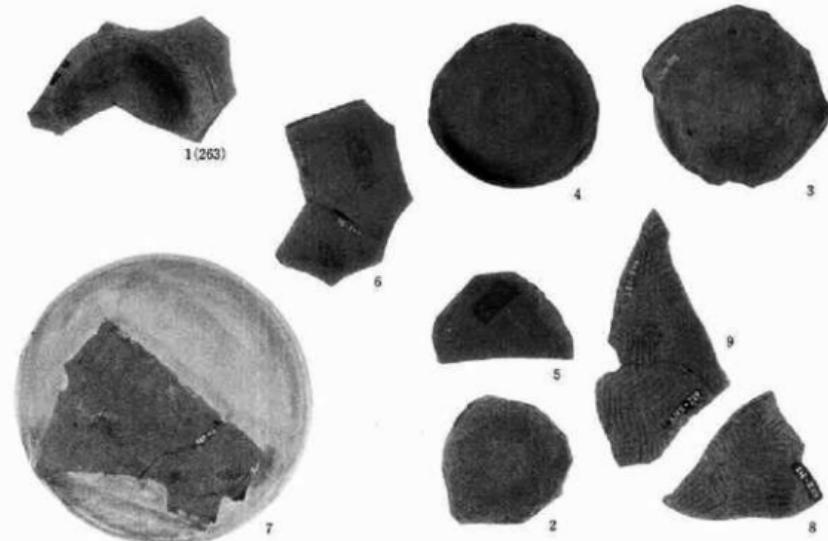
1~8 は中世陶質土器

1~6 は  $S = \frac{1}{3}$

8 は約  $\frac{1}{4}$

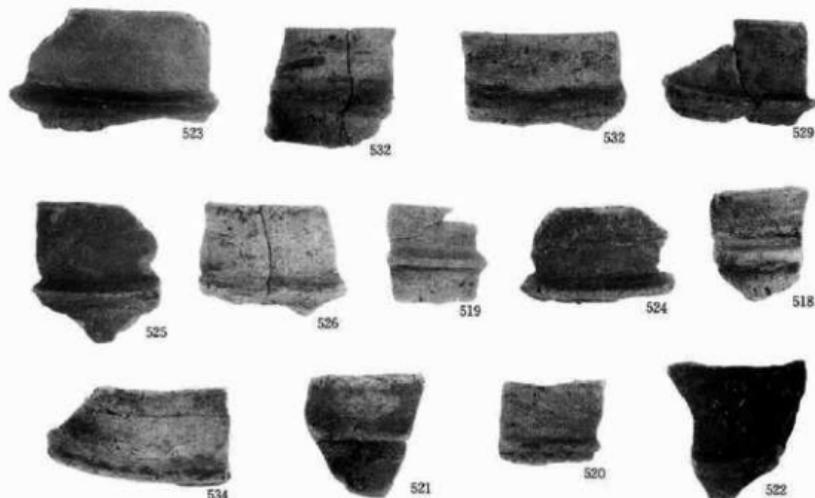


灰釉陶器 および 中世陶器



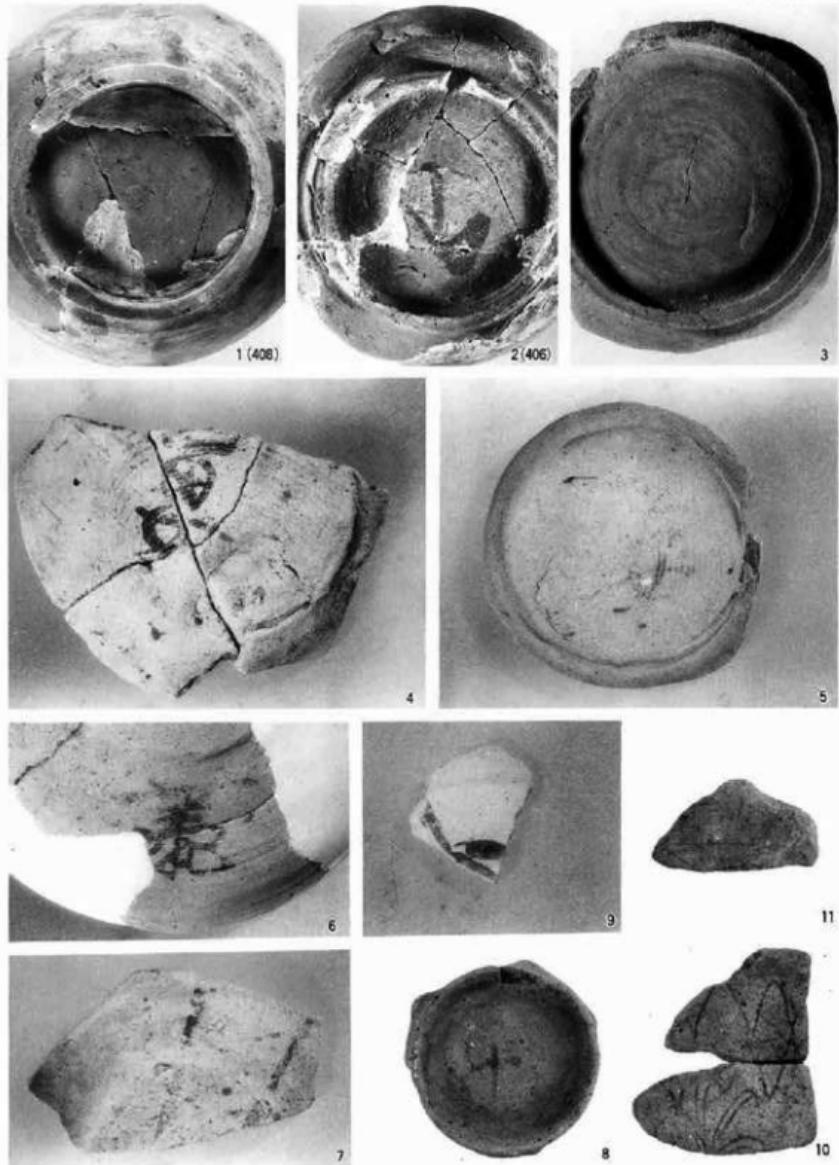
転用視

$S = \frac{1}{4}$



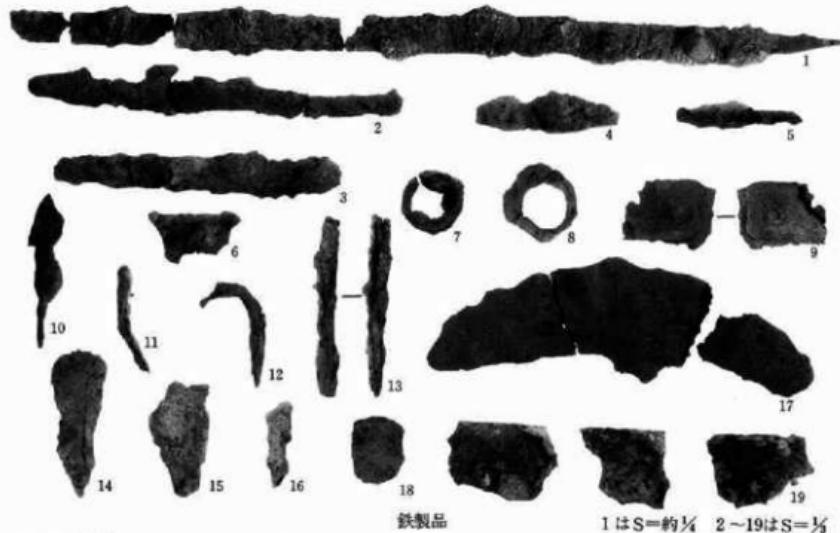
羽釜（遺構外出土）

$S = \frac{1}{4}$

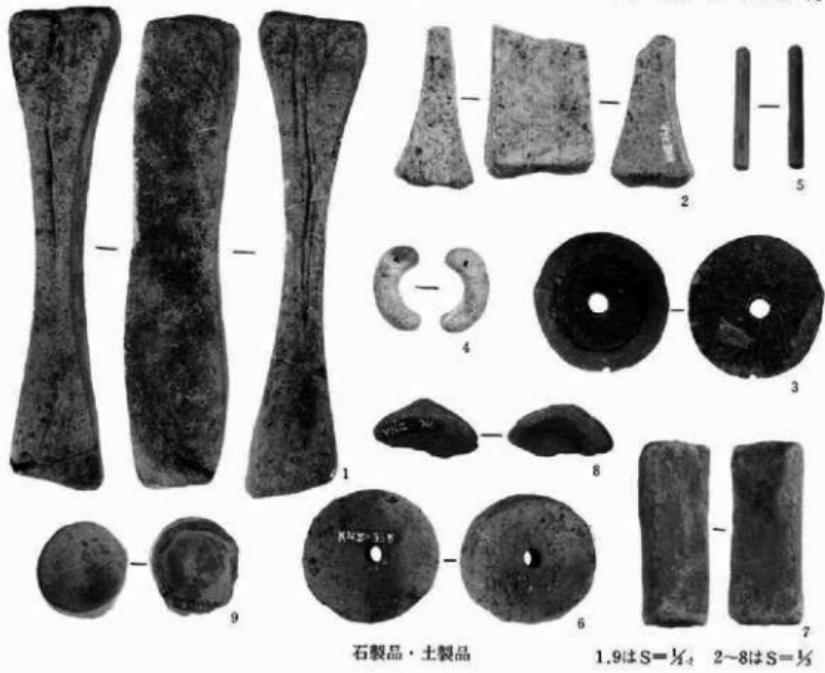


墨書き器・刻書き器

図版 54



1はS=約 $\frac{1}{4}$  2~19はS= $\frac{1}{3}$



1,9はS= $\frac{1}{4}$  2~8はS= $\frac{1}{3}$

新潟県埋蔵文化財調査報告書第37

関越自動車道

埋蔵文化財発掘調査報告書

金星遺跡

昭和60年3月30日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 新潟県教育委員会

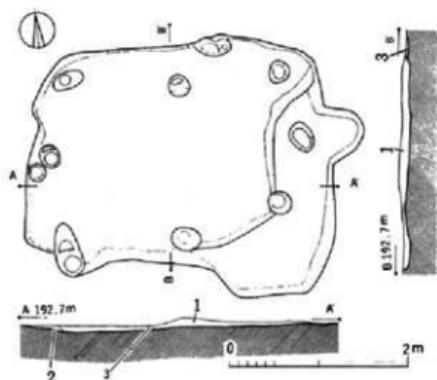
印刷 第一印刷所

金屋遺跡正誤表

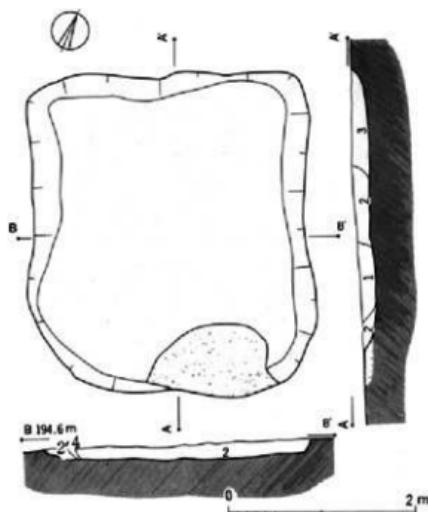
頁	行	誤	正
目次	7	まとめ.....	まとめ.....
7	5	いつ終了するか	いつ終了するか
11	第 7 図	暗褐色土(古墳時代前期遺物包含層)	暗褐色土(古墳時代中期遺物包含層)
16	第 14 図	土器集中範囲	土器密集範囲
22	27	壁穴住居跡(S 1) 9軒	壁穴住居跡(S 1) 10軒
22	第 20 図	土器集中範囲	土器密集範囲
22	第 21 図	土器集中範囲	土器密集範囲
68	第 76 図	平安時代遺構外出土器	平安時代遺構外出土土器
75	第 83 図	平安時代遺構外出土器 土器品	平安時代遺構外出土土器 土器品
98	第 93 図	古墳時代前期遺構面	古墳時代中期遺構面
99	3	「飛鳥地域出土の古式土師器」	「飛鳥地域出土の古式土師器」
99	14	「苗吹田遺跡範囲確認調査報告書」	「苗吹田遺跡範囲確認調査報告書」
追加 99	20行と21行の間	金子拓男ほか 1983:『新潟県刈羽郡西山町高塙B遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会	
100	25	吉岡車幅はか	吉岡車幅はか



P 13 第11図と差し替え



P 33 第34図 S 18 実測図と差し替え  
(縮尺は原図とは不同)



1 暗褐色土+砂利…砂質土を多く含む、乾燥が早い。  
2 " …しまりよし  
3 " …2層より下や褐色が強い  
4 褐色土+砂利…しまりよし  
5 褐色土…地山ブロック

P 23 第23図 S 11 実測図と差し替え  
(縮尺は原図とは不同)

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第37集『金屋遺跡』 正誤表追加

頁	誤	正
60 p 第66図	1887	187
64 p 第72図	306	326
64 p 第72図	323	332
図版41	336	133
図版41	131	134
図版44	355	286
図版44	318	317
図版45	306	232
図版46	327	329
図版46	379	370
図版46	370	379
図版48	421	429
図版48	429	421
図版49	495	479
図版50	556	555
図版50	555	562
図版50	562	556
図版50	567	574
図版50	574	567
図版54	8	10